
スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION

ひらひら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION

【Nコード】

N10070

【作者名】

ひらひら

【あらすじ】

過去、大いなる闇が人類に立ちはだかった時、それを打ち払ってきた戦士達がいる。

彼らの名前は独立遊撃部隊、ガイアセイバーズ

彼らは軍隊でも太刀打ちできない敵や災害救助などありとあらゆる任務をこなす組織だ。

今回はトライバル・エンドと名乗る邪悪な存在が相手である。

果たして、ガイアセイバーズはトライバル・エンドの陰謀を打ち砕くことができるのだろうか。

いよいよガイアセイバーズの新たな戦いが始まる。

Episode - 0

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Episode - 0

過去、大いなる闇が人類に立ちはだかった時、それを打ち払ってきた戦士達がいる。

彼らの名前は独立遊撃部隊、ガイアセイバーズ

彼らは軍隊でも太刀打ちできない敵や災害救助などありとあらゆる任務をこなす組織だ。

今回はトライバル・エンドと名乗る邪悪な存在が相手である。

果たして、ガイアセイバーズはトライバル・エンドの陰謀を打ち砕くことができるのだろうか。

いよいよガイアセイバーズの新たな戦いが始まる。

邪悪な存在の出現に合わせて、ガイアセイバーズ現総監 天道総司は頼れる仲間を集めていく。

次回 Episode - 1 始まり

Episode - 1 始まり（前書き）

皆さん、どうも ♪ ♪

ひらひらです ♪ ♪

この小説はブログに掲載しているものなのですよ ♪ ♪

それでは、お楽しみください ♪ ♪

Episode - 1

始まり

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Episode
- 1 始まり

2017年、ガイアセイバーズ結成から10年程経った今でもいろいろな事件が起こっている。

その中には人の手によるものも多い。

ガイアセイバーズの存在は犯人達を刺激し、犯人達を煽ってしまうからだろう。

そこでガイアセイバーズは警察の手に負えなくなった犯人達を鎮圧する任務も加わった。

ある銀行では銀行強盗が立て籠っている。

しかも、犯人はサブマシンガンやライフル、ショットガンで武装している。

人数は8人、人質は30人くらいだ。

突入しようとした警官隊は犯人達に返り討ちにあつたのか、一人も戻って来なかった。

犯人グループが警官達に要求したのはガイアセイバーズ総監、天道総司の身柄と逃走用のヘリコプターだった。

現場を指揮している鈴木警部はガイアセイバーズ本部に連絡を入れる。

『もしもし。何かあったようだな？　そういえば、鈴木。加賀美はどうした？』

「それが・・・別の事件を担当して・・・どうしたらいいですか？」

鈴木の問いに天道は答えを示す。

『なら、俺が行こう。一応、アサルトフォースも向かわせるが、俺が犯人の要求を飲むしかないだろう。人質の命がかかっているしな』

アサルトフォースとは、ガイアセイバーズ結成当時にできた特殊部隊である。

彼らはガイアセイバーズメンバーのサポートや犯罪者の捕獲、災害時の救助など、自衛隊の延長と考えるといいだろう。

しかし、エネルギーライフルやエネルギーマシンガンなどの特殊武器を武装して、怪物との戦闘もこなさなければならぬのでかなり危険な職場である。

『とにかく、何もさせるな。余計なことをされたら困るからな』
「分かりました。到着をお待ちしてますね」

天道の言葉に鈴木は納得したのか、警官達を下がらせる。

「さて、天道総監からの指示は小型爆弾を天井に撃ち込むことだ。後は総監がなんとかするだろうからな」

「ああ、あの坊主の腕は確かだからな。けど、こんな人数で行く程のことか？」

天道からの要請で出動したアサルトフォース装甲車の中では隊長の玄田留と隊員の中野良宏が話している。

この二人はガイアセイバーズ結成時からの付き合いである。

「中野さん、そういうことは総監の前では言っちゃ駄目ですよ。」

娘さんに言いつけますよ」

彼女の名前はクリス・ローレン。

イギリス名家のお嬢様だった彼女だが10年前に起こったとある事件で怪物に両親を殺された過去がある。

その後、彼女は14歳になると同時にイギリス軍へ特別入隊し、自身の肉体づくりと重火器の扱いを徹底的に学び抜いた。

そして、何年かイギリス軍に従軍した後、天道のヘッドハンティングによって、アサルトフォース副隊長に抜擢された。

「相変わらず厳しいなあ。　クリスは堅物だからなあ。　なあ、みつ

つき？」

「くうくん」

みつきとは良宏が飼っている狐で、実は1000年も生きている妖狐である。

名乗る時は四条みつきと名乗るが真名は違う。

「みつき。　もう、俺達も知ってるから普通にしてる」

「うん、わかった。　たいちょうの言う通りにする」

ちなみに、アサルトフォースやガイアセイバーズのメンバーもみつきが妖狐であることは知っている。

「さて、目的の銀行に着いたようだな。　今回の作戦内容の確認をする。　俺達がただ突入するのはフェイクでクリスが小型爆弾を天井に打ち込むのが狙いだ。　いいな？」

「分かっています、玄田隊長。　総監と人質の方々を救出しなければなりませんから失敗は・・・」

クリスが硬くなったのを見て、中野がちゃかしていく。

「そんなに緊張すんなよ。授業参観じゃあるまいしょ」

「何言ってるんですか！？ こんな重要な任務の時に！！」

アサルトフォースが突入するまでには時間がかかりそうなので少し時間をさかのぼってみよう。

鈴木から呼ばれた天道はアサルトフォースに作戦の指示を与えてから自分も犯人が立て籠もっている銀行へ向かう。その途中で天道はある場所に寄り道をしていた。

天道が銀行に着いたのを見て、鈴木が駆け寄る。

「すいません、天道さん。本当は俺がなんとかしなきゃいけないんですが・・・」

「気にするな。犯人の狙いは俺だろうからな」

天道の言葉に鈴木が動揺する。

普通の強盗がガイアセイバーズ総監に何かしようなものなら10倍返しにされるだろう。

それなのに、天道の身柄を要求するのは確におかしい。

「まさか、イマジンとかが関わってるってことですか？」

鈴木は何年か前にネガタロスというイマジンが起こした事件に巻き込まれたことがある。

「そうかもしれんし、もっと大馬鹿野郎がいるのかもしれん。だから、それを確めに行く」

そう言う天道は銀行の入り口に向かっていく。
すると、入り口の近くにいた犯人の一人が銀行の中から出てくる。

「やっと来たな、天道総司。さつさと中に入れ」

「その前に人質を解放しろ。それが条件だ」

犯人の一人は少し考えた後、銀行の中に戻ると人質を解放する。

「いいだろう。お前達に付いていこう。どうせ、俺が目的なんだろう？」

「俺の契約者が大金を望んできてな。お前を呼ぶついでに契約を完了させてもらおうと思ったんだよ」

どうやら、犯人の一人はイマジンと契約しているらしい。

天道はその男と銀行の中へ入っていく。

銀行の中にはまだ人質がいた。

しかし、天道はその二人に見覚えがあった。

「お前達は野上と紅か？」

二人は仮面ライダー電王である野上良太郎と仮面ライダーキバである紅渡だ。

天道は5年前の戦いで出会っている。

「何でここにいるんだ、お前達は？」

「僕はデンライナー署としての仕事での給料がもらえたので引き落としに来たんです。」

「僕はバイオリンの材料の代金を振り込みに・・・」

「それで捕まったわけか。 さて、俺達をどうするつもりだ?」

天道の言葉に良太郎達も犯人達を見る。

「お前達にはある方に会ってもらつ。 お前達をどうするかはその方が決める」

「その方とは誰だ?」

天道がそう言うのと良太郎達の側に座らせられる。 ちなみに、円陣を組むようにである。

「逃走用のヘリはそいつの所へ俺達を運ぶためか?」

「そうだ。 お前達は俺達に従うしかないのだ」

天道達は犯人に縄で縛られているため、逃げ出せないのである。

「せめて、トイレに行かせてくれないか? それとも、人質だからお漏らしでもさせるか?」

一見すれば失言だが、うまくいけば犯人に縄をほどいてもらえ、さらに反撃のチャンスがやってくるはずだ。

「駄目だ。 そう言つて逃げるつもりだろう? そんなことをさせる馬鹿がいると思うのか?」

相手のイマジンも頭が切れるようだ。

一瞬で天道の目的に気づいたようなのだから。

「けど、僕達が君達から逃げられると思つてるのかい? ライフルやショットガンなんかを持つてるのに?」

「（ウラタロス？ 犯人を刺激してどうするの？？）」

良太郎の身体にウラタロスが憑依している。

ウラタロスが憑依した良太郎は眼鏡と青いメッシュが特徴である。

犯人のリーダーが他の仲間に指示して、良太郎達の身体に巻き付けた縄をほどいていく。

「ありがとう。じゃあ、行ってもいいかな？」

「俺達の半分の監視するのは構わんな？」

犯人のリーダーはイマジンの憑いた男のようだ。

その男の指示で犯人の半分のマシンガンなどを手にして天道達に付いてくる。

残りの半分はフロアで待っている。

しかし、フロアの天井に仕掛けた小型爆弾が爆発し、犯人の半分は瓦礫の下敷きになった。

「何だ！？ 何が起こったんだ！？」

イマジンの憑いた男がフロアの様子を見ようと視線を後ろへ向けた瞬間、天道は素早く近づき、銃を突きつけた。

「甘かったな。俺が何もしなかったか」

「どうやら、お前を侮っていたようだ。任務に失敗した俺をあなたが生かしておくわけではないだろう。だが、契約は果たさせてもらうぞ」

そう言うと男の身体から砂が溢れ出て、イマジンの姿になる。
イマジンの手には札束が握られている。

「望みは叶えた。 契約完了だ」

イマジンはそう言うのと札束を男に投げ渡し、過去への扉を開く。

「過去を変えてやる。 そうすれば、俺はあの方に消されることはない」

そして、イマジンは過去に飛んでいった。

ウラタロス
良太郎は契約者の男にライダーチケットをかざす。 すると、2

006年5月15日の文字が浮かぶ。

中に二人の犯人が来るが、天道と紅が二人の前に立ちはだかる。

「行け、野上！ 時間の運行を守れ！！」

「行ってください、野上さん。 ここは僕達が何とかします」

「じゃあ、任せるよ」

そう言うのと、ウラタロス良太郎は窓から出て、デンライナーに乗り込み、過去へ向かう。

2006年5月15日、イマジンの契約者である男は初めての銀行強盗を行い、警察から逃げていた。

そこに、イマジンが現れる。

イマジンはその場にいた警官達を蹴散らしていく。

そこにデンライナーが追いついた。

「電王か。 ここで倒してやろう・・・」

ロッドフォーム
イマジンはそう言うのと、両手に剣を持ち、電王に斬りかかる。

電王は素早くデンガッシャーを組み立てるとイマジンの二つの剣を

巧みに防いでいく。

一方、カブトとキバは敵のファンガイアとワームのコンビネーションに苦戦している。

「おい！ お互いの得意な相手に分けようぜ！！」

「いいだろう。 なら、俺がワームとやろう・・・」

そう言うと、カブトはクロックアップを発動させ、ワームを別の場所に誘導する。

キバは連続パンチでファンガイアを怯ませていく。

ロッドフォーム

電王は巧みにデンガッシャーで剣を弾き飛ばす。

そして、距離を保ちながら強烈なキックを叩き込んでいく。

さらに、デンガッシャーでイマジンの身体を突き立てていく。

カブトはクロックアップの状況で敵の攻撃をかわしながらカウンターの要領でキックやパンチ、肘打ちなどを放っていく。

キバは連続パンチとキックのコンビネーションでファンガイアを怯ませ、そして、ウェイクアップフェッスルを取り、とどめを刺そうとする。

カブトはカブトゼクターのスイッチを押していく。

『 1・・・ 2・・・ 3・・・ 』

ロッドフォーム

電王もライダーパスを手にして、セタッチしようとする。

しかし、その時・・・
敵の様子が豹変する。

一体、何が起こったのか？黒幕は誰なのか！？

T o b e c o n t i n u e d

次回 スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION
isode - 2 ガイアセイバーズ集結
E p

続発する事件の裏で暗躍する黒幕の正体が明かされる。
天道は新たな脅威に対し、頼れる仲間達を集めていく。

Episode - 2

ガイアセイバーズ集結（前編）（前書き）

わたしの小説は拙いと思いますが感想をいただけると嬉しいです♪

ひらひらでした♪

Episode - 2

ガイアセイバーズ集結（前編）

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Episode - 2
ガイアセイバーズ集結（前編）

戦いの最中、異変が起こった敵の様子にカブト達は動揺を隠しきれなかった。

「何が起こったんだ？」

カブトは相手の異変に対応する方法を考えながら、距離を取っている。

しかし、敵は狂ったようにもがいている。

ロケットフォーム
電王はデンガツシャーを肩に置き、様子を見ている。

「変な感じだね。 何かに操られてるみたいだよ」

「（ウラタロスの言うとおりかもしれないね。 今までもそういう敵はいたからね）」

5年前の戦いでもイマジンやワームなどを操る真の敵がいた。
イマジン無理やり操った敵が突然話し始める。

「わたしの名前はトライバル・エンド・・・ 全ての世界を喰らうもの・・・」

「たいした名前だね・・・ 何が目的??」

ロケットフォーム
電王に問い詰められたトライバル・エンドは何も答えなかった。
まるで、別の場所で話しているかのように・・・

カブトとキバが戦っていた銀行にいたワームとファンガイアも二人の前で突然話し始めた。

「はじめまして、仮面ライダーカブトにキバ・・・わたしの名前はトライバル・エンド・・・全ての世界を喰らうもの・・・

以後お見知りおきを・・・」

「悪いが俺は興味の無い奴の名前はすぐに忘れる癖があつてな。お前の名前も覚えられそうにない」

「へっ、そうだぜ。俺も渡もお前みたいな野郎のことなんて覚えてる暇ねえんだよ」

カブトとキバットの言葉にトライバル・エンドは笑いながら言葉を発していく。

「くははは・・・面白い方々だ・・・いずれは覚えていただきますよ・・・それでは、失礼させていただきますね・・・」

そう言うと、トライバル・エンドに憑かれていたワームやファンガイアの肉体が崩れていった。

カブトとキバは変身を解いていく。

「奴は一体？　また新手の敵か??」

「でしょうね。もしかしたら、5年前の敵、ブラッディと繋がっているかもしれないですよ」

ブラッディとは5年前天道達の前に立ちはだかりくるしめてきた。

「とりあえず、ここを出ようぜ、渡」

「そうだね、キバット。早く出よう」

天道達は中にいたイマジンの契約者を連行しながら銀行を後にした。

一方、2006年にいた電王も変身を解いて、少し状況を整理していた。

「（今回の敵がイマジンを使ってきたってことはもしかして・・・）」

「（そうだね・・・ 良太郎の言う通り、カイが蘇ったのかもね。けど、逃げないんでしょ、良太郎？）」

ウラタロスの言葉に良太郎ははつきりと答えていく。

「（もちろんだよ。僕は自分にやれることをやるだけだよ！）」

「（じゃあ、デンライナーに戻って先輩達と話そうか？）」

その言葉で良太郎はデンライナーに戻っていく。

デンライナーには良太郎とともに戦ってきたイマジン達がいる。

「良太郎、カイが蘇ったっていうんはほんまか？」

「おいおい、冗談だろ、カメ公！？ あいつはあん時に消えただろが」

良太郎とウラタロスの報告にモモタロスとキンタロスは驚いている。リュウタロスとジークは話を聞かずにお絵描きしたり、コーヒーを飲んだりしている。

「オーナー、とりあえずデンライナー署の力を貸してもらえますか？」

「仮に、カイが絡んでゐるならゝやるしかないでしょう。しかし、デンライナーは通常運転もしなくてはなりません。それでもいいですか？」

オーナーの言葉に良太郎ははいと答えていく。
モモタロス達も少し嬉しそうな感じだ。

中国のある場所でトライバル・エンドを追い詰めている戦士達だった。

彼らの名前は仮面ライダー。

「しつこい人達ですね・・・ わたしを追って、世界中を駆け回って・・・楽しいですか？」

「楽しい、楽しくないの問題ではない。 貴様を止めなければ多くの人間が苦しむことになる。 だから、俺達が貴様を倒す！」

トライバル・エンドを囲むように11人の仮面ライダーがいる。

「仮面ライダー1号、仮面ライダー2号にV3・・・」

トライバル・エンドの正面には仮面ライダー1号、仮面ライダー2号、仮面ライダーV3がいる。

「それに、仮面ライダーストロンガー、仮面ライダーBLACK RX、仮面ライダースーパー1・・・」

そして、後ろには仮面ライダーストロンガー、仮面ライダーBLACK RX、仮面ライダースーパー1がいる。

「左右は残り5人が囲んでいるわけですか… 厄介ですね…」
「今度は逃がさん！ ここで貴様を倒す！！」

仮面ライダー1号の声で11人のライダーが戦闘態勢になる。

トライバル・エンドも戦闘態勢に入ったのか、魔導陣を描いていく。

「何をするつもりだ、てめえ！ エレクトロファイヤー！！」

ストロンガーがしびれを切らしたのか、エレクトロファイヤーを放つていく。

しかし、エレクトロファイヤーを吸収したかのように魔導陣が発動してしまう。

そこに現れたのはガイアセイバーズが戦ってきたダークキメラとブラッディである。

「ここはどこだ？ 何故俺がここにいる??」

「あなたが我々を蘇らせてくれたのですね」

ダークキメラとブラッディはトライバル・エンドを見て呟いた。

トライバル・エンドは剣を取りだしながら答える。

「わたしに力を貸してくれませんか？ まだまだやらねばならないことがありますので…」

トライバル・エンドの言葉にダークキメラは二本の剣を身体から出して、ブラッディは姿を変えながら頷く。

そして、三体が11人のライダー達に向かっていく。

ガイアセイバーズの総監室では天道と八神はやてがモニター越しに話している。

「久しぶりだな、はやて。 お前達の活躍は耳にしてるぞ」
『あはは。 そら、嬉しいなあ。 天道君らの方はどないや?』
「相変わらずだよ。 怪物はうろつろつしてるし、テロや犯罪も多く
起こってるしな。 ところで、雑談をするために連絡を入れたわけ
ではないんだろ」

天道の言葉にはやての表情が真剣なものになる。

『うん・・・ 天道君はジェイル・スカリエッティって知つとる・・・?』
「ああ、なのはから聞いた。 いかれたマッドサイエンティストだ
ろっ」

ジェイル・スカリエッティ、2年前ミッドチルダにある時空管理局
地上本部を襲撃、壊滅させた。

さらに、聖王のゆりかごと呼ばれるロストロギアを使って、自分の
世界を創ろうとした狂気に満ちた男だ。

「で、その男がどうした? 脱獄でもしたか??」
『脱獄はしてへんけどある男と接触してるんや・・・』
「ある男って誰だ?」

天道の言葉にはやての顔が少し曇る。

『そいつが名乗った名前がトライバル・エンドや・・・』
「本当にトライバル・エンドと名乗ったんだな?」
『そつやよ・・・ 何かあったんか?』

はやての問いかけに天道はこれまでの事を話した。

『そんなことがあったんやね・・・ スカリエッティの技術をそんな危ないもんが手に入れたら不味いことになるかもやね・・・』
「全くだな。 だが、奴の考えていることがいくつか分かったぞ」
『それ、どういうことやの？ 狙いは何やって言っん？？』
「それはまた話す。 じゃあな」

天道はそう言うともニターを消して考えるように俯いた。

ここは私立 東山学園のグラウンド。
そこに、一人の少年、沢井零次がいる。
彼は高校2年でサッカー部に所属している。
今は部活が終わり、自主練をしている。

「沢井零次くんですね・・・ わたしの名前は・・・ ぶっ!!」
名前を名乗ろうとしたトライバル・エンドの顔に零次が蹴ったサッカーボールがヒットした。

「うつせえよ! 変態野郎!! 変な仮面とマントなんかしやがって、人が練習してる邪魔すんなよ!!」
「練習? もうすぐ消えてなくなるのにご苦労さまですよ・・・」

トライバル・エンドの態度に零次の怒りが爆発したのか、殴りかかっていく。
しかし、トライバル・エンドは零次の拳をかわしていき、彼の首を掴んで意識を遠のかせる。
そして、連れていこうとしたトライバル・エンドにエネルギー弾が飛んでくる。

「誰ですか・・・あなたは？」

「貴様は連続誘拐犯のトライバル・エンドだな！！ 貴様は俺がもらっ！」

そこに現れたのは仮面ライダーイクサの資格者、名護啓介である。名護はイクサベルトを腰に装着して、イクサナックルを右手に持ち、左手に当てる。

『レ・ディ・ー』

「変身！！」

『ファイ・ス・ト・オ・ン』

名護の身体にイクサのライダースーツが装着される。

イクサはクロスシールドを展開させ、バーストモードを発動される。

「トライバル・エンド、貴様を倒す！！」

イクサがイクサカリバー・ガンモードの銃口から銀の弾丸を射っていく。

しかし、トライバル・エンドは闇をバリア状に形成して防ぎ、零次を抱えて消えた。

イクサはトライバル・エンドを逃したことに怒りを感じ、地面に拳を叩きつけてから変身を解く。

トライバル・エンドは零次を自分達の組織、ダーククライムのアジトへ連れてきた。

そこには手術台がある。

「ようこそ、トライバル・エンド様。 わがラボへようこそ」
「マスタークラウン No.4 ハイドよ、久しぶりですね・・・
ジキルはどうしてますか？」

ハイドと呼ばれた男は部下に作業を急ぐように命じながら答えている。

「元気にしていますよ。 さて、改造手術を始めましょうか・・・」
ハイドの言葉にトライバル・エンドはほくそ笑みながら別室に向かう。

トライバル・エンドが施そうとしている改造手術とは一体？
そして、ダーククライムの組織構成はどうなっているのか？
全てはまだ謎の中だ。

to be continued

次回 スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION E
pisode - 3 ガイアセイバース集結（後編）

トライバル・エンドの目的は新たな仮面ライダーの誕生である。
本郷猛達、11人ライダーはトライバル・エンドの目的を阻止しようと奔走する。
一方、ガイアセイバースで集結できるメンバーがついに日本に集まる。

Episode - 3 ガイアセイバーズ集結（後編）（前書き）

皆さん、どうも ♪

ひらひらです ♪

いけるところまで投稿しますよ ♪

Episode - 3 ガイアセイバーズ集結（後編）

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Episod
e - 3 ガイアセイバーズ集結（後編）

沢井零次を連れ去ったトライバル・エンドを追って、本郷猛と一文字隼人がダーククライムのアジトに潜入していた。
風見達はアジトの近くで待機している。

「一文字、ここが奴らのアジトらしいな。 どうする？」

「さっさと行って連中を叩き潰せばいいんだろうが。 何、焦ってんだよ・・・ らしくねえぞ」

一文字は本郷の焦った様子を見て、茶化すように話しかける。
ちなみに、二人の会話はライダー達の特殊な周波数で全員に聞けるようにしている。

「彼は俺が守らなければならないんだ。 あの日、本当の意味で救えなかった俺が・・・」

本郷と一文字はラボの手術室へ急ぐ。

手術室では零次の改造手術が始まろうとしている。
手術台の上には零次が裸で拘束されている。

「やめろよ！！ 俺に何するつもりだよ！！」

「あなたは神の器になるのです。 この私、ハイドの手によってね・・・」

ハイドの言葉に零次はもがいていくが逃げられない。

「改造手術を始める！」

ついに、零次への改造手術が始まる。

零次の身体の中にナノウイルスが注入されていく。

このナノウイルスはダーククライムが所有する怪人や怪獣、宇宙人の遺伝子を組み合わせたものである。

零次の身体が徐々に変わっていく。

零次の叫び声を聞いた本郷の顔にさらに焦りが浮かぶ。

一文字はそれを見て、風見達に指示を出す。

「本郷、どうしてそんなに焦ってたんだよ？ 何かあんのか？？」

「彼は5年前、俺がある場所から救い出した子どもだ・・・」

本郷は一文字に零次との出会いについて話し始めた。

「5年前、俺は神威一族を追っていたんだ・・・」

神威一族とは絶対的な能力を用いて暗殺を繰り返してきた一族である。

いろいろな警察や探偵が彼らに近づいたが全て消されている。

「俺は神威一族の狂気を止めるために彼らの本拠地へ向かったんだが、そこにいたのは血にまみれた零次だった・・・」

本郷の話を聞いた一文字は絶句してしまった。

本郷と同様に一文字達も零次とは交流があったので動揺も大きい。しかし、気を取り直して二人は正面から、他の9人はそれぞれのポ

イントから潜入していく。

零次の頭の中では改造手術のことがなくなり、その代わり様々な映像が流れてくる。

仮面ライダー達が戦う姿などが溢れている。

「トライバル・エンド様、彼はもうまもなくストーン・イヴを受け入れるはずです。そうすれば、あとはストーン・アダムを埋め込んで記憶を消せば完成ですよ」

「そうですか・・・ 慎重にお願いしますね・・・ 彼を失うのは惜しいので・・・」

トライバル・エンドは零次の隠された記憶を知っているようだ。

一方、ガイアセイバーズもダークククライムのラボを発見していた。

「俺とアサルトフォースで奴らのラボを制圧する。 目標はトライバル・エンドの捕縛および撃退だ」

「けど、俺達だけでなんとかできるのか。 部下を危険にさらすのは避けたいんだがな」

隊長の玄田は部下のことを一番に考えている。

彼は10年程前の時からガイアセイバーズに所属していて、過去の事件で所属していた隊の隊員達が自分と他の数名だけを残して、ワームに惨殺されている。

「玄田の気持ちは分かるし、俺もいたずらに犠牲を払うつもりはない。 今回は奴を捕まえるのは最終目標だ。 とりあえず、奴に威嚇できればいい」

「そうか。 なら、その任務を受けよう。 アサルトフォース各員、

出動！」

玄田の言葉でアサルトフォースの隊員達が出動準備をしていく。

ダーククライムのアジトでは零次の改造手術に異変が起こっていた。零次が突然目覚め、暴れだしたのだ。

「早く止めなさい・・・彼はまだ不完全なですよ・・・」

トライバル・エンドの言葉にアーナロイドやゾビル、ウガッツ達が零次を囲んでいくが次々に弾き飛ばされていく。そこへ11人のライダー達が入ってくる。

「あなたたちは仮面ライダー・・・だが、彼はあなたの下には行きませんよ・・・彼はもう獣になったんですから・・・」

仮面ライダー1号はハイドの言葉にハイドとトライバル・エンドに視線を送る。

他のライダー達は周りにいるウガッツやゾビル達を戦っている。

「零次・・・俺はまた君を救えなかったのか・・・」

「本郷！ まだ零次は死んでねえだろ！！ なら、俺ん時みたいに救えよ！！」

仮面ライダー2号の言葉に他のライダー達も頷きながら戦っていく。仮面ライダー1号は零次の下に向かう。

零次は仮面ライダー1号に襲いかかる。

「零次！ 俺の声を聞け！！ 脳波を俺に合わせるんだ！！」

「あゝあゝ・・・本・・・郷・・・さん・・・」

トライバル・エンドは仮面ライダー1号の狙いに気づいたのか、止めようと剣で襲いかかってくる。

「そうはさせん！ リボルケイン！！」

「ライドルスティック！！」

仮面ライダーXと仮面ライダーBLACK RXは自分の武器を取りだし、トライバル・エンドの剣を防ぐ。

「俺は何をやってたんだ……」

「零次、君は人ではなくなってしまったんだ……」

仮面ライダー1号に言われて、自分の身体を見る。

零次の身体はすでに硬質なものになっていた。

「俺は本郷さん達と同じく改造人間になったんですね……」

「ああ、すまない…… 償いきれるものじゃない……」

仮面ライダー1号が頂垂れると零次は彼の肩を叩いて励ます。

「本郷さんのせいじゃないですよ。 俺は逃げない！」

そう言うと、零次は手術台に飛び乗るとポーズを取っていく。

「俺は闇を討つもの、仮面ライダー…… イヴー！！」

零次が仮面ライダーイヴと名乗ったのを聞いて、トライバル・エンドの仮面の下で表情が変わる。

「貴様〜！！ トライバル・エンド様に逆らうつもりか！？」

「もともと従つてもねえんだよ！！ それに、お前らみたいな奴らをほつといたらくなことになるねえだろうが！！」

トライバル・エンドはイヴの言葉を聞き、彼に手をかざした。すると闇の雷が彼に向けて放たれた。

「ぐああああ！！」

「あなたは神の器なのです・・・ 反逆など許されないので・・・

」

トライバル・エンドの攻撃でイヴの変身が解け、零次に戻つてしまふ。

零次にトライバル・エンドが剣を振り落としていく。

その剣を仮面ライダー1号が受け止める。

「本郷さん！！ てめえ！！」

零次はトライバル・エンドに殴りかかろうとするが仮面ライダー2号と仮面ライダーV3が止める。

「何で止めるんですか！？ 本郷さんを助けないと！！」

「変身もまともにできない君が・・・ それは危険すぎるぞ・・・

」

「全くだ。俺達がなんとかするから見てろ！」

再び剣を振り下ろしていくトライバル・エンドの右手に仮面ライダーXのライドロップが打ちつけられる。

そして、仮面ライダー1号の身体に仮面ライダーZxのマイクロチエーンが巻きつけられて引き寄せられる。そして、他のライダー達

が前に出て、トライバル・エンドと対峙する。
そこへ天道達を乗せた装甲車が乱入していく。

「うるさい奴らめ！！ わたしの邪魔ばかりしやがって！！」

トライバル・エンドの口調が少し変わったように感じられた。

天道達が装甲車から降りてくるとアサルトフォースは左右からトライバル・エンドを包囲する。

そして、天道の手にはカブトゼクターが握られている。

「はじめまして、天道総司・・・ 意外と早かったですね・・・
びっくりしましたよ・・・」

「俺も馬鹿じゃないからな。 貴様らがどこにいて何をしてるのか
を調べているからな」

そう言うのと、天道はカブトゼクターを装着する。

すると、天道の身体にライダースーツが装着される。

「アサルトフォース各員、仮面ライダーとその少年を保護！！」

アサルトフォースの隊員は零次を守りながら、装甲車に乗せるとラボから逃げた。

仮面ライダー達も同行した。

「おや、あなた達は残ったようですね・・・」

「ああ、お前を止めておかないといけないからな」

「それに、俺達が零次を守らなければならぬからな！！」

残ったのは仮面ライダーカブトと仮面ライダー BLACK RX
だった。

二人はそれぞれの武器を手をしている。

「おやおや、血気盛んですね・・・わたしに勝てるつもりですか？」

トライバル・エンドは二人に剣をふるう。
しかし、二人はかわしたり防いだりしていく。

「逃げてるだけ駄目ですよ・・・それとも、降参ですか・・・」
「誰が降参などするものか！！俺は負けない！！」
「それに俺達が何もしてないと思うか？」

仮面ライダーカブトと仮面ライダーBLACK RXは左右からトライバル・エンドに迫る。

『総監！ ある程度の距離は稼いでおきました！！ 撤退してください！！』

『分かった。 だが、できる限り距離を離すように玄田に伝えてくれ。 頼むぞ、ローレン』

仮面ライダーカブトはクリスからの連絡を受けて、退路を作るためにカブトクナイガン・ガンモードで辺りに乱射していく。

「気でもふれましたか・・・ おかしな方だ・・・」
「周りが見えないようだな。 よく見てみる！！」

トライバル・エンドの視線が周囲に向いた時、壁の向こうから自動走行してきたカブトエクステンダーが突っ込んでくる。

「なっ・・・ 何！？ まさか！！？」

「その通りだ。貴様は馬鹿だな」

「まったくだな！ ライドロン！！」

仮面ライダーBLACK RXの呼び声にライドロンが高速で走ってくる。

そして、ライドロンの車体が壁を突き破って現れる。

そして、二人はそれぞれのマシンでラボから脱出する。

「おのれ！！ サイクロプスβ01！！ あいつらを追え！！ イヴもストーン・イヴさえ無事なら器に用はない！！」

ロボットのような外観をしたサイクロプスβ01にジキルが命令を下していく。

サイクロプスとはトライバル・エンドの分身であるダークカメラが作った怪獣や宇宙人、怪人達の遺伝子情報を組み合わせ改造したものである。

ちなみに、仮面ライダーイヴの身体はサイクロプスの技術を応用したものである。

しかし、ダークカメラが作ったのはαシリーズだけである。

すなわち、イヴの身体はαシリーズのデータしか使われていないのだ。

ライドロンに乗る仮面ライダーBLACK RXとカブトエクステンダーに乗る仮面ライダーカブトはアサルトフォースの装甲車と他のライダー達に追いついた。

「天道！ 奴らは！？」

「撒いてきたはずだ。 たぶん追っ手が来るぞ」

天道の言葉に他のライダー達の視線が向けられる。

しかし、後方から来た敵の存在に天道の言葉を認識していく。

「仮面ライダーイヴ！！ お前のストーン・イヴを寄越せ！！」

サイクロプスβ01の言葉にアサルトフォースの装甲車のスピードが上がる。

しかし、サイクロプスβ01の姿が消え、見えなくなる。

「ぐふふ・・・ お前のストーン・イヴを奪えば俺はもっと上に行けるんだ・・・ だから、死ね！！」

アサルトフォースの装甲車の屋根を剥ぎ取り、右腕に装備されたエネルギー砲の銃身を零次達に向ける。

「させるか！！ 零次は渡さんぞ！！」

アサルトフォース装甲車にしがみついたサイクロプスβ01の身体に仮面ライダー1号がライダーキックを打ち込んでいく。

しかし、サイクロプスβ01の身体は装甲車から離れない。

クリスが零次を庇おうとしたのを見て、零次は飛び出していく。

「てめえ！ 俺が目的なら相手になってやるよ！！ 変身！！」

零次は覚悟を決めて変身していく。
そして、道路に飛び出る。

「俺は闇を討つもの、仮面ライダーイヴ！！」

サイクロプスβ01はアサルトフォース装甲車から離れ、道路に降

りていく。

「てめえ、何もんだ!!」

アイキャッチA（変身前のポーズを取る零次）

アイキャッチB（ファイティングポーズを取るイヴ）

「俺の名前はサイクロプスβ01 ガルノーだ!! お前を殺すものの名だ!! 覚えておけ!!」

サイクロプスβ01、ガルノーは両腕からかぎ爪を出していく。

「イヴ! 止めるんだ!! 君はまだ力を使いこなせてないだろう!?!」

「けど、あのまま黙ってることなんてできねえよ!!」

仮面ライダー1号と仮面ライダーイヴが話しているところへガルノーが襲いかかってくる。

しかし、二人がそれをかわすとガルノーが身体が震え始めた。

「しまった! エネルギー切れか!? くそっ!! 覚えてろよ!!」

そう言って、サイクロプスβ01、ガルノーは飛び立っていく。その様子を見ながらその場にいた全員は呆然としてしまった。

中国のある秘湯に一人の男がいる。

彼の名前は漢堂ジャン。

獣拳戦隊ゲキレンジャーのゲキレッドである。

幻獣ドラゴン拳のロンを慟哭丸に封印した後、いろんな国を旅していた。

そして、今回中国に獣拳を普及させに来ていた。

「はあゝ やっぱり修行の後の風呂はニキニキだなあゝ」

温泉に浸かり、ご機嫌なジャンだったが自分を見ている何者かの視線には気づいていた。

ジャンは服の置いてある場所まで行くと慟哭丸だけ持ってまた温泉に浸かる。

「（どうやら、わたしの視線には気づいたようですね・・・そろそろもらいに行きますか・・・）」

ジャンは温泉から出ると着替えを済ませて叫ぶ。

「俺のこと見てる奴出てこい！！ 分かってんだぞ！！」

ジャンの言葉にトライバル・エンドが姿を現す。

「はじめまして、漢堂ジャンさん・・・わたしの名前はトライバル・エンド・・・あなたに頼みがあって参りました・・・」

「俺に用って何だ！？」

ジャンはトライバル・エンドに対して身構えながら問いかける。

「単刀直入に言いますとあなたの持つ慟哭丸をわたしに渡してほしいのです・・・」

「嫌だ！！ それにお前、一瞬ゾワンギゾワンゴだったぞ！！」

ジャンが拒否するとトライバル・エンドの纏う雰囲気が変わった。

「どうしても嫌ですか・・・ なら、仕方ありませんね・・・」

トライバル・エンドはそう言うといマジン達を呼び出した。

ジャンはゲキエンジャーに激気を送るとゲキレッドに変身した。イマジンが繰り出してきた攻撃を捌き、キックやパンチで反撃していく。

さらに、激気を込めて咆哮弾をイマジン達の集団に放っていく。

「何で、慟哭丸を狙うんだ！？ ロンを復活させるつもりなのか！
！？」

「なかなか利口ですね・・・ その通りですよ・・・ 計画の一部
ですがね・・・」

トライバル・エンドがそう呟くとイマジン達はさらにゲキレッドに攻撃を仕掛けてくる。

そして、イマジンに両腕を掴まれ、動きが鈍ったところにトライバル・エンドが迫る。

「悪く思わないでくださいね・・・ これも、わたしの望みのため
なのですから・・・」

トライバル・エンドの手がゲキレッドの胸の辺りに添えられるとそのまま中へ入り込んだ。

そして、トライバル・エンドの手には慟哭丸が握られていた。

「あつ！ それ、返せ！！」

「丁重にお断りさせていただきますよ・・・ では、また・・・」

トライバル・エンドの足下に魔方陣が描かれ、消えた。
ゲキレッドは素早くイマジン達を投げ飛ばすと距離を取った。

「（俺のせいで、慟哭丸を奪われた・・・とにかく、ここはなんとかしてラン達に連絡しないと・・・）」

連絡を取ろうとしたゲキレッドに強烈な砲撃が撃ち込まれた。

砲撃を撃ち込んだのはサイプロクスα02 D02である。

このサイプロクスは基本シリーズである、αシリーズを砲撃用に改造したものである。

タイプは使用目的別に分けられる。

タイプDは遠近両用の砲撃型であるのだ。

装備は両肩のバズーカ砲と左腕のマシンガンと右腕のレーザー砲である。

「目標確認・・・爆破する・・・」

その言葉とともにサイプロクスα02 D04の全ての武装が火を吹いた。

しかし、それらはゲキレッドには当たらなかった。

何故なら、ゼロライナーが現れ、ゲキレッドを庇ったからだ。

「無事か、漢堂？ 助っ人連れて来てやったぜ」

「助っ人って誰だ？ 侑斗??」

ゲキレッド「ジャンは侑斗の言葉に疑問を持ったようだ。

侑斗は悪戯っぽく笑うとゼロライナーに視線を送った。

開いたドアから出てきたのはジャンにとって懐かしい二人だった。

「レッ！ ラン！」

「ジャン！ 久しぶりね！！ 大丈夫？」

「久しぶりだね、ジャン。 とりあえず、あいつらをどうにかしようか！？」

レッツとランはジャンの横に並び立ち、変身した。

そして、スーパーゲキクローを取り出した。

「『スーパービーストオン！！』」

三人は過激気をスーパーゲキクローに注ぎ込んで、スーパーゲキレンジャーになった。

「俺も久しぶりに変身するか。 変身！」

侑斗はゼロノスベルトを腰に装着し、ゼロノスカードをセットして仮面ライダーゼロノス>アルティフォーム<へ変身した。

「目標の増援を確認・・・ 破壊する・・・」

サイプロクスα02 D04はゲキブルーやゲキイエロー、ゼロノスを敵と認識したようだ。

「最初に言っておく！ 俺はかーなり強い！！」

「過激にアンブレイカブルボーディー！ スーパーゲキレッド！！」

「過激にオネストハート！ スーパーゲキイエロー！！」

「過激にファンタスティックテクニク！ スーパーゲキブルー！！」

それぞれ名乗り終わると敵に向かっていく。

スーパーゲキレンジャー達は素早くイマジン達を倒していき、ゼロ

ノスはサイプロクスα02 D04と戦っていく。

「目標レベル B・・・破壊可能・・・」

「言ってくれるじゃねえか！ だったら、俺達がめえを破壊してやるよ！！」

ゼロノスのゼロガッシャー・サーベルモードの刃がサイプロクスα02 D04の身体に傷をつける。

しかし、サイプロクスα02 D04のマシガン銃撃で反撃されてしまう。

「侑斗！ 大丈夫か！？」

「遅せえんだよ！！ 来い、デネブ！！」

ゼロノスはゼロノスベルトからゼロノスカードを抜き取り、黄色の面を表にして再びセットしていく。

すると、デネブがゼロノスと合体し、ベガフォームになった。

「最初に言っておく！ 久しぶりの侑斗の活躍を見てくれ！！」

「（余計なこと言わなくていいんだよ！！ さっさとあいつをどうにかしろ！！）」

デネブのずれた一言に侑斗が心の中でツツコミを入れる。

そうしている内にスーパーゲキレンジャー達がゼロノスに合流した。

「漢堂！ みんな！！ 力を貸してくれ！！」

「もちろん。 僕達もゆつくり話をしたいんでね」

スーパーゲキレンジャー達はゲキバズーカを呼び出し、ゼロノス<gtベガフォーム<はゼロガッシャーをボーガンモードに変えていく。

『フルチャージ』

ゼロノス>ベガフォーム<はボーガンモードをフルチャージしていき、スーパーゲキレンジャー達は激気をゲキバズーカに込めていく。

「目標破壊・・・」

サイプロクスα02 D04は全身の武装を四人に向ける。

「スーパー激激砲!!」

「ふんっ!!」

ゲキバズーカとゼロガッシャーから放たれたエネルギーはサイプロクスα02 D04に炸裂した。

しかし、サイプロクスα02 D04の左腕のマシガンだけはまだ機能していた。

そこへ黒いデンライナーに似た列車が現れた。

「そいつは俺がもらうぞ。 いいな？」

「ちよつと待て！ お前何なんだ!!」

黒いデンライナーから出てきた男はゲキレッドに耳を貸さずに黒いゼロノスベルトに似たベルトを取り出した。
そして、それを腰に装着していった。

「黙って見てろ。 変身」

男はベルトに手をかざすと変身した。

「行くぞ、シュナイダー」

男は黒いライダーに変身した上にベルトにイメージのような絵が描かれたカードを読み込ませると小型の回転ノコギリがたくさんついた大剣を取り出した。

「目標変更・・・破・・・」

サイプロクスα02 D04が言い終わる前にライダーの大剣が両足と両腕を切り裂いた。

「終われ・・・」

動けなくなったサイプロクスα02 D04の身体に大剣を突き刺していく。

そして、大剣を抜き取るとサイプロクスα02 D04は爆発した。ゼロノス>ベガフォーム<はゼロノスベルトからゼロノスカードを取り変身を解除した。

「待てよ。いきなり現れて説明もなしかよ」

「説明する必要はない。言っても無駄だからな」

ライダーは変身を解くと侑斗に向き合った。

「俺の名前は仮面ライダーカオス、サイガ リョウだ。覚えておくといい。 桜井侑斗」

リョウはカオスライナーに乗り込み、時の中へ消えた。

ガイアセイバース本部でもある日本支部関東基地ではガイアセイバ

ーズのメンバーがこれからの方針について話している。

「俺達のこれからの動きについてだが、とりあえずは、ダーククラ
イムの調査と沢井零次を鍛え上げることだ」

「それなら、俺には関係ないな。 君達でなんとかしなさい」

天道の言葉に名護は作戦室を出ていこうとする。

天道は名護を呼び止めた。

「まあ、待て。 お前にはトライバル・エンドを追ってほしい。
借りがあるんだろ？」

「俺の失態を見ていたというわけか。 いいだろう。 俺がトライ
バル・エンドを追う」

そう言うと、名護は作戦室を後にした。

「天道くん、何でわたしらまで呼んだん？ それだけやったらわた
しらの力まで必要ないやろ??」

「はやての言いたいことは分かる。 しかし、トライバル・エンド
はおそらく全ての世界に手を出すだろう」

天道ははやての疑問に対していろいろと答えていく。

「まあ、天道くんの話は分かったけど、ずっとこっちにはおられへ
んよ。 わたしらの部隊は時空管理局の所属なんやから」

「分かっているさ。 なら、定期的にこの基地にある転送ポートを
使って来ればいいだろう。 とにかく、協力してほしい」

天道の言葉にはやては頷いた。

そして、ガイアセイバーズの今後の方針が決まった。

次回 スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION EPI
S O D E - 4 出会い

強くなるための訓練を始めた零次達。

高校でも幼なじみや新たな友人とも出会う。
しかし、敵の牙も零次に襲いかかってくる。

E p i s o d e - 4 出 会 い (前 書 き)

前書きが思いつきません・・・

Episode - 4 出会

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Epis
ode - 4 出会

仮面ライダーイヴこと零次の訓練が始まって一週間が経った。
今は訓練に付き合ってくれているスバルとランニングをしている。

「なあ、スバル。俺の訓練に付き合ってくれるのはありがたいんだけどよ・・・仕事とかいいのかよ」

「うん、大丈夫。あたしの部隊はそんなに出動する機会ないし、仕事も交代制だしね。それに、八神部隊長が六課をまた作ってくれたから」

零次はスバルの言葉にちょっとした疑問を抱いてしまう。

スバルが所属しているのは機動六課という組織だとばかり思っていたからだ。

「スバルってどんな仕事してるんだ。ちょっと気になってさ」

「あたしは特別救助隊っていうところで働いてるよ。レスキューの仕事をしてるんだ」

スバルの誇らしげな表情に零次はドキツとしてしまった。

それと同時に自分よりも大人なスバルにちょっとした尊敬の念が生まれたのを感じた。

「スバルはすげえな。俺なんて将来のことも今のことも何も考えられない」

「あたしには今の零次に答えてあげられるほど頭よくないけど・・・
零次は零次らしくしてればいいんじゃないかな」
「だよな。ありがとな、スバル。ほら、さっさと行くぞ」

零次が急に走り出すとスバルも慌ててついていく。

しばらく走っていると河原に着いた。

そこでは、一人の少女がシャドーボクシングのように身体を動かしている。

「彩〜！！ 朝から元気だな〜！！」

「零次も朝から元気だね〜！！ こっちに来て話そうよ！！」

零次と親しげに話している少女を見て、スバルは首を傾げる。

「あつ、スバルは彩とは初めて会ったよな？ こいつは美島彩。
この辺でストリートファイトをしてる格闘娘だ」

「その紹介はないよ、零次。えっと、スバルちゃんだよな」
「うん。彩ちゃんだよな？ 零次とは知り合いなんだ」

スバルの言葉に彩は思い出すように話し始めた。

「ボクが零次と出会ったのは1年程前なんだ。あの時ね、ボクが
夕方の練習をしてるとね・・・」

1年前、彩が河原で格闘技の自主練習をしているところから悪
そうな奴らがからんでいたのを見た俺は彩を助けるつもりでちよう
ど持っていたサッカーボールをそいつらの一人の頭に向けて蹴りつ
けた。

「痛つてゝな！！ 何すんだよ！！ ガキがかつこつけてんじゃねえぞー！！」

「うつせえーんだよ、ばゝか！！ 女一人に男三人なんてだせえんだよー！！」

俺としてかつこよく彩を助けたつもりだったが不良のターゲットが俺に移ったことには気づいていなかった。

「てめえ、ぼこぼこにされてえのか！？ 俺らはストリートファイトじゃ有名なんだぜ・・・」

「ストリートファイト？ ゲームじゃないんだからそういうのは卒業しようぜ」

俺との会話に意識が行っていた男達のボディに彩が肘や拳を叩き込んでいった。

すると、男達が地面に倒れ込んだ。

しかも、意識がなくなってる・・・

「お前つてすげえんだな。 何かの縁だし、名前教えてくれよ？」

「いいよ。 でも、君の名前も教えてくれる？」

彩の言葉に俺は自己紹介をする。

「俺は沢井零次だ。 住んでんのは東京で、今日は近くの高校に練習試合に来てただんだけど、迷っちゃってな・・・」

「あははは。 ボクは美島彩だよ。 ボクはこの辺でストリートフアイトをしてるんだ。 今度は零次のいる東京に行ってみようかな」

俺と彩は笑いながら話していた。

「そんな感じでボクと零次は会ったんだよ」

「あはは・・・ けど、零次っていい人だね。 彩ちゃんを助
けようとするんだから」

零次はスバルと彩の言葉に照れたように頭をかいた。

「別にいいだろ・・・ あの時は彩があんなに強いなんて知らな
かったんだよ。 なあ、彩・・・ 俺に戦い方を教えてくれ・・・」
「それはボクをからかっているの・・・ だったら、怒るよ・・・」

零次の言った言葉に彩の雰囲気が変わったのを見たスバルはおろ
ろしてしまう。

しかし、そこへサイクロプスβ01、ガルノーが現れてしまった。

「イヴ！ 女とお楽しみところで悪いが死んでもらうぞ！！」

「零次、あれ何なの？ ボクにも分かるように説明してよ」

彩の呟きにも似た言葉を聞いた零次は答えるように静かに変身した。

「これが今の俺だ。 俺はもう普通の人間じゃない」

「そういうこった。 関係ねえガキは退いてな」

ガルノーはイヴに向かって突進していく。

イヴはガルノーの突進を受け止めるのではなく、飛び越すことでい
なした。

そして、ガルノーの顔面に素人臭さを丸出しにしたような後ろ回し
蹴りを打ち込んでいく。

「スバルちゃん。何か逃げる方法はあるかな？」
「どうして！？ 零次、戦えてるよ！！」

スバルは彩の言葉に反論していく。
しかし、彩は落ち着いてスバルの言葉に意見を返していく。

「零次が仮面ライダーになったのは分かったよ。けど、戦い方が素人すぎるよ。キックのスピードも全然ないし・・・あれじゃ、効かないよ・・・」

「それじゃあ、零次が勝てる見込みないの・・・」

スバルは不安そうに彩を見る。

「ねえ、スバルちゃんはどうなことができるの！？ ボクは気を使うことができるけど・・・」

「あたしは魔法が使えるけど打撃系だし・・・どうしよう？」

彩はスバルの言葉を聞いて、プランを提示する。

「じゃあ、ボクがラウスウェイブで視界を塞ぐからスバルちゃんは零次を撤退させて！！」

「分かったよ、彩ちゃん！！ お願いね！！」

スバルの言葉を聞いた彩は身体の中にある気を練り上げて、ラウスウェイブを発動させる。

スバルは地面にリボルバーナックルを叩きつけ、ウィングロードを発動させていく。

そして、イヴのいる場所まで行くとイヴの手を掴み、勢いよく逃げていく。

彩は二人を確認してからスバルの肩に捕まって逃げる。

「彩！ 何で逃げてんだよ！！ あいつを倒すのが俺の役目だろ！」

「今の零次じゃ勝てないよ。それに、零次が勝たなきゃいけないのは零次を改造した奴らでしょ・・・」

彩の言葉に零次は冷静さを取り戻した。

「スバル。 とりあえず、どこか隠れられそうな場所に逃げてくれ・・・」
「分かったよ・・・」

スバル達は近くの路地裏に逃げた。
零次は少し落ち込んでいるようだ。

「零次、ボクのさっきの言葉への答えは決まったよ。 ボクも零次に喧嘩の仕方を教えるよ。」

けど、必ず生き残るって約束して・・・」

「ああ、分かったよ。 それに、俺だって死ぬつもりはねえよ。けど、逃げられないのも事実だ」

零次の言葉に彩は頷きながら否定はしなかった。

「じゃあ、彩。 俺達は帰るけど東京に来る時は俺に連絡しろよ。迎えに行つてやるからさ」

「うん、期待しているよ。 スバルちゃん、今度会ったら勝負しようね」

「うん、約束するよ。 でも、負けないよ」

零次達は駅の広場で別れの挨拶を交わしていた。

スバル達は早速意気投合したようで再会の約束を交わしていた。

トライバル・エンドはある男と会っていた。

その男の名は古賀修造。

彼は世界的複合企業集合体、『WAC』のオーナーである。

『WAC』は表向きは最新技術を応用して社会に貢献している。

しかし、裏社会では軍事兵器を造り、世界中のテロ組織や軍隊に売りさばいているのである。

「古賀修造さん・・・わたし達、ダーククライムはあなた方、『WAC』にサイプロクスの製造を任せたいのです・・・いかがでしょう・・・」

「俺達の組織にメリットはあるのか。もし、ないならお引き取り願おうか」

修造の言葉にトライバル・エンドはわざとらしい動作で修造を止めた。

「あなた方のメリットはサイプロクスによる利益と独占開発権を譲ることを約束しましょう・・・」

「なら、サイプロクスの詳細なデータをもらえるとありがたいが・・・それは利用価値はあるのか」

修造の問いかけにトライバル・エンドは別の空間から書類を取り出した。

「では、この書類を読んでみてください・・・きっと、わたし達の発明を理解いただけるはずですよ・・・」

修造は書類に目をおし、データを見ていく。

「サイプロクスシリーズか。現代兵器の大半に耐えきり、任務ごとに用途を変える。破壊するには核爆弾を使用しなければならぬ。個体もあるのか。面白い製品だな」

修造はトライバル・エンドに書類を返すと、12人の部下を呼びつけた。

「我々、『WAC』の新しい商品が決まった。

ダーククライムという組織が持ってきたサイクロプスシリーズだ」
「オーナー、それは一体どういうもののです？」

「そうですよ、オーナー・・・サイクロプスは空想上の怪物ですよ。どうやって、作るのですか・・・」

彼らは『WAC』の理事達である。

なので、わけのわからない商品を認めるわけにはいかないのである。

「サイクロプスとは過去に出現した怪獣や怪人、宇宙人達の遺伝子を組み合わせて加工した劣化コピーだから俺達にも造り出せるだろうから造る。」

この考えに何か意見があるものはあるか・・・」

「オーナー、その遺伝子に問題はないのですか。私達の企業を崩壊させることはできないのですよ」

「なら、実験してみようじゃないか・・・それで、半数以上の賛成意見が得られれば商品として売る。」

これでいいだろう」

修造の提案を了承した理事達は次々に会議室を後にしていく。

零次達が彩と出会ってからまた一週間が経った。

今では零次は自分の力のある程度もてあますことなく使いこなせるようになってきた。

今は神敬介こと仮面ライダーXとの特訓に励んでいる。

「行くぞ、零次!!」

「ああ、来い!!」

仮面ライダーXはライドルスティックを取り出すとイヴに打ちかかった。

仮面ライダーXのライドルスティックを使った棒術はイヴの動きに微妙な戸惑いを生み出させてしまう。

さらに、ライドルスティックでイヴを殴った後にキックをイヴの腹に入れていく。

「どうした!! こんなものなのか!？」

「まだまだあ!!」

イヴもミドルキックの要領で仮面ライダーXに反撃していくがライドルスティックに防がれてしまう。

しかし、諦めずにパンチを打ち込んでいく。

一発のパンチが仮面ライダーXのライドルスティックを抜いて当たった。

「ぐうつ・・・やるな! そろそろレベルを上げていくぞ!!」

イヴと仮面ライダーXの特訓が終わり、二人は変身を解いてクールダウンをしている。

「零次、まだまだ攻撃のタイミングや構成が甘いぞ。もっと経験

を積まないとな・・・」

「ありがとうございます、敬介さん。俺もまだまだなあ・・・」

「

零次の呟きに敬介は笑いながら答えていく。

「いやいや、格闘技を再び始めてから一週間や二週間でここまで感覚を取り戻したんだからさすがだよ。なあ、先生方」

敬介は零次の指導に当たっているギンガ達の方へ向きながら尋ねた。ギンガ達は集まった零次に対する評価を相談していた。

「みんな、どう思う？ 合格？ 不合格？」

「そうですね・・・ 明日菜さんが見たところではどうなんですか？」

今の零次はガイアセイバーズの女性陣に戦い方を学んでいる。

その中に、明日菜こと神楽坂明日菜と刹那こと桜崎刹那もいる。

アイキャッチA（仮面ライダーXと仮面ライダーイヴのライダーキック対決）

アイキャッチB（ガイアセイバーズ隊員専用トレーニングウェアを着た明日菜と刹那）

彼女達はNGO団体『白き翼』に所属していて人を影から襲う妖魔達を倒していたりする。

「あたしとしてはまだまだだね。ただの喧嘩でもまだあたしの方が強いわよ。動きが素人すぎるのよ」

「そうですね。もう少し、攻撃の打ち方をコンパクトにするとい

いですよ。 皆さんはどう思いますか？」

刹那の問いかけにギンガ達はまた問題点を述べていく。

ダーククライムの本拠地、ダークホライズンではある話題が持ちあがっていた。

「トライバル・エンドよ・・・ シャドームーン様を甦らせるとは本当なのか？」

「その通りですよ、大神官ダロム様・・・ しかし、あなた方と違う方法でしかシャドームーン様を復活させることができないのです・・・」

トライバル・エンドの言葉にダロムを含む、幹部達の視線が集まる。

「そう・・・ まずは、シャドームーン様の遺体を見つけなければならぬ・・・ そこへ、シャドームーン様の魂を結びつけなければならぬのです・・・」

「では、我らがシャドームーン様の遺体を探そうではないか・・・」

そう言うのと幹部達は姿を消した。

零次達の学校でも異変が起こりつつあった。

生徒が一人また一人と消えていつているのだ。

「何が起こってるんだ？ まるで神隠しだな」

「おい！　そこで何をやってる！？」

零次が周りを調べていると誰かが声をかけてきた。

「あんた、何者だ？　ただの高校生ってわけじゃないみたいだな？」

「気づいてたのか。俺は村中聡だ。お前は誰だ？」

聡の言葉に零次は少し考えてから答えた。

「えっと・・・俺は沢井零次。普通の高校生だ」

「俺はちよつと違った高校生だ・・・ちよつと調べ物をしてただけだ・・・」

聡は何かを隠しているようだ。

そうしている内に、悲鳴が聞こえてきた。

「聡！　さつさと行くぞ！！」

「聡さんだろ！！　年上だぞ！！」

零次と聡が悲鳴のあった場所に向かうとそこにいたのはガルノーだった。

「てめえ・・・何でこんな真似しやがった！！」

「貴様を確実に殺すための人質だ。さあ、お前のストーン・イヴを超越せ！！」

零次はガルノーの言葉に周りを見て、少し躊躇っていた。

他の生徒が体育館の天井から吊られていたのだ。

「そいつらを放せ！！　関係ねえだろ！！」

「零次、あいつがサイクロプスか・・・厄介そうだな・・・」

零次と聡は天井から吊られた生徒達を見ながら様子を伺う。

「さつさとしろよ。 全員殺すぞ。」

「分かった・・・ 少し待っててくれ・・・」

零次はそう言うのと舞台裏に向かった。

ガルノーは左腕から出した大きな針で零次のいる辺りを何度も刺した。

そして、さらにそこへ右腕から出したバズーカ砲で砲撃した。

「やったか・・・ 後は奴の死体からストーン・イヴを引きずり出してやる・・・」

ガルノーが近づいていくとそこには零次の姿はなかった。

「こつちだ!! 俺はここにいるぞ!!」

体育館のステージの上には仮面ライダーイヴがいた。

その姿は眩しいくらいの白銀だ。

ガルノーはイヴに向けて機関銃を撃っていく。

しかし、イヴはそれを両腕で弾いていく。

「ば、馬鹿な・・・ それにその姿は何なんだ!!」

「俺にも分からんさ。 だが、力が沸いてくるんだ! 俺はお前達のような悪の使者から平和を守れるんだ!!」

イヴの言葉にガルノーはさらに機関銃を乱射するがイヴにはまったく効き目がなくなっている。

イヴはガルノーを掴み、投げ飛ばしてしまう。

「君、早く天井の縄をほどいてやってくれ。 皆を降ろさないと・・・」

」

「ごまかさなくていいさ、ライダー。　聡って呼んでくれ」

聡はイヴの正体を理解したようだ。

二人は天井に吊られた生徒達を助けていく。

生徒を助け終わるとイヴはガルノーを投げ飛ばした場所に向かう。

ガルノーはイヴに投げ飛ばされて中庭の辺りにいた。

「くそ・・・　何なんだ・・・　あの力は・・・」

ガルノーがぼやいていると一人の男が現れた。

「お前にはもう何も期待はしない。　あの世へ行くといい」

「何だと！！　ぶち殺されてえか！！」

ガルノーが叫ぶと男は自分の名を名乗った。

「俺は古賀修造。　デスライダーだ」

修造の言葉とともに修造の腰に銀色のベルトが現れた。

「変身！！」

修造はデスライダーに変身するとゆっくりとガルノーに近づいていく。

「なめんなあ！！」

ガルノーは全身の武器を乱射していくがデスライダーの身体の周り

にまとっているバリアのようなもので逸らされたり弾かれてしまっている。

「消える・・・」

デスライダーは一気にガルノーに近づくと右手でガルノーの顔を掴んでいく。

そして、そこからサイコキノエネルギーを注ぎ込んでいく。

そう、デスライダーは『WAC』がいずれ自分達の障害になるであろうガイアセイバーズを相手にするために作った擬似仮面ライダーなのである。

「ぐあああああああ・・・」

サイコキノエネルギーを浴びせられたガルノーの身体に亀裂が走っていく。

そして、ガルノーが消滅した。

そこへ、イヴがやってきた。

「お前は誰なんだ・・・見たところ、ガイアセイバーズのメンバーって感じもしないしな・・・」

「俺は『WAC』所属のデスライダーだ。貴様を倒すのはまた今度にとっておくとしよう」

そう言うと、デスライダーは静かに消えた。

イヴは変身を解くと体育館に戻った。

イヴが初勝利を納めてから一週間、ガイアセイバーズメンバーからの特訓は厳しくなり、体力作りと称してアサルトフォースの訓練にも参加させられている。

そして、それから少ししてようやく休みがもらえたのだ。

零次とスバル、ティアナは東京に遊びに来た彩や彩の親友の三木原珠音と一之瀬由芽を連れて、東京で有名なストリートファイトの穴場にいた。

「それにしても、スバルから初めて聞いた時は全然信じられなかったけど彩ってめちゃくちゃ強いよね」

「そうよ。　アーヤはめちゃくちゃ強いのよ」

今、ティアナと珠音が話しているのは先程行われた彩の試合で開始から30秒という速さで相手を完全に打ちのめしたことについてだ。

「そんなことないよ。　ボクはまだまだよ」

「彩ちゃん、次も頑張ってくださいね」

由芽が彩と話していると彩の前に一人の少女がやってきた。

黒いロングの髪に白いＴシャツとジーパンにスニーカー・・・

ここまでなら、普通の女の子の格好だがその手には青色のオープンフィンガーグローブが嵌められていた。

「美島彩と彩坂梨杏の試合を始める」

零次は立会人の言った名前に驚いてしまった。

彩坂梨杏は零次の幼なじみで幼い頃に一緒に空手をやっていた仲だ。

「よろしくね、彩ちゃん」

「うん、梨杏ちゃん。　でも、ボクも負けないからね」

梨杏と彩はしっかりと握手を交わしてから距離を置き、お互いの得

意とする構えを取った。

「Ready Fight s!!」

立会人の掛け声に彩と梨杏が一気に距離を詰めていく。

いよいよ、二人の試合が始まった。

次回 スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION E
pisode - 5 彩坂梨杏 プロデビュー!! (前編)

彩坂梨杏はプロのライセンスを取ったにも関わらず何故ストリートファイトで闘っているのか。

そして、彩との勝負の行方は・・・

梨杏とまどかとの過去とは一体!?

彩坂梨杏、君の想いを見せてくれ!!

ぶっぎるぜ!!

Episode 5 彩坂梨杏 プロデビュー!! (前編) (前書き)

皆さん、どうもですよ♪

ひらひらです♪

今回からゲスト扱いで登場している美島彩ちゃんは宮内ミヤビさんのサイト、魔女の棺(女闘館)で執筆中の彩Ayaの主人公なのですよ♪

それでは、お楽しみください♪

Episode - 5 彩坂梨杏 プロデビュー!! (前編)

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Epis
ode - 5 彩坂梨杏 プロデビュー!! (前編)

梨杏と彩のストリートファイトの試合が始まった。

梨杏と彩はお互いに一気に距離を詰めると梨杏は左ジャブを数発放ち、彩はそのジャブを華麗なステップワークでかわしてから梨杏の左足の膝にローキックを叩き込んでいく。

しかし、梨杏はバックステップで彩のローキックをかわすと左右のストリートを打ち込んでいく。

彩は梨杏の左右のストリートをかわすとワンインチパンチを梨杏のボディーに叩き込んでいく。

「ぐぶつ・・・ まだまだ!!」

「梨杏ちゃんには負けないから!! 覚悟してよね!!」

彩がそう言いながらサイドキックを放とうとしたところに梨杏が距離を詰めて彩のキックをいなし、お返しのボディーブローを打ち込んでいく。

高校生にしては身長が低く、体重の軽い彩にとって梨杏のボディーブローはかなりダメージを負うことになる。

しかも、梨杏は自分の通う東山学園では男子ボクシング部や女子ボクシング部で何度もスパーリングをこなし、自分よりも少し上の階級の相手とも打ち合えるのだ。

「ぶふう・・・ (梨杏ちゃん、強いよ・・・ 今まで闘ってきた

中でもかなり上の方にいるよ・・・）　けど、楽しくなってきたよ！！」

「彩ちゃん、凄いね・・・　わたしのパンチ、少しくらい体重の重い男子でもダウンさせられるのに彩ちゃんは耐えたんだ・・・　ちよつと自信なくなっちゃったよ・・・」

梨杏と彩は少し距離を取りながら話している。

早くもお互いに肩で息をしている。

しかし、梨杏も彩も相手に挑んでいくことを止めない。

「（梨杏ちゃんってボクサーだね？　でも、パンチの打ち方が普通のボクサーと違うような気がするなあ・・・）　ねえ、梨杏ちゃん！？　空手とかやったことってあるの！？」

「（彩ちゃんの闘い方って基本的にどんな格闘技をベースにしてるんだろ？　さっきのボディーブローは中国拳法みたいだったけどフットワークはボクサーみたいだし・・・　分かんないや・・・）　うん、そうだよ！　彩ちゃんは我流だったりするの！？」

二人はお互いに疑問に思ったことを考えながら、話していく。
しかし、お互いに相手が隙を見せたら、自分のパンチがキックを相手に叩き込もうとしている。

「彩ちゃん、行くよ！！」

「ボクも行くからね、梨杏ちゃん！！」

二人はしびれを切らしてしまったのか、一気に近づくと再び左右のストレートを乱打していく。

彩はさらに右のハイキックやミドルキックを打ち込んでいくが梨杏は両腕でパリングして弾いていく。

そして、梨杏は彩の顎に右アッパーをめり込ませていく。

「ぶふう・・・」

彩は梨杏の右アッパーに口から唾液と血を吐き出していく。

しかし、咄嗟に宙に浮かぶことで梨杏のアッパーの威力を殺した彩は空中で体勢を整えるとギアブレードと呼ばれる後方宙返りでのキックで梨杏の顎を打ち抜いていく。

「がはあ・・・ はあ・・・ はあ・・・」
「はあ・・・ はあ・・・」

梨杏と彩はお互いに顎を打ち抜かれて吹き飛ばされる。
倒れたまま、数十秒が経った頃に二人はゆっくりと立ち上がった。

「はあ・・・ はあ・・・ 彩ちゃん、強すぎだよ・・・ 連戦な
んでしょ・・・」

「はあ・・・ はあ・・・ そうだよ・・・ けど、梨杏ちゃん相
手なら先に試合してなくてもたぶんこうなってたよ・・・」

梨杏と彩は息を整えながら構えていく。

そして、お互いに右のストレートを繰り出していく。
しかし、彩の右手には気が込められていた。

「てええい!!」

「うわあああ!! ラウズナツコオオオオツ!!」

梨杏の拳と彩の拳がお互いの鼻にめり込み、止まった。
そして、二人の身体がアスファルトの上に崩れ落ちた。
しかし、彩だけがふらふらしながらも立ち上がった。

「勝者、美島彩!!」

立会人の言葉にその場にいた観客達が大歓声を上げた。しばらく、その熱気は止むことがなかった。

彩達は試合が行われた場所から少し離れたファミレスにいた。

梨杏と彩は試合の後、早速意気投合したのか、話が弾んでいる。

「梨杏ちゃんってプロボクサーだったんだあ。　どうりでパンチが重いわけだよ」

「でも、まだ試合したことないんだよね。　あつ、１ヶ月後に試合だよ」

梨杏の言葉に彩達は呆れたような表情をしている。

異世界から来ているスバルやティアナはポカンとしている。

普通、試合するプロの格闘家が１ヶ月前に怪我をするようなことはない。

デビュー戦が控えている梨杏なら分かっているはずだ。

「どうして、梨杏ちゃんはストリートファイトをこんなにぎりぎりまで続けてたの？」

「えっとね、お母さんに今まで出してもらってたジムの入会金や月謝を返したかったのとストリートファイトでならわたしのボクシングをもっと高められるかなって思ったのが理由だよ。

まあ、今わたしがいるジムは経営難でもうすぐなくなるらしいだけだね・・・」

梨杏の練習してきたジムは長い間、タイトル保持者が出なかった。なので、ジムの施設運営費はどんどんなくなり、梨杏がプロテストを受けた時には無理をしたくらいだ。

「だから、会長と試合をするのはデビュー戦が最後なんだ」

「梨杏ちゃんは凄いね。自分のことだけじゃなくてジムの会長さんのことも考えてるんだから。デビュー戦、頑張ってね！ボクも応援に行くから！！」

「あたし達も応援に行くよ。みんなで応援すれば百人力だね、ティア」

「あたしに話振らないでよね、スバル。けど、せっかく知り合っただんだし応援くらいには行くわよ」

ティアナの言葉に彩達は笑った。

ティアナは素直じゃないので素直に応援するとは言えないが憎まれ口を叩きながらも応援しようという気持ちはある。

「ところで、梨杏。あんたは会見とか済ませてるの？」

「ふえっ？ まだだよ。それがどうしたの？」

珠音が梨杏に会見をしたのかと尋ねると梨杏はまだしていないと答えた。

珠音はその梨杏の答えに呆れて肩をすくめた。

「あんたねえ。そんな顔で相手との会見なんかしたら嘗められるわよ」

「大丈夫だよ。相手のことはよく知ってるから」

零次は梨杏の言葉に疑問を感じたので尋ねてみた。

「梨杏、お前のデビュー戦の相手って誰だよ？」

「えっ？ まどかだよ。神宮寺まどか」

神宮寺まどか。

梨杏や零次の幼なじみである。
小さな頃からボクシングをしていて、零次や梨杏と知り合ったのもそれが縁である。

詳しく話すと二人が小さな頃、梨杏の習っている空手が強いが、まどかの習っているボクシングが強いかで喧嘩して殴りあったのである。

ちなみに、その時は梨杏がまどかをKOして勝っている。

「ねえ、零次、梨杏ちゃん。 まどかつて誰？」

「あつ、それはあたしも気になったよ。 良かったら教えてくれな
い？」

彩とスバルは零次達にまどかのことを尋ねる。
珠音や由芽達も興味津々という顔をしている。

「あれはね、 8年くらい前かな。 わたしと零くんが一緒にランニ
ングしてた時がまどかと初めて会った時なんだよね」

梨杏は少し遠い目をしながら話し始めた。

（約8年前）

「（零くんと一緒に走っているとやっぱりうれしいなあ・・・）」

わたしは最近一緒に空手を始めた零くんと一緒にランニングをして
いる。

零くんも少しうれしそうに走ってる。

「零くん。 ちょっと速いよお」

「早く来いよ、梨杏。置いてくぞ」

零くんの言葉にわたしの目からじんわりと涙が出てきた。
零くんはそんなわたしを見て、駆け寄ってくれた。
そして、わたしの顔を乱暴にハンカチで拭いてくれた。

「泣くなよ。梨杏が泣くのは見たくないんだよ」

「うつつ・・・ うん・・・ もう泣かない・・・」

それでも、まだ泣き声混じりで話すわたしの頭を少し乱暴に、でも、優しく撫でてくれた。

「空手家さんはずいぶん泣き虫なのね。けど、あたしはボクシングの練習中なの。退いてくれないかしら!？」

「何よ! だったら、あなたが避けたらいいじゃない!! ボクサ―ってのろまな人が多いってほんとなんだ!？」

わたしは目の前にいる赤くて長い髪の女の子が言ったことに凄く頭にきて、その女の子が好きなボクシングを馬鹿にしてしまった。

「何ですって! だったら、あんたを殴り倒してあげるわよ!!」

女の子はそう言うとなわたしの顔を思い切り殴ってきた。

殴られてカッとなったわたしはその娘のお腹に下突きを叩き込んでやった。

女の子は少し苦しそうに顔を下に向けたけど、すぐに、わたしのお腹にパンチを打ち込んできた。

「んぶう・・・ や、やったな〜!!」

「あぐう・・・ やったわよ!! あんたみたいな弱つちい空手家

なんかに負けないんだから!!」

その娘がわたしの大好きな空手をまた馬鹿にしてきた。

「ねえ、あなたの名前は何て言うの？ わたしは彩坂梨杏だよ」

「あんた、馬鹿じゃないの？ 何で、喧嘩してるあんたに名前なんか教えなきゃいけないのよ・・・」

その娘はわたしの提案を馬鹿にして、取り合おうとしていない。

「ふーん・・・ 負けるのが怖いから名乗れないんだ・・・ これは喧嘩じゃなくて決闘だよ！ わたしとあなたの格闘技、どっちが強いかのね!!」

「分かったわ。 決闘なら名乗らなきゃ駄目ね！ あたしの名前は神宮寺まどか!! いつか、世界チャンピオンになるボクサーの卵よ!!」

その娘の、まどかの言葉を聞いて、わたしは拳を突き出す。

まどかも拳を突き出して、わたしの拳とぶつけてきた。

これで、仕切り直しの挨拶は終わった。

全力でまどかを殴り倒すだけだ!!

「二人とも止めるよ!! どっちが強くてもいいだろ!？」

「零くんは黙ってて！ これはわたしとまどかの問題なんだから!!」

「そうよ！ 男のくせに喧嘩をすぐに止められなかったあんたが口を出さないでよ!!」

零くんはわたし達の感情に任せた言葉を聞いて、怒ったようにどこかへ行ってしまった。

「（零くんになんか言いたくなかったのに・・・全部、まどかのせいだ！！）」

わたしは怒りに任せて、まどかに殴りかかった。

「（足は、蹴りは絶対に使わない！

まどかが拳で勝負するならわたしだって拳で勝負するんだから！！）」

「

わたしはもう空手とボクシング、どっちが強いとか関係なくなっていた。

ただ、目の前にいるまどかに勝ちたくなっていたのだ。

「負けないんだから！ まどかには負けない！！」

「あたしだって梨杏には負けない！ 絶対負けないわ！！」

わたしとまどかはお互いの鼻に右ストレートと右の正拳突きを叩き込んだ。

わたしとまどかのパンチがお互いの鼻から鼻血を出させていく。しかし、わたし達は痛みに耐えながら殴りあっていた。

わたし達は子どもだが格闘家なんだ。

「まどか、強いね・・・ はあ・・・ はあ・・・ ボクシングのこと、ちょっとだけ興味沸いたよ・・・」

「はあ・・・ はあ・・・ あんたこそ強いわね・・・ 負けたわ・・・」

そう言うと、まどかの身体がアスファルトの上に崩れ落ちた。

わたしがどうしたらいいか、迷っていると零くんに連れられたお母

さんが見えた。

お母さんは倒れて動けないまどかに近づくと意識があるかを素早く確かめてくれる。

そして、まどかが無事なのを確認すると抱き抱えて、わたしの家まで連れていった。

わたしは家に帰るなり、お母さんから拳骨をもらってしまった。

アイキャッチA（小さい頃の梨杏とまどかのツーショット）
アイキャッチB（今の梨杏とまどかのツーショット）

お母さんはわたしのやったことを叱ってるんじゃない。
空手を喧嘩に使ったことを怒ってるんだ・・・

「梨杏、喧嘩しちゃ駄目とは言わない。でも、空手が強いとか他の格闘技が弱いとか決めつけないで。そんなことしたら、梨杏は弱くなっちゃうよ」

「ごめんなさい・・・まどかに馬鹿にされた時、お母さんのことまで馬鹿にされた気がして・・・それで・・・」

わたしが気まずそうに言うと優しく撫でてくれた。

「分かったら別にいいわよ。後で、まどかちゃんからもお話聞かないとね」

お母さんはそう言うと、居間を後にした。

まどかが起きて、お母さんとまどかのお父さんがわたし達の話聞いてくれた。わたし達は自分が思ったことを話した。

「どうやら、まどかが最初に喧嘩を吹っ掛けたようですね。まことに申し訳ない」

「いえ、気にしないでください。二人ともいい勉強になったでしょう。それよりもまどかちゃんに何かあったんですか？」

わたしは零次くん達を居間で遊ばせて、わたしの部屋でまどかちゃんのお父さん、神宮寺耕次さんと話している。

わたしと耕次さんは耕次さんの奥さん、わたしのライバルであった神宮寺あかりを通じて知り合った。

わたしとあかりはキックボクシングの試合で何度も勝負してきた。勝敗はほとんど同じだったけど、世界タイトルマッチの時はわたしが最終ラウンドにあかりを全力で殴り続けてKOした。

「それで、その時の試合の映像をあかりが見ていたところにまどかがやって来て、ゆかりさんにラッシュを食らっているのを見てしまったんです」

「そう。どうせ、あかりのことだから『この人は空手家なんだよ』とでも言っただんでしょ？」

わたしの言葉に耕次さんは頷いてくれた。

「耕次さん、この話題はまどかちゃんが大きくなったらわたしから話すわ。それまで、黙っててくれる？」

「分かったよ。ゆかりさんにはいつも助けられてたから大丈夫だ」

わたしの言葉に耕次さんが頷いてくれる。

わたし達は別の話題に話を変えて世間話を続けた。

（現在）

「こんな感じでまどかと知り合って仲良くなったんだ」

「なんだか、凄い出会い方だったんだね。でも、梨杏ちゃんにとってデビュー戦は長年のライバルとの試合なんだね」

梨杏の言葉を聞いた彩が自分の感想を言っていく。

梨杏はそんな彩にまどかとの思い出を話し始めた。

「わたしとまどかが仲良くなってからいろいろあったなあ・・・運動会じゃあわたしとまどかがよくリレーのアンカーになって競ったなあ・・・結局、わたしとまどかの足の速さは変わらなかったから結果は引き分けなんだけどね・・・」

梨杏はそこまで話すと思い出すかのようにミルクティーを飲んだ。

「あれは5年前かな・・・小学校の卒業式の日にはまどかはアメリカに引越すことになったんだ・・・」

梨杏はその時のことをゆっくり話した。

（5年前）

「あたしね、パパとママと一緒にアメリカに行くことにしたの。向こうならボクシングも本格的に学べるしね」

「そうなんだ・・・まどかはもう日本には帰ってこないの？」

わたしの問いかけにまどかは笑いながら答えてくれた。

「そんなわけじゃないわ。向こうで3年間ボクシングを学ん

で16歳くらいになったら日本に帰ってくるだけよ。

そして、プロデビューするんだから」

「分かったよ、まどか。わたしはボクサーにはなっていないと思う。けど、帰ってきたら勝負しようね。わたし、強くなるから・・・」

「

わたしの目から流れた涙をまどかが拭ってくれた。

「じゃあ、もう行くわね。また会いましょ」

「うん！ また会おうね！！」

まどかはわたしと拳を打ち合わせるとまどかのお父さんの運転する車に乗っていった。

（現在）

「それで、わたしとまどかは今回のデビュー戦で会うことになったんだ」

「長年の夢と約束が叶ったんだね。あたしなら嬉しくて堪らないよ」

わたしの言葉を聞いたスバルちゃんが嬉しそうに笑ってくれるのを見て、わたしも嬉しくなる。

わたし達はファミレスを後にしてそれぞれに解散した。

彩ちゃん達は自分の住んでいる街に帰って、スバルちゃん達はガイアセイバーズの訓練に行った。

今日1日みんなと話せてだいぶリラックスできた。

「まどかとの試合もきつと負けない」

「誰が誰に負けないって？ ボクシングのキャリアはあたしの方が長いんだからね」

わたしの後ろにはまどかがいた。

まどかは昔と同じ不敵な笑みを浮かべて、わたしに手を振ってきた。わたしが手を振り返すとまどかが駆け寄ってきた。

「久しぶりじゃない、梨杏。まさか、あんたがあたしのプロデビュー戦の相手とはね。運命ってやつかしら？」

「そうかもね。なら、わたしは運命を信じるよ」

わたしがそう言うと、まどかも笑ってくれた。

まどかは昔よりも丸くなったように感じる。

「けど、負けないわよ。昔はあたしが負けたから今度は梨杏の番よ」

「今度もわたしは負けないよ。まどかをリングの上でKOするから」

わたしがそう言うと、まどかは笑いながら拳を打ち合わせてくれた。わたし達は近くの公園まで行って、いろいろ話すことにした。

「梨杏はどうしてボクサーになったわけ？ あんなに空手好きだったのに」

「わたしが小学校最後の大会で負けちゃった時にある人が励ましてくれたの・・・その人もボクサーだったんだけど、女子ボクサーの試合ってその頃、ほとんどなかったから・・・」

「そうなんだ・・・でも、今なら試合だってたくさんできるんだからプロと試合してるんでしょ？」

わたしはまどかの問いかけに答えるのに一瞬躊躇ってしまった。

「えっとね、その人・・・デビューした後、試合をする前に轢かれそうになった子どもを助けて、その代償に左腕と右足が動かなくなっちゃったの。リハビリして、なんとか日常生活は送れるようになったんだけど結局ボクサーとしては引退を余儀なくされたんだよね・・・」

「分かったわ、梨杏・・・あんたがボクシングに懸ける想いがね・・・でも、あたしは負けないわ！あんたもその人の分まで意地を張りなさいよー！」

「言われなくても分かってるもん！！深雪お姉さんの分まで闘うんだから！！それで、わたしがまどかをKOするんだから！！」

わたしがそう叫ぶとまどかはわたしの顔の前で右ストレートを止めていた。

わたしもお返しに左ストレートをまどかの顔の前で寸止めしてやった。

そして、お互いに背中を向けると公園を後にした。

次にまどかと会うのは試合の時だ。

次回 スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION E
pisode - 6 彩坂梨杏 プロデビュー！！（中編）

梨杏は一人の少女と出会い、次第に仲良くなっていく。

しかし、その少女の体内には新たな悪の使者の牙が隠されていた。次第に感染者が増えていく、謎のきのこ胞子！

梨杏もその魔の手に晒されてしまう！！

そして、イヴの怒りが爆発する！！

戦え、仮面ライダーイヴ！

人々の平和を守れ！！

ぶっぎるぜ！！

E p i s o d e - 6 彩坂梨杏 プロデビュー！！（中編）（前書き）

ひらひらです ♪ ♪

次回はスーパーヒーロー作戦の要素がまったくない女子ボクシング話になりますよ ♪ ♪

それでは、お楽しみください ♪ ♪

Episode - 6 彩坂梨杏 プロデビュー！！（中編）

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Episode - 6 彩坂梨杏 プロデビュー！！（中編）

梨杏がまどかと再会してから日が経ち、試合の一週間前になった。梨杏は試合に備えて、病院に行き、彩との勝負で負った傷や痣などの回復具合を診察してもらうことにした。

「彩坂さん、診断の結果を教えますね」
「お願いします、先生」

お医者さんは梨杏を見つめるとため息を吐いて話し始めた。

「とりあえず、怪我は完治してますよ。ただ、お腹や顔の痣はまだ消えてませんよ。できれば、試合なんてしてほしくないですね」
「先生、すいません・・・ 例え、どれだけ不利でもボクシングから逃げたくありません」

梨杏の言葉に先生は少し考え込んでいた。
結局、診察はそこで終わり、梨杏は病院を後にしようとした。
しかし、梨杏の目には小さな女の子が映っていた。
その女の子は苦しそうにしながら歩いていた。

「大丈夫？ 手伝おつか？？」
「ありがとう、お姉ちゃん・・・ でも、大丈夫だか・・・ ああ・・・」

梨杏に気を使わせまいとした女の子が倒れてしまい、慌ててその娘を抱えてナースステーションまで駆け込んだ。
その後、梨杏はその娘の部屋にお呼ばれしていた。

「あの、お姉ちゃんのお名前は??」

「わたしは彩坂梨杏だよ。あなたのお名前はなあに?」

女の子は少し躊躇ってから答えた。

「んん」と、わたしは橋場真由。この病院に2ヶ月前から入院してるの」

「真由ちゃんは何の病気で入院してるの?」

梨杏がそう聞くと真由は首を傾げてから答えた。

「分かんない・・・なんか、難病なんだって・・・」

「そっか・・・でも、きつと大丈夫だよ。だって、お医者さんがいるもんね」

梨杏の言葉に真由は少し笑った。

それから、梨杏は真由と別れて、病院を後にした。

「マッシュルームサイクロプス! 作戦の方は順調か?」

「はっ、ハイド様。人間どもの体内には俺のキノコ胞子が充満していますよ」

ハイドはその言葉を聞いて、ほくそ笑みながら次の作戦を伝えた。

「ならば、マッシュルームサイクロプスよ。次は東京中の人間ど

もの体内にキノコ胞子を植えつけてやりなさい。そうすれば、人間どもはすぐに絶えることでしょう」

マツシユルムサイクロプスはハイドの言葉を聞いて、ただちに作戦を開始した。

梨杏はまた真由の病室を訪ねていた。

(梨杏 side)

わたしが真由ちゃんの病室に行くと真由ちゃんが嬉しそうに迎えてくれた。

「真由ちゃん、こんにちは。調子はどう？」

「梨杏お姉ちゃんに会ってから凄く体調がよくなったの。梨杏お姉ちゃんも怪我大丈夫？」

真由ちゃんが心配そうに聞いてきたのでわたしはガッツポーズを取りながら答えた。

「もう大丈夫だよ！痛みはないから。でも、少し痣が残っちゃってるけどね」

真由ちゃんがわたしの顔の痣を見ながら、質問してきた。

「ねえ、梨杏お姉ちゃんは何してるの？」

「お姉ちゃんはね、ちよつと前までは喧嘩とか空手をやってたよ」

わたしが喧嘩をしていたと言うと真由ちゃんは少し怖がったような

顔をした。

なので、少し表現を変えることにした。

「えっとね、わたしがやってたのは喧嘩というかストリートファイトっていう格闘技の試合をやってたんだよ。今は止めて、もうすぐプロボクサーとしてデビューするんだけどね」

真由ちゃんはわたしの言葉に目を輝かせながら聞き入っていた。

「お姉ちゃん、ボクサーなんだ！　かつこいいい！！　わたしも応援に行けたらなあ・・・」

「じゃあ、お姉ちゃんとの約束しない。　お姉ちゃんの試合の相手は凄く強い人だけど、お姉ちゃん、頑張って勝つから・・・　真由ちゃんも病気なんかＫＯしちゃおう！！」

真由ちゃんは少し驚いてから元気に答えてくれた。

「うん！　約束する！！　真由も頑張るからお姉ちゃんも頑張つてね！！」

わたしは真由ちゃんと面会時間いっぱいまで話した。

そして、その後真由ちゃんのお母さんから話を聞いている。

「いつも、ありがとうございます。　真由が入院したのは２ヶ月前にきのこ採りに行った後なんです。　真由はうわごとのようにきのこのお化けが出たって言っていました・・・」

「それは、本当ですか。　だったら、警察がガイアセイバーズに通報しないと」

真由ちゃんのお母さんは首を横に振るようにしてから再び話し始め

た。

「警察に通報したら、証拠がない事件には手は出せないと言われまして・・・ ガイアセイバーズに言うのは躊躇ってしまつて・・・」
「わたしの知り合いにガイアセイバーズのメンバーがいます。わたしはその娘に掛け合ってみます。だから、諦めないでください！！」

わたしはそう言うと、すぐに病院を後にした。

梨杏は真由の母親から聞いたことをガイアセイバーズのメンバーに話した。

「話の内容は分かった。俺達がこの事件を片づけよう」

話を聞いた天道は早速ガイアセイバーズの捜査班を事件捜査に介入させる手配を整えた。

「あの、わたしも協力させてください！」

「冗談なら聞いている時間ないよ。 うちらは遊んでるわけじゃない」

洋子の言葉に梨杏は洋子を睨み返し、答えていく。

「その病院にはわたしの大切な友達がいるんです！ だから！！」
「分かったわ。 天道さん、うちが梨杏ちゃんを責任持つて守ります。 捜査に協力させたくて下さい」

天道は少し考え込んでから梨杏の捜査協力を許可した。

梨杏と洋子は早速、梨杏が真由と出会った病院に向かっていた。

「さて、梨杏ちゃん。危険なのは分かっとなるな。それでも行くんやね？」

「はい・・・それでも、真由ちゃんのこと心配なんです・・・」

梨杏の言葉を聞いた洋子は梨杏の肩に手を置いて励ましていく。

二人は病院の中に入り、まず院長室へ向かうことにした。

「病院で捜査するならまずは院長室からやな」

「勝手に入っていいいんですか？」

洋子は梨杏の問いかけをさも当たり前のように否定した。

「そんなのアポなし訪問に決まっとなるやん。悪の組織相手にアポ取ってどうするん？」

「いや、なんか泥棒みたいで・・・」

洋子はそんな梨杏の様子を見て、くすりと笑ってしまう。
梨杏は洋子が笑ったことに頬を膨らませながら抗議する。

「あははははは！ 梨杏ちゃんかわいすぎ！！」

「むうー！ 何で笑うんですか！！」

二人して騒いでしまうと洋子は梨杏を落ち着かせようと宥める。

「ごめんごめん。梨杏ちゃんの反応が昔のうちみたいでかわいかったから、ついな・・・とりあえず、静かに探そか・・・」

「はい。 見つければいいのはこの病院のカルテですよね？」

なんだかんだで、すっかり捜査に協力している梨杏の言葉に洋子は無言で頷いていく。

しばらく、辺りを探していると机の上にあるカルテを見つけた。

「やっぱり、この病院は黒みたいやね・・・ 入院患者の半数以上が例の病気にかかってるわ・・・」

「洋子さん、真由ちゃんは大丈夫なんですか!？」

梨杏は真由のことが気になり、つい語尾を強めてしまう。

洋子は梨杏にゆっくりと事実を伝えた。

「落ち着いて聞いてな・・・ 真由ちゃんも例の病気にかかってる・・・ だからこそ、解決法を探すで」

「はい・・・ 急ぎましょう・・・」

梨杏達がカルテを調べていると院長室に院長達が戻ってきてしまった。

「君たちはここで何をしているのかね？」

「あんた達の不正を暴きに来たのよ。 自分達でウイルスをばらまいておきながら白々しいことは言わせへん！」

院長は洋子の言葉に笑いながら答えるかのように姿を変えた。

「それがあんたの正体ってわけ？」

「そうだ。 このマッシュルームサイクロプス様のキノコ胞子は特別であ・・・ 最初はただの胞子だが徐々に毒性を持つようになるのさ」

マッシュルームサイクロプスの説明を聞いた梨杏は怒りのまま殴りつけようとする。

マッシュルームサイクロプスは梨杏を嘲笑うかのようにキノコ胞子を放出した。

「はぁ・・・ はぁ・・・ 洋子・・・さん・・・」

「はぁ・・・ はぁ・・・ 梨杏・・・ちゃん・・・」

二人の様子を見たマッシュルームサイクロプスは笑いながら自分の能力の捕捉説明をした。

「ちなみに、俺のキノコ胞子は俺の意思で効果を何倍にもできるのだ。 その二人を病室へ叩き込んでおけ!!」

マッシュルームサイクロプスの命令で洋子と梨杏は病室に監禁されてしまった。

「（なんとか、脱出しなきゃ・・・ うちにできることがなくても天道さん達ならなんとかしてくれるはずや・・・）」

洋子は毒に侵されながら必死に脱出を考えていた。

「（こうなったら一か八か、飛び降りるだけだ・・・）」

洋子はそう考えるとゆっくりと窓の近くに行き、窓へ飛び込んで下の路地へ落ちた。

そこへ一台の車が通りかかった。

「おい、君！ 大丈夫か!？」

「うつ・・・うつ・・・あなたは・・・」

洋子が名前を尋ねると男は自分の名前を教えてから洋子の腕に注射器の針を刺した。

「俺は香川竜馬。ICPOから今回の事件を追うように指示されたんだ」

「あれっ・・・頭がすっきりしてきた・・・」

洋子は竜馬が刺した注射針から注入された薬剤によって体調が戻ったようだ。

「君に施したのは孢子型バクテリアを元通りにする抗生剤だ。博士が作ったバクテリアは人の抵抗力や再生力を促進する効果があるんだ・・・」

「でも、それと今回の事件と何の関連があるんですか？」

洋子が問いかけると竜馬は懷から写真を取りだし、洋子に見せた。

「この人に見覚えはないかい？」

「この人、さっきの病院でうちに毒孢子を吐いてきた人だ・・・」

竜馬は洋子の呟きに確信を得たような表情をした。

「彼は2、3ヶ月前にとある集団にさらわれたんだ」

「その組織の名前ってまさか？」

洋子の言葉に竜馬は頷きながら答えた。

「そう・・・ダーククライムだ・・・」

「やっぱり・・・でも、何であの人の研究じやなきや駄目やつたんですか？」

「彼の研究していたバクテリアはどんな物質にも変化できる。すなわち、奴らにとって何にでも変化できるバクテリアは怪人を生み出す細胞を作るのに適していたというわけだ」

洋子は竜馬の言葉の意味を理解するとすぐにガイアセイバースに連絡した。

「ガイアセイバース本部、応答してください。今回の事件の詳細が判明しました」

「続きは俺が話すよ。ガイアセイバース総監、天道総司さんだな？俺はICPOから派遣された香川竜馬だ。今回の事件は犬養博士という人が作り出した孢子型バクテリアを利用したダーククライムの犯罪だ」

竜馬の言葉を聞いた天道は通信越しに少し考えてから答えた。

『では、香川竜馬と中野洋子に命令を下す。博士がバクテリアを元に戻す抗体か何かを作っていないか、調べるんだ』

「了解！！」

洋子達は天道の指示を受けて、犬養博士がいる病院の調査に乗り出した。

洋子は再び院長室へ忍び込んでいた。

「やっぱり、ここに抗体があつたんや・・・香川さんに知らせんと・・・」

洋子は竜馬に連絡を取ろうと通信機を手にとったが、電話妨害が施

されるのか、連絡が取れない。

そこへ、院長である犬養博士が戻ってきた。

「ようこそ、ガイアセイバーズの捜査官さん・・・わたしの毒胞子の影響は出なかったのですか・・・」

「犬養博士・・・どうして、こんなことをするんや!？」

洋子の言葉に犬養博士は顔に汗を浮かべながら答えていく。

「わたしの研究費の確保のため・・・わたしの研究の偉大さを世界中の人間に証明してやるんだ・・・」

「そんなことのために関係のない人達を苦しめたんか!？」

洋子の言葉を聞いた犬養博士の表情が変わった。

アイキヤッチA（梨杏と真由、仲良くお話し中）

アイキヤッチB（竜馬と洋子、背中あわせ）

「君、そこに変異型バクテリアの抗体がある・・・早く持つていつて、患者達に投与してくれ・・・」

「分かりました・・・博士、必ず助けに来ます・・・」

洋子が院長室を出ようとした時、博士の意識はマッシュルームサイクロプスのものに変わった。

そして、洋子を襲うように指示するとダーククライム戦闘員が襲いかかってきた。

竜馬は洋子をフォローすべく、プラスアップしていた。

「プラスアップ!!」

竜馬の身体にナイトファイヤーのスーツが装着される。

そして、ナイトファイヤーは院長室に窓を突き破って入っていく。

「やれ!!」

マッシュルームサイクロプスの命令にダーククライム戦闘員達はナイトファイヤーに襲いかかろうとする。

「ケルベロス・ショット!」

ナイトファイヤーはケルベロスΔ(ショットモード)の光弾でダーククライム戦闘員を次々と撃ち抜いていく。

マッシュルームサイクロプスはたまらず、窓の外へ飛び降りて逃げた。

「中野さん。早く、抗体を患者の下へ運ぼう」

「けど、博士を追わなくていいんですか?」

洋子の言葉を聞いたナイトファイヤー「香川竜馬の動きが一瞬止まった。」

洋子の言わんとしていることが分かっているかのように・・・

「博士は俺の力では救えない・・・だから、救える命を一つでも多く救うんだ・・・」

「ナイトファイヤー・・・分かったわ・・・みんなの命を守つたろ・・・」

洋子達は急いで抗体を患者の下へ運んだ。

マッシュルームサイクロプスは病院の近くの森まで逃げていた。

「待て！ お前に梨杏の治療法を聞き出すまでは逃がさん！！」

「待ちなさい・・・ 君の大切な人を治す手段はガイアセイバーズの基地にデータで送ったし、君の仲間が手を尽くしてくれているだろう・・・」

マッシュルームサイクロプスの意識は再び博士のものに戻っていたようだ。

「だったら、あんたも俺が救う・・・」

「いや・・・ 君の手でわたしにとどめを刺してくれ・・・」

マッシュルームサイクロプスの言葉に零次いやイヴは何も言えない。そして、マッシュルームサイクロプスは何も話さずにイヴへと突進していく。

「分かったよ・・・ あんたのことは忘れねえ・・・ 必ず、あなたの仇も取ってやる・・・」

そう言うと、イヴはマッシュルームサイクロプスの下へ走っていき、途中で空高く飛び上がっていく。

「だから・・・ ゆっくり眠れ！！」

イヴは空中でムーンサルトを決めると落下スピードを乗せたライダークックをマッシュルームサイクロプスに叩き込んだ。

「あ・・・ ありがとう・・・ わたしを逝かせてくれて・・・」

マッシュルームサイクロプスはそれだけ言つと爆発してしまった。

事件が収拾がついてから3日が経ち、梨杏のデビュー戦の日になった。

「梨杏、真由ちゃんに会ってから試合会場に行かなくて大丈夫か？」

「ありがとうございます、会長。けど、わたしは真由ちゃんに甘えるわけには行かないですから・・・」

梨杏は試合前日に真由に会おうとしたが結局、会わなかった。

「わたしは心の中でまどかに負けるかもしれないと思ってしまった。そんな状態で大事な時期の真由ちゃんには会えなかったんです・・・」

「そうか・・・けど、真由ちゃんのことを背負いすぎて、まどかちゃんに負けたら真由ちゃんはどう思う？」

里山会長の言った言葉を梨杏は飲み込み、表情を引き締めた。そこへ、真由を連れた竜馬が入ってきた。

「すみません。ここは彩坂梨杏さんの控え室でいいんですよね？真由ちゃんを案内してたもので・・・」

「ありがとうございます。真由ちゃん、梨杏お姉ちゃんは頑張っている試合してくるから見ててやってくれな」

里山会長の言葉に真由は嬉しそうに返事をした。

「うん！わたし、お姉ちゃんが頑張ってくれるの楽しみに見てる！！」

「ありがとう、真由ちゃん・・・梨杏お姉ちゃん、きっと頑張るからね！！」

梨杏と真由は指切りをした。

そして、梨杏はこの試合への覚悟を改めて決めた。

一方、まどかの控え室では会長の神宮寺耕次と試合前の確認をしている。

「いいか、まどか。今日の試合はお前にとって大事な試合だ。

だが、梨杏ちゃんにお前の全力を見せてやれ!!」

「うん! 梨杏との打ち合いをしても決定打をもらわないようにすればいいんですよ!？」

梨杏との試合でテンションの上がっているまどかの返事を聞いた耕次会長は試合の準備をしていく。

まどかは試合開始までの間、梨杏との試合をイメージしてシャドーボクシングに集中していた。

そして、試合開始の時間がきた。

次回 スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Epi
sode 7 彩坂梨杏 プロデビュー!! (後編)

いよいよ、始まった神宮寺まどかと彩坂梨杏のバンタム級デビュー戦。

二人は四年間の想いや自身の成長をぶつけ合っていく。

果たして、勝利の女神はどちらに微笑むのか。

乙女達よ、運命を交錯させよ!!

Episode - 7 彩坂梨杏 プロデビュー!! (後編) (前書き)

皆さん、どうもです ♪ ♪

ひらひらですよ ♪ ♪

今回は全編通して女子ボクシング一色ですよ ♪ ♪

二次小説において女子ボクシングの話が出てくるのは珍しいと思いますよ ♪ ♪

それでは、お楽しみください ♪ ♪

Episode - 7 彩坂梨杏 プロデビュー！！（後編）

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Episode - 7 彩坂梨杏 プロデビュー！！（後編）

いよいよ、試合開始の時間になり、二人はすでにリングの上になっている。

「（いよいよ、まどかとの試合か・・・勝てるかは分からないけど全力でぶつからなきゃ！）」

「（あたしは同じ相手に二度も負けない・・・この試合で梨杏をKOして、それを証明するわ！）」

二人は試合への意気込みは充分なようだ。

リングアナが二人の名前を読み上げていく。

「赤コーナー、116・7ポンド 里山ジム所属 彩坂梨杏！！」

リングアナのコールに梨杏は右腕を高く突き上げていく。

「青コーナー、117・8ポンド 神宮寺ジム所属 神宮寺まどか！！」

リングアナのコールにまどかは堂々と両腕を突き上げていく。まるで、自分が勝者だと言わんばかりに・・・

会場は観客がそれなりにいる。

いくら、美少女女子高生ボクサーのデビュー戦とはいえ、4回戦の試合なので見に来るお客も少ないわけである。

「両者、リング中央へ！」

二人はレフェリーにリング中央に来るように指示されるとゆっくりとリング中央へ向かった。

そして、相手を睨み続けていく。

「梨杏、あんたが通ってた病院の娘は大丈夫？ はつきり言って、あたしはあんたとその娘のことを考えて試合してる暇はないわよ」
「真由ちゃんはまだ大丈夫だよ。それに、わたしも真由ちゃんもまだかには負けないよ。KOしてあげるから」

レフェリーが二人に自分のコーナーに戻るように指示していく。
二人はその言葉に自分のコーナーに戻っていく。

「まどか。 作戦に変更はない。 梨杏ちゃんとの打ち合いに付き合うふりをしながら梨杏のパンチをかわして、お前のパンチだけを叩き込んでやれ」

「分かってるわ、パパ。 梨杏のパンチをもらえば、あたしが一発でグロッキーになるくらい・・・ だから、あたしのパンチとテクニクで梨杏をKOしてやるわ！」

まどかの言葉に耕次会長は頷いていく。
そして、まどかは試合開始までウォーミングアップをしていく。

「梨杏、神宮寺まどかは強敵だ。 心してかかれよ」
「分かってますよ、会長。 まどかはわたしが簡単勝てる相手じゃないってことは分かってますから・・・」

梨杏の答えに里中会長は満足したような表情を浮かべて、梨杏にマウスピースをくわえさせた。

「ラウンド1、ファイト!!」

試合開始のゴングが鳴り、二人が自分のコーナーから飛び出していく。

しかし、まどかはリング中央から少し離れた場所で構えを取った。

梨杏はまどかとの距離を縮めるべく、一気に近づいていく。

「来なさいよ、梨杏。 あんたのパンチなんかじゃあたしはKOできないわよ」

「なら、わたしのパンチでまどかをKOするんだから!!」

梨杏はさらにまどかの顔やボディを狙って、左右のストレートやフックを放っていく。

しかし、まどかは梨杏のパンチを紙一重でかわしたりガードしたりしていき、逆に梨杏の顔やボディに左右のストレート、フックやアッパーを叩き込んでいく。

まどかのパンチ力に梨杏のパンチ力が合わさったようなカウンターを食らい、梨杏の口から唾液が吐き出される。

「ぶふう・・・ あふう・・・」

「梨杏! あんたのパンチはあたしには当たらないわよ!!」

梨杏はまどかに自分のパンチをかわされても必死にパンチをまどかの身体に叩き込もうとするがまどかに全てかわされてしまう。

「はぁ・・・ はぁ・・・ (何で、まどかを捕まえないの?)

速すぎるよ・・・」

「ふふっ・・・ あたしを捉えられなくて焦ってんの・・・ だったら、そろそろあんたをKOしてあげるわ!!」

まどかはそう言うと、梨杏の顔やボディへ左右のフックやストレート、アッパーを叩き込み、ラッシュをかけていく。

まどかのラッシュを食らった梨杏は前のめりにダウンしてしまった。

「ダウン! 1・・・ 2・・・ 3・・・」

「はぁ・・・ はぁ・・・ あたしのパンチも結構効くみたいね・・・」

まどかはニュートラルコーナーに向かいながらそんなことを呟っていた。

梨杏はなんとか立ち上がろうとするがなかなか立ち上がれない。

「7・・・ 8・・・ ナイ・・・」

「（負けたく・・・ ない・・・ まどかには負けたくない!!）」

梨杏はカウント9でふらつきながらも立ち上がった。

レフェリーが梨杏に試合を続けられるかを聞くと梨杏は頷いていく。

「ファイト!!」

レフェリーは梨杏が頷いたのを見て、試合を再開していく。

まどかは試合が再開されると梨杏がガードするのも構わず、左右のフックやアッパーなどを叩き込んでいく。

梨杏は反撃しようと考えているがまどかのパンチのスピードが速く、隙が見つけられない。

「ストップ！ 神宮寺、ストップだ！！」

梨杏とまどかはレフェリーを見つめていく。
二人ともレフェリーストップかと思った。

「ゴングだ。早く自分のコーナーに戻って」

レフェリーの指示にまどかと梨杏は自分のコーナーに戻っていく。
まどかも梨杏も肩で息をしているがダメージはラッシュを受けた梨杏の方が大きいだろう。

「まどか、１ラウンド目はまずまずな結果だな」
「そうだね、パパ。 けど、梨杏は次のラウンドから飛ばしてくるわ」

まどかは耕次会長に自分が思っていることを話していく。

「梨杏はおそらくスロースターターよ・・・ １ラウンド目じゃエンジンのかからないわ・・・」
「すなわち、２ラウンド目以降じゃなければ梨杏ちゃんの本当の力は計れないということか・・・」

耕次会長はまどかの言葉に返事を返していく。
娘の言葉を神宮寺耕次は最も信用している。

「だったら、まどか。 梨杏ちゃんが次のラウンドでエンジンをかけてくる前にKOしてしまうんだ！」
「うん、分かってるよ、パパ！！ このラウンドで梨杏と決着をつけてくるわ！！」

まどかは耕次会長の、父親の言葉に答えた。

「梨杏、1ラウンド目は完全に神宮寺に持っていかれたな。けど、勝負は次のラウンドからだ。いいな？」

「はい、会長！ わたしもまどかとの勝負は2ラウンドにあると思ってますよ。だから、安心してください」

梨杏が会長の言葉に返事をするとう会長は頷きながら梨杏の身体の汗を拭いた。

「ラウンド2、ファイト！！」

そして、2ラウンド開始を告げるゴングが鳴り響き、梨杏とまどかがコーナーを飛び出していった。

しかし、梨杏はリング中央から少し離れた場所でガードを構えている。

「どうしたの、梨杏！ インファイターのあんたが中途半端な位置で止まったら、アウトボクサーのパンチの餌食になるわよ！！」

「だから、何？ わたしのパンチでまどかをKOすればいいだけの話だよ！！」

梨杏はまどかに近づき、左右のストレートとフックを打ち込んでいく。

しかし、まどかは梨杏のパンチをかわすとまた左右のストレートを梨杏の顔に叩き込んでいく。

「んぐう・・・ かはあ・・・ あぶう・・・」

「ほらほら、反撃してみなさいよ！ あんたの四年間はこんなもんなのー！！」

まどかの言葉に梨杏は右アッパーをまどかのボディに叩き込むことで答えていく。

「うぶう・・・（さすがに梨杏のパンチは効くわね・・・けど、一発程度じゃあたしをKOするには足りないわよ!!）」

「はぁ・・・はぁ・・・（やっと、まどかに一発食らわせられた・・・けど、ダメージはわたしの方が大きい・・・もっと、まどかにわたしのパンチを叩き込まなきゃ!!）」

梨杏はさらにまどかの身体にパンチを叩き込もうと左右のストレートやフック、アッパーを打ち込んでいく。

しかし、まどかは落ち着いて梨杏のパンチを捌き、自分の左右のフックを叩き込んでいく。

「ぶふう・・・んあつ・・・くはぁ・・・」

「やってくれるじゃない、梨杏！でもね、あたしは今回はあんたに負けるわけにはいかないわ!!同じ相手に二度も負けられないのよ!!」

まどかはさらに、梨杏のボディと顔に左右のフックやアッパー、ストレートを叩き込んでいく。

梨杏の口からは血混じりの唾液が吐き出され、顔やボディは痣ができて、腫れてきている。

それでも、梨杏は諦めずにまどかの身体にパンチを叩き込もうとする。

しかし、ここで2ラウンド終了のゴングが鳴り響いた。試合は前半が終わったが明らかに梨杏が不利なようだ。

「よくやった、まどか。前半はお前が有利だぞ」

「はぁ・・・はぁ・・・そうでもないみたい、パパ・・・梨杏のパンチが効いてるわ・・・」

まどかは梨杏のボディへの右アッパーのダメージが色濃く残っていることに気づいていた。

「梨杏ちゃんのボディが効いたみたいだな。もう時間もあまり残ってない。梨杏ちゃんのパンチをかわせとは次のラウンドからは言わない。次のラウンドからは全力で梨杏ちゃんを叩きのめしてこい。いいな!？」

「分かってるわ、パパ・・・この試合はあたしが勝つんだから!」

耕次会長はまどかが梨杏のパンチが効いていることを見抜いた様子だ。

まどかがそのことを頷くと耕次会長は何も言わずにまどかの汗を拭いたりするとまどかは肩で息をしながら体力を回復しようとしている。

「会長、すいませんでした・・・試合の流れはまどかに持ってかれました・・・」

「いや、気にするな・・・神宮寺は強い・・・次のラウンドはKOされても構わん! 神宮寺に一発でも多く、お前のパンチを叩き込んでやれ!!」

梨杏の言葉に里山会長は否定せずにまどかの実力を評価した上での作戦を指示した。

梨杏はそれに頷くと何も言わずに体力の回復に努めた。

「ラウンド3、ファイト!!」

3ラウンド目が始まり、まどかと梨杏はお互いにリング中央まで一気に接近していく。

そして、左右のフックやストレートを相手の顔に叩き込んでいく。そのパンチに、梨杏の顔はさらに腫れていき、左目も完全に塞がってしまう。

しかし、まどかの顔も梨杏のパンチを打ち込まれ、腫れ始めた。

「ぶふう・・・ かはあ・・・ まどかには負けない!!」

「んはあ・・・ あぐう・・・ あたしだって梨杏には負けないわよ!!」

二人とも相手に勝ちたいという気持ちが強いのか、倒れてしまいそうなくらいのダメージを受けても拳を振るうことは決して止めない。しかし、まどかの手数が徐々に減ってきているのを梨杏は感じていた。

「（あたしは全米のジュニアチャンプよ・・・ いくら、梨杏がパンチ力があるからって負けられないのよ・・・）」

「（さすがに、全米ジュニアチャンプになっただけあって、まどかってば強い・・・ たぶん、向こうの人といっぱい試合をして勝ち続けたんだよね・・・ 拳にまどかの今までのボクシングが込もってるよ・・・）」

まどかも梨杏もお互いに弱気になりそうな自分を奮い立たせていく。まどかと梨杏はさらに左右のストレートを相手の顔に打ち込んでいく。

「んんっ・・・ ぶはあ・・・ んぶう・・・」

「んあっ・・・　がはぁ・・・　ぶふう・・・」

二人の口からはさらに血混じりの唾液が吐き出される。
二人の顔は完全に腫れてしまった。

梨杏の右目も徐々に腫れてくるが、まどかの右目も腫れてきた。

「はぁ・・・　はぁ・・・　さすがにしぶといわね・・・」

「はぁ・・・　はぁ・・・　まどかも随分打たれ強くなったじゃない・・・」

まどかと梨杏はお互いに軽口を叩きあっていく。

しかし、また二人は左右のフックやストレート、アッパーを相手の顔やボディに叩き込んでいく。

「ストップ！　二人ともやめろ！！　ゴングだ！！　ゴング！！」

3ラウンド終了のゴングが鳴り響く中、二人は左右のパンチを叩き込み続けるがレフェリーが二人の間に腕を差し出し、二人を止めた。
まどかと梨杏はふらふらになりながら自分のコーナーに戻っていく。

アイキャッチA（梨杏とまどか、試合前の宣伝ポスターの絵）

アイキャッチB（梨杏とまどか、ファイティングポーズを取って、向き合う）

「まどか、このラウンドでだいぶやられたな。　かなりきついだろっ」

「はぁ・・・　はぁ・・・　はぁ・・・　でも、負けない・・・」

まどかは今にも倒れそうになる身体をなんとかスツールの上に座らせ、顔を下に向けながら辛そうに息をしている。

3ラウンドで梨杏からもらったパンチは軽く30発は超えているだろう。

そのダメージは相当なものになっているはずだ。

「まどか、次のラウンドが最後のラウンドだ。 勝敗は気にするな。 梨杏ちゃんにお前の全てを見せてやるんだ。 いいな？」

「分かってるわ、パパ・・・ あたしはまだ梨杏に全部を見せてない・・・ あれを使うけどいいよね・・・」

まどかにはまだ切り札があるようだ。

「分かった。 しかし、インファイトであれを使うのは危険だし、うまくいっても梨杏ちゃんをKOするには足りないかもしれないしねぞ。

それでも、いいんだな？」

「梨杏のパンチを利用すれば、あれはもっと強くなるわ・・・ 梨杏にあたしに勝てると思わせればいいと思うわ・・・」

まどかの言葉に耕次会長は頷き、まどかの顔を冷やしたり、鼻血を抜き取ったりした。

そして、最終ラウンドに備えていく。

「梨杏、随分やられたみたいだな。 顔も腫れてるし、目も見えにくいはずだ。 左目は塞がり、右目もほとんど塞がってきているだろう？」

「はぁ・・・ はぁ・・・ そうみたいですわ・・・ 視界がすごく狭くなってきましたし・・・」

梨杏が痛みに顔をしかめると里山会長は梨杏の右目を氷袋で冷やし始めた。

「梨杏、次のラウンドが俺とお前でやるボクシングの最後だ。最後に俺にお前が成長した姿を見せてくれ」

「はい。わたし、会長のいるジムでボクシングができてよかったです。だから、会長と一緒に戦う最後の試合はわたしの勝利で終わらせてきます」

梨杏は里山会長の言葉に力強く返事をした。

「ラストラウンド、ファイト!!」

最終ラウンドである4ラウンド目の開始を告げるゴングが鳴り響き、二人はゆっくりとリング中央へ行った。

そして、お互いの顔に左右のフックを連打していく。

さらに、左右のストレートやアッパーも相手の顔やボディに叩き込んでいく。

「ぶふう・・・ あが・・・」

「げふう・・・ んはあ・・・」

二人の口からは血と胃液が混じり合った唾液が次々に吐き出されていく。

それでも、まどかも梨杏も相手の顔やボディにパンチを叩き込むことを止めない。

「はあ・・・ はあ・・・ (まずい・・・ 腕が重くなってきた・・・ このままじゃ、梨杏に負けちゃうわ・・・)」

「はあ・・・ はあ・・・ (きつくなってきた・・・ でも、負けたくない!!)」

梨杏とまどかはバックステップで少し距離を置いていく。

ちょうど、ストレートの威力が一番発揮しやすい距離だ。

「はあ．．． はあ．．． （来なさいよ、梨杏！！）」

「はあ．．． はあ．．． （行くよ、まどか！！）」

梨杏が右ストレートを、まどかが左ストレートを放っていく。

しかし、まどかは左腕を途中で曲げると梨杏の右ストレートを叩き落とした。

そして、カウンターの右ストレートを梨杏の鼻っ柱に叩き込んだ。

「うぐう．．． ぶはあ．．．」

梨杏はまどかのカウンターに鼻から大量の鼻血が吹き出し、口からは真上に血や胃液、唾液などがべつとりとついたマウスピースを吐き出した。

そして、ゆっくりと後ろへ倒れていった。

「ダウン！ 1．．． 2．．． 3．．．」

レフェリーがカウントを始めると梨杏は意識が朦朧とする身体を無理やり起こそうとするが視界が狭い上にぼやけてきている。

「はあ．．． はあ．．． （どうよ、梨杏？ あたしのカウンタ

ーは？？ 効いたみたいね．．．）」

「はあ．．． はあ．．． （あれ．．． 周りがぐにやぐにやになつて．．． まどかは、レフェリーさんはどこ．．．？）」

梨杏はぼんやりする頭の中でレフェリーやまどかのことを必死に考えていく。

「6・・・7・・・」

梨杏の意識がカウント7あたりで少しだけはつきりしてきた。そして、梨杏は俯せの体勢になり、腕の力を入れていく。

「8・・・ナイン・・・テ・・・」

梨杏はKOを告げるカウント10前にぎりぎりで立ち上がった。しかし、梨杏の膝はかくかくと笑っていて、目も焦点が合っており、虚ろな表情をしている。

「ファイト!!」

レフェリーが試合を再開させるとまどかは一気に試合を決めようと梨杏に近づき、左右のストレートとフックを梨杏の顔やボディに叩き込んでいく。

「ぶふう・・・がはあ・・・んふう・・・んはあ・・・」

梨杏の顔はまどかのパンチで腫れ上がり、ついに両目が塞がってしまった。

そして、梨杏の口や鼻からは大量の血が流れていく。

さらに、梨杏のボディはまどかの左右のフックやアッパーの連打を受けて、赤黒い痣が数多くできている。

「はあ・・・はあ・・・梨杏、これで終わりよ・・・あんたをKOしてあたしが勝つわ!!」

梨杏はまどかの言葉に反応することはもうできない。何故なら、完全に意識が飛んでしまっているからだ。

「あんたに勝つのはあたしなんだから!!」

まどかは右腕を下から上へ振り上げていく。

そして、梨杏の顎に渾身の力を込めた右アッパーを叩き込んでいく。まどかの右アッパーに梨杏の口からは血や胃液、唾液で汚れたマウスピースが空高く吐き出され、梨杏の身体も勢いよく吹き飛ばされた。

そして、吹き飛ばされた梨杏の身体はコーナーまで吹き飛ぶとコーナーポストにもたれながら崩れ落ちた。

「ダウン!!」

レフェリーは梨杏がダウンしたことでカウントを取ろうとしたが梨杏の状態を見て、カウントを取らず両腕を交差させると試合終了を告げた。

「KO!! 勝者、神宮寺まどか!!」

まどかはレフェリーのコールを受けて、両腕を空高く力強く突き上げた。

観客の大歓声が会場に溢れた。

まどかと梨杏の試合が終わってから2日、梨杏は病院に検査入院していた。

医者の話では、梨杏の身体にはこれといった異常はなく、傷や痣を治せばまたボクシングができるとのことだ。

「『戦慄のKOプリンセス現る! 神宮寺まどか、彩坂梨杏を劇的

KO!!』かぁ・・・わたし、まどかにそんなに手ひどくやられたんだ・・・」

梨杏が読んでいるのはスポーツ新聞の一面である。

その紙面には、まどかが梨杏をKOした時の写真や梨杏がコーナーに沈んだ時の写真、お互いに顔面を腫らしながら殴りあった時の写真などが載っていた。

「やっぱり、まどかには届かなかったなあ・・・」

「何、センチに黄昏てんのよ。あんたはねえ、あたしを、全米ジュニアチャンピオンのあたしをKO寸前まで追い詰めたのよ！自信持ちなさいよね!!」

梨杏が物思いに耽っているといつの間にか、まどかと真由が梨杏の病室にいた。

しかも、まどかは若干怒っているようだ。

「真由ちゃん、ごめんね・・・お姉ちゃん、約束守れなかった・・・」

「そんなことないよ、梨杏お姉ちゃん。真由ね、梨杏お姉ちゃんファンになったの!」

梨杏が真由に謝ると真由はそんなことは気にしていないとばかりに言ってきた。

「梨杏、真由ちゃんはあんたのファイトを見て、元気をもらったって言ってたわよ。それなのに、あんたはたった一回負けただけでもうおしまいなわけ?」

「そんなわけないじゃない・・・わたしはまだ諦めない!!」

まどかの言葉に梨杏も誠心誠意を込めた言葉で返した。

まどかはそんな梨杏を見て、笑みを浮かべた。

「それでこそ、あたしがライバルに定めた女だわ・・・ 梨杏、次もあたしは負けないわよ！ 勝ちたかったら、もっと強くなりなさい！！」

「分かってるよ、まどか。 わたしはもつと強くなる！ それで、次にやる時はまどかをKOするんだから！！」

梨杏はそう言いながら、右腕を突き出した。

まどかも右腕を突き出して、梨杏の拳と自分の拳を軽く打ち合わせた。

「じゃあ、梨杏、真由ちゃん・・・ またね・・・」

まどかはそう言うつと梨杏の病室を後にした。

「梨杏お姉ちゃん。 真由とも約束して・・・ 絶対にボクシング辞めないって・・・」

「大丈夫だよ、真由ちゃん・・・ お姉ちゃんはどれだけ辛くても絶対にボクシング辞めたりしないから・・・ 指切りしよっか・・・」

「うん！！」

梨杏と真由は小指を合わせて、指切りをした。

それは、二人の大切な約束となった。

梨杏は思った・・・

自分を信じてくれるライバルやファン、それに大切な少女がいる限り、決して諦めない・・・

登れる限りの高みを目指していくことを胸に誓った。

次回予告

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Episod
e - 8 ゲームバンクの罠

シャドームーンの魂と肉体を探し始めたダーククライム。

ガイアセイバーズはそのことを知るが、そこにゲームバンクの恐るべき罠が待っていた！

ゲームバンクの能力でゲーム世界に閉じ込められたガイアセイバーズは果たして脱出できるのか！！

お楽しみに！！

Episode - 8 ゲームバンクの罠（前書き）

皆さん、どうもです ♪ ♪

ひらひらですよ ♪ ♪

今回はEpisode - 8とEpisode - 9を掲載しますよ ♪

♪

これからは今ブログで掲載している分に追いつくまでゆっくりと投稿していきますよ ♪ ♪

それでは、お楽しみください ♪ ♪

Episode - 8 ゲームバンクの罠

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Episode - 8 ゲームバンクの罠

梨杏とまどかのデビュー戦が終わってから2週間が経っていた。

零次は相変わらず洋子達との戦闘訓練を続けている。

今は洋子とスパリングを行っていたりする。

「ほら、零次くん！ 君の蹴りはモーションがまだまだ大きいよ！
！　すぐ読まれてガードされちゃうよ！！」

「だったら、ガードできないくらい強い蹴りを打ち込めばいいんだ
ろ！！」

零次は洋子のガードをお構い無しに鋭い蹴りを打ち込んでいく。

しかし、洋子はそれが当たる寸前でかわし、零次のボディに右の
掌底を叩き込んでいく。

お腹に衝撃を与えられた零次は勢いよく飛んでいった。

「だからって、ただ力強く蹴ればいいってもんじゃないよ。 君の
場合はモーションを小さく、威力を上げる必要がある。 例えるな
ら、君の蹴りを刀のように研ぎ澄まさないや駄目だよってことだね」
「ありがとうございました、洋子さん。 それにしても、めちゃく
ちや強いですね？」

洋子は零次に誉められて嬉しそうに頬を緩めた。
そして、照れ隠しに零次の背中を強く叩いた。

「そういえば、洋子さんってガイアセイバーズに何で入ったんですか？」

「えっとね、わたしがガイアセイバーズに入ったのは天道さんに誘われたからかな・・・」

洋子は零次の問いかけにはぐらかすように答えた。
そのまま、基地の中へ入っていった。

「野上さんは洋子さんがガイアセイバーズに入った理由って知ってますか？」

「僕も詳しくは知らないんだ。ただ、洋子ちゃんの恋人が関係してるらしいよ」

良太郎はそれだけ言うとその場を後にした。

『品川の街中で蛮機獣の出現が確認されました。ガイアセイバーズ各員はただちに出勤してください!!』

ガイアセイバーズのメインコンピューターである『ワイズ』が蛮機獣の出現を衛星で監視し、ガイアセイバーズの基地内にそのことを大音声で隊員達に報告した。

「全員、さっきの放送は聞いたな。とりあえず、蛮機獣を撃退、背後にいる奴を調べるんだ!!」

「了解!!」

総監である天道総司の指示でガイアセイバーズのメンバーが素早く出勤の準備をしていく。
そして、現場へと急行した。

「さあ、この街を俺様の力で破壊してやるゲーム!!」

現場で暴れている蛮機獣はゲームバンキである。

ゲームバンキは腕のビームガンから電撃を放ち、街を破壊していく。

「おい、蛮機獣！ 俺達が相手だぜ!!」

「ゴーオンレッドにガイアセイバーズどもか？ 全員揃ったな??」

ガイアセイバーズのメンバーはゲームバンキの様子に違和感を感じたのか、一気に攻め込むことができないようだ。

「俺の力を受けてみるゲーム!!」

ゲームバンキがそう言うのと辺りの雰囲気急に変わった。

まるで、ゲームの世界に入ったようになっていく。

カブトやゴーオンレッド、イヴ達はこの世界がどこなのか、分からなくなっている。

「貴様、ここはどこだ？ 答えろ」

「ゲームマスターたるこの俺に対してずいぶんな口の聞き方だな。

言っておくがな、俺しかお前達をこの世界から出すことができないんだぞ。 そんな口の聞き方をしているのか？」

ゲームバンキの言葉にカブトはカブトクナイガン・ガンモードの銃口をゲームバンキに向けて答えた。

「黙れ。 俺達は必ずこの世界から貴様の力を借りずに脱出してやる」

カブトがそう言うとガイアセイバーズのメンバーもそれぞれ構えを

取った。

「だったら、死ぬまで後悔してるんだなゲーム!!」

そう言うと、ゲームバンクの姿が消えた。

カブト達はどこかの遺跡にいた。

「ここはどこだ？　どうやら、何かの遺跡のようだが・・・」

「分からんな・・・　遺跡ならおそらくトラップがあるはずだがな・・・」

カブトの言葉にボウケンレッドが冷静に答えていく。そして、遺跡の内部をどんどん進んでいく。

「待ってください・・・　あなた方が裏切るのは計算に入ってたが本当に裏切るとは呆れましたね・・・」

「黙れ！　俺を利用してようとしても無駄だ!!」

トライバル・エンドが追っているのは臨獣拳の元当主、黒獅子リオだった。

トライバル・エンドは蘇らせた部下達を全てコントロールできていたわけではないのだ。

「あまりわたしの手を煩わせないでください・・・」

「偽名を使っているような貴様に何を言われても無駄だ。　ハ・・・」

「

リオは名前を呟こうとしたがそこにトライバル・エンドが闇のエネルギー弾を撃ち込んだ。

「困りますねえ・・・ 今、あなたが口にした名はまだ明かすわけにはいかないんですよ・・・」

トライバル・エンドは本名を明かそうとしたリオを抹殺しようと剣を振り降ろした。

しかし、その剣がリオに到達することはなかった。

「お取り込み中悪いがあんたの思い通りにさせるわけにはいかないんでな」

そう、仮面ライダーディケイドがライドブッカー・ソードモードの剣先で防いでいたのである。

剣を防がれたトライバル・エンドはさらにディケイドに斬りかかっていく。

「わたしの計画の邪魔をしないでいただきたいものですね・・・」

「悪いな・・・ 俺はお前の邪魔するのが生きがいだからな」

ディケイドはそう言いながらトライバル・エンドの剣をかわし、ライドブッカーから一枚のカードを取り出す。

そして、ディケイドライバーにセットしていく。

『ATTACK RIDE ILLUSION』

すると、ディケイドが6人に分身した。

「やれやれ・・・ わたしも動きやすい身体になりますか・・・」

そう言うと、トライバル・エンドの姿は黒獅子リオの姿に変わっていた。

ディケイドは黒獅子リオ（トライバル・エンド）を包囲していく。

「随分な姿だな。俺達を相手に勝てるつもりか？」

「勝てるではなく、滅ぼすですよ・・・」

トライバル・エンドはそう言うと目の前にいるディケイドに拳を叩き込んだ。

ディケイドはその威力に吹き飛ばされてしまう。

しかし、体勢を整えると他の5人のディケイドとともにトライバル・エンドに襲いかかっていく。

「なかなかやりますね・・・わたしも本気を出すとしましょう・・・」

「だったら、さっさと本気出せよ！遊んでやるからよ」

黒獅子リオ（トライバル・エンド）はディケイドの包囲をジャンプすることで回避していく。

そして、ディケイドの身体に拳を叩き込んでいき、さらに、他のディケイドにも蹴りを打ち込んでいく。

「ぐはぁ・・・くそっ・・・」

「案外大したことありませんねえ・・・死んでください・・・」

黒獅子リオ（トライバル・エンド）は闇の力を手に集めていく。

ディケイドはライドブッカーから一枚のカードを引き抜いていく。

「俺はあんたにやられるつもりはないぜ・・・」

FINAL ATTACK RIDE DE・DE・DE・DEC

A D E

ディケイドがファイナルアタックライドを発動させ、トライバル・エンドを倒そうとする。

ゲームバンキの力でゲームの世界へ飛ばされたイヴ達は変身を解除し、その世界の探索をしていた。

「しかし、これだけ調べて分かったのがこの世界からは通常の方法では脱出できないということだけか・・・」

「ここから脱出するにはあのゲームバンキを倒すしかないということだな・・・」

天道や明石を始めとしたガイアセイバーズメンバーは対策会議を行っていた。

しかし、明確な解決方法が見当たらず焦れている。

「おい、ゲームバンキ！ これはゲームなんだろ！？」

『何だゲーム。 言ってみるゲーム』

零次が空に向かって叫ぶと空からゲームバンキの声がした。

「俺の条件はただ一つ。 ゲームのプレイヤーを俺が指名する・・・

その条件が飲めないなら俺達はゲームをしないぜ！」

『いいだろうゲーム・・・ 指名するゲーム・・・』

ゲームバンキの言葉に零次は考え込む。

「（本当なら洋子さんに任せるところだが、今は関西支部に出向してるからな・・・ ここはあいつに任せるか・・・）」

零次は答えを出したようである。

『さっさと言うゲーム!』

「ああ。俺が指名するのは彩坂梨杏だ!!」

『分かったゲーム・・・連れて来てやるゲーム!!』

そう言うのと、ゲームバンキは別の場所にいた梨杏を呼び寄せた。

「な、何なんですか・・・」

「お前の幼なじみがお前に命を預けるって言ってるゲーム。だから、呼んだゲーム」

梨杏は自分の目の前にあるテレビに映る零次を見て、驚いていた。

「何で零くんがテレビの中にいるんですか!？」

「お前に隠してたゲームか、沢井零次・・・教えてやるゲーム。沢井零次は仮面ライダーイヴだゲーム」

梨杏はゲームバンキの言葉を信じられないという表情をした。しかし、テレビの画面に映る零次の表情は一気に暗くなる。

「ほんとなんだね、零くん・・・なら、わたしが零くんを守るから!! 早くゲームをさせてください!!」

「だったら、早くコントローラを握るゲーム」

梨杏はゲームバンキから渡されたコントローラを握ると少し深呼吸をした。

「（零くん・・・必ずわたしが助けるから・・・）」

ゲームバンキのゲームが再開された。

零次達の前にダーククライム戦闘員が複数現れた。

「（頼むぜ、梨杏。） 変身！！」

零次は梨杏に全てを任せ、イヴへ変身した。

「よし、行けぜ！！！」

イヴは梨杏の操作を受けて、的確に戦闘員達にパンチやキックを叩き込んでいく。

まるで、自分の意思で動いているように動いている。

「馬鹿なゲム・・・ 何でこんな動きができるゲム・・・」

「（零くんの癖、仕種、タイミング、よく分かる・・・ だから、零くんを、仮面ライダーイヴを最高の状態で戦わせてあげられる！！）」

梨杏は素早くコントローラにコマンドを叩き込んでいく。
それを受けて、イヴは次々に戦闘員を叩きのめしていく。

「凄いなあ、梨杏ちゃん・・・ 俺達もあそこまで凄いと知らないかったぜ・・・」

「そうですね、城先輩。 俺が昔零次君を訪ねた時、梨杏ちゃんと仲良くゲームしてたんだけど、凄い集中力でノーミスでクリアしましたよ」

筑波洋は城茂の言葉に昔のことを思い出すような口調で返事をした。

「我が僕達よ・・・ ガイアセイバーズがいない今のうちにシャドームーン様の肉体を探してくるのです・・・」

トライバル・エンドの言葉に従った手下達は早速シャドームーンの肉体の搜索へと向かった。

「そして、わたしはシャドームーン様の魂を導かねば・・・」

トライバル・エンドはダークホライズンの儀式場でシャドームーンの魂を導くための魔導陣を発動させた。

「そろそろ、ラスボスでも出てきそうな雰囲気だな」

「一文字さんの言う通りかもですよ」

零次の呟きを聞いたガイアセイバーズのメンバー達はその方向を見ると一体の怪人が立っていた。

「さて、ラスボス倒して現実の世界に帰りますか」

零次がそう言つて、一歩踏み出すと空間が隔離され、他のガイアセイバーズメンバーは現実世界へと強制転送された。

「どういうことなんですか！？ 何で零くんだけ帰ってこないんですか!？」

そう、ガイアセイバーズが帰されたのは梨杏が零次をコントロールしている場所だったのだ。

「最初から仮面ライダーイヴを誘い込むことが目的だったゲーム。そして、我らが王に器を捧げるゲーム」

ゲームバンクの目的が分かったガイアセイバーズのメンバー達はゲームバンクを倒そうとするが既に実体はここにはいない。

零次（仮面ライダーイヴ）の前に蠅螂のようなサイプロクスがいた。

「あんたがラスボスかよ？」

「ああ。我が名はマンティスサイプロクス。貴様を倒す者の名だ。覚えておけ」

そう言うと、マンティスサイプロクスは両腕の鎌を水平に構え、イヴを見据えた。

イヴも静かに構えていく。

「（梨杏、俺の命・・・預けたぜ！！）行くぞ！！」

アイキャッチA（コントローラーを持って、ゲームしている梨杏）
アイキャッチB（デイメンションキック発動中の仮面ライダーディケイド）

イヴはそう言うと、マンティスサイプロクスに素早く近づき、左右のパンチを叩きつけていくこうとする。

しかし、マンティスサイプロクスはそのパンチを両腕の鎌で器用に防ぎ、さらに、イヴの腕を鎌で切り裂こうとした。

その一撃でイヴの左腕には鋭い傷ができた。

「なかなかやるな、イヴよ。やはり、トライバル・エンド様が欲しがることはある」

「てめえ・・・トライバル・エンドのこと、どこまで知ってるんだ・・・」

マンティスサイプロクスはイヴの言葉に少し考えてから答えた。

「知っているのはトライバル・エンド様が貴様に何を望んでいるかということだけだ。だが、それも簡単には教えられんな」

「だったら、てめえを倒して聞き出すまでだ！」

イヴはマンティスサイプロクスが左右の鎌を振るうのを見て、かわしていく。

しかし、イヴの身体には触れてもいないのに無数の傷ができあがっていた。

「ぐううう・・・ な、何なんだよ・・・」

「我の能力だ。貴様に見抜けるか」

イヴはマンティスサイプロクスの言葉を聞いて、考えてみたが答えが出ない。

「（あれはもしかして・・・ よーし！！）」

梨杏は画面越しに映るイヴ、零次とマンティスサイプロクスの姿を見て、ある考えにたどり着いた。

それを実行するためにコントローラでコマンドを叩き込んでいく。

イヴはマンティスサイプロクスに向かって、左右のパンチを放っていくがマンティスサイプロクスはまた左右の鎌で空を切った。

すると、イヴの身体には傷が増えた。

「そうか・・・ かまいたちか・・・」

「それがお前の答えか。 なら、死ぬがいい」

マンティスサイプロクスは再び例の技を放とうとする。

イヴは迎え撃とうとしたが身体が動かなかった。

イヴの意思で動くことができないからだ。

「死んだか・・・ 器を回収して・・・」

マンティスサイプロクスの視線の先でイヴはボロボロになりながら立っていた。

「そうか・・・ 梨杏は気づいてたんだ・・・ お前の技が真空状態から放つものだったことに・・・」

「気づいたところで何もできん。死ぬだけだ」

マンティスサイプロクスはイヴをとどめを刺すべく、鎌を振るった。しかし、イヴは絶妙なタイミングである技を使った。

「イヴフラッシュュ!!」

ストーン・イヴから強烈な光が放出され、マンティスサイプロクスのバランスが崩れた。

その隙に、イヴはマンティスサイプロクスの背後を取った。

「一瞬あれば十分だ・・・」

イヴはそのままマンティスサイプロクスを担ぎ、回転させながら上空に投げ飛ばした。

「行くぜ、梨杏・・・」

イヴはジャンプすると回転し、マンティスサイプロクスに回転踵落としを叩き込んだ。

そして、着地したと同時にマンティスサイプロクスは爆発した。

「何なんだよ、これ・・・」

イヴのいるゲーム世界に影響が現れ始めた。

そして、イヴは・・・

「零くん・・・良かった・・・」

「ありがとな、梨杏・・・あと、黙っててごめんな・・・」

零次の言葉に梨杏は泣き出してしまった。

ガイアセイバーズのメンバー達もその様子を静かに見ていた。

零次はしばらくしてから表情を変えた。

「まだ借りを返さなければならぬ奴がいる・・・ゲームバンクの野郎をぶっ飛ばす!!」

「・・・ああ」

零次の言葉にガイアセイバーズメンバー達は頷いていく。

「零くん、いつてらっしやい。ちゃんと帰ってきてね」

「大丈夫だよ、梨杏ちゃん。私達は絶対に負けないから」

「なのはさんの言う通りだよ。梨杏は心配しないで待っててね」

梨杏の言葉になのはとスバルは頼もしいくらいの笑顔で答えた。

「貴様を抑えておくのが俺の役目だが、少しくらいはやらせてもらうぞ」

「うるさいゲーム！ 邪魔するなゲーム！！」

ゲームバンクの前にいるのはシンケンレッドこと志葉丈瑠だ。
シンケンレッドはシンケンマルを片手に持ち、峰を肩に乗せている。

「シンケンレッド、志葉丈瑠、参る」

「来るなら来いゲーム」

ゲームバンクの言葉にシンケンレッドは静かに動き出した。
そして、ゲームバンクの身体を袈裟斬りにする。
しかし、ゲームバンクの姿はぶれた。

「馬鹿めゲーム。 誰が馬鹿正直に貴様らの前に姿を現すものかゲーム」
「そういうことが。 だが、そんなことは分かっている」

シンケンレッド、志葉丈瑠の言葉にゲームバンクの幻は動揺しながら消えた。

別の場所に隠れていたゲームバンクはシンケンレッドである志葉丈瑠の言葉に動揺し、ゲーム世界からコマンドブロックという手下を大量に呼び寄せていた。

「奴の言葉はどういう意味ゲーム？ 俺の居場所がバレるわけないゲーム」

「そうはいかないんだな、これが！！」

ゲームバンクの前にはイヴを始めとしたガイアセイバーズのメンバー達がいた。

全員が手に武器を持ち、闘志をみなぎらせている。

「何で、イヴがここにいるゲム？　ゲム世界に閉じ込めたはずゲム・・・」

「ゲムをクリアしたから次のステージに進んだだけだろ。　てめえはぶっ飛ばすから覚悟しとけ」

イヴがそう言うと、ゲムバンキはすぐさま逃げようとする。

しかし、イヴは一跳びでゲムバンキに近づくと左右のストレート、フックをゲムバンキに叩き込んでいく。

その攻撃にゲムバンキはふらつきながら腕を伸ばし、反撃している。

「甘いぜ！　ライダーチョップ！！」

イヴはゲムバンキの伸ばしてきた腕をかわし、ライダーチョップで叩き切った。

片腕を切り落とされたゲムバンキは痛みからか、後ろへ数歩下がった。

「馬鹿なゲム・・・　俺は強いはずゲム・・・　何で、こんな奴に・・・」

「分からないのかよ・・・　それはここがリアルだからだよ。　てめえのゲムじゃねえんだよ！！」

イヴは叫びながら左右のパンチと右のハイキックをゲムバンキの身体に叩き込んだ。

そして、空中に跳び上がりながら前方回転をした。

「行くぜ！　ライダーキック！！」

そして、その勢いを利用したライダーキックをゲムバンキに叩き

込んでいく。

ゲームバンキはそのエネルギーに耐えきれず、盛大に爆発した。

「やったぜ」

「やったね、零次！ 凄いよ！！」

「そうね。 あんたにしてはよくやったわよ」

スバル達が変身を解除した零次の傍にやってきて思い思いの感想を言っている。

零次はそれらに返事をしながらその場を後にした。

ダーククライム本拠地、ダークホライズンではイヴと対になるアダムが誕生していた。

「死者を合成させて造り上げたアダムと生者を改造し造り上げたイヴ・・・ 2つが争うことで王の器から神の器へと進化する・・・ 時は来た・・・」

アダムを見ながら、トライバル・エンドはそんなことを呟いていた。

これからの戦いは一体どうなるのだろうか・・・
それはいずれ分かることだろう・・・

t o b e c o n t i n u e d

次回

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Episod
e - 9 ガールズインパクト始動

ガイアセイバーズ女性隊員によって構成された団体、ガールズインパクトが活動を開始した。

しかし、そこへ反ガイアセイバーズ組織の魔の手が忍び寄る。

お楽しみに！！

Episode - 9 ガールズインパクト始動（前書き）

ひらひらです ♪ ♪

本日の投稿はここまでですよ ♪ ♪

それでは、お楽しみください ♪ ♪

Episode - 9 ガールズインパクト始動

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Episode - 9 ガールズインパクト始動

天道総司が宣言した、ガイアセイバーズ女性隊員で構成された打撃系格闘技団体、ガールズインパクトが活動を開始した。公開トレーニングを行っただけの話ではあるが・・・

「それにしても、ガールズインパクトを創るって言った時の反響は凄かったねえ・・・ まあ、反対意見も多かったけど・・・」
「そうですね・・・ でも、天道さんは軌道に乗れば一般からもスタッフや選手を募集するって言ってたじゃないですか」

梨杏の言葉に洋子はサンドバックを叩くのを止めて、頷いていく。そう、ガールズインパクトはある程度軌道に乗れば、一般からの選手やスタッフを受け入れるつもりでいる。

「でも、梨杏。 あたし達も参加していいの？」

スバルは梨杏に尋ねていた。

自分達は正式なガイアセイバーズの隊員ではなく、あくまで臨時隊員だと主張しているのである。

「それは関係ないんとちゃうかな？ っていうか、なのはちゃんらはガイアセイバーズの隊員でもあるわけやから部下のスバルちゃんらも隊員扱いしとるんとちゃう??」

「そう言われてみればそうだね。 スバル達はもうガイアセイバーズの隊員だしね。 お給料ももらったでしょ？」

梨杏は最近、スバルから呼び捨てで呼んでいいと言われてからスバルのことを呼び捨てしているのだ。

スバルは梨杏の言葉に笑みを浮かべながら首を縦に振っていく。

「でも、わたしね、一度スバルと闘ってみたかったんだ！ あつ、魔法とかじゃないよ、格闘技で試合したいってことかな」

「それはあたしもだよ、梨杏。あの試合見てから、ずっと梨杏と闘ってみたいって思ってたの。喧嘩とかじゃなくてさ・・・スパーリングだっけ？」

スバルの疑問混じりの言葉に梨杏は頷いていく。

スバルも地球に来てから梨杏や彩、零次達から地球の文化を学んでいるがまだまだ拙いようだ。

「合ってるよ、スバル。でも、スバルもだいぶ地球の文化に慣れてきたんじゃない？」

「そうだね、だいぶ慣れたかも。でも、まだまだ慣れないことも多いよ」

スバルの言葉に梨杏は少し笑みを浮かべた。

「スバルもリーちゃんも強いからね。ボクも二人と試合したいよ」
「あたしもだよ、アーヤ。アーヤは強いからね」

スバルは彩の言葉に答えると人懐こい笑みで彩を見た。

「三人の願いが叶うわよ。今度ある、ガールズインパクトの初回興行で三人のうちの二人にはセミファイナルで試合をしてもらうからね」

スバル達が話していると加奈が自動走行型車椅子に乗って、ガールズインパクトのジムまでやってきた。

加奈はガイアセイバーズでは事務や営業管理、武器管理などの裏方の仕事をしている。

しかも、加奈はそのトップである。

「スバルちゃんはとっても強いってお姉さんから聞いたし、梨杏ちゃんはまだかちゃんとの試合があつてか2戦目の申請がないままだし・・・」

梨杏は加奈の言葉に少し俯いてしまった。

梨杏としては、早く試合をしてまどかに追いつきたいという想いがあるが他の選手が渋っているとも噂されている。

「わたし、スバルとやりたいです!」

「あたしも梨杏と勝負したい!!」

スバルと梨杏の気合い十分な様子を見て、加奈は静かに微笑む。そして、二人の前に書類を差し出す。

「じゃあ、二人ともこの書類にサインしてちょうだい。そうしてくれれば、私が試合の準備は進めておくわ」

加奈はスバルと梨杏が書類にサインしたのを見て、車椅子を走らせながらジムを後にした。

零次はマッハアクセルを走らせていた。妙な電波をキャッチしたからである。

「妙だな・・・俺に場所を指定してきたはずなのに・・・」

零次が向かっているのは零次の家の近くにある河原だった。

零次は河原に着くとマツハアクセルから降りて、辺りを見回した。

「俺を呼んだ奴、いるんだろ！出てこい！！」

零次の言葉に黒い身体の怪物が姿を現した。

「てめえは何者だ！？」

「アダム・・・イヴ、貴様を破壊するものだ・・・」

アダムはそう言うと、左腕をバズーカ砲に変形させ、イヴに向けて発射した。

なんとか、かわしたものの爆風にイヴは吹き飛ばされてしまった。

「ぐあっ・・・」

「イヴ、破壊する・・・」

アダムは左腕を元に戻すとイヴに接近し、左右のパンチを叩き込んでくる。

イヴはその威力に体勢を崩すと転がりながらアダムとの距離を取った。

そして、反撃の右ストレートをアダムの胸に叩き込んでいく。

「硬えな・・・何なんだよ、こいつ・・・」

「私はアダム・・・貴様を死へ誘うもの・・・」

アダムの女性のような声にイヴは一瞬動揺してしまった。

そこをアダムに突かれ、刀に変形させた右腕で袈裟懸けに斬られた。

しかし、すぐに体勢を整えるとエネルギーを右手に集中して、アダムの身体に渾身のパンチを叩き込んだ。

「くっ・・・ イヴ、私はトライバル・エンド様からの帰還命令で退くが次こそは必ず破壊する・・・」

「待ちやがれ!!」

イヴはアダムを追おうとしたが高速で飛び去ったアダムを追うことはできなかった。

仕方なく、変身を解くと零次はガイアセイバーズ基地へ戻るために再びマツハアクセルを走らせた。

ガールズインパクトの初興行の日がついにやってきた。
選手となるガイアセイバーズ女性隊員は皆、緊張しているようだ。
梨杏とスバルも同じであった。

「なんか、緊張するね。 梨杏は緊張しないの？」

「ううん、緊張してるよ。 やっぱり、人の前で試合をするっていうのは慣れないよ」

梨杏とスバルは自分達の控え室の前で話している。

同じ部隊の仲間とはいえ、今回は選手同士なので全員一緒に控え室というわけにはいかないのだ。

「けど、わたしは負けないよ、スバル」

「あたしもだよ、梨杏」

二人はそう言うと、自分の控え室へ入っていった。

「天道さん、ガイアセイバーズに脅迫状が来たって本当ですか!？」
「ああ、そうだ。内容はガールズインパクトとガイアセイバーズの解散を要求するものだった」

ガイアセイバーズに送られた郵便物の中に紛れ込まされて、脅迫状が入っていた。

内容は天道が話した通りで送り主は書かれていなかった。

「それで、送り主は何者なんですか？」

「おそらくは反ガイアセイバーズ組織のどれかだろう。もちろん、ガールズインパクトもガイアセイバーズも解散などさせない」

ガールズインパクトは実のところ、政府が防衛費の1/4を払っていたのだが、それを支払うことを渋ってきた。
ならば、自分達でガイアセイバーズの運営費を稼いでもおうと天道は考えたのである。

「ガールズインパクトはガイアセイバーズの組織運営のためと女性隊員が強くなることで男性隊員達を奮起させるために作られたから解散させられないんですね」

「その通りだ、加奈。そして、犯罪者の脅しに屈するようでは地球など守れん。だから、反ガイアセイバーズ組織の計画を正面から叩き潰す」

今、総監室で話しているのはガールズインパクトのトータルマネジメントに就任した大滝加奈である。

加奈はガイアセイバーズでは組織運営の中枢である総合管理課のチーフも務めている。

「ああ、既に正木に連絡してウインスペクターとソルブレインを動かしている。お前はガールズインパクトの興行を無事に成功させてくれ」

「分かりました、天道さん。いえ、総監」

加奈は車椅子の上で敬礼をしてから総監室を後にした。

ガールズインパクトの興行が始まった。

試合は順調に進み、ついにスバル達の試合、セミファイナルまで来た。

「いよいよかあ。梨杏はきつと凄く強いんだろうなあ。あたしのシューティングアーツの基礎がどこまで通用するかだね。頑張るぞー!!」

「スバルちゃん、調子よさそうやね。せやけど、うちがスバルちゃんのお姉ちゃんと試合するっていうのに気にならないの?」

スバルは洋子の問いかけに少し深呼吸をしてから答えた。

「心配はしてますよ。でも、ギン姉はあたしよりも強いから洋子さんに勝っちゃったりするんじゃないかなって思ってるんです」
「そら、また偉い自信やね。自分のことやないのにここまで言うっていうのも凄いわ」

洋子は感心したように呟きながらスバルを見た。

そこへ、呼び出し係になった整備部の女性隊員がスバルを呼びに来た。

「あつ、はい!　じゃあ、洋子さん。ギン姉との試合頑張って

くださいね!!」

「スバルちゃんも梨杏ちゃんとの試合、頑張りや!!」

洋子は笑顔でスバルを控え室から送り出した。

一方、梨杏の控え室ではギンガと梨杏が話していた。

「あのね、梨杏ちゃん。スバルのことで少し話したいことがあるんだけどいいかな?」

「スバルのことならスバルから聞きます。今、スバルが話してくれないんだったら、それは今は聞いてほしくないことだと思っんです。だから、今は聞きません」

梨杏の言葉と表情にギンガは梨杏の言いたいことが分かったのか、その話はしなかった。

まずは、スバルがリングアナを務める柊瑞枝に呼ばれ、花道からリングまで向かった。

そして、リングインをしていく。

次に、梨杏がリングインしていくとレフェリーを務める宇崎ランが二人をリング中央へ呼んだ。

ちなみに、瑞枝はアサルトフォースの隊員で、ランは獣拳戦隊ゲキレンジャーの一員でもある。

「二人ともクリーンなファイトをしてね」

「はい!!」

「もちろんです!!」

ランの言葉にスバルと梨杏が勢いよく答えるとランは二人を自分の

コーナーに戻した。

洋子はギンガの控え室にいた。

加奈に呼ばれたのである。

「それで、加奈。会場の中に反ガイアセイバーズ組織の犯罪者が潜り込んだのはほんま？」

「ええ、本当よ。今は会場の駐車場にいるわ。二人は素早く片付けてくれないかしら？」

加奈の言葉に洋子もギンガも頷いていく。

「ありがとう、洋子、ギンガちゃん。気をつけて」

洋子とギンガはすぐに駐車場へ向かった。

駐車場にはハンドガンやマシンガンを持った男達がいた。

「ギンガちゃん、魔法使ってもええから手早く片付けるで!!」
「分かりました!!」

そう言うと、ギンガは男達の前に飛び出した。

男達はすぐさまギンガに向けて、手にした銃を乱射した。

「トライシールド!!」

ギンガはその銃弾をシールド系の魔法であるトライシールドで防いだ。

そこへ、洋子が男達の手元に銃弾を撃ち込んだ。

「あんたら、観念しい！！ あんたらの負けや！！」
「まだ、負けてなんかいねえ！ 会場に仕掛けた爆弾が爆発すれば
お前らも終わりだ！！」

男達の一人の言葉を聞いて、洋子はすぐに加奈に報告した。
そして、ギンガが男の首筋に手刀を叩き込んだり、腹にパンチを叩
き込んだりして気絶させた。

洋子の報告を受けた加奈はすぐさま爆弾の搜索を指示した。
その指示を受けて、ソルブレイン隊長、西尾大樹とウィンスペクタ
ー隊長、香川竜馬はそれぞれの部下に命じていった。

「竜馬先輩、様子が変ですよ。いくら、ガイアセイバーズを潰す
ためとはいえ、ただ関係のない人達を殺すことに意味はないはず
です」

「確かに。もしかしたら・・・大樹、ガイアセイバーズの基地
に急ぐぞ！！」
「はい！！」

竜馬と大樹は会場を飛び出して、ガイアセイバーズ基地へ急いだ。

アイキャッチA（道路を走るソルギャロップとナイトカスタム）
アイキャッチB（空手着のスバルと梨杏）

スバルと梨杏の試合は1ラウンド目が終了し、インターバルに入っ
ていた。

「それにしても、スバルのその格好慣れないわね。まあ、それは
いいわ。で、スバル、梨杏は強い？」

「凄く強いよ・・・なんてったって、キックは重いし、パンチは速い。やっぱり、空手っていうのに凄く慣れてるみたい」

「そうね。まあ、梨杏は元々空手やってたって話だしね・・・」

スバルの言葉にセコンドに就いたティアナは頷きながら答えていく。

「だから、全力で行くよ。いい？」

「それを選ぶのはあんたでしょ。それに梨杏はそんなに柔な子じゃないでしょ」

ティアナの言葉にスバルは静かに頷いていく。

「リーちゃん、スバルは強い？」

「うん、強いよ・・・アーヤもきつと喜ぶくらいの強さだよ・・・わたし、空手には自信あったんだけどなあ・・・」

セコンドに就いてくれた彩の言葉に梨杏は肩で息をしながら頷いていく。

「ボクもスバルと闘ってみたかったなあ。けど、今はリーちゃんのことをサポートするよ」

「ありがと、アーヤ。ただ、スバルの身体が凄く硬いんだよ」

梨杏の呟きに彩は聞こえなかったのか、不思議そうに首を傾げた。梨杏は慌てて手を振り、彩の気を逸らした。

「何でもないよ、アーヤ。そんなことよりアーヤなら次のラウンド、どうする？」

「うーん・・・ボクならスバルにパンチを叩き込んでダウンさせるけどなあ。だって、ややこしく考えてもボクらしくないし」

梨杏は彩のそんな言葉に気が楽になったのか、息を整えることに集中した。

2ラウンド目が始まり、スバルと梨杏はゆっくりと近づいていく。そして、スバルが左右のストレートやフックを梨杏の顔やボディ、脇腹に叩き込んでいく。

梨杏はスバルのパンチの威力に口から唾液を吐き出し、顔やボディは腫れてきている。

しかし、梨杏も左右のフックとアッパーをスバルの顔やボディに叩き込んだ。

スバルも口から唾液を吐き出していった。

「ぶふう・・・」

「んぐう・・・」

「まだまだ!」

スバルと梨杏はさらに左右のストレートをお互いの顔に叩き込んでいく。

二人はそのストレートに口の中を切ったのか、血混じりの唾液を吐き出していく。

しかし、梨杏はスバルの身体に違和感を感じていた。

「（スバルの身体、やっぱりなんか硬い・・・まるで、機械が身体の中に詰まってるみたい・・・）あぐう・・・んんっ・・・」
「（梨杏、なんかあたしのことを試してるみたい・・・まさか、あたしのこと、バレたの!？）んぶう・・・ぶはあ・・・」

二人はお互いに自分の考えを否定しようとしながら相手の顔にパンチを叩き込んでいく。

ガイアセイバーズ基地に着いたソルブレイバーとナイトファイヤーはすぐさま基地内部を調べ始めた。

「ウィザードサーチャー!!」

ソルブレイバーはウィザードサーチャーを作動させて、周りの様子を見ていく。

すると、視線を動かした先に爆弾が置かれているのを発見した。

「ナイトファイヤー、爆弾を見つけた」

「本当か、ソルブレイバー。なら、早く処理するぞ」

ソルブレイバーとナイトファイヤーはすぐに爆弾のある場所に向かった。

スバルと梨杏の試合は最終ラウンドまで来ていた。

既にパンチやキックを数多く叩き込まれた二人の顔や身体には青痣ができ、腫れてしまっている。

しかし、二人は相手に自分のパンチやキックを叩き込むのを止めようとしなない。

「はぁ・・・ はぁ・・・ やっぱり、スバルは強いなぁ・・・」

「はぁ・・・ はぁ・・・ 梨杏だって強いよ・・・」

二人は疲れからクリンチを繰り返していた。

そして、自分の想いを話していく。

「はぁ・・・ はぁ・・・ わたしはスバルが零くんを見て、何か悩んでるのが分かったから力になりたかったの・・・ だから、ス

バルのことを少しでも知らなきゃって思ったの・・・」

「はぁ・・・ はぁ・・・ そうなんだ・・・ あたしも梨杏に聞いてほしいことがあるんだ・・・ だから、後で聞いてね・・・」

二人は自分の想いを相手に伝えることができてほっとしたのか、表情を変えた。

「でも、負けないから!!」

二人揃って同じことを叫んだ後にランの指示でクリンチを解いた。そして、左右のストレートやフック、ハイキックやミドルキックを相手の顔やボディ、脇腹に叩き込んでいく。

「んんっ・・・ んあっ・・・」

「あぶう・・・ くふう・・・ スバル! あたしの空手の技見せてあげるよ!!」

梨杏はそう言うと、スバルの右ストレートをかわし、カウンターの左ボディアッパーを打ち込んでいく。

梨杏のアッパーを食らったスバルは少し下に向いてしまった。

梨杏は右足を振り上げ、下を向いたスバルの頭に踵落としを叩き込んでいった。

「かはぁ・・・」

スバルは梨杏の踵落としの威力に意識が飛んでしまい、前のめりにダウンしてしまった。

ランは梨杏をニュートラルコーナーに向かわせ、スバルへのカウントを始めた。

「1・・・2・・・3・・・」

スバルは徐々に意識が回復して立ち上がるかと身体に力を入れていく。

しかし、身体に力が入らないようだ。

「4・・・5・・・6・・・セ・・・」

スバルは徐々に立ち上がっていく。

そして、カウント7で立ち上がった。

「スバルちゃん、まだやれる？」

「やれます・・・」

ランがスバルに試合が続けられるか尋ねるとスバルは試合を続けられることをアピールしていく。

試合が再開されると梨杏はスバルにさらにダメージを与えるために一気に近づき、左右のフックやストレート、アッパーをスバルのガードの甘くなつた顔やボディに叩き込んでいく。

スバルは梨杏のパンチを食らう度に呻き、口から血混じりの唾液を吐き散らしていく。

そして、梨杏の右アッパーがスバルの顎に叩き込まれるとスバルの口から血と唾液を纏ったマウスピースが吐き出され、そのまま崩れ落ちるようにダウンした。

ランはスバルの様子を見るが白目を剥いており、とても試合を続けられる状態ではない。

「試合終了！ 勝者、彩坂梨杏！！」

ランは梨杏の右手を上げて、試合終了を高らかに告げた。

二人の激しい試合を称え、会場中から拍手が送られる。

一方、会場にいた犯罪者達を捕まえた洋子達は事情聴取をしていた。そこで、分かったのは会場のリングの下に爆弾が仕掛けられているということだった。

「次の試合はどうします？ 断りますか??」

「それはあかで・・・ そんなんしたら、会場中騒ぎになるわ・・・
・ だから、試合中に爆弾を運ぶ・・・」

洋子の決断にギンガは驚きを隠せなかった。

爆弾を運ぼうなんて危険なことをするとは思えないからだ。

「けど、試合を中止すればいいじゃないですか!？」

「けど、ギンガちゃんとはかく、うちは格闘家や・・・ 試合を中止するなんて簡単にできん・・・ それに中止したところで会場から人を出しとる間にドカンや・・・」

ギンガは洋子の言葉に頷いていく。

洋子とギンガの試合が始まった。

天道達は爆弾の起動スイッチを持っている犯人を探していた。

「天道さん、犯人見つけたわ。 あんたの近くにいますよ」

「ああ、分かった。 バイクルは香川にそのことを報告しろ。 い
いな？」

「任せてちょ」

バイクルはそう言うと、通信を切った。

天道は観客から離れた場所でライダーベルトにカブトゼクターを装

填し、仮面ライダーカブトに変身した。

洋子は試合が始まるとギンガと激しいパンチやキックの応酬を繰り広げ、観客を魅了していく。

そして、ギンガのパンチを利用して場外に飛ぶ。

そして、素早くリングの下に潜り込むと爆弾を発見し、それを持って出た。

「天道くん、頼むで!!」

「任せろ」

カブトはそれを確認するとクロックアップして洋子に近づいていく。そして、その手から爆弾を取り、会場の外へ出ていく。

「さてと、仕上げだ」

カブトはそう言うと、爆弾を空高く投げた。

通常の時間の流れに戻ると洋子はすぐにリングに戻っていく。

洋子はギンガに近づき、首相撲の体勢に持っていく。

「洋子さん、爆弾は？」

「天道くんが処理してくれたわ。もうじき、爆発するはずやで」

洋子の言葉通り、外で爆発音がした。

会場内にいる観客は一種のパフォーマンスだと思ったらしく、大歓声が巻き起こった。

爆弾のスイッチを持っていた男はこのことで慌てて会場を出た。そこに、天道達が待ち構えていた。

「ここまでだな。 あいつを捕らえろ」

天道の言葉にアサルトフォースの隊員達がすぐさま犯人を捕まえた。

ギンガとの試合も最終ラウンドを残すのみとなった。

自分のコーナーに帰った時、セコンドに就いてくれていたジャスミンから犯人を逮捕したことを聞き、洋子は安心からか、少し肩で息をするスピードが上がった。

「というわけだから、洋子ちゃんは試合に集中していいよ。 天道さんからの指示だからね」

「ほんまですか？ なら、このラウンドでギンガちゃんをKOしてこようかな」

洋子はそう言うのと、息を整えたのか、表情が活き活きしている。

そして、ギンガと洋子の最終ラウンドが始まった。

ギンガも洋子も後のことは考えていないのか、テンポよく左右のパUNCHやキックを繰り返していく。

しかし、二人はそれをガードしたり弾いたりして、かわしていく。決定打が出ないまま、最終ラウンドの半ばまで来ていた。

「はあ・・・ はあ・・・ やっぱり、ギンガちゃんも手え抜いとったんか・・・ さっきまでと全然スピードがちゃうんか・・・」
「はあ・・・ はあ・・・ そういう洋子さんだって手を抜いていたじゃないですか・・・ こんなに強いって分かってたら早めに倒すことも考えましたよ・・・」

二人は疲労から肩で息をしながらゆっくりと話しかけていく。

その間に体力を少しでも回復させるのが狙いでもある。

「せやけど、そろそろケリつけなあかんわな・・・」

「そうですね・・・ 私も洋子さんもそれほど長くは闘えそうにな
いですし、この試合もあとわずかですからね・・・ 決着つけまし
ようか・・・」

ギンガと洋子はゆっくりと構えなおすと相手をじつと見つめていく。
二人とも相手が隙を見せたら、一気に仕掛けるつもりだ。

「（さすがに動かんか・・・ なんなら、うちがわざと隙を見せて
もええんやけど、ギンガちゃんの腕ならその瞬間にうちはリングと
デーパーキスやな・・・） ギンガちゃん、仕掛けへの・・・」
「（洋子さん、全く隙がない・・・むしろ、私を誘ってる・・・
だったら、一か八か仕掛けてみようかしら・・・ でも、下手な
ことをしたら私が倒される・・・） 洋子さんこそ仕掛けたらどう
ですか・・・」

会場を包む緊張感にギンガと洋子の身体から汗が流れていく。

しかし、洋子とギンガが一步踏み出し、相手の顔に渾身の右ストレ
ートと左ストレートを叩き込もうとした時に高らかに試合終了のゴ
ングが鳴り響いた。

二人の拳はクロスカウンター状態になっていたが顔の前数cmのと
ころで止まっていた。

結局、ギンガと洋子の試合は判定でもドローとなり、次回の興行で
再戦を行うことになった。

これから、ガールズインパクトがどうなるかはまだ誰にも分からな
い。

t o b e c o n t i n u e d

次回

スーパーヒーロー作戦 N E W M I S S I O N E p i s o d
e - 1 0 古き鉄の来訪 P a r t - 1

ダーククライムによる事件もしばらく起こらず、平和な日常が流れていた。

そんな時、一人の少年がガイアセイバーズ基地に現れた。

彼は一体、どこから来たのか・・・

そんなガイアセイバーズを嘲笑うかのように新たな事件が起こった。

ガイアセイバーズはそれにどう立ち向かうのか？

古き鉄はどうなるのか？？

お楽しみに！！

Episode - 10 彩坂梨杏VS笹森さつき（前書き）

この話は本当はEpisode - 12にあたる話なんですが諸事情からEpisode - 10とEpisode - 11はホームページとブログのみでの掲載にしますね♪

それでは、お楽しみください♪

Episode - 10 彩坂梨杏VS笹森さつき

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Episode - 10 彩坂梨杏VS笹森さつき

ダーククライムにも目立った動きもなく、平和な時が流れていた。しかし、梨杏はそんな中、一人悩んでいた。それは自分の試合がまったく決まらないことである。

「梨杏、何辛気臭い顔してんだよ。らしくないぜ」
「うん・・・自分でもそう思う・・・」

梨杏の歯切れの悪い返事に零次は少し心配になってくる。

「梨杏が少しナーバスになってる？」

「ああ。どうも、自分に自信が持てなくなってるみたいなんだ」

スバルやギンガ、洋子によるティアナの格闘訓練に付き合っていた零次は訓練を終えたスバルと最近の梨杏の様子について話している。

「あの子、何か悩んでんの？」

「そうなんだよ、ティアナ。どうしたらいいと思う？」

「あたしには何にもできないわよ。梨杏にとって必要な悩みですよ」

ティアナの言葉にスバルと零次は首を傾げた。

ティアナは二人をそのままにすると休憩室へ向かった。

梨杏は自分の悩みを吹っ切るためにランニングをしていた。

「はぁ・・・はぁ・・・（今のままじゃまどかに追いつくことなんてできないよ・・・そのためには勝たなきゃだめなのに試合自体がないんだもん・・・どうしたらいいの？）」

「あの、どうしたんっすか？ そんなところでじっと立ち止まって」

梨杏は突然話しかけられて、びっくりしてしまい、尻餅をついた。

梨杏に話しかけた少女は梨杏に手を差し出し、立ち上がるのを手伝う。

「えっと、彩坂梨杏ちゃんっすよね？　ぼくは笹森さつきっす。よろしくっす」

「よろしくね、さつきちゃん」

梨杏の言葉にさつきの表情が変わった。
まるで、泣きそうな表情だ。

「やっぱり、ぼくって子どもっぽいんっすかね？　これでも、ぼく24っすよ・・・ちゃんと大学も出てるんすよ・・・」

「ごめんなさい！　さつきさんがあんまりフランクだったから・・・」

「いや、いいんすよ。　っていうか、嬉しいっすよ・・・　ぼく、童顔っすから相手に嘗められちゃって・・・」

梨杏はさつきの苦労が目に浮かぶような感じがした。
自然と梨杏は笑っていた。

それを見たさつきも笑顔になる。

「良かったっすよ、次の対戦相手が本調子になってくれて。　そう

じゃないと楽しくないっすからね」

「えっ？　どういふことですか、さつきさん」

「おっと、梨杏っち。　ぼくのはちゃん付けでもいいっすよ。

それと、ぼくは梨杏っちのこと、梨杏っちって呼ばせてもらっすね」

さつきの言葉に梨杏は頷く。

しかし、梨杏は再び話を戻した。

「えっと、さつきちゃん。　次の相手がわたしってどういふことなの？」

「そのままの意味っすよ。　梨杏っちならばくも本気でやれるっすからね。　とにかく、ぼくは負けないうっすよ！」

さつきはそう言いながら右腕を梨杏に向けて突き出す。
梨杏もさつきの右拳に自分の右拳を打ち合わせていく。

活き活きとした表情で戻ってきた梨杏を見て、スバル達も安心したような表情になった。

梨杏はスバルの腕を掴んでトレーニングルームへ行った。

「梨杏ってばすっかり元気になっちゃって。　零次、あんたにフォロ―させなくてもいいみたいね」

「だな。　それにしても、ティアナがそんなにおせっかい焼きだったとは知らなかったぜ」

零次の言葉にティアナの顔が少し赤くなった。

ティアナは右手を振り上げながら零次を追いかけていく。

ある日、梨杏は加奈に呼ばれ、事務室へ向かっていた。

正式に次の対戦相手が決まったことを報告するためだ。

「梨杏ちゃん、次の対戦相手が決まったわ。相手の名前は・・・」
「笹森さつきちゃんですか？」

梨杏は加奈がさつきの名前を言う前に言ったことで一瞬加奈の顔が驚きに染まった。

しかし、すぐに気を取り直し、梨杏の前に試合の契約書を差し出した。

「じゃあ、話は早いわ。梨杏ちゃんはその契約書にサインするんでしょ？」

「はい！」

加奈が悪戯っぽく聞くと梨杏は力強く即答した。
それを見て、加奈達も微笑む。

そして、数日後、梨杏とさつきの試合の日がやって来た。
梨杏は自分の控え室でスバル達と話していた。

「けど、2試合目が決まって良かったね、梨杏」
「ありがと、スバル。でも、不安だよ。さつきちゃんの試合のビデオを見たんだけど、さつきちゃんってパンチ力ありそうなんだよ・・・」

不安そうに言う梨杏の表情にスバルも少し心配になってくる。
零次は梨杏に近寄ると梨杏の額にデコピンをした。

「ふえっ！？ 何？」

「お前らしくねえよ。お前はどんな強い相手でも嬉しそうにして

「んだろ？ 違うか？？」

「・・・ だよ。 わたしはどんな相手でも負けたくないもんね
！！」

梨杏は気合を入れ直すと頬を叩いてから洋子達にバンテージを巻いてもらう。

零次達は梨杏の控え室から出て、観客席に向かう。

一方、さつきの控え室ではさつきのジムの先輩でも倉橋茜達に試合の準備をもらっている。

「さつき、バンテージの巻き方、きつくない？」

「ん。 大丈夫ですよ、茜さん」

さつきがそう言うのと茜は手早くバンテージを巻いていく。

先輩の三崎翔達はさつきのコスチュームを違和感を感じないように調整していく。

「どう、さつき？ コスチュームの着け心地に違和感ない？？」

「大丈夫ですよ、翔さん。 そろそろ試合っすね。 精神統一したいんで少し出てもらっていいっすか？」

「もちろんだよ。 今日はさつき、君の試合なんだから」

茜はそう言うのと翔や他の後輩を連れて、控え室を後にした。

「（試合のビデオを見てから少し震えが止まらないっすね。 梨杏
うちのことは前々から知ってたつもりだったんっすけど認識不足っ
す・・・）」

さつきは梨杏が中学時代に出ていた空手の試合をよく観戦していた

ようだ。

とにかく、さつきは精神を研ぎ澄ませていく。

一方、梨杏も自身の控え室で精神統一をしていた。

そこへ、試合の順番が来たことをスタッフが伝えに来ていた。

梨杏は洋子と宇崎ラン、柊瑞枝を連れて、花道を歩き、リングへと向かう。

梨杏が花道からリングへ続く道に出ていくと会場中から歓声が飛び交う。

そして、梨杏はリングインしていく。

続けて、さつきも花道からリングへと向かう道を歩いていき、リングインしていく。

二人がリングの上に揃ったところでリングアナによるアナウンスが始まった。

「赤コーナー、ガールズインパクト所属 116・7ポンド 彩坂
〜梨杏〜!!」

梨杏はリングアナのコールを聞くと右腕を高く突き上げた。

梨杏はすでに戦闘体勢に入っている。

「青コーナー、ファイティングスピリッツ所属 117・3ポンド 笹森〜さつき〜!!」

続いて、さつきも自分の名前をリングアナにコールされてから梨杏とは反対の左腕を高く突き上げた。

そして、梨杏とさつきはレフェリーからの注意を聞いている間もお互いに相手を睨みつけていた。

別に、お互いに相手が憎いというわけではない。

お互いが溢れる闘志を抑えきれなくなっているのだ。

「二人ともクリーンなファイトをするように！ 自分のコーナーに戻って！！」

二人はレフェリーにそう言われると自分のコーナーへ戻っていった。

「さて、梨杏。この試合、どうする？」

「そんな答えの分かつてる質問するなんてちよつとずるいですよ」

梨杏の緊張をほぐすための洋子の質問に梨杏は頬を膨らませながら答えた。

洋子の意図を理解した上の態度でもある。

「さて、梨杏はこの試合、前よりも突っ込んでいくつもりでしょ？」
「はい。さつきちゃんの試合のビデオを見てからずっと考えてました・・・ たぶん、今回の試合はさつきちゃんから逃げようとしたら容赦なく叩きのめされると思います・・・ だから、倒される前に倒してきます」

梨杏は力強くそう言うのと試合前なので集中していく。

さつきのコーナーでは茜と翔がさつきと試合のプランを話し、他のセコンドは試合の準備を進めていく。

「さつき、梨杏ちゃんとの試合、勝てそうかな？」

「分からないっすね・・・ 梨杏っちの試合のビデオを見てから少し怖くなってるっすよ・・・」

「まあ、さつきは彩坂梨杏が空手をやってた頃から注目してたからね」

翔の言う通り、さつきは自身の技を増やすために梨杏の試合を見ていたがそのうち梨杏のファンみたいなものになっていた。

「でも、負けるつもりはないっす。だって、ぼくもプロレスラーっすからね」

さつきはプロレスラーである。

しかし、元々複数の格闘技に興味があったため、キックボクシングやボクシング、総合格闘技のライセンスも取得しているのである。

「とにかく、楽しんできなよ、さつき。勝ち負けは気にしないでいいから」

「分かったっす。梨杏っちとの試合、楽しんでくるっす!!」

さつきがそう言うと、ちょうどセコンドアウトの指示が出たので翔と茜はリングから降りていく。

「ラウンド1、ファイト!!」

レフェリーのコールに梨杏もさつきも一気にリング中央に飛び出していく。

二人ともハードパンチャーなので自然とこういう展開になる。

さつきと梨杏は最初から飛ばしているようでお互いの顔に左右のストリートを叩き込んでいく。

お互い、ハードパンチャー同士なのでパンチをもらえば効くのである。

早くも、二人の口からは唾液が吐き出されていく。

しかし、お互いに左右のストリートを緩めない。

それどころか、さらに、スピードを上げていくのである。

「んぶう．．． かふう．．． ぶふう．．．」
「んあつ．．． んぐう．．． ぶはあ．．．」

二人の壮絶な殴り合いに会場から大歓声が巻き起こる。

しかし、梨杏とさつきには観客の歓声は関係ない。

ただ、相手をKOするためにパンチを繰り返すだけである。

『見てください！ 彩坂と笹森の壮絶な殴り合いに会場から割れんばかりの歓声が溢れています！ さて、彩坂と笹森の顔はついに腫れてきたわけですがどうなるのでしょうか！？』

実況の興奮したようなアナウンスがさらに場内の熱気が増していく。

「はあ．．． はあ．．． （ビデオで見るより実際に喰らってみるとさつきちゃんのパンチ力がよく分かるよ．．． けど、負けないんだから．．．）」

「はあ．．． はあ．．． （梨杏うちのパンチ力は見てたより強烈っすねえ．．． 苦しいっすよ．．． でも、負けないうっす！！）」

二人は苦しそうに息をしながらお互いに心の中で相手を誉めていく。しかし、お互いに拳を相手に叩き込むことを忘れることはない。

「ぶふう．．． んあつ．．．」
「はぶう．．． あぐう．．．」

お互いの口からはさらに血混じりの唾液が吐き出されていく。

しかし、ここで１ラウンド終了のゴングが鳴り響いた。

レフェリーはなおも打ち合う梨杏とさつきの間に身体を差し入れていき、二人を止める。

二人ともレフェリーの行動に1ラウンドが終わったことを理解した。そして、ゆっくりと自分のコーナーへ戻っていく。

アイキャッチA（梨杏とさつきがファイティングポーズを構えたポスター）

アイキャッチB（梨杏とさつき、インターバル中）

コーナーに戻った梨杏の頬を冷やしたり、鼻血を拭いたりしながら洋子達は梨杏に今のコンディションを聞いていく。

「梨杏、大丈夫なん？ 思い切りもろとるみたいやけど」

「はぁ・・・ はぁ・・・ 正直、微妙です・・・ さつきちゃんのパンチがとっても重くて・・・」

梨杏の言葉に洋子達は頷いていく。

二人のパンチが相手に叩き込まれた時の音が普通の4回戦にはないものだった。

「とりあえず、次のラウンドはさつきちゃんにわたしのパンチを叩き込んできますよ・・・」

「分かったわ・・・ 梨杏、頑張つてきいな」

洋子の言葉に梨杏は力強く頷いていく。

さつきのコーナーでは茜と翔がさつきの身体の汗を吹いていく。

「さつき、梨杏ちゃん強い？」

「もちろんっすよ・・・ ばくがここまでパンチ喰らってるんっすから・・・」

さつきは茜の言葉に返事していく。
そして、2ラウンド開始のゴングを静かに待つ。

2ラウンド開始のゴングが鳴り、梨杏とさつきはまた一気にリング中央まで飛び出していく。

梨杏とさつきはまたしても左右のストレートを相手の顔に叩き込んでいく。

「んあつ・・・ ぶふう・・・」

「かはあ・・・ んぶう・・・」

梨杏とさつきの口からはさらに血混じりの唾液を吐き出していく。
しかし、さつきは突然左右のストレートを打つのを止め、梨杏のボディに右アッパーを叩き込んだ。

「んぐう・・・ ぶはあ・・・」

梨杏は顔面に意識が集中していたため、突然強烈なボディブローを叩き込まれ、梨杏は口からマウスピースを吐き出してしまう。
そして、そのまま俯せにダウンしてしまう。

「ダウン！ 笹森、ニュートラルコーナーへ！！」

レフェリーは梨杏がダウンしたのを見るとさつきをニュートラルコーナーに向かわせた。

そして、梨杏に対してのカウントを始めた。

「1・・・ 2・・・ 3・・・ 4・・・」

梨杏はカウント4の時点で立ち上がるうとし、カウント6で立ち上がった。

しかし、足は震えていて、とても余裕があるようには見えない。

「彩坂、できるか？」

「やります・・・」

レフェリーが梨杏に試合を続けられるかと聞くと梨杏も弱々しく頷いていく。

レフェリーはそんな梨杏の様子に試合を再開させる。

「梨杏っち！ そろそろKOするっすよー!!」

さつきはその呼び掛けと同時に梨杏の顔やボディに左右のストレートやフックを叩き込んでいく。

しかし、梨杏も致命傷になりそうなパンチはガードしているのでなかなかダウンしない。

そうしている内に、2ラウンド終了のゴングが鳴り響いた。

さつきはゴングの音に反応して、梨杏へのラッシュを止めた。

「はぁ・・・ はぁ・・・」

「はぁ・・・ はぁ・・・ 梨杏っち、次のラウンドでKOするっすよー!!」

さつきはそう言うと、自分のコーナーへ戻っていった。

しかし、梨杏はダメージからか、ロープを伝いながら自分のコーナーへ戻っていった。

「梨杏、大丈夫？ 試合続けられる??」

「はぁ・・・ はぁ・・・ もちろんですよ、洋子さん・・・ わ

たし、さつきちゃんに負けませんから・・・」

洋子は梨杏の言葉を聞くと、セコンドのランと瑞枝に梨杏の足をマッサージするように指示していく。

さつきのコーナーでは茜による次のラウンドの作戦が伝えられていた。

「さつき、梨杏ちゃんは次のラウンドにたぶん君を倒しに思うんだ。だから、逆に梨杏ちゃんをさつきのパンチでKOしちゃおう」

「はい!」

さつきは茜の言葉に力強く頷いていく。

そして、3ラウンド開始のゴングが鳴り、さつきは勢いよく自分のコーナーから飛び出していく。

梨杏は赤コーナーの前で止まっている。

さつきは赤コーナーにいる梨杏を追い込んだと思い、左右のストリートやフックを梨杏のガード越しに叩き込もうとする。

しかし、梨杏もただ殴られているだけではないようだ。

「んぐう・・・ぶはあ・・・（はあ・・・はあ・・・さつきちゃんは今まで通りの闘い方をしてくるならこの状況で決着を付けようとしてくるはず・・・たぶん、狙ってくるのは渾身の力を込めた右アッパー・・・）」

梨杏は自分の考えをさつきのラッシュを喰らいながらまとめていた。さつきは梨杏のそんな様子などお構い無しにこのラウンドで梨杏をKOしようとさらに激しいラッシュをかけていく。

「はあ・・・ はあ・・・ そろそろ倒れるっすよ、梨杏っち!!」
「はあ・・・ はあ・・・」

さつきは梨杏にとどめを刺そうと下から振り上げるような右アツパ
ーを梨杏の顎目掛けて放っていく。
しかし、梨杏もさつきの振り上げた右腕を左手で叩き落とし、カウ
ンターの右ストレートをさつきの顔に叩き込んでいく。

「ぶはあ・・・」

さつきは自分自身のパンチ力と梨杏のパンチ力が合わさった右スト
レートを顔、いや、鼻に叩き込まれ、激痛と大量の鼻血に意識が半
分飛び、勢いよくリング上にダウンした。

レフェリーはさつきの様子を見て、試合続行が可能かどうか確認し
ていく。

しかし、さつきの瞳は白目を剥き、試合続行が不可能という事実を
レフェリーは確認した。

「勝者、彩坂梨杏!!」

レフェリーは梨杏の右腕を掴み、勝ち名乗りをしていく。

梨杏はさつきの様子を見下ろしていく。

さつきは意識が飛んだままで担架に乗せられ、運ばれていった。

試合から数日が経ち、梨杏はさつきが検査入院のために入院してい
る病院に来ていた。

そして、さつきの病室の前で入ろうか入るまいかと悩み、右往左往
していた。

梨杏の後ろから静かにさつきが来ていた。

「梨杏っち・・・何やってるんすか？」

「ふえ？ さつきちゃん!？」

梨杏はさつきに声をかけられて驚いたのか、少しオーバーなリアクションを取ってしまった。

さつきはそんな梨杏の様子を見て、くすくすと笑っていた。

「梨杏っち、そんな緊張しなくてもいいですよ」

「えっと・・・だって、わたし・・・」

「ボクシングですよ、梨杏っち。 あんな風に負けるのもお約束です」

梨杏はさつきのフランクな様子に梨杏もくすりと笑った。

二人はすっかり気まずい雰囲気忘れ、長時間話した。

「梨杏っち！ 次はぼくが梨杏っちをKOするっすから、負けちゃ駄目っすよ!!」

「今度も負けないから！ わたし、誰にも負けたくないもん!!」

梨杏はさつきにそう言ってからさつきの病室を後にした。

その胸には暖かいものが宿っていた。

ちなみに、二人はその後にお互いの携帯番号を教え合い、いつでも連絡が取れるようにしていた。

t o b e c o n t i n u e d

次回

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Episod
e - 11 絶体絶命 イヴ敗れたり！

自分達の計画の邪魔をするイヴを抹殺するためにダーククライムが
送り込んだ次なる刺客はコブラサイクロプス
独特の拳法と能力を使い、イヴを圧倒する。
イヴはこの強敵にどう戦うのか？

次回をお楽しみに！！

E p i s o d e - 1 1 絶体絶命 イヴ敗れたり！（前書き）

続けて投稿しますよ ♪ ♪

それでは、お楽しみください ♪ ♪

Episode - 11 絶体絶命 イヴ敗れたり！

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Episode - 11 絶体絶命 イヴ敗れたり！

零次は相変わらずガイアセイバーズのメンバーとの訓練に明け暮れていた。

今の訓練では複数の相手の攻撃をかわし続けるというものを行っている。

そして今まさに、訓練の最中である。

「ほら、零次君、きっちり私の攻撃をかわす！ まだまだスピードを上げられるんだよ！！」

「はい！！」

零次は宇崎ランの突きをひたすらかわしていた。

しかし、ランも少しずつ突きのスピードを上げていく。

「くうっ・・・速えなあ・・・」

「まだまだ序の口だよ、零次君！ 根性だよ！！」

徐々に速くなるランの拳が零次の身体に当たりだしていく。

そこで、ランは突きを止めていった。

「じゃあ、私の今日の訓練はおしまいね。他の人との訓練も頑張っ
てね」

「ありがとございました、ランさん」

零次はランと挨拶を交わしてから洋子との訓練の準備をしていく。

零次の訓練スケジュールは前半が基本的な格闘訓練、後半は変身した上での本格的な戦闘訓練である。

「さて、零次くん。今日のうちとの訓練は実戦形式で行くで」
「分かりました、洋子さん」

零次は洋子の言葉に返事をしながら構えを取っていく。

洋子はそんな零次を見て、構えることなく自然体のままにいる。

「ほんなら、行くで!!」

洋子は素早く零次との距離を測ると左右の回し蹴りを放っていく。
零次は洋子の回し蹴りをぎりぎりでかわしていくが洋子もそれを予想していたのか、さらに左右のストレートを零次の顔目掛けて連打していく。

零次は洋子の左右のストレートを両手でパリーの要領で弾いていく。

「零次くんもだいぶできるようになってきたなあ!!」
「洋子さんやみんなのおかげですよ!!」

零次と洋子は軽口を叩き合うが技の応酬の最中なので一瞬たりとも気が抜けないのである。

二人の訓練の終わりを告げるタイマーが鳴り響いた。

「じゃあ、今日はここまでやね」
「はい。ありがとうございました!!」

零次は前半の訓練を終え、アップをしていく。

「けど、零次って強くなったよね。今度、模擬戦してみよっか?」

「いいなあ。天道さん達に掛け合ってみるか？」

零次はスバルの言葉に軽く返事をした。

この返事が後に騒動の種となるのを今の零次は知らない。

零次が自宅に帰る途中、白蛇が首に巻きついてきた。

零次はその白蛇を払おうとしたがなかなか払うことができない。

しかも、その白蛇はどんどん零次の首を締め付けていく。

「があああつ・・・何なんだよ、これ!？」

「教えてやろう。その白蛇は俺の分身だ。俺の意思次第でどれだけでも締め付けていくのだ」

零次の目の前にコブラのような意匠を象ったサイクロプスがいた。

「てめえは？」

「俺はコブラサイクロプス・・・貴様を殺すために造られたものだ」

コブラサイクロプスの言葉に零次は身構えていく。

コブラサイクロプスも構えを取っていく。

「くそ・・・変身!！」

零次の影が銀色になり、イヴの姿を写していく。

そして、一瞬の閃光とともに変身は完了した。

「うらあ!！」

イヴは力任せに白蛇を引き剥がした。

そして、左右のキックのコンビネーションをコブラサイクロプスに叩き込もうとする。

しかし、コブラサイクロプスは両腕でイヴのキックを捌き、カウンターの右のパンチを叩き込んでいく。

コブラサイクロプスのパンチでイヴは吹っ飛ばされてしまった。

「ちいっ」

イヴは少し悔しそうな声を上げてから体勢を整えていく。

コブラサイクロプスはそんなイヴとの距離をすでに詰めていた。

そして、コブラサイクロプスの周りに重力場が発現していた。

そのまま、拳を叩き込まれたイヴは大きく吹き飛ばされてしまう。

「がはぁ・・・」

イヴの口から血が吐き出されていく。

「弱い・・・これが大首領が求めたものか・・・」

「大首領・・・誰だ、そいつは・・・」

イヴの問いかけにコブラサイクロプスは静かに答えていく。

「大首領とは俺達の主のことだ。普段は姿さえ見せないがな」

「そうかよ・・・だったら、自力で姿を拝ませてもらうさ」

イヴは再びファイティングポーズを取っていく。

コブラサイクロプスは一步も動こうとしない。

イヴは飛び上がり、そのままコブラサイクロプスに近づいていく。

「行くぜ!!--」

イヴはジャンプの勢いを利用した右のパンチを叩き込もうとするが急に失速してしまった。

そして、コブラサイクロプスの左肘を腹に叩き込まれてしまった。イヴはコブラサイクロプスの攻撃に勢いよく飛ばされてしまう。しかも、ダメージが大きいのか、立ち上がることもできない。

一方、イヴの救出に向かった仮面ライダースーパー1とストロンガーの前に一人の男が立っていた。

その男とは『WAC』総裁となった古賀修造であった。

「貴様ら、俺と戦え……」

「今はてめえと遊んでる暇はねえんだよ」

「先輩、ここは俺に任せてください」

スーパー1がストロンガーを行かせようとするが右腕を差し出すことで止める。

スーパー1はストロンガーの意図を理解し、ブルーバージョンを走らせ、イヴの救出に向かう。

修造はあえてスーパー1を追わずにその場に留まった。

「貴様でも構わん……俺と戦え……」

「ああ、いいぜ。エレクトロファイヤー……」

ストロンガーが両手を交差させると地面に右手を叩きつけていく。すると、地面に電気が走っていく。

しかし、修造は平然とその場に立っていた。

「どうした……その程度か……」

修造の言葉にストロンガーは後ろへ飛び、距離を取っていく。
修造の腰に銀色のベルトが現れた。

「変身・・・」

修造がそう言うと、紅い身体のデスライダーになった。

「てめえも真っ赤ってわけか。悪趣味だな」

「貴様も変わらんだろう・・・それに俺の身体が紅い理由は貴様の血を吸っても汚れないことを証明するためだ」

「そうかい。なら、俺の血を浴びることができるか、試してみるか？」

ストロンガーはそう言うとデスライダーに右の回し蹴りを放っている。

しかし、デスライダーは一步も動かない。

それどころか、見えない壁に阻まれてしまう。

「（バリアか・・・なら、どこかに穴があるかどうか探してやる）」

「貴様が何を考えているかは知らんがお前に俺は倒せん・・・」

ストロンガーは右腕を空にかざすとそこから電気を放出し、雷雲を呼び寄せた。

「エレクトロサンダー！！」

雷がデスライダーに襲いかかるがそれでもデスライダーには到達しない。

デスライダーは初めてバリアを解除し、ストロンガーに向けて衝撃波を乱射していく。

ストロンガーは見えないはずの衝撃波をなんとかかわしていくが数発被弾していた。

「どうやら、貴様の力はこの程度のような・・・そろそろ・・・」

デスライダーはストロンガーにとどめを刺そうと近づいていく。しかし、その行く手を一枚のランプのカードが遮った。

「誰だ・・・」

「俺だよ、ストロンガー。シャドウだ」

「シャドウ？　どうして、貴様が蘇ったんだ・・・」

シャドウとはストロンガーがかつて戦ったデルザー軍団の一人であるジェネラルシャドウのことである。

シャドウは腰の辺りに収めてあるシャドウ剣を抜き、デスライダーに向けた。

「何のマネだ、シャドウとやら・・・俺の目的は仮面ライダーに死を与えること・・・」

「まあ、待て。ストロンガーは俺が殺す。お前は仮面ライダーの死が見たいのだろう？　なら、ここは退いてもらえないか？？」

シャドウは不敵な笑みを浮かべて、デスライダーに告げる。
デスライダーはしばらく考えた後、その場を去った。

「命拾いしたな、ストロンガー。俺がお前を殺すまで死ぬなよ。
ランプフェイド」

シャドウは手にしたトランプのカードを上 to 投げると姿を消した。ストロンガーは少し考えてからカブトローにまたがり、走らせた。

コブラサイクロプスの殺人拳がイヴに襲いかかるうとしている。しかし、その拳を防いだ者がいた。

「貴様は何者だ？」

「仮面ライダースーパー１！！」

コブラサイクロプスの攻撃を防いだのは仮面ライダースーパー１だった。

コブラサイクロプスは素早く仮面ライダースーパー１との距離を取る。

「ほう・・・なかなかできるな・・・」

「お前こそな。しかし、零次は助けさせてもらっぞ」

スーパー１はイヴとコブラサイクロプスの間に立つように間合いを取る。

そこへストロンガーが到着するとコブラサイクロプスはコブラの姿になり、その場から離脱した。

零次達はガイアセイバーズの基地に戻り、早速コブラサイクロプスの能力に対する作戦会議を開いていた。

「奴の能力はおそらくは重力制御・・・そして、それを生かした拳法を使っている」

「なら、その重力制御をなんとかしなければならぬわけか？」

天道の問いかけに沖一也は頷いていく。

「なら、話は簡単だな。俺達が沢井零次を、仮面ライダーイヴを鍛え上げればいい」

「確かにそうだな。これは零次を鍛えるいいチャンスかもしれないからな」

天道の言葉に丈瑠も賛成の意思を示していく。

丈瑠は最近、零次をもっと徹底的に鍛える必要があるのではないかと考えていた。

今回、零次が、仮面ライダーイヴがコブラサイクロプスに負けそうになったことを受けて、丈瑠は自分の考えが間違いでなかったことを悟ったのだ。

「なら、さつさとやろうぜ・・・ 時間がないんだ・・・」

「焦るな、零次。今、無理をしても意味はない。訓練は明日から始める」

零次は丈瑠の言葉に焦ったような表情をしていく。

しかし、自分の身体の状態は分かっているようで医務室で休むことにした。

「コブラサイクロプス、何故イヴを逃がしたのですか・・・」

「大首領からの命令とはいえ、あんな雑魚に執着する理由が分からんな」

コブラサイクロプスの言葉にダークホライズンの祭壇にあるダーククライムのレリーフから大首領の声が響いた。

『コブラサイクロプス・・・ あれは我の大事な器だ・・・ それ

にあまり自惚れていると足下を掬われるぞ……」

「分かりました…… 早急にイヴを捕らえに向かおうと思います」

コブラサイクロプスはそう言うのとダークホライズンを後にした。

数日が経ち、零次の身体は完全に回復していた。

「さて、零次。今日は1日ぶつ通して戦闘訓練だ。内容はダーククライムによって囲まれた状況での戦闘だ」

「ああ。それくらいやらなきゃ間に合わねえからな」

零次が身構えると丈瑠達も構えていく。

そして、しばらくしてから天道が零次に回し蹴りを放ったことで訓練が始まった。

「どんどん行くで、零次くん!!」

「ああ、来い!!」

零次は洋子とラン、スバルの攻撃を捌き、反撃していく。

しかし、他のメンバーからの攻撃が零次に襲いかかる。

『WAC』本社では、古賀修造が自身の身体を修理していた。

修造はライダーを殺すという目的のために自身の身体を改造しているのだ。

しかも、最近ではダーククライムから与えられたサイクロプスの細胞も含んでいるため、自身の身体に不備が起きやすくなっている。

「何の用だ、トライバル・エンド？」

「あなたにお願いがあつて来たんですよ……」

修造は突然現れたトライバル・エンドに対して言った。

それに対して、トライバル・エンドは答えていく。

「あなた方に頼んだサイクロプスの生産具合を聞きに来たのですよ・
・・」

「心配するな。 予定通りに進んでいる」

トライバル・エンドは修造の言葉を聞くと『W A C』本社を後にした。

アイキャッチ A（イヴ、絶体絶命）

アイキャッチ B（零次、特訓中）

零次の訓練は順調に進んでいた。

しかし、街中に大量の蛇が現れたという報告を受けたガイアセイバーズの一同は現場へ急行した。

コブラサイクロプスは街中を蛇を撒き散らしながら闊歩していた。

「待て、コブラサイクロプス!!」

「懲りずにまたやられにきたのか、イヴ」

コブラサイクロプスの前にすでに変身していたイヴが立ちふさがった。

「俺のかわいい分身達はどうするつもりだ?」

「あの薄気味悪い蛇ならガイアセイバーズみんなが清掃してくれてるぜ」

コブラサイクロプスの問いかけにイヴは軽口で返事をしていく。しかし、イヴの発言に怒りを感じたコブラサイクロプスは素早くイヴとの距離を詰めると左右の拳を振るっていく。

イヴはコブラサイクロプスの繰り出すパンチをかわしていく。そして、バク転でコブラサイクロプスと距離を取っていく。

「ちょこまかと・・・」

コブラサイクロプスはそう言って、例の重力場を発生させた。

「（それを待つてたぜ・・・） うらぁー!!」

イヴは近くに落ちていた小石を拾い、コブラサイクロプスに向けて投げた。

しかし、その小石はすぐに落ちてしまう。

「馬鹿か、貴様。俺の能力を忘れたのか？」

「てめえの猿の一つ覚えみてえな技なんざいちいち覚えてられつかなー!!」

イヴはコブラサイクロプスの言葉に軽口を返しながら近くにある物を拾い、投げていく。

まるで、何かを確かめるように・・・

「貴様こそ猿の一つ覚えではないか。そんなことで俺の能力を破れるとも思ってたか？」

イヴはコブラサイクロプスの言葉を見殺しして、ひたすら物を投げていく。

しかし、イヴにはある確信があつた。

「（そうか・・・ あいつの重力場は半径2メートルでしか通用しないんだ・・・ なら・・・） イヴフラッシュ！！」

イヴはストーン・イヴから強烈な光を放ち、コブラサイクロプスの目を眩ませた。

コブラサイクロプスは眩しさから重力場のコントロールに意識を集中した。

「トオッ！！」

イヴは掛け声を出すと素早く空中へ跳んだ。

コブラサイクロプスはイヴの姿を捉えきれていない。

そして、コブラサイクロプスがイヴを捉えた時にはすでに遅く、コブラサイクロプスの真上にイヴはいた。

「行け、コブラサイクロプス！！」

イヴはそう言うと、コブラサイクロプスの重力場を利用して急降下した。

「ライダー急降下キック！！」

そう、イヴはコブラサイクロプスの重力場の力を利用して、自身のキック力と重力を利用したのだ。

イヴの急降下キックによってコブラサイクロプスの身体は真つ二つになった。

しかし、コブラサイクロプスの周りに魔導陣が現れ、コブラサイクロプスは姿を消した。

「逃がしたか・・・ けど、やったんだ・・・」

「ああ、よくやったな。 だが、ダーククライムが奴を生かしてお
く理由が分からんな」

天道の言葉の通り、トライバル・エンドがコブラサイクロプスを生
かしておく理由がない。

きつと、何かあるはずだと推察したのだ。

ダークホライズンでは回収したコブラサイクロプスの再改造が行わ
れていた。

「コブラサイクロプス、あなたにはまだやってもらわなければなら
ないことがありますからね・・・」

トライバル・エンドはそう言うത്と手術室を後にした。そして、祭壇
に向かったトライバル・エンドはあの世からある一団を呼び寄せて
いた。

「デルザー軍団の猛者達よ・・・ 蘇り、我らに使えなさい・・・」

トライバル・エンドの呪文にデルザー軍団の改造魔人達の肉体がダ
ークホライズンの祭壇に集まった。

しかし、まだ肉体だけなので彼らが動くことはない。

『トライバル・エンド・・・ 俺の肉体はまだ見つからないのか？』

「もう少し待ってもらえませんか、シャドームーン・・・ 我々の
使いがあなたの肉体を探しているところです・・・」

『そうか・・・ なら、待とうではないか』

そう言うと、シャドームーンの精神は黙った。
トライバル・エンドはなにやら準備を始めていた。

一体、何が始まるうとしているのか？
ダーククライムの企みとは？？

t o b e c o n t i n u e d

次回

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Episod
e - 1 2 逆襲 改造コブラサイクロプス！！

イヴの急降下キックで倒されたコブラサイクロプスはハイドの手に
よって再改造が施された。

そして、トライバル・エンドもシャドームーン蘇生のために動き始
めていた。

さらに、アダムもイヴを探していた。

ダーククライムの複雑な動きにイヴは、ガイアセイバーズはどう立
ち向かうのか？

『次回

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Episod
e - 1 2 逆襲 改造コブラサイクロプス！！』

ぶっちぎるぜえ！！

E p i s o d e - 1 2 逆襲 改造コブラサイクロプス！！（前書き）

コブラサイクロプス編、完結 ♪ ♪

それでは、お楽しみください ♪ ♪

Episode - 12 逆襲 改造コブラサイクロプス!!

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Episode - 12 逆襲 改造コブラサイクロプス!!

イヴに敗北し、再改造が施されたコブラサイクロプスはその力をテストしていた。

「砲撃、開始!!」

バズーカ砲を持った戦闘員が改造コブラサイクロプスに向けて砲撃していく。

しかし、爆煙の中、改造コブラサイクロプスは無傷で立っていた。

「最終テストは終了です・・・ 改造コブラサイクロプス、あなたにはしばらく最終調整に入ってもらいますよ・・・」

「構わん。 イヴを抹殺できるなら何だってやるだけだ」

そう言うと、改造コブラサイクロプスは調整ポットの中に入っていく。

零次はいつもより早くガイアセイバーズの基地に来ていた。

零次達の通う東山学園が今日創立記念日であるためである。

「零次、今日は早いんだねえー」

「まあな。 今日は創立記念日だったんだよ」

「創立記念日? 何それ??」

スバルは異世界であるミッドチルダで生まれ、育っているため、地

球の文化に疎いのである。

「そっか。 スバルは地球人の血を引いても地球で育ったわけじゃないえもんな。 創立記念日っていうのは学校が建てられた日のこととでその日は学校が休みになるんだ」

「なるほど。 じゃあ、あたしと練習しようよ！」

「いいぜ。 あとで、梨杏も来るしな。 俺とは軽く流す感じでやんぞ」

スバルは零次の言葉に嬉しそうに頷くと、すぐに更衣室へ向かっていった。

零次はスバルの行動力に驚くばかりだった。

トレーニングルームへ向かった零次とスバルはそこで一也と茂がトレーニングをしていた。

一也と茂は零次達が来たのを見て、トレーニングを中断した。

「おうっ、零次。 今日はえらく早いご出勤だな」

「茂さん、そう言うとなんかあれですよ・・・ そんなことより二人とも早いですね。 珍しいなあ」

零次の言葉に一也は笑いながら答えた。

「実は茂先輩に頼まれたんだ。 少し組み手に付き合ってくれっさ」

「そうなんですか？ 意外ですね。 茂さんってそういうイメージないのに」

茂は零次に近づくと両手を零次の側頭部に置いた。
そして、そのまま締め上げていく。

「誰が怠け者だつて、いつからそんなこと言えるようになったんだ、ええ」

「冗談ですよ、茂さん。それよりも、マジでどうということなんですか？」

茂は零次の質問の意味を図りかねているようだ。

零次は茂の疑問に自分の質問の捕捉をしていく。

「いや、茂さんってあんまり特訓するイメージがなくて・・・」
「馬鹿たれ・・・そういうことは俺より強くなってから言えっての」

茂はそう言つと、トレーニングルームを後にした。

零次は茂を見送るとスバルとトレーニングを開始した。

スバルと零次はまず軽くお互いの打撃のコンビネーションを確認していく。

いくら、トレーニングとはいえ、二人とも本気でパンチやキックを放つていくため、気は抜けない。

「ほんとに強くなったね、零次。凄いよ!!」

「そうか・・・俺としてはまだまだだけだな!!」

そう言いながら、二人は打撃を相手に叩き込もうとしていく。

しかし、二人とも巧みにかわしていく。

「そろそろ終わりにするか？」

「そうだね。少し休憩しよっか」

スバルと零次はトレーニングを中断し、休憩を取ることにした。

零次がガイアセイバーズ基地の周りを歩いていると一枚のトランプが飛んできた。

「誰だ!？」

「俺の名前はジェネラルシャドウ。お前の顔を拝みに来たわけだ」

零次はジェネラルシャドウとの距離を測りながら慎重に動いていく。

「ほう・・・それなりにはできるようだな・・・だが、俺の用はもう済んだ・・・では、さらば」

そう言うと、ジェネラルシャドウは姿を消した。

ダークホライズンではまた一人、改造魔人が蘇った。

「ステイル! ここはどこだ?」

「地獄の一丁目だ、鋼鉄参謀・・・」

蘇ったのは鋼鉄参謀だ。

シャドウの言葉に辺りを見回す。

「地獄からの生還、おめでとうございます・・・鋼鉄参謀・・・」

「お前は何だ!? 偉そうにしゃがって!!」

鋼鉄参謀はトライバル・エンド目掛けて手にした鉄球を叩きつけようとした。

しかし、トライバル・エンドの張ったバリアに鉄球は弾かれてしまった。

「短気は損気ですよ、鋼鉄参謀・・・わたしはあなた方の力を借りたいのですよ・・・」

トライバル・エンドの視線を追って、ある一点を見た鋼鉄参謀は驚いてしまった。

何故なら、そこには改造魔人達の身体が安置されていたからだ。

「どういうことだ、これは!？」

「あなた方、デルザー軍団は仮面ライダーストロンガーによって全滅させられたのですよ・・・」

トライバル・エンドの言葉に鋼鉄参謀は悔しそうに鉄球を地面に叩きつけた。

「だからこそ、ストロンガーに復讐するのです・・・」

「だったら・・・」

鋼鉄参謀が早速出ていこうとしたのをトライバル・エンドが止めた。

「今は待ちなさい・・・あなたの身体と魂がまだ適合していない・・・そんな状態ではまともな動きなどできませんよ・・・」
「なるほどな。なら、その時まで身体を休めておくことにしよう」

そう言うと、鋼鉄参謀は祭壇を後にした。

1日のトレーニングが終わり、零次は自宅への帰路に着いていた。
そこへ、エネルギー弾が発射された。

「てめえはアダム!!」

「イヴ、貴様を殺す・・・」

アダムは両腕を剣に変えて、零次に斬りかかった。
零次はなんとかかわしていく。

そして、素早く後方へジャンプすると零次は意識を集中させていく。
零次の影が銀色になり、イヴの姿が映し出される。

「変身!!」

一瞬の閃光の後、零次は仮面ライダーイヴに変身した。

イヴはファイティングポーズを取るとアダムを見据えていく。

アダムはなおも両腕の剣でイヴを切り裂こうとするがイヴはそれをかわしていく。

近頃の激戦で、イヴ、いや、零次にも足りなかった経験値が足されてきたのだ。

「はんっ!? てめえの力つてのはその程度かよ!!?」

「言わせておけば・・・死ぬ、イヴ!!」

アダムは両腕をマシンガンに変えると弾丸をイヴに向けて乱射した。
しかし、イヴは被弾する中、ある程度の弾丸をかわしていく。

「どうしたんだ? 腕が鈍ったのか??」

「黙れ!! (どうしたというのだ・・・何故、これ程までに感情的になっている・・・私には感情というものはないはずだ・・・)」

アダム自身、自分の異変について理解できていないのだ。

イヴはアダムの動きが止まったのを見て、左右のストレートを叩き込んでいく。

アダムはその衝撃に後ろに数歩後退していた。

「くっ・・・ イヴ、覚えておけ・・・ 次は必ず殺す・・・」

そう言うと、アダムは空へ飛び上がり、逃げた。

イヴはアダムを追うことはせずに変身を解除した。

「何だっただよ、一体？」

零次はそう呟いてからマツハアクセルに股がり、発進させた。

トライバル・エンドはダーククライムの祭壇にてアダムに起こった異変について瞑想していた。

『トライバル・エンドよ・・・ アダムに起こった異変については分かっておるうな・・・』

「分かっております・・・ あれの中にある彼女の記憶が目覚めたに違いありません・・・」

トライバル・エンドの言葉にダーククライム大首領はさらに言葉を続けた。

『トライバル・エンド・・・ 今は静観するのだ・・・ 時が来れば我が指示を出す・・・』

「はっ・・・ 了解しました・・・」

トライバル・エンドはそう言うと、祭壇を後にした。

零次はアダムを探して、マツハアクセルを走らせていた。

零次にはアダムの様子が気になっていたのだ。

「（あの時、アダムは別のことに意識があつたように見えた。も

しかしたら、何かあったのかもしれないな」

零次は自分自身のことを知るためには他に知らなければならぬと
考え始めていた。

零次がそんなことを考えていると突然オートバイに乗ったダークク
ライム戦闘員が数人現れた。

「おっと、お出ましか。 行くぜ!!」

「「ギイツ!!」」

ダーククライム戦闘員はオートバイを走らせると零次に突っ込もう
とする。

零次はマッハアクセルの方向を変えるとダーククライム戦闘員達目
掛けて突っ込んでいく。

「変身!!」

零次は1日に二度目の変身を行った。

イヴへの変身はエネルギーを大量に消費するため、連発することは
危険なのである。

しかし、ダーククライム戦闘員を一人また一人と蹴散らしていく。

「まだ、やるか!？」

「ギイツ!!」

一人残ったダーククライム戦闘員はまだ突っ込んでくる。

イヴはその突撃をかわして、マッハアクセルをダーククライム戦闘
員の乗るオートバイにぶつけていく。

「さてと、ひとまずお片付け完了だな・・・」

イヴは変身を解き、零次の姿に戻るとマッハアクセルをまた走らせていった。

「零次、ダーククライム戦闘員に襲われたのは本当だな？」

『ああ、そうです。 あいつら、俺をつけてやがったみたいで・・・』

零次の言葉に天道は少し考えた後、零次に指示を出した。

「零次、きつとすぐにコブラサイクロプスがお前の下に来るだろう。 お前はそいつを迎え撃て。 いいな？」

『了解！！』

天道は零次がそう言った後、通信を切った。

別世界では門矢士がある男と対峙していた。

「お前は誰だ？」

「僕の名前はゼルセン・アーデント・・・ 仮面ライダーイヴのアナザーだよ・・・」

ゼルセンの言葉に士はディケイドライバーを腰に装着した。

そして、左腰に装備してあるライドブッカーから一枚のカードを取り出した。

「問答無用というわけかい？」

「まあな。 高町なのは式『お話』って奴だ。 変身！！」

『KAMENRIDE DECADE』

士はディケイドライダーにそのカードを装填して、仮面ライダーディケイドに変身した。

ゼルセン・アーデントは意識を集中する。

すると、彼の影が銀色と黒色が混じりあったようなものになった。

そして、黒と白銀に身を纏う、仮面ライダーイヴ・アナザーに変身した。

「さあ、始めようか？」

イヴ・アナザーはそう言うと、また別の世界へ飛んだ。

ディケイドはそのことに驚きが隠せないようだ。

「どういうことだ！？ 何で、あいつが俺や海東と同じことができるんだ！！？」

ディケイドは疑問を一度思考の外へ追いやると自分もイヴ・アナザーが飛んだ世界へ向かった。

「さて、君にはやってもらいたいことがあるんだ」

「どういふつもりだ？ 俺はお前を信用してるわけじゃねえぞ」

ディケイドの言葉にイヴ・アナザーは少し歩きながら話を続けていく。

「この時間に大いなる災いが降りかかろうとしている。 君にはガイアセイバーズより先にこの時間で行動してもらいたいんだ」

「いいだろう。 俺がやってやるっじゃねえか」

ディケイドはそう言うと、変身を解除して、その場を後にした。
イヴ・アナザーはその時間から消えた。

ここ最近、またしても蛇が大量に現れるという事件が発生していた。しかも、その蛇は赤色だった。

零次達、ガイアセイバーズはその事件をすでに追っていた。

「しっかし、今度も蛇の放し飼いかよ・・・」

「おそらく、コブラサイクロプスだろうな。だが、奴らの意図が分からん」

隼人の言葉に猛は自分の意見を交えながら答えていた。

「だが、簡単にはしっぽを出さないだろうな」

「いや、一つ方法がありますよ」

志郎の言葉に零次はある考えを提示した。

アイキャッチA（対峙するゼルセン・アーデントと門矢士）

アイキャッチB（訓練着姿のスバル）

零次は自分の考えを志郎達に伝えていく。

「奴はきっと俺を狙ってきます。だから、そこを捕まえようってわけだ」

「なるほどな。確かに効率的な方法だな」

零次の言葉に茂が答えていく。

そして、改造コブラサイクロプスを捕まえるための作戦が開始された。

改造コブラサイクロプスは次々に街中に蛇をばらまいていく。
しかし、その蛇をガイアセイバーズのメンバーがどんどん回収して
いく。

「どういうことだ？ 俺の蛇がいなくなっている」
「俺が捕ってやったんだ、コブラサイクロプス！―」

零次の言葉に改造コブラサイクロプスが零次を見る。
しかし、零次は仮面ライダーⅤに変身しようとせず、生身で戦っ
ていく。

零次の目には何か考えがあるようだ。

零次が改造コブラサイクロプスと戦っている間にガイアセイバーズ
のメンバーが街中に残っている赤蛇を回収していたのだ。

「しかし、零次はあいつと生身で戦うって言ってたけど大丈夫なの
かよ？」

「さあな。だが、今俺達ができるべきことはコブラサイクロプスが
ばらまいた赤蛇の回収だけだ。 急ぐぞ」

「ああ」「おうつ」「はいっ」

加賀美の呟きに答えてから天道は指示を出していく。

そして、返事を返したガイアセイバーズメンバーは赤蛇の回収を急
いでいく。

零次は改造コブラサイクロプスの攻撃をひたすらかわしていく。
しかし、改造されたことでスピードやパワーが増している改造コブ
ラサイクロプスの攻撃は零次にとって激しいものとなっている。

「はあ・・・ はあ・・・ （变身さえできりやあこんな野郎に負けねえってのに・・・）」

「どうしたあ！？ 俺を倒したお前の力はそんなものか！！？」

改造コブラサイクロプスは次々と攻撃を繰り出し、零次を攻め立てていく。

しかし、変身できないもどかしさを抱えながら必死に改造コブラサイクロプスの攻撃をかわしていく。

「零次！ 赤蛇は全部回収したぜ！！」

走輔の言葉に零次は頷き、意識を集中し、変身していく。

「お前！！」

「俺は仮面ライダーイヴ！！ さあーて！ さっきまでの借り、返させてもらっぜ！！」

イヴは胸の前で右手を左手に叩きつけて気合いを入れる。

そして、改造コブラサイクロプスとの距離を詰めると左右のパンチを連打していく。

改造コブラサイクロプスがそれを捌こうとするがイヴのスピードは改造コブラサイクロプスのそれを上回っている。

「馬鹿な！？ 何故だ！！？」

「てめえはただ改造すりゃあいいつて考えたみてえだが・・・ そんなことでマジで強くなれるわけねえだろ！！」

イヴの言葉に改造コブラサイクロプスは怒り狂ったように攻撃を繰り出していく。

しかし、イヴは致命傷になりそうな攻撃は捌き、それ以外は身体で

受け止めていく。

「くそう!!」

改造コブラサイクロプスは吐き捨てるように言うとその場から逃走した。

「マツハアクセル!!」

イヴは改造コブラサイクロプスを追うためにマツハアクセルを呼び寄せた。

イヴの指示にマツハアクセルが自動走行で駆けつけた。

イヴはマツハアクセルにまたがり、急発進させていく。

ダークホライズンの祭壇で改造コブラサイクロプスとイヴの戦いを見ていたトライバル・エンドの下に地獄大使からとある報告が入った。

「どうしました・・・ 地獄大使・・・」

『はっ、トライバル・エンド様。 部下がシャドームーンの肉体を発見したと報告してきました』

トライバル・エンドは地獄大使の報告にほくそ笑んだ。

「では、早速回収してください・・・ お願いしますよ・・・」
『了解しました・・・』

地獄大使はそう言うと、通信を終えた。

トライバル・エンドは祭壇にて自分の剣を呼び寄せようとしていた。

改造コブラサイクロプスを追ったイヴはある荒野に来ていた。
そこには、バズーカ砲を構えたダーククライム戦闘員が改造コブラサイクロプスの盾にならんばかりに並んでいる。

「撃て！！ 撃て撃て！！」

改造コブラサイクロプスの言葉にダーククライム戦闘員はバズーカ砲を発射していく。

しかし、イヴは砲撃と爆煙の嵐の中をマッハアクセルで駆け抜けていく。

そして、マッハアクセルのトップスピードで駆け抜けることでマッハアクセルの必殺技、アクセルブレイクを発動させていく。

「行くぜ、アクセルブレイク！！」

「く・・・ 来るなあ！！」

改造コブラサイクロプスの言葉もむなしくアクセルブレイクで弾き飛ばされてしまった。

イヴはマッハアクセルから降りるとゆっくり構えていく。

改造コブラサイクロプスはゆっくり立ち上がると破れかぶれでイヴに突っ込んでいく。

イヴはその場で跳ぶと改造コブラサイクロプスに向けてライダーキックを放っていく。

「くそぉ・・・」

そう言うと、改造コブラサイクロプスは粉々に砕け散った。

ダークホライズンの祭壇ではシャドームーンの魂と肉体を結びつける儀式が行われていた。

そして、ついにシャドームーンが復活したのである。

「ここはどこだ？」

「ダーククライムの本拠地、ダークホライズンですよ・・・ シャドームーン・・・」

トライバル・エンドの言葉にシャドームーンは右手から電撃を放つがトライバル・エンドは例のバリアで防いでいた。

「わたしは敵ではありませんよ・・・ あなたにはガイアセイバーズ達を抹殺してもらいたいのですよ・・・」

「構わん・・・ だが、仮面ライダーBLACK RXの首は俺がもらう。 いいな？」

シャドームーンの言葉にトライバル・エンドが頷くとシャドームーンは祭壇を後にした。

ついに、甦ったシャドームーン・・・

恐るべき強敵達を前にガイアセイバーズ達はどう戦うのか・・・

t o b e c o n t i n u e d

次回

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Episode - 13 魔女イザベルの挑戦

シャドームーンが復活し、トライバル・エンドは自身の計画を第2段階に引き上げることにした。

それは、ダーククライムの10本の剣、マスタークラウンを呼び寄せた。

そして、マスタークラウンの中から策略家である魔女イザベルが恐るべき計画を立てていた。

狙われたのは、一之瀬由芽だった。

零次達は由芽を守ることができるのか？

次回もぶっちぎるぜえ！！

E p i s o d e - 1 3 魔女イザベルの挑戦（前書き）

ダーククライム幹部がまた登場しますよ ♪ ♪

それでは、お楽しみください ♪ ♪

Episode - 13 魔女イザベルの挑戦

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Episode - 13 魔女イザベルの挑戦

平和な午後の一時、しかし、その影では恐るべき計画が実行されようとしていた。

「さあ、アイビーサイクロプス。計画を実行に移すのよ」
「分かりました、魔女イザベル様」

そう言うと、アイビーサイクロプスは姿を消した。

午前の退屈な授業が終わり、彩、珠音、由芽の三人は仲良く昼ご飯にありついていた。

「そういえばさ、アーヤ」
「ん？ なに？」

珠音の問いかけに彩は少しふやけた感じの声で返事をしていた。

「この前の梨杏の試合、どうだったの？」

「あれ、タマちゃんは格闘技雑誌とか読まないの？」

「読まないわよ、そんなの。それよりも、どうだったの!？」

珠音は彩の言葉にツツコンでいく。

彩はそんな珠音の様子に笑顔を浮かべながら答えていく。

「うん、リーちゃんが勝ったよ！ それも、カウンターでのKOだ

よ！ 凄いでしょ！？」

「確かに凄いとは思うけど、アーヤが自慢することじゃないでしょ」
「でも、梨杏さん、本当に凄いですね。私、尊敬してしまいます」

珠音と彩の会話を聞いていた由芽が会話に混ざってきた。

「ユメちゃんがそんなこと言うなんて珍しいねえ」

「そんなことないですよ。私だって悩んだりしますから」

由芽は彩の言葉に優しく否定していく。

そして、三人はそれぞれの昼食をパクリと食べていった。

しかし、由芽の表情に彩は何か違和感を感じていたのだった。

（少し時間を遡る。）

由芽が学校から帰ると自分宛の手紙が届いていたのでそれを自分の部屋に持ち帰り、早速開けてみることにした。

そこには、『あなたにいずれ不幸が訪れるだろう あなたの未来を憂う者より』と書かれていた。

（現在）

由芽はこの手紙について考えていたのである。

「ユメちゃ・・・ユメちゃん！」

由芽は彩が呼びかけているのにも気付かず、考え込んでいた。
しかし、彩の呼びかけに気付いた由芽は一時考えるのを止めることにした。

「どうしたんですか、彩ちゃん？」

「ねえ、ユメちゃん、何か悩んでるよね……隠さないでね……ボクもタマちゃんもちゃんと聞くから……」

由芽は彩の言葉に自分がどれだけ二人に心配をかけているかに気付いた。

そして、由芽の瞳から涙が溢れた。

「ふえっ！？ ユ……ユメちゃん……」

「あゝあ、アーヤつてば由芽を泣かせちゃ駄目じゃない」

珠音の言葉に彩があたふたしていると由芽も不思議と笑っていた。そして、今自分の身に行っていることを話すことにした。

「変な手紙が来てたって？」

「そうなんです……それで、悩んでて……」

「どうせ、不幸の手紙とかでしょ？ 由芽は気にしすぎなのよ」

由芽の言葉に彩は本当に心配そうな顔をして答えて、珠音はあまり深く考えないように由芽に注意していく。

しかし、由芽はすっきりしていないと言わんばかりの表情をしながら鞆の中からあるものを取り出した。

「黒い薔薇つてまた悪趣味なことするわね」

「でも、綺麗だよ？」

珠音の言葉に彩は自分の感想を素直に言った。

由芽は二人の会話を聞いていると自然と笑顔になっていた。

「やっぱり、ユメちゃんは笑ってる方がいいよ」

「それはあたしもそう思う。　どうしても、心配ならアーヤからガイアセイバースの人達に調べてもらうように依頼したらいいんじゃない？」

「そうですね。　彩ちゃん、珠音ちゃん、二人ともありがとうございます」

由芽が二人にお礼を言くと彩は素直に喜び、珠音は少し照れ隠しをしていた。

放課後になり、由芽達は三人で帰ることになった。

「でも、アーヤは最近いろいろ友達増えたわよね」

「そうだね。　リーちゃんにスバルに零次でしょ・・・　それから・・・」

彩が指を折りながら数えていると由芽の表情がまた微妙なものになっていた。

それに気付いた珠音が由芽に話しかけた。

「どうしたのよ、由芽？　今日、何か変よ」

「そんなことないですよ、珠音ちゃん。　心配してくれてありがとうございます」

由芽の返事に珠音は自分の杞憂が余計なものだったようだと思った。しかし、すでに由芽の身体には異変が起こっていた。

由芽の影に蔭のようなものが絡まっていたのだ。

彩は珠音の助言通り、梨杏に連絡を取っていた。

『それで、由芽ちゃんがいつもと違っっと思うんだね？』

「うん・・・気のせいだといんだけど・・・」

彩の言葉に梨杏も通信越しに同じようなことを思っていた。

『とりあえず、天道さんには報告しておくよ。 由芽ちゃんに何かあったらすぐに教えてね、アーヤ』

「分かったよ、リーちゃん」

彩はそう言つと通信を切った。

それから、気分転換にいつものトレーニングを始めた。

梨杏から報告を受けた天道はその話に事件性を感じたのか、明野宮城東高校にスバルとティアナを派遣することにした。

二人は早速彩と珠音に事情を説明しに行くことにした。

「つまり、由芽は何か事件に巻き込まれてるってわけ？」

「そうなるわね。 でも、あの子の安全のためにも下手に動かないでよね」

「うん、分かったよ。 けど、ユメちゃん、助けられるのかな・・・」

「大丈夫だよ、アーヤ。 あたし達だけじゃなくて零次達も動いてる。 だから、きつと由芽は助けるよ」

彩はスバルの言葉に安心した表情を浮かべていた。

零次はすでに明野宮市へ入り、由芽の異変について調べていた。

きつと、ダーククライムが絡んでいるはずだからという意識の下で・・・

「しかし、ダーククライムの連中がこんな回りくどい手を使って

くるなんて連中も方向転換したってことか・・・？」

零次はそう呟きながらマツハアクセルを走らせていた。
しかし、そこへ砲撃が浴びせられた。

「アダムか！？」

零次は砲撃が飛んできた方向を見るとそこにはアダムがいた。
零次は素早くマツハアクセルから降りると意識を集中していく。
すると、零次の影が銀色になり、イヴの姿を映し出した。

「変身！！」

変身を終えたイヴはアダムとの距離を取り、構えを取っていく。

「仮面ライダーイヴ！！ 行くぜ！！」

「貴様を殺す・・・ 今度こそ・・・」

アダムも構えを取り、イヴとの距離を測っていく。
そして、駆け出すとアダムとイヴは左右のパンチやキックを相手に
対して放っていく。

しかし、お互いに寸前でかわしたりガードしたりしているため、決
定打は入っていない。

「てめえに聞きてえことがある・・・ てめえは何なんだ？」

「私はアダム・・・ 貴様を殺す者だ・・・」

イヴの質問にアダムはいつもと同じ言葉しか言わない。

なので、イヴは考えを改めアダムを叩きのめして聞くことにした。

「だったら、答えは簡単だ。　てめえを叩きのめして聞くまでだぜ」

イヴはそう言うと、再び左右のパンチやキックのコンビネーションをアダムに対して放っていく。

しかし、アダムも同じように左右のパンチやキックのコンビネーションを放ってくる。

イヴとアダムはお互いに相手の隙を突こうとする。

「そこまでだ、二人とも・・・」

イヴとアダムのパンチを受け止めていたのはイヴと同じ姿をしているが黒と銀のラインを持ったライダーだった。

そう、二人の攻撃を止めたのは仮面ライダーイヴ・アナザーだったのだ。

「てめえは何者だ!？」

「僕はゼルセン・アーデント・・・　仮面ライダーイヴ・アナザーさ」

イヴの問いかけにイヴ・アナザーは答えていく。

しかし、アダムがイヴ・アナザーの手を振り払い、攻撃を仕掛けていく。

「まったく・・・　君はどんな時も変わらないんだね・・・」

「貴様、私のことを知っているのか？」

アダムの言葉にイヴ・アナザーは頷いていく。

アダムはイヴ・アナザーとの距離を取ると構えを解いていく。

「貴様の知っていることをすべて話せ・・・　それ次第だ・・・」

「それはできないな・・・ イヴ、いや、沢井零次・・・ 早く、行きたまえ・・・」

イヴはイヴ・アナザーの言葉を聞き、咄嗟にマツハアクセルに飛び乗ると走らせて、その場を後にした。

イヴを視線で追っていたアダムが視線を戻すとイヴ・アナザーはその場からいなくなっていた。

変身を解除した零次は彩達の通う明野宮城東高校に着いた。

早速、調べていると妙な気配を感じた。

しかし、その気配もすぐに消えてしまった。

「（由芽ちゃんに会いに行くのが手っ取り早いけど、下手をすると由芽ちゃんの身が危なくなる・・・ ここはティアナに任せるしかねえな・・・）」

零次はそう考えるとマツハアクセルを走らせ、明野宮城東高校を後にした。

その様子を見ている影が確かにあった。

スバル達が明野宮市に来てから一晩経ち、天道の指示通り、明野宮城東高校に転校していた。

「全員、席につけ！ 今日はずちのクラスに転校生が二人も来たぞ」

担任の言葉でクラスの生徒達は座っていく。

担任はその様子を見ると転校生の二人を呼んだ。

「皆さん、はじめまして。 ティアナ・ランスターです。 よろしくお願いします」

「はじめまして！ スバル・ナカジマです！！ みんな、よろしくね」

ティアナとスバルが挨拶を終えるとクラスの雰囲気が一気に変わった。

それはそうだろう。

二人とも相当な美少女なのだ。

盛り上がらない方が不自然である。

「じゃあ、二人の席は美島と一ノ瀬の後ろだ」

スバルとティアナは担任の言葉に従い、自分の席に座った。

「二人ともうちのクラスなんだ。 すっごい偶然じゃない？」

「そうね。 あたしもそう思うわ。（まさか、天道さんが権力にものを言わせたなんて言えないわよね・・・）」

ティアナと珠音が話しているのを由芽はなんとも言えないような表情で見ている。

放課後になり、スバルとは別行動を取ったティアナは一人校内を探索していた。

「（由芽に起こった異変はきつと学校の中に何かある。 何の前触れもなしに事件が起こることなんてあり得ない・・・ だから、きつと見つけ出してみせる！）」

ティアナは決意を固めると動き出した。

「魔女イザベル様、ここそと動いている者がいるようですがいか

が致しますか？」

「放っておきなさい・・・あの程度の小娘相手に遅れを取る私ではないわ・・・それよりも、例の娘には取り憑けたのかしら？」

アイビーサイクロプスと魔女イザベルの計画は最終段階に入っていた。

「もちろんです、魔女イザベル様。あの娘の深層心理の中に潜む闇を利用した人間どもの洗脳計画、順調に進んでおります」

「なら、急いでちょうだい。ガイアセイバーズも嗅ぎ付けているようだから計画の成功に関わってくるわ」

魔女イザベルの言葉にアイビーサイクロプスは頷くと姿を消した。

ティアナはまず最近自分達以外に転校してきた生徒や転勤してきた教師について調べていた。

そして、三人のうち、候補として一人の人物が上がった。

その人物は保険医の喜多村さやかである。

何故、彼女に目をつけたのかというと保険医なら全校生徒について調べることができるからだ。

「さて、喜多村先生について調べてみようかな？」

ティアナがそう呟いた時、蔦のようなものがティアナの首目掛けて飛んできた。

ティアナはそれを避けると素早くバリアジャケットを装着していく。そして、クロスミラージュを構えるがそこには何もなかった。

「あたしの気のせい？ そんなはずないんだけど・・・」

ティアナはバリアジャケットを解除すると元の制服姿に戻った。
そして、保健室に向かうことにした。

アイキャッチA（明野宮城東高校の制服姿のティアナ、クロスミラー
ジユを構える）

アイキャッチB（明野宮城東高校の制服姿のスバル、リボルバーナ
ツクルを右腕に装備）

ティアナが保健室に入ってきたのを理解したさやかは作り笑顔を作り、
対応した。

「あら、ランスターさん。 どうしたのかしら？」

「いえ、少し悩みを聞いてもらいたくて・・・」

ティアナはわざとらしく弱気なふりをしている。

ここでボロを出すわけにはいかないのだ。

「何かしら？ 私でよければ聞かせてちょうだい」

「は・・・はい。 実は、私の友達が最近元気がなくて・・・でも、
私、どうすればいいのか分からなくて・・・」

ティアナの言葉にさやかは少し考えたふりをしてから答えていく。

「それなら、その子とじっくり話してみたらどうかしら？ そうすれば、
その子の悩みもなくなるかもしれないわよ・・・」

「ありがとっ・・・ございます」

ティアナはそう言うと保健室を後にした。

零次は由芽達と合流し、由芽の様子を見ることにした。

「（けど、いつもと変わらず、大人しそうな娘だよな・・・）」

零次はそんなことを考えながら彩や由芽達と話していく。

ティアナがゆっくり歩いていると周りを少女達が囲んだ。

「あなた達は何なんですか？」

「・・・・・・・・」

少女達はティアナの言葉には答えない。

ティアナは自分の考えが甘かったことを理解した。

そして、猫をかぶることを止めた。

「あー、もう！！ めんどくさ！！ あんた達、何者！？」

「私達は魔女イザベル様が僕・・・」

少女達の言葉にティアナは自分の考えをまとめた。

とりあえず、少女達を救うことが先決だ。

「クロスミラージュ、セットアップ！」

『セットアップ』

ティアナは素早くバリアジャケットを装着していく。そして、拳銃型になったクロスミラージュを手にしてから素早くスタンバレットで一人の女生徒を狙い撃った。

もちろん、非殺傷設定なので命の危険はない。

しかし、その女生徒はまったく効き目がないと言わんばかりの様子で動いている。

「（打撃特性と高電圧での神経刺激の効果があるスタンバレットを喰らって平然と動いてる辺り、痛覚を麻痺させられてるの？）」

ティアナがそんなことを考えているとスバルが静かに歩いてきた。

「スバル！？ どうした・・・」

ティアナはスバルの下に駆け寄るがスバルはティアナの腹に右のシヨートアッパーを叩き込んだ。

ティアナはスバルの放った一撃に意識が薄れてしまった。

途切れゆく意識の中でスバルの目を見たティアナは自分の失態に気がついた。

零次は由芽の異変に気づきつつあった。

しかし、決定的な証拠が掴めず、手をこまねいていた。

「どうしたんですか、零次さん・・・」

「なあ、由芽ちゃん。何か悩みがあるなら俺に話してみろよ。すつきりするかもよ」

「そうだね。そうしなよ、ユメちゃん！」

零次と彩の言葉に由芽の表情が変わった。

まるで、二人に対して強い怒りを感じているかのように・・・

「彩ちゃん達に何が分かるんですか！！ 毎日を気楽に過ごしてるのに！！」

「どうしたの、ユメちゃん・・・ 何か変だよ・・・」

彩の言葉がトリガーとなったのか、由芽の目から生氣がなくなった。

「うるさいです・・・放っておいて・・・」

由芽はそう言うと、駆けていった。

「（どうして、私はあんなことを・・・）」

『それはお前が心の中でそう思ってるからさ・・・自分の心に素直になったらいいさ・・・』

由芽は自分が零次達に言ったことを反省していると心の中から不思議な声が聞こえた。

由芽はその声の言葉を否定しようとするができなかった。

『それはそうさ。お前はいつも自分を偽ってたんだからな・・・』

ククク・・・』

「ちが・・・」

そこで、由芽の意識は完全になくなった。

そして、由芽の影から蔦のようなものが伸びた。

零次が由芽の家の近くに来た時、由芽の家から影を這うようにして蔦が伸びてきた。

零次はそれを見て、由芽の家に入ろうとしたがそこへスバルがウィングロードの上を滑走しながら突っ込んできた。

零次はそれを咄嗟に前転でかわした。

「何すんだ、スバル!？」

「死ね・・・沢井零次・・・」

スバルの口からとんでもない言葉が吐き出された。

しかし、零次はオーラルアイを発動させ、スバルを見ていく。
スバルの身体には普通では見えない蔦が複雑に絡みついていた。

「スバル、待つてろよ・・・ へん・・・」

零次が意識を集中させてイヴに変身しようとしたが別の方向からオレンジ色の弾丸が飛んできて、零次の左腕を貫いた。

「があああつ・・・」

零次は痛みから呻いてしまう。

しかし、意識を切り替えると次々と撃ち込まれるティアナの魔力弾をかわしていく。

「何なんだよ・・・ まさか、ティアナ達を操ったのは由芽の異変の元凶か・・・」

「その通りよ・・・ はじめまして、沢井零次・・・ 私の名前は魔女イザベル・・・ ダーククライム大首領を支える10本の柱の一つよ・・・」

突然、現れた魔女イザベルの言葉に零次は魔女イザベルの方を見る。そして、意識を集中しようとするがそこへティアナの魔力弾が飛んでくる。

的確なティアナの射撃をかわすだけで精一杯になってしまっている零次はなんとか変身しようと試みる。

「あはははは！ 変身できるものなら変身してみなさい！！ できないでしょうけどー！！」

「やってやるぜ！ へん・・・身ー！！」

零次はスバルの右ストレートとティアナの魔力弾をかわしてからジャンプすると空中でイヴに変身した。

「何故、変身できたの!？」

「空中にしようが変身はできるってことだ!! 行くぜ、魔女イザベル!!」

イヴはすぐに魔女イザベルに対して右のパンチを放とうとするが魔女イザベルは逃げるように姿を消した。

(今はお前と戦う時ではないわ・・・ いずれ、必ず殺してあげる・・・)

虚空に魔女イザベルの声が響いた。

しかし、相変わらずスバルとティアナの攻撃はイヴに向けて放たれている。

「すまねえ、ティアナ、スバル!!」

イヴはそう言うと、スバルとティアナの腹にコンパクトに放ったパンチを叩き込み、気絶させた。

そして、由芽の部屋へ行こうとしたがすでに由芽は外に出てきていた。

「由芽ちゃん! いつもの君はどうしたんだ!? らしくないぜ!!」

「らしくない? あなたに何が分かるんですか?」

イヴは由芽の言っている言葉が本当の由芽の言葉ではないということとを理解していた。

イヴは静かに構えた。

「イヴ・・・フラッシュ!!」

イヴの掛け声とともにストーン・イヴから強烈な光が放たれ、由芽の身体から植物の怪物、アイビーサイクロプスが弾き出された。

「てめえが由芽ちゃんを操ってたのか!？」

「うるさい、小僧めが!! 死ね!!」

アイビーサイクロプスは右手の蔦を伸ばして、イヴを捕まえようとしていく。

しかし、イヴはその蔦を掴み、ジャイアントスイングの要領で振り回していき、放り投げた。

「終わりだあ!!」

イヴは空中で体勢を整えられないアイビーサイクロプスを追うように走っていく。

そして、勢いよくジャンプするとアイビーサイクロプスにライダーキックを叩き込んでいく。

アイビーサイクロプスはライダーキックの衝撃に耐えられず爆発した。

アイビーサイクロプスによる事件が解決してから2日経ち、零次はまた東京へ戻ることにした。

「あの、沢井さん・・・今回はありがとうございました・・・えっと・・・」

「由芽ちゃんが今回言ってたことはただのうわごとき。だから、

気にすることはない」

由芽は零次の言葉に少し納得できないといった表情をしている。

零次はそんな由芽の表情を見て、由芽のおでこにデコピンしていく。

「ふえっ?」

「いいか、由芽ちゃん。由芽ちゃんには彩や珠音ちゃんがいるんだから何か悩みがあるなら二人に話せばいいんだ」

「いいんでしょうか?」

「ああ、いいんだって。それは別にわがままになんかならないからさ」

零次がそう言うのと由芽は深々とお辞儀をした。

そして、零次はガイアセイバーズの基地へ戻っていった。

ダーククライムの作戦はますます恐ろしいものになってきている。はたして、イヴやガイアセイバーズはダーククライムを打倒することが出来るのだろうか。

t o b e c o n t i n u e d

次回

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Episode - 14 神宮寺まどかVS笹森さつき

梨杏と闘って、負けてしまった笹森さつきだが女子ボクシング協会

は神宮寺まどかの試合がなかなか組まれなことからさつきとまどかの試合を組んだ。

そして、両者が了承したことで二人の試合が決まった。

はたして、二人はどんな試合を繰り広げるのか？

勝利の女神はどちらに微笑むのか？？

乙女達よ、己の想いを拳でぶつけよ

Episode - 14 神宮寺まどかVS笹森さつき（前書き）

皆さん、どうもですよ ♪ ♪

次話はまた後程掲載しますね ♪ ♪

それでは、お楽しみください ♪ ♪

Episode - 14 神宮寺まどかVS笹森さつき

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Episode - 14 神宮寺まどかVS笹森さつき

魔女イザベルによる事件から3日経ち、零次達はまたのどかな日常に戻っていた。

「そつか。そんなことがあったんだね」

「ああ、大変だったぜ。けど、平和が一番だよなあ」

梨杏と零次は学校が終わり、ガイアセイバーズ基地に来ていた。

そして、訓練が休みになった今日、スバル達と休憩室でお茶をすることにした。

「なあ、スバル達は将来どうしたいって思ってるんだ？」

「前にも似たようなこと、話したよね？」

スバルの言葉に零次は頷いていく。

ティアナはそんな零次の様子が何か迷っているように見えた。

「いやさ、俺、何で戦ってんのかななんて思っちゃってさ・・・

あつ、気にしないでくれよ」

「ちゃんと話さないよ。溜め込んでてもしょうがないでしょ？」

零次はティアナの言葉に少しずつ自分の思っていることを話し始めた。

「最近、分からなくなってきたんだ・・・ 何のためにダークク

ライムと戦ってるのか・・・」

「あんたは別に戦闘のプロってわけじゃないんだからしょうがないじゃない」

「でも、スバルやティアナだけじゃなくてエリオやキャロもまだ子供なのに必死で戦ってる・・・ けど、俺はあいつらみたいに戦えてない・・・」

零次の言葉にティアナは頭を抱えてしまった。

こんな時にちゃんとしたことが言えない自分に腹を立ててしまっているのだ。

「じゃあさあ、これから見つけていけばいいんじゃないかな？」

「どういう意味だよ？」

「あたしもね、夢は形になったけどまだまだ全然だもん」

零次はスバルの顔を見ながらスバルの言葉を聞いていく。

「だって、あたしもみんながみんな助けられてるわけじゃない・・・ 守れない人だっているよ・・・ けど、あたしは助けられる命を助きたいんだ・・・ だから、零次もゆっくりでいいんだよ」

「ありがとな、スバル。 なんか湿っぽい話になっちまったな・・・ 何か明るい話題はないのかよ？」

零次はエリオやキャロ、ティアナに梨杏を見ながらそう言っていく。梨杏は零次の視線を受けて、少しわざとらしくくらいに話を切り出した。

「あつ、そうだ！ わたしね、まどかとさつきちゃんから二人の試合のチケットもらったんだ！！」

「二人からチケットもらったって・・・ あんた、あの二人とはラ

イバルみたいなものでしょ？」

ティアナの言葉にスバルも頷くことで同意を示していた。

「うん、まあね。　けど、ライバルだから遠ざけるってずるいと思うんだ・・・」

「ずるいつてどういうことですか？」

梨杏の言葉に疑問を持ったキャラコが梨杏に尋ねた。

梨杏はキャラコの質問に答えることにした。

「ライバルだから遠ざけるっていうのは結局付き合いがあると負けるっていう考えだと思うんだ。　もちろん、そういう考えの人の方が多いだろっし正しい考えだと思うよ。　けど、わたしは仲良くできるなら仲良くしたいしその中で切磋琢磨すればいいって思うんだよ」

「素敵な考えですね。　ちょっと尊敬しちゃいます」

キャラコは梨杏の言葉に素直に尊敬の意を見せている。　梨杏はそんなキャラコの視線に照れたのか、慌ててチケットをティアナ達に渡していく。

「まっ、見に行くくらいは付き合っただげるわよ」

「ありがとっ、ティアナさん」

梨杏達はその後もお茶を飲んだりいろいろと話したりした。

さつきの所属するファイティングスピリッツでは倉橋茜と笹森さつきが試合に向けてのトレーニングをしていた。

「ほら、さつき。君の相手はアウトからインまでこなせるオールラウンダーだよ。さつきの持ち味を活かすためにはたとえ相手が逃げようとしても逃がさない執念が必要になるよ」

「はいっす！ まだまだ行くっすよ！！」

さつきはアウトボクシングを用いてさつきとの距離を巧みにコントロールする茜をしつこく追いかけていく。

しかし、茜は左ジャブで牽制するとさつきとの距離を離していく。

「もっとしつこく来ないと駄目だよ！ 相手にぶつかってくるくらいの勢いでフットワークを使って！！」

茜の指示にさつきはさらにスピードを上げて茜との距離を詰めようとしていく。

しかし、コーナーに追いつめることを考えていないさつきのやり方では茜を捉えることができない。

捉えたと思ったら次の瞬間反対回りに回って回避していく。

「どうすれば相手を追いつめられるかを考えて！！」

茜の言葉にさつきの動きが徐々にスムーズになっていく。

しかし、ここで1ラウンド終了のゴングが鳴った。

さつきは2分間茜を捕まえることができなかったのだ。

「さつきの場合はまだフットワークそのものに慣れてないね。神宮寺まどかは勝ち気な性格をしてるらしいからそこに賭けるしかないね」

「そうっすか・・・さすがは梨杏っちのライバルっすね・・・一筋縄じゃいかないっす・・・」

さつきは茜の言葉に少し考えてからそう答えていた。

さつきにはまどかのことを素直に称賛するだけの余裕があるようだ。

一方、神宮寺ジムではまどかがインファイター対策と男性ボクサーとのスパーリングを行っていた。

このスパーリングは神宮寺ジム会長であり彼女の父親でもある神宮寺耕次の指示ではなく、まどか自身が望んでやっているものである。

「はあ・・・ はあ・・・」

「まどかちゃん、まだ続けるのかい？ もう6ラウンドくらいはやってるよ」

スパーリングを手伝ってくれている男性ボクサー、手塚はまどかの疲労を見抜いたのか、スパーリングの中止を申し出た。

しかし、まどかはファイティングポーズを取ると手塚にまだ続けられるとアピールしていく。

手塚はまどかのファイティングポーズを見て、気を引き締めていく。そして、素早いフットワークでまどかとの距離を詰めるとさらに左右のラッシュを叩き込んでいく。

まどかはあえてかわさずガードしようとするが手塚のパンチ力の前にまどかのガードは破られそうになり、姿勢が少しずつ崩れていく。

「（まどかちゃん・・・ けど、今ここで止めるのは彼女に失礼だし練習にもならない・・・ なら、心を鬼にして彼女を殴るだけだ！ー）」

手塚は迷う自身の心に言い聞かせ、ひたすらまどかの身体にパンチを叩き込んでいく。

まどかは手塚の隙を伺い、自分のパンチを叩き込もうと狙っていくがここで7ラウンド終了のゴングが鳴り、まどかはリングの上にへ

たり込んだ。

そして、他のジム生にヘッドギアとグローブを外してもらった。

さつきとまどかの試合の日が来て、梨杏達は会場に来ていた。

「しかし、まどかの人気は凄いなあ・・・」

「そうだね。でも、まどかはたぶんそんなこと気にしてないんだろうなあ・・・」

零次と梨杏はまどかの人気について話している。

スバル達は二人の話題には付いていけず、周りを見回していた。

「じゃあ、中に入ろっか？」

梨杏の言葉にスバル達はチケットを受付に渡して会場の中に入った。

二人がリングインを済ませ、レフェリーにリング中央に呼ばれていた。

さつきもまどかもお互いに相手の顔を見つめていく。

「あんた、最近、梨杏のカウンターでKOされたわよね」

「そうっすけどそれがどうかしたっすか？」

まどかの挑発にさつきは乗ることなく答えていく。

「あたしはカウンター一発で終わらせるつもりはないから」

「それは好都合っすね。ぼくも梨杏っちともう一回やるためにまどかっちに負けてる暇はないっす」

さつきとまどかがそんなことを言っているとレフェリーの注意が終

わっており、二人を自分のコーナーに戻らせた。

「まあ、合格かな。神宮寺まどかに飲まれてないみたいだし」

「それはもちろんっすよ、茜さん。まどかっちに飲まれてるようじゃ梨杏っちとはやれないっすよ」

さつきは自分のコーナーで準備をしてくれた茜と話していく。しかし、まどかを相手にすることへの緊張感はないようだ。

「とりあえず、神宮寺まどかとの距離をゼロにするくらいで接近していこう」

「はいっす。負けないっすよ」

さつきはそう言つと、精神統一を始めた。

一方、まどかのコーナーでは耕次会長がまどかに指示を与えていた。

「まどか、たぶん笹森はお前がアウトボクシングに徹すると考えて距離を詰めてくるだろう。だから・・・」

「笹森さつきとの距離を逆に詰めて動揺させるってことよね？ インファイトくらいこなせないと梨杏とはやれないわ」

耕次会長の言葉にまどかも返事をしていく。

まどかの様子を耕次会長はそれ以上何も言わずにまどかの身体をほぐしていく。

そして、１ラウンド開始のゴングが鳴るとさつきとまどかは一気にリング中央まで駆けていく。

「（そういつつもりっすか、まどかっち！ なら、話は早いっすよ！ー！）」

「（やっぱり、インファイターね！ 突っ込んでくることは読んでたわ！ さあ、梨杏対策の踏み台にさせてもらうわよ！！）」

さつきとまどかの距離がほぼゼロになると二人は左右のパンチを交錯させる。

そのパンチに二人の顔が歪む。

しかし、相手へパンチを放つことは一切止めない。

「はあ・・・ はあ・・・ やるっすねえ、まどかつち・・・」

「はあ・・・ はあ・・・ あんたもね・・・ けど、まどかつちは止めなさいよ・・・」

まどかとさつきはお互いにパンチを出し続けていたので疲れたのか、距離を取ってから話していく。

しかし、またすぐに相手との距離を詰めると左右のフックやストリートを叩き込んでいく。

「んぶう・・・ かはあ・・・」

「んんっ・・・ ぶふう・・・」

お互いのパンチに口から唾液を吐いていく。

しかし、左右のパンチを相手の顔に叩き込むことは決して止めない。

『神宮寺と笹森の試合は1ラウンドから激しいものとなっています！ 神宮寺はこれまでの試合とは違い、インファイトでの勝負を挑んでいる！！ いったい、何を考えているのでしょうか！？』

実況の声に観客席からの歓声がさらに大きくなっていく。

しかし、ここで1ラウンド終了のゴングが鳴り響いた。

さつきとまどかはレフェリーに放されると自分のコーナーに戻って

いく。

「まどか、1ラウンド目はうまくいったな」

「ううん・・・ うまくなってるよ、パパ」

まどかの言葉に耕次会長は少し疑問に満ちた表情を浮かべていた。

「あの、笹森さつきって子、あたしがインファイトを挑んだ瞬間に咄嗟に対応してきたの」

「つまり、笹森は応用力があるということか？」

耕次会長の言葉にまどかも頷いていく。

その様子を見て耕次会長は次のラウンドの作戦を考えていく。

まどかはその間も息を整えつつ、1ラウンドで消費した体力を回復させようとしている。

「まどか、次のラウンドはアウトで笹森を掻き乱してやるんだ。そうすれば、お前が有利になる」

「分かったわ、パパ・・・ その作戦で行ってみるよ！」

まどかはそう言うと、頭の中で作戦のイメージをまとめていく。

一方、さつきのコーナーでは茜と翔がさつきの身体を拭いたりしながら次のラウンドでの作戦を伝えていく。

「さつきのラウンドはうまくいったけど次のラウンドは練習通り行きなさいよ」

「分かったっす、翔さん。 とりあえず、やってみるっすよ」

翔のアドバイスにさつきは頷いていく。

茜は何も言わずにマウスピースを洗ったりしていく。

「じゃあ、次のラウンドは神宮寺まどかにプレッシャーを与えてやりなさい」

「はいっす、翔さん!!」

さつきは翔の言葉に力強く頷いていく。

その様子に翔は微笑んでいく。

そして、2ラウンド開始のゴングが鳴ったのを聞いて、さつきは一気に駆け出していくがまどかはゆっくりと動いていく。

さつきがまどかとの距離を詰めようとするともどかはその距離を離していく。

「行くっすよ、まどかつち!!」

「来なさいよ、笹森さつき!!」

まどかは左ジャブを数發放ち、さつきを牽制していく。

アイキャッチA（まどかとさつきの試合のポスター）

アイキャッチB（まどかとさつき、ファイティングポーズを取り相手を見つめていく）

さつきはまどかが放つジャブをものともせずにもどかとの距離を詰めていく。

しかし、まどかはフットワークを駆使してそれを回避していく。

「くっつ……さすが、まどかつち……速いっすね……」

「ふん……この程度で速いとか言ってほしくないわね!!」

まどかはさつきの言葉に軽口で返すとさらにスピードを上げてさつきを振り回していく。

しかし、さつきも必死で追いつこうとする。

「しつこいわね！」

まどかは追ってくるさつきの顔を狙って右のジャブを数発放っていくがさつきは叩き込まれるパンチに構うことなく突き進んでいく。まどかはさつきが自分との距離を詰めてくるとすぐに距離を置いていく。

「逃げてばかりじゃぼくには勝てないっすよ!!」

「なら、迎え撃ってあげるわよ!!」

まどかはそう言うつと足を止め、さつきを迎え撃っていく。

さつきの右フックを左腕でガードしたまどかはすぐに左アッパーをさつきの鳩尾に叩き込んでいく。

まどかの左アッパーを喰らい、さつきの口から血反吐を纏ったマウスピースが吐き出され、さつきの身体はリングの上に前のめりに倒れた。

「ダウン！ 神宮寺、ニュートラルコーナーへ!!」

さつきがダウンするとレフェリーはまどかをニュートラルコーナーに向かわせてからさつきへのカウントを始めた。

「1・・・2・・・3・・・」

「んっ・・・はぁ・・・はぁ・・・（まどかつちのアッパー、効いたっすねえ・・・けど、まだやれるっすよ・・・）」

さつきはレフェリーのカウントを聞きながら身体を休めていく。
まどかはニユートラルコーナーにもたれながら息を整えながらさつきから感じたプレッシャーについて考えていた。

「はぁ・・・ はぁ・・・ （あの時、あたしは笹森さつきにやられるって感じてた・・・ だから、あんな不恰好なアッパーしか打てなかったんだ・・・）」

さつきを仕留めるつもりで放った左アッパーだったがさつきの放つプレッシャーにまどかの狙いが僅かに外れていたのだ。

「4・・・ 5・・・ シッ・・・」

さつきはカウント6でももむろに立ち上がった。
相変わらず、苦しそうに息はしているがその瞳は死んでいない。

レフェリーは立ち上がったさつきに試合を続けられるか確認している。

さつきはレフェリーの問いかけに頷くとファイティングポーズを取っていく。

「ファイト！」

レフェリーが試合を再開していくとまどかはさつきにとどめを刺すべく、さつきとの距離を縮めていく。

さつきはこのラウンドを凌ぐつもりはないのか、ガードをしない。
さつきの顔やボディにまどかの左右のパンチがめり込んでいくがさつきのパンチもまどかを捉えていく。

お互いにパンチを打ち合う展開になったところで2ラウンド終了のゴングが鳴り響いた。

「はあ．．． はあ．．． 次のラウンドでKOしてあげるわ．．．」

「はあ．．． はあ．．． それは楽しみつすね．．．」

さつきとまどかはレフェリーに注意されない程度の声でお互いに相手に対して話しかけていた。

それから、二人とも僅かにふらつきながら自分のコーナーに戻っていく。

「さつきのラウンドは仕方ないよ、さつき。 次のラウンドはこの試合の中間地点だよ。 気を引き締めて」

「分かっているっすよ、茜さん。 次のラウンドはまどかつちをダウンさせてくるっすよ」

さつきは茜の言葉に弱気な台詞を返してしまう。それだけまどかの実力を意識してしまっている。

「なら、諦める？」

「そんなわけないっすよ、茜さん。 ぼくは勝つつもりっす」

茜はさつきの言葉に満足したように微笑んだ。

一方、まどかのコーナーではセコンドがまどかの鼻から流れていく鼻血を拭ったり身体中の汗を拭いたりしていく中、耕次会長は次のラウンドの指示を出していく。

「まどか、笹森はしつこそうだな」

「うん、かなりしつこい．．． けど、負ける気はないわ」

まどかの言葉に耕次会長も頷いていく。

「まどか、次のラウンドからはフットワークは捨てるんだ・・・」

「どういうこと、パパ？」

「笹森はお前がいくら逃げてもしつこく追ってくるだろう。そう
なったらお前が疲れるだけだ」

まどかは耕次会長の言葉の意図を掴んでいた。

「つまり、笹森さつきと打ち合って、あの子も疲れさせてやれって
ことね？」

「その通りだ。できるか、まどか？」

「もちろん！！」

まどかはそう言うと呼吸を整えていく。

3ラウンドが開始されたと同時にさつきがまどかとの距離を詰めよ
うと駆け出していく。

まどかはあえてその場から動かさずさつきを迎え撃とうとする。

「来なさいよ、笹森さつき！！」

「行くつすよ、まどかつち！！」

二人の距離がほぼゼロになると二人は相手の顔やボディに左右のス
トレートやフックを次々に放っていく。二人がお互いに相手の身体
にパンチを叩き込んでいくと二人の口からは血混じりの唾液が吐き
出されていく。

しかし、二人ともさらに自身のスピードを上げていこうとする。

「んぶう・・・ かはあ・・・」

「あぶう・・・んあつ・・・」

二人の口からは年頃の女の子が出すことはまずないであろう悲鳴を上げてしまう。

しかし、すぐに表情を引き締めると相手の顔に自分のパンチを叩き込もうとしていく。

「はあ・・・はあ・・・（まずいわね・・・笹森さつきの方が体力はあるはず・・・このまま打ち合ったらあたしがやられる・・・）」

「はあ・・・はあ・・・（さすがにまどかつち・・・わずかつすけどリードされてるっす・・・）」

さつきとまどかはそんなことを考えながらも体力の回復のためにクリンチに持っていく。

「はあ・・・はあ・・・やるじゃない、笹森さつき・・・けど、あんたには負けないわよ・・・」

「はあ・・・はあ・・・それはばくのセリフっすよ、まどかつち・・・」

二人はクリンチをしながらも強気で相手に対して挑発の言葉を忘れない。

やがて、レフェリーが二人を離す。

二人はその瞬間に相手の顔に向けて左右のストレートを放っていく。お互いの顔がますます腫れていく中、まどかの体勢が一瞬崩れてしまった。

「（まさか・・・笹森さつきのパンチが今ごろになって効いてきたっていうの・・・）」

「（何だか知らないけどチャンスっす！！） 行くっすよ、まどか
っち！！」

さつきはそう言いながらまどか目掛けて左ストレートを放っていく。
まどかは慌ててガードするが体勢が崩れた状態ではさつきのパンチ
を止めることはできなかった。

まどかのガードが吹き飛ばされ、まどかは一瞬だがノーガード状態
になってしまった。

しかし、さつきにとってその一瞬で良かったのだ。

「（これで決めるっす！！）」

まどかは心の中でそう叫ぶとまどかの顎へ下から振り上げる豪快な
右アッパーを叩き込んだ。

さつきの右アッパーを喰らい、まどかの口からは様々な液体に纏わ
れたマウスピースが空高く吐き出されていく。

そして、まどかの身体が後ろへ勢いよく倒れていった。

「ダウン！ 笹森、ニュートラルコーナーへ！！」

レフェリーはさつきをニュートラルコーナーに向かわせるとまどか
の様子を確認していく。

まどかは白目を向き、口からは血混じりの唾液を流していた。

レフェリーはまどかが試合を続行できないと判断し、ゴングを鳴ら
すように目配せをした。

そして、試合終了のゴングが高らかに鳴らされた。

「勝者、笹森さつき！」

レフェリーのコールにさつきは勝ち名乗りを上げていく。

まどかは意識を失ったまま、担架で運ばれていった。

試合が終わってから3日経ち、さつきと梨杏はまどかが検査入院している病院の病室に来ていた。

「何やってんのよ。入ったら？」

まどかは入るか入るまいかで悩んでいたさつきを病室に招き入れた。

「あたしはあんたに負けたけど、負けてないって思ってるから・・・」

「それはどういうことっすか？」

さつきはまどかの言葉の意味を理解しきれていないようだ。

「あたしはあんたに完全に負けたわけじゃない・・・だって、次は負けないからね」

「そうっすか。でも、ぼくも負けないっすよ！」

さつきの言葉にまどかは右の拳を突き出していく。

さつきもそれを見て、右の拳を突き出していく。

「梨杏、あんたもよ」

「わたしも？」

梨杏はまどかの言葉に驚くがすぐに右の拳を突き出していく。

「じゃあ、あたし達三人は戦乙女同盟よ！」

「戦乙女同盟？」

まどかが言った言葉に梨杏とさつきは首を傾げてしまう。

「あんた達とあたし、三人の中で誰かが世界を獲るわよ！ もちろん、最有力候補はあたしだけだね」

「それは面白そうっすね。 けど、最有力候補はぼくっす」
「違うよ、わたしだよ！」

三人はお互いの顔を見てからクスクスと笑い始めた。
そして、戦乙女同盟の誓いを立てた。

梨杏は用事があるからとまどかの病室を後にしたがさつきは残っていた。

「あんたは帰らないわけ？」

「ぼくはもう少しまどかつちと話していくっすよ」

さつきの言葉にまどかはそっぽを向きながら頷いた。

さつき達の未来がどうなるかは誰にもまだ分からない。

t o b e c o n t i n u e d

次回

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Episod
e - 15 デュラハンの罠

つかの間の平和を楽しむ零次達。

彩達とショッピングに出かけた零次達に迫り来るダーククライムの影。

そして、零次Ⅱイヴを狙う新たなマスタークラウンが現れ、零次はかつてない危機に襲われる。

零次は助かるのか？

戦わなければ生き残れない！！

Episode - 15 デュラハンの罠（前書き）

皆さん、どうもですよ ♪ ♪

ひらひらです ♪ ♪

今回から数話の間、マスターク라운最初の犠牲者となるデュラハンの登場のお話ですよ ♪ ♪

それでは、お楽しみくださいね ♪ ♪

ひらひらでした ♪ ♪

Episode - 15 デュラハンの罠

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Episode - 15 デュラハンの罠

彩達が4日間のテスト休みを利用して、零次達に会いに来ていた。せつかなので、休日を利用して買い物へ行こうとしていた。

「けど、テスト休みをこっちで過ごしていいわけ？ 友達と遊びに行ったりしないの？」

「ふえ？ 友達と遊びに来てるよ??？」

ティアナの疑問に彩は質問で返した。

その様子を見ていた零次達は笑っている。

「それで、今日はどこに行きたいの？」

「えっとね・・・ 何だっけ、タマちゃん？」

「ウィンドスケールよ、ウィンドスケール」

ウィンドスケール（WINDSCALE）とは風の街、風都を中心に店舗展開しているアパレル関係のショップのことである。

「ウィンドスケール!? わたし、そこ行ってみたかったんだあ・・・」

梨杏は珠音達が行こうとしていた場所を知ると自然とテンションが上がっていた。

多少、おしゃれに興味のある女の子ならウィンドスケール（WINDSCALE）は押さえておくべき場所なのである。

「ねえ、さつきから言ってるウィンドスケールって何よ？」

先程からの話に付いていけなくなっていたティアナは梨杏達にウィンドスケールについて尋ねていた。

ティアナ達はまだ地球に来たばかりなのでファッションについて知らないことが多い。

「ウィンドスケールっていうのは風都っていう街を中心に店舗展開してるシヨップのことよ。結構、素朴なデザインんだけどそこがまたいいのよ」

珠音の説明にスバルは頷き、ティアナは納得したような表情をしていた。

「じゃあ、とりあえず風都に行こっか」

梨杏の言葉に彩達は頷き、すぐに準備を始めた。

「気だるい昼下がりでぜ・・・昨日の死闘が嘘のようだ・・・」

「翔太郎くん、黄昏てる暇があったらミミちゃん探してよ！」

風都、鳴海探偵事務所では相変わらずの日常があった。

「あのなあ、亜樹子。何で、最近、ペット探ししか仕事の依頼がないんだよ!？」

「仕方ないでしょ! 翔太郎くんが言う『ハードボイルド』な事件なんて今の風都じゃ起こらないんだから!！」

亜樹子と翔太郎が言い争っていると寝ていたはずのフィリップが起

きてきていた。

「君達、静かにしたまえ。うるさくて眠れないじゃないか」

「すいません・・・」

フィリップの言葉に二人は謝っていく。

それを聞いたフィリップはまた寝るために自分のベットへ戻った。

「お前なあ・・・ もっと仕事選べって言うてんのが分かんねえかな？」

「仕事選べる立場なわけ？ 翔太郎くんの好みの仕事ばかり選んでたらこっちは死活問題なのよ」

亜樹子は翔太郎に事務所の出納帳を見せた。

「な、何だよ・・・」

「何だよって何よ！ 今月、翔太郎くんが買ったハードボイルド小説、いくらしたと思ってるわけ！？」

翔太郎は亜樹子から問い詰められると視線を逸らした。

そんな翔太郎の様子に亜樹子はこめかみに青筋を浮かばせながら笑った。

「ふーん・・・ じゃあ、今月の翔太郎くんの月給からもらっておくわね」

亜樹子の言葉に今度は翔太郎が詰め寄る。

「亜樹子！ 何で、お前がうちの経費管理してんだよ！？」

「わたしが所長だからでしょ！？」

亜樹子の言葉に翔太郎はばつが悪くなったのか、事務所を後にした。

零次達は電車に乗り、風都まで来ていた。

「ここが風都かぁ・・・ 初めて来たなぁ・・・」

「ほんとだねえ・・・ あれが風都タワーかぁ・・・」

梨杏と零次は間近で見る風都タワーの大きさにため息混じりに感想を言っていた。

スバルやティアナ達は言葉もなくただ風都タワーを見つめるだけだった。

「そんなに風都タワーが珍しいかい、お嬢さん方」

彩達の後ろから一人の男が声をかけた。

全員はその男の方を一齐に向いた。

「そんな顔しないでくれよ。俺は左翔太郎、この街のハードボイルド探偵さ」

「「ハードボイルド??」」

彩とスバルは翔太郎が言った『ハードボイルド』という言葉が理解できなかったのか、首を傾げた。

「ハードボイルドっていうのは・・・」

「ハードボイルドっていうのはどんなことにも揺らがない鉄の意思を持った男性のことですよ」

翔太郎の言葉と重なるように由芽がスバルと彩にハードボイルドに

ついて説明していく。

「なるほど」 ほんとに由芽は物知りなんだね」

「ほんとだよ」 さすがユメちゃん！」

二人が由芽を誉めると由芽は照れくさそうにはにかんだ。

「まっ、そういうことだ。 つまり、俺みたいな奴のことさ」

「冗談でしょ？ 初対面の女の子にナンパするようなのがハードボイルドって言えないわよね」

翔太郎の取り繕った言葉にティアナが鋭くつつこみを入れ、珠音も頷いていた。翔太郎は少しへこんだ顔をしたがすぐに表情を戻した。

「ところで、今日は何でこの街に来たんだ？」

「あたし達、ウインドスケールに行こうと思ってて」

翔太郎は珠音の言葉に表情を変える。

「ウインドスケールになら俺が案内するぜ」

「ウインドスケールの場所、知ってるんですか？」

「もちろんだ。俺の帽子もウインドスケール製だからな」

そう言うと、翔太郎は珠音達に自分の帽子を見せた。そんなことをしていると翔太郎が持っている携帯が鳴った。

「あっ、フィリップか？ どうした？？」

『翔太郎・・・ 今すぐメモリを使ってくれ』

翔太郎に電話をかけてきたのは彼の相棒のフィリップだった。

「何かあったのか？」

『ダーククライムの神官でトライバル・エンドっていう奴に襲われる……』

フィリップの言葉に翔太郎の表情が変わった。

零次は翔太郎の持つ携帯、スタッグフォンから聞こえてきた名前に表情を変えた。

「分かったぜ、フィリップ。じゃあ、フアングジョーカーで行くぜ」

翔太郎はそう言うつとUSBメモリーのようなものを上着の内ポケットから取り出し、それを起動させた。

『JOKER』

翔太郎の持つ、ジョーカーのガイアメモリが地球の声、ガイアウィスパーが鳴り響いた。

翔太郎の腰にはドライバーが装着されていた。

一方、フィリップが何故トライバル・エンドに狙われたのか、話は数分前に戻る。

「亜樹ちゃん、翔太郎はどうしたんだい？」

「翔太郎くんなら出かけたわよ」

少し不機嫌さが残る感じで話す亜樹子にフィリップはくすりと笑った。

「あつ、そうだ。 フィリップくん、風花饅頭買ってきてくれない？」

「ああ、いいよ。 ちょうど、外の空気が吸いたかったところだからね」

フィリップは亜樹子からお金を受け取り、出かけた。

そして、その後でトライバル・エンドに襲撃されたのである。

「あなたがフィリップさんですね・・・」

「君がダーククライム神官、トライバル・エンドだね？」

フィリップの問いかけにトライバル・エンドは仮面越しに笑って答えた。

フィリップは後ろへ後退しながらタイミングを待つ。

「（まだドライバーが装着されていない・・・ 翔太郎、早くしてくれ・・・）」

【（悪かったな、遅くなってよ・・・ 行くぜ、フィリップ！）】

フィリップは自分の身体にダブルドライバーが装着されていることに気づき、後退を止めた。

「君が知っていることを教えてくれないかな？」

「わたしの知っていること・・・ 何ですか、それは・・・」

トライバル・エンドはフィリップの問いかけに惚けながらフィリップとの距離をゆっくり詰めていく。

一方、翔太郎が装着したドライバーにジョーカーメモリを挿入した。すると、そのメモリが転送され、翔太郎の身体が倒れた。

「ちょっと、翔太郎さん!？」

「おい、あんた!！」

突然倒れた翔太郎に零次とスバルが詰め寄り、その身体を揺らしていく。

しかし、意識ごとジョーカーメモリを転送した翔太郎の身体が反応することはない。

「では、あなたを壊して地球の記憶、地球の本棚をいたたくとしましょう……」

トライバル・エンドはそう言うと言いついリップに向けて剣を振るった。しかし、その剣がリップを貫くことはなかった。何故なら、彼を恐竜の姿をした機械が守ったからだ。

「来い、ファンゲ!!」

フィリップの言葉にファンゲと呼ばれたメカ恐竜はフィリップの下へ駆け出し、彼の下へ行った。

フィリップはファンゲを變形させた。

フィリップが持つファンゲとは彼を守るために造られた自動行動型のガイアメモリなのである。

そして、ガイアメモリとしてのファンゲは牙の記憶を有している。

「【変身!!】」

フィリップはファンゲメモリを起動させるとそれをダブルドライバ

ーのソウルサイドに装填した。

そして、ファングメモリを変形させた上でダブルドライバーを展開して変身していく。

すると、フィリップの身体が仮面ライダー^{ダブル}W・ファングジョーカーに変わった。

「【（さあ、お前の罪を数えろ！！）】」

「それがダブルの切り札ですか・・・」

トライバル・エンドの言葉に答えず、ダブル（ファングジョーカー）は勢いよくトライバル・エンドとの距離を詰めていく。

トライバル・エンドは距離を詰めてくるダブル（ファングジョーカー）に剣を振るっていく。

ダブル（ファングジョーカー）はトライバル・エンドの剣を右腕で防ぐと左手でタクティカルホーンを一回弾くと右腕からアームファングが現れた。

【てめえの剣なんか効かねえんだよ！！】

ダブル（ファングジョーカー）の左目が赤く点滅すると翔太郎の声が発せられた。

トライバル・エンドはダブル（翔太郎）の言葉に何も言わずに剣を振るっていく。

しかし、ダブルはその太刀筋を見切り、かわしていく。

「君の剣さばきなど僕らには通用しないさ！」

【お前もここまでだぜ】

仮面ライダーW（翔太郎・フィリップ）の言葉にトライバル・エンドは何も言わずに剣を振るっていく。

しかし、ダブルはトライバル・エンドの剣をかわし、すれ違いざまにアームファングの刃でトライバル・エンドの身体を切り裂いていく。

「（これは・・・）」

【（どうした、フィリップ？）】

二人は共有している意識下で話をしていく。

フィリップはトライバル・エンドの身体に違和感を感じていたのだ。

「（奴の身体、単なる機械かもしれない・・・そうでなければ、あの手ごたえのなさはおかしい・・・）」

【（難しいことはどうでもいいさ。それよりも、選手交代だ、フィリップ）】

翔太郎は自分の身体をスバルが担ぎ、運んでくるのが見えたのでフィリップに自分と代わるように指示した。

フィリップはそれに対して、トライバル・エンドとの距離を十分に取り、ファングジョーカーの変身を解除した。

「お前ら・・・スバルと・・・」

「仮面ライダーイヴ・・・」

「イヴか。っていうか、その声、零次か!？」

イヴ、零次は翔太郎の言葉に頷き、返事をした。

翔太郎はそんな零次、イヴを見て、笑みを浮かべた。

「行くぜ、フィリップ。 2ラウンド開始だ」
「了解だ」

翔太郎とフィリップは自身のメモリを起動させ、構えた。
なお、ドライバーは装着されたままだ。

「変身!!」

『CYCLONE』

『JOKER』

翔太郎の身体を風が包み、仮面ライダーWに変わった。
すると、今度はフィリップが倒れた。

「あ、あの!？」

「ああ。フィリップのことは気にすんな。仕様だ、仕様」

仮面ライダーW（翔太郎）のぶっちゃけた言葉にイヴはくすりと笑
ってしまう。

三人は構えを取るとトライバル・エンドを囲んだ。

「仕方ありませんね・・・ 本気でお相手しましょうか・・・」

トライバル・エンドはそう言うと仮面とマントを取った。

アイキャッチA（彩達、ウインドスケールにてお買い物）

アイキャッチB（銀色のロボット姿のトライバル・エンド）

銀色のロボットののような姿を晒したトライバル・エンドを見たイヴ
達は静かに構えを取っていく。

トライバル・エンドも戦闘体勢を取るとイヴ達に急接近した。

「スバル、翔太郎さん！ 散れ!!」

「分かった！」

「言われなくても分かってるよ!!」

イヴの言葉にスバルとダブルはそれぞれに反応を示した上で後方へ飛び退き、トライバル・エンドの攻撃を回避していく。

【翔太郎。 奴の身体を構成している元素を特定した】

「何って元素だよ？」

翔太郎はフィリップの言葉に対応しながらトライバル・エンドの身体に右の回し蹴りを叩き込んでいく。

しかし、トライバル・エンドの身体には大したダメージを与えることができないようだ。

【翔太郎、ここはヒートに変えよう】

「ああ、そうだな!!」

トライバル・エンドが繰り出した右のパンチをかわしながらダブルはサイクロンのメモリをドライバーから抜き、ヒートのメモリをドライバーに挿入していく。

『HEAT』

『JOKER』

ダブルの姿がサイクロンジョーカーからヒートジョーカーに変わる。ダブルの強みはヒート、サイクロン、ルナのソウルメモリとジョーカー、メタル、トリガーのボディメモリの組み合わせによるハーフチェンジシステムによって様々な能力を発揮できることである。

「うおおおりゃあっ!!」

「せあつ!!」

イヴとスバルが気合いを含んだ声を上げながらトライバル・エンドにコンビネーションパンチを叩き込もうとしていく。

しかし、トライバル・エンドは二人の拳を軽々と受け止めていた。

「えっ、嘘？」

「ちいっ！ スバル、ぼさつとすんな!!」

トライバル・エンドの強さに驚き、動きの止まったスバルを叱咤しながらイヴはトライバル・エンドの左手から自分の左手を引き抜いた。

スバルもすぐに気を取り直すとトライバル・エンドと距離を取っていく。

「さすがですね・・・ 三人相手では辛いですよ・・・」

「だったら、退けよ」

トライバル・エンドの言葉にダブル（翔太郎）は軽口を叩くことで返事をする。

しかし、トライバル・エンドはそんなダブル（翔太郎）の言葉を見して再び三人との距離を詰めていく。

スバルもトライバル・エンドとの距離を詰めていく。

しかし、スバルの目はいつもの青ではなく金色に変わっていた。

これは、スバルの正体でも戦闘機人の能力を発動させた時に現れるものである。

スバル自身、この力を使うことは滅多にないが強力な敵に対しては躊躇うことなく使うことができるのだ。

「スバル・・・」

「零次・・・これがあたしの正体だよ・・・」

スバルは零次に自分の正体を知られ、拒絶されることを恐れていたのである。

しかし、零次はスバルの考えていることは別の感想を持っていた。

「かけー!!」

「ふえ？ 何で・・・??」

スバルは零次の感想に驚いたような声を出していた。

「だってよ、金色の目とかかつこいいじゃねえか。俺なんて黒色だぜ」

零次はイヴとしての自分の目の色を少し気にしていたのだ。

スバルはそんな零次の様子を見て、くすくす笑いながら自分の目を拭った。

「もうっ・・・悩んでたのが馬鹿みたいじゃん・・・」

「悪かったな・・・それより、行くぜ、スバル!!」

「うん!!」

スバルとイヴは再びトライバル・エンドとの距離を縮めるとお互いに息の合った攻撃を仕掛けていく。

トライバル・エンドは二人の攻撃をかわしきれなくなったのか、左右に動き、回避していく。

「野郎お!!」

そこへダブルが右の拳に炎を宿してトライバル・エンドに殴りかか

った。

トライバル・エンドは不意をつかれたその攻撃をかわすことができず、吹き飛ばされてしまった。

【やはり、奴は完全なロボットだったのか】

「どういうことだよ、やはりって?」

フィリップの含みのある言葉に翔太郎がすぐさま反応していく。
スバルとイヴもダブルの方へ向いた。

「どういうことですか、えっと・・・」

「フィリップだ」

「フィリップさん!？」

スバルはフィリップにどうということなのかを聞いていく。
スバルの質問にダブルの右目が点滅したかと思うとフィリップがそれに答えた。

【ファンゲジョーカーでトライバル・エンドと戦っていた時、奴を切り裂いている手応えがなかった。いや、切っても切っても再生してくる感じだったんだ】

「つまり、トライバル・エンドは常に再生してるってことですか？」

スバルの言葉にダブルが頷いていく。

しかし、トライバル・エンドは三人が会話を終えるのを待たずに急接近し、左右の攻撃を三人に叩き込もうとする。

三人はトライバル・エンドの攻撃を捌いたりかわしたりしながら回避している。

【スバル・ナカジマ。

君の能力は確か対象物の内部と外部に振動

を与えて破壊するものだったよね？】

「は、はい・・・」

スバルは自分の能力について話すことを嫌っている傾向があるため、その話をできることならしたくないと考えている。

しかし、今の状況を打破するために自分の能力をフィリップが必要としていることは理解しているため、我慢しながら話していく。

「フィリップ、この話はしない方がいいんじゃないか？」

【スバル・ナカジマの気持ちは僕にも検索できない。彼女に嫌われるのならそれはそれで仕方ないことだからね。けど、僕達みんなが生き残るためには彼女の力がどうしても必要なんだ】

フィリップが自分のことを知り、なおかつ考えてくれた上での選択を取ってくれたことがスバルにはとても嬉しかったのである。

「あたし、何をすればいいんですか？」

【君には振動拳という技を使って奴の外部と内部にダメージを与えてほしい】

フィリップの言葉の意図が掴めないスバルは思わず首を傾げてしまう。

しかし、理解していた零次と翔太郎はスバルに素早く説明していく。

「要するに、スバルの技でトライバル・エンドのコアを剥き出しにしてやるうってことだよ。ですよね、フィリップさん？」

【沢井零次。君は検索した結果以上に物分かりがいいようだ】

ダブル（フィリップ）の言葉にイヴは照れたように頭を掻いた。

「どうしました・・・ 相談は終わりましたか・・・」

「ああ、終わったぜ！」

【沢井零次、スバル・ナカジマ。 任せるよ】

「任せといてくださいよ！！」

「任せてください！！」

スバルとイヴはダブルの言葉にトライバル・エンドとの距離をゼロにしていく。

そして、二人はそれぞれに左右のパンチやキックをトライバル・エンドの身体に叩き込んでいく。

「振動拳！！」

スバルは振動拳を発動させ、トライバル・エンドに左右のパンチを叩き込んでいく。

トライバル・エンドの身体にはスバルのIS、振動破砕による衝撃が駆けめぐり、内部と外部が同時に破壊されていく。

そして、トライバル・エンドのコアが剥き出しになった。

「今です！ 翔太郎さん！！」

「ああ、分かっている！！」

【必ず決めてみせる・・・ 君にただ辛い想いはさせない・・・】

そう言うのと、ダブルはサイクロンとトリガーのメモリをダブルドライバーに装填した。

『CYCLONE』

『TRIGGER』

すると、ダブルの姿が緑と青のサイクロントリガーに変化した。

ダブルは左の胸元についていたトリガーマグナムを取り、構えた。そこへ、蝙蝠の姿をした青いメカが現れた。

『BAT』

ダブルはその蝙蝠、バットショットをトリガーマグナムに装着し、トライバル・エンドに銃口を向けた。

「【トリガー・・・バットシュ・・・】」

二人の声が途中で途切れてしまった。

イヴとスバルはそんなダブルの様子に違和感を感じた。

「てめえら・・・止まれや・・・」

そこに現れたのは龍の姿をした怪物だった。

その怪物は足下に倒れているティアナの頭を踏みつけていた。

「ティアー!!」

スバルはティアナの頭が怪物に踏みつけられているのを見て、思わず駆け寄りそうになる。

しかし、怪物の右手から放たれた岩がスバルの足を止めた。

「俺の名前はデュラハンだ。まず、てめえら、変身を解け」

デュラハンの言葉にスバル達が躊躇っているとデュラハンは足に力を入れた。

すると、踏みつけられているティアナの顔が苦痛に歪んだ。

「分かった・・・ 変身を解くからその足を退ける・・・」

イヴは静かにそう言うと変身を解除した。

それを見たダブルは変身を解き、スバルはバリアジャケットを解除した。

「いい子だ・・・ じゃ、俺について来てもらっぜ」

デュラハンがそう言うと、ダーククライム戦闘員がマシンガンを構えながら翔太郎達を囲んだ。

この状況からいったいどうなるのか？

t o b e c o n t i n u e d

次回

スーパーヒーロー作戦 N E W M I S S I O N E p i s o d
e - 1 6 イヴ暴走！！

卑劣なデュラハンの罠で身動きができなくなった零次達は捕えられてしまう。

そして、零次は硫酸プールの上に吊り下げられ、危機的状況に陥ってしまう。

零次は自身の生命の危機に ついに暴走してしまう。

暴走したイヴを止めることはできるのだろうか？

次回もぶっちぎるぜ

E p i s o d e - 1 6 イヴ暴走!! (前書き)

デュラハン編2話目ですよ ♪ ♪

今回は激しいバトルを展開しますよ ♪ ♪

それでは、お楽しみください ♪ ♪

Episode - 16 イヴ暴走!!

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Episode - 16 イヴ暴走!!

変身を解いた零次と翔太郎、バリアジャケットを解除したスバルはダーククライム戦闘員にマシンガン突きつけられながら歩かされた。

そして、どこかの廃工場に連れて行かれ、零次は水槽のようなものの上にロープで吊るされ、翔太郎達は近くの柱にロープで縛られた。

「なあ、一つ聞いていいか・・・」

「どうしたって言うんだよ、沢井零次」

零次は静かにデュラハンに自分が疑問に思っていたことを尋ねた。

「何で、ティアナの足と腕を傷つける必要があった・・・」

「ああ、それかぁ・・・ この女が俺に抵抗してきやがったからだよ」

デュラハンの言葉に零次は強い怒りを感じたのか、自分が吊り下げられているロープなど関係ないかのように暴れた。

しかし、そんな様子を見たデュラハンが大きな声で笑っていく。

「あはははは!!　そうか、そうか。　てめえはそんなことで怒んのか」

「何がおかしい!!」

「いやいや、失敬失敬。　あの女を痛めつけたのは雑魚のくせにこの俺に傷をつけやがったからだよ」

デュラハンは零次の表情がますます怒りに包まれていくにも関わらず平然とそう言いきった。

” ティア・・・ ティア！ 大丈夫！？ ”

” うっさいわね・・・ あんたの大声のせいで目が冴えちゃったじゃない ”

スバルは少し苦しそうだがいつもの調子でティアナが答えてくれたことが嬉しくなった。

” ねえ、ティア。 アーヤ達はどうしたの？ ”

” 彩達には素早く逃げるように指示したし、あの子達もすぐにそれに対応してくれたわよ・・・ あたしは時間稼ぎをするつもりだったんだけど、この様よ・・・ ”

スバルはこんな時だがティアナの迅速な判断に感心した。

「さてと、俺はイヴ、てめえが死に怯える姿を見学させてもらっぜ」

そう言うと、デュラハンは近くのドラム缶の上に座った。

一方、ティアナの指示で逃げていた梨杏達は偶然にも鳴海探偵事務所の前に着いていた。

しかし、そこでダーククライム戦闘員に囲まれてしまった。

「アーヤ、どうしよう？ 」

「やるしかないよ、リーちゃん！ ユメちゃんとタマちゃんを守れるのはボク達だけだもん！！ 」

梨杏は彩の力強い言葉に闘志を燃やしていく。

しかし、そこへ一振りの剣が飛んできて、一人のダーククライム戦闘員を捉えた。

「何だ、お前ら？」

「貴様こそ何だ!？」

やってきた男、照井竜はダーククライム戦闘員の言葉に怒りの表情になった。

「俺に質問をするな!!」

竜はそう言つと、自分の剣、エンジンブレードが刺さっている戦闘員のところへ行き、戦闘員に刺さったエンジンブレードを強引に抜いた。

「面倒な奴らだ・・・　まとめて片付けてやろう」

竜は自分のドライバー、アクセルドライバーを取り出すと腰に装着した。

そして、アクセルのメモリを取りだし、起動させた。

「変・・・身!!」

『ACCELE』

竜が起動したアクセルメモリをアクセルドライバーに装填し、右側のグリップをひねることで仮面ライダーアクセルに変身した。

「さあ！　振り切るぜ」

アクセルはそう言うと、地面に刺していたエンジンブレードを力強く抜き、構えた。

ダーククライム戦闘員も手にナイフを持ち、アクセルに斬りかかっていく。

しかし、アクセルはダーククライム戦闘員の太刀筋を見切り、かわしてからエンジンブレードを叩きつけるようにしていく。

すると、エンジンブレードの重さでダーククライム戦闘員の身体はあっという間に真っ二つになり、消えた。

「凄い・・・圧倒的な強さだよ・・・」

「うん、そうだね・・・っていうか、あんなに重そうな剣を振り回してるんだもんね・・・」

梨杏と彩はアクセルの圧倒的な強さに感心している。

二人がそんな会話をしている中、アクセルはさらにダーククライム戦闘員を蹴散らしていた。

「くそっ・・・」

『VIOLENCE』

『BIRD』

追い詰められたダーククライム戦闘員は懷からガイアメモリを取り出した。

そして、そのガイアメモリを起動させ、ドーパントに姿を変えた。

「ドーパントか・・・なら・・・」

『ENGINE』

アクセルはエンジンメモリを起動させ、それをエンジンブレードに装填していく。

すると、エンジンブレードの刀身に炎が宿った。
そして、アクセルはエンジンブレードで2体のドーパントに斬りつけていく。

「喰らえっ――！」

バードドーパントは空へ逃げ、羽根手裏剣でアクセルに襲いかかっていく。

しかし、アクセルは落ち着きながら回避していくとエンジンブレードのトリガーを引いた。

『JET』

アクセルはエンジンブレードの機能の一つであるジェットの能力を使い、高速の斬撃による衝撃をバードドーパントの羽根手裏剣に叩きつけた。

さらに、エンジンブレードのトリガーを引き、新たな能力を発動させていく。

『STEAM』

高温の蒸気が発生し、アクセルの姿が見えなくなった。

しかし、アクセルはその蒸気の中を駆け抜けながらまたエンジンブレードのトリガーを引いた。

『ELECTRIC』

すると、エンジンブレードの刀身に電撃が走り、アクセルはエンジンブレードを叩きつけるようにバードドーパントとバイオレンスドーパントを切り裂いていく。

「終わりだ・・・」

『ENGINE MAXIMUM DRIVE』

エンジンブレードの刀身に凄まじいエネルギーがほとばしったかと思つとアクセルは素早く2体のドーパントに接近し、Aの軌跡を描くように斬撃を放った。

「絶望がお前達のゴールだ・・・」

アクセルの言葉とともに2体のドーパントが爆発し、元の戦闘員の姿に戻っていた。

「さて、貴様らが何なのかを吐いてもらおうか」

変身を解除した竜が近づきながらそう言ったと同時に戦闘員が悶え始め、泡のようになり消えてしまった。

しかし、その場には通常とは形の違うガイアメモリの残骸が落ちていた。

「さて、お前達は何の用でこんなところへ来たんだ？」

竜の質問に彩達が答えようとした時、ふらつきながらフィリップがやって来た。

竜はフィリップの姿を見ると慌てて駆け寄った。

しかし、フィリップは安心したのか、意識を失ってしまった。

デュラハンに捕まっている翔太郎達は小声で話していた。

「大丈夫か、ティアナ？」

「足と腕が痛くて辛いわよ……」

「これからどうするんですか、翔太郎さん？」

三人が小声で話しているのを聞いたデュラハンが左手から岩の槍を飛ばした。

それはティアナと翔太郎の間に刺さった。

「なあ、てめえら……まさか、助かるなんて思ってたねえよな？」

「さあ、どうだろうな……というより、何で俺達を生かしてやる……」

翔太郎の問いかけにデュラハンは不気味な笑みを浮かべてから答えた。

「てめえらに沢井零次が死ぬところを見せてから殺してやるためさ」

「つまり、俺達は零次にとっての人質ってことかよ……」

「鋭いな……俺は感心したぜ……けどな、お前らが先に死なないってことはねえんだぜ……まっ、俺の機嫌を損ねえことだな」

デュラハンはそう言うと、その場を後にした。

もちろん、ダーククライム戦闘員がマシンガンやハンドガンを構えながら見張っているため、下手に動けない。

鳴海探偵事務所では意識が戻ったフィリップと竜、彩と梨杏が作戦を練っていた。

「俺が正面から行く。フィリップ達は裏から行け」

「分かった。じゃあ、行こうか」

そう言うと、フィリップは早速準備を始めた。

デュラハンは零次達の様子を見ながら苛ついていた。

「てめえら！ 何で、絶望しねえ！！」

「はん！ あいにく、俺は諦めるのが嫌いなんだよ！！」

デュラハンの言葉に零次が答えると苛立ちをぶつけるように辺りに岩の槍を乱射していく。

「それに俺はまだてめえに殺されたわけでもねえ。なのに、諦めるのなんざごめんだぜ！！」

「そうか・・・ なら、死ねよ・・・」

そう言って、デュラハンが岩の槍を放とうとした瞬間、一人のダイククライム戦闘員が駆け込んできた。

「デュラハン様、大変です！ 仮面ライダーが一人でここに！！」

戦闘員の言葉にデュラハンは廃工場の外に出た。

外にはアクセルがエンジンブレードを下向きに持った状態で倒れた戦闘員の真ん中に立っていた。

「てめえは何なんだ？」

「俺は仮面ライダーアクセル・・・ 貴様を絶望というゴールへ送る者だ・・・」

デュラハンの問いかけにアクセルが静かに答えるとデュラハンはそんなアクセルの様子に腹を立てた。

「うぜえんだよ!!」

デュラハンはアクセル目掛けて岩の槍を乱射していく。
しかし、アクセルはその槍を打ち落としていく。

「無駄だ・・・俺は弱くはないぞ・・・」

「はん！ てめえが強いって言うんなら俺はもっと強いぜ」

デュラハンは岩の槍を伸ばして両手で持つと槍術のように振るっていく。

アクセルはデュラハンが振るう岩の槍をかわし、エンジンブレードで斬りつけていく。

しかし、デュラハンにはまったく効き目がないのか、デュラハンの勢いは決して止まらない。

「てめえのちんけな攻撃じゃ俺には効かねえぜ・・・」

「なら・・・」

『ENGINE』

アクセルはデュラハンとの距離を離すとエンジンメモリをエンジンブレードに装填し、能力を上げた。

「ほう・・・ それでも、てめえは俺には勝てねえんだよ・・・」

デュラハンはそう言うと、アクセルとの距離を詰めていく。

そして、岩の槍を棍棒くらいの大きさにすると上から振りかぶって叩き落とすように振り落とした。

アクセルはその軌道を読み、小さな動きでかわしていくがデュラハンはお構い無しに岩の棍棒を振るっていく。

「どうした、逃げてるだけじゃ勝てねえぞ」

「うるさい奴だ・・・ 黙らせてやろう・・・」

『ELECTRIC』

アクセルはエンジンブレードのトリガーを引き、刀身に電撃を纏わせていく。

そして、デュラハンにエンジンブレードを振り下ろしていく。

しかし、デュラハンは岩の棍棒を槍に変えるとエンジンブレードを弾き、アクセルの身体を突いていく。

「ぐあつ・・・」

アクセルのスーツが頑丈なため、竜の肉体に槍が到達することは今のところではない。

しかし、いつ、デュラハンの槍が自身の身体を貫くかめしれないという緊張感にアクセルの動きが僅かに鈍ってしまった。

「はん！ これでも喰らえ！！」

デュラハンはアクセルの動きが鈍った瞬間に岩の槍でアクセルを工場内へ弾き飛ばした。

「照井！！」

吹き飛ばされてきたアクセルを見て、翔太郎が声を荒げた。

「左か・・・ なんて様だ・・・」

「お前もな、照井・・・」

翔太郎の言葉にアクセルは少し頷いた。

デュラハンが工場の中へ入ってきた。

「ははは・・・そろそろ、てめえらも終わりだぜ・・・」

デュラハンはそう言うと、岩の弾丸をアクセル目掛けて放とうとした。

しかし、そのタイミングで飛んできたバットショット（ライブモード）が強烈な光を放つとデュラハンがよろめいた。

さらに、スタッグフォン（ライブモード）がデュラハンの近くの電線を切り、その電線がデュラハンの足下の水溜りに触れた。

「があああああつ！！」

デュラハンの身体に水溜まりを伝って高圧電流が流れた。

そのダメージからデュラハンがぐらついた。

「翔太郎、お待たせ」

翔太郎達のところへ来ていたフィリップはそう言うとすぐに翔太郎達を縛っていたロープをほどいた。

「遅かったな、相棒」

「すまない・・・少し疲れていたからね・・・」

翔太郎とフィリップは並んで立つとデュラハンの様子を見た。

「てめえら・・・全員ぶち殺してやる・・・」

デュラハンはそう言うと、ダブルドライバーとマッハキャリバー、クロスミラーシュが置かれた場所へ岩の弾丸を乱射した。

アイキャッチA（照井竜、仮面ライダーアクセルへ変身！）

アイキャッチB（怒りの表情をしたデュラハン）

しかし、岩の弾丸はその場に現れたファングメモリ（ライブモード）によって打ち落とされた。

「ファング！」

フィリップの声を聞いたファングメモリ（ライブモード）はダブルドライバーを翔太郎の下へ飛ばした。

「上出来だぜ、ファング。 フィリップ、変身だ」

「了解だ」

『LUNA』

『JOKER』

「「変身！！」」

『LUNA』

『JOKER』

翔太郎の身体にダブルのスーツが纏われるとフィリップは倒れた。

「とりあえず、まずこれからだな」

ダブル（ルナジョーカー）はそう言うと、右腕を伸ばし、マッハキヤリバーとクロスミラージュを素早く回収した。

ダブルの右腕が元に戻り、マッハキヤリバーとクロスミラージュを

スバル達に返した。

「二人ともセツトアップしろ。 零次を助けるんだろ？」

「はい！」

「まっ、しょうがないわね。 あいつに借りを返さないと駄目だしね」

スバルとティアナはそう言うと、デバイスを起動させていく。

「そんなら、沢井零次から殺してやるよ！！」

デュラハンはそう言うと、岩の弾丸で零次の身体を吊り下げているロープを切った。

そして、零次は硫酸プールの中に落ちた。

「零次！！」

その様子を見たスバルが慌てて助けようとするがダブルとティアナはスバルを止めていく。

「ティアア！！ 翔太郎さん！！」

スバルは二人を振り切って零次を助けに行こうとする。

しかし、そんな時、零次が落ちた硫酸プールに異変が起こった。

黒い闇のようなエネルギーに包まれた硫酸プールが跡形もなく消え去った。

【あり得ない・・・ 物質が完全に消滅するなんて・・・】

ダブル（フィリップ）の呟きにスバル達は首を傾げた。

しかし、黒い闇が晴れた時、そこには黒い姿をし、いつもと少しだけ違うイヴがいた。

「零次！！」

スバルは零次の無事を知り、嬉しそうに言ったがイヴは反応を示さなかった。

イヴはデュラハンの下へひたすらに駆けていく。

「ちい・・・くそがあ！！」

デュラハンは近づいてくるイヴに岩の槍を大量に放っていくがイヴはその槍を手に宿した闇で消滅させていく。

【そうか・・・やはり、あれが仮面ライダーイヴに隠されたブラックボックスの能力・・・】

「どういうことだよ、フィリップ？」

ダブル（フィリップ）の言葉にダブル（翔太郎）は疑問で返していた。

スバル達もその疑問に頷きながら同意していることを表している。

【僕は天道総司から依頼されて沢井零次のことを検索していたんだ】
「それで、イヴのことを知ってたんだな」

【ああ。 検索できた項目を見ているとストーン・イヴのことがあった。 あれは所有者の生存本能に反応し、隠された力を発揮する】

スバル達はダブル（フィリップ）の言葉を理解できなかったがダブル（翔太郎）はその意味を気づいていた。

「つまり、ファングの暴走と同じようなもんか」

【ああ。 しかも、彼の力が発動している間は彼には近づけない】
「近づけば消滅させられるからですね」

ダブル（フィリップ）の言葉にティアナが反応していく。

「くっ・・・ ちきしょー・・・」

デュラハンは自分が不利だと理解するとすぐに逃げた。

イヴは視線をダブル達の方に向けた。

「グルアアアアアー！！」

イヴは咆哮とともに三人の下へ駆け出した。

【ティアナ・ランスター、君はこの場から離れるんだ。 スバル・ナカジマ、君には協力してもらうよ】

「はい！」

「分かりました！ 後任せます！！」

ティアナはそう言うと、魔力で構成したアンカーを使って、距離を取った。

「じゃあ、行くぜ、スバル！！」

「はい！！」

スバルとダブルはイヴに接近していく。

イヴは接近してくる二人を確認すると左右のパンチを繰り出していく。

しかし、イヴは黒い闇を発動させることなく、二人のパンチをかわしていき、荒々しい左右のパンチを放っていく。

「どうやら、落ち着いてきてるみたいだな・・・!」

「そうなんですかね!?!」

スバルがそう言ったのを聞くと、ダブルはメタルのメモリを起動させ、ダブルドライバーに装填していく。

『LUNA』

『METAL』

そして、ダブルはダブル（ルナメタル）にハーフチェンジした。

「おーらよつとー!!」

そう言いながらダブル（ルナメタル）はメタルシャフトを鞭のようにしならせ、イヴに打ちつけようとする。

しかし、イヴはメタルシャフトが自分の身体を捉える前に能力を使って消滅させた。

「嘘だろ!」

【おそらく、素手以外の方法で彼を攻撃しようとするれば消滅させられ、無効化されるんだろう】

ダブルの言葉にスバルはついていけなかったのか、構わず左右のパンチから右ハイキックへ繋げるコンビネーションを叩き込もうとしていく。

しかし、スバルの右足を掴むとイヴは力任せに彼女を投げ飛ばした。そして、投げ飛ばされたスバルを受け止めようとしたダブルも吹っ飛んでしまう。

「零次!!」

「零くん!!」

ティアナが下がったところに彩達が来た。

彩と梨杏は黒いイヴがスバル達を襲っているのを見て、声を荒げてしまう。

「アーヤ・・・ 梨杏・・・ 来ちゃ駄目・・・」

スバルは二人を制止しようと苦しそうに声を出していく。しかし、二人はスバル達の下に行くと黒いイヴを見た。

「スバル、あれは零くんなの？」

「うん・・・ あたしが守りきれなかったから・・・」

梨杏はスバルの言葉を遮るように首を横に降った。

そして、黒いイヴを見据え、ファイティングポーズを取った。

「リーちゃん？」

「アーヤ、スバルや翔太郎さん、ティアナさん達を守って・・・

零くんはわたしが助ける!!」

梨杏はいつもよりも力強い声でそう言った。

スバルはなんとか止めようとするが先程のダメージで立ち上がるこ
とができない。

「零くん! いい加減にしなよ! そんなの零くんらしくないよ!
!」

梨杏の言葉を聞いたイヴが梨杏に駆け寄っていく。

しかし、梨杏はイヴが放つ禍々しい威圧感に怯むことなく動かない。イヴが右腕を振り上げた瞬間、梨杏はイヴとの距離を詰めた。

「零くんのバカーー!!」

梨杏はそう叫ぶとイヴの胸に渾身の右ストレートを叩き込んだ。すると、イヴの動きが止まった。

「り……な……」

イヴがそう呟くと静かに変身が解け、零次は倒れた。

「零くん!!」

梨杏は倒れた零次に慌てて駆け寄っていく。

そんな梨杏をスバルと彩はどこか面白くなさそうな顔で見ている。

「スバル、彩、なーに、梨杏のこと見てんのよ？」

「別になんでもないよ……」

「そ、そうだよ!」

ティアナの言葉にスバルと彩は取り繕うように返事をしていく。

ダブルはそんな様子を見ながら変身を解除した。

「さて、そろそろ戻ろうぜ」

「そうだね、翔太郎」

翔太郎とフィリップが帰ろうとした時、竜が戻ってきた。

「左……フィリップ……あいつはどうした……」

「あ、ああ・・・ そっぴゃ、どこ行つたんだ？」

竜の質問に翔太郎はデュラハンの存在を忘れていたことに気づいた。

「はあ・・・ はあ・・・ ちくしょう・・・」

デュラハンはイヴが暴走した時、素早く逃げていたのである。しかし、デュラハンの右手の甲に何かの紋章が浮かんでいた。デュラハンはそれを見た瞬間、表情を変えた。

「ま、まさか・・・ 死の紋章・・・」

デュラハンはそう呟くと手の甲を拭った。しかし、その紋章は消えなかった。

『デュラハン・・・ 貴様、逃げたな・・・』

「待ってください、ダーククライム大首領！ あれは戦略的撤退で！！」

『黙れ！！』

ダーククライム大首領はデュラハンの言葉を遮るように一喝した。

『しかし、ただ殺すのはあまりに酷だ。 それなりの結果が出せば助けてやらんこともない』

「分かりました！ 必ず、イヴをダークホライズンに持ち帰ってみせます！！」

デュラハンがそう言うとダーククライム大首領の声は消えた。

「（ヤベえ・・・ このままじゃ俺は間違いなく消される・・・）
おい、お前ら！ あの探偵どもの弱点をすぐに調べてこい！！」

デュラハンの言葉とともにダーククライム戦闘員が風都の街を暗躍し始めた。

追いつめられたデュラハンはいったい何をしようとしているのか？

t o b e c o n t i n u e d

次回

スーパーヒーロー作戦 N E W M I S S I O N E p i s o d
e - 1 7 デュラハンの最期

ダーククライム大首領によって死の紋章を刻まれたデュラハン。
自分の生命の危機を逃れるべく、デュラハンはある人物を人質に取った。

零次達はその人を救うべく、デュラハンとの対決に挑む。
そして、ついに訪れる、デュラハンの最期。

戦士達よ、正義を貫け！！

Episode - 17 デュラハンの最期（前書き）

デュラハン編3話目ですよ♪♪

今回は激しいバトルの末、デュラハンとの決着がつきます♪♪

それでは、お楽しみください♪♪

Episode - 17 デュラハンの最期

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Episode - 17 デュラハンの最期

ダーククライム大首領によって死の紋章を刻まれたデュラハンは焦っていた。

ダーククライム大首領が与えてくれたチャンスを逃すようなことになれば間違いなく消されてしまう。

「（まずいことになったぜ・・・ダーククライム大首領のことだ、俺が失敗したり逃げたりすればその場で殺してくるだろう・・・）」

そんなことを考えていたデュラハンの下にダーククライム戦闘員が戻ってきた。

「デュラハン様、あいつらの弱点が分かりました」

「で、そいつは誰だ？」

デュラハンの問いかけにダーククライム戦闘員はすぐに答えていく。

「あいつらの事務所の所長、鳴海亜樹子・・・こいつは二人のガードがきつい上にこの街に来たガイアセイバーズとも合流するため、危険でしょう・・・」

「駄目じゃねえか!!」

デュラハンの激昂にダーククライム戦闘員は怯えてしまった。そこへ負傷を癒したトライバル・エンドが現れた。

「デユラハン・・・では、左翔太郎の知り合いの刃野幹夫という男はいかがです・・・」

「トライバル・エンド・・・てめえ、何で、そんなことを俺に教える？」

「あなたには助けてもらった借りがありますからね・・・」

そう言うと、トライバル・エンドは姿を消した。

翔太郎達はリボルギャリーを走らせ、鳴海探偵事務所の地下室に戻ってきていた。

「それにしても、大変だったんだ・・・」

「そんなことないですよ・・・それに、ガイアセイバーズのみんなのフォローもありますし・・・」

零次と翔太郎は自分達の情報を交換する意味も含め、何気ない話をしていた。

「さあ、事務所へ戻ろうか」

フィリップはそう言うと、さっさと事務所へ戻っていった。梨杏達もそれに続いていく。

しかし、事務所には誰もいなかった。

「どういうことだ、これ？」

「亜樹ちゃんの身に何かあったのか・・・」

フィリップが翔太郎の言葉に自分の推測で言葉を返した時、事務所の扉が開き、亜樹子に戻ってきた。

「あつ、二人とも帰ってたんだ。なら、連絡してよ」
「お前こそどこ行ってたんだよ？ 心配しただろ」

翔太郎の言葉に亜樹子は苦笑いを浮かべながら答えた。

「それが・・・さつきガイアセイバーズの人達、っていうか、天道さんが来て・・・」

「つまり、天道総司達がビリヤード場にいるってことだね、亜樹ちゃん？」

フィリップの問いかけに亜樹子が頷いた。

「じゃあ、とつと天道に今までのこと、報告しようぜ」
「今までのこと？」

翔太郎の言葉に亜樹子は疑問に思い、尋ねるが翔太郎はそれをあえて無視した。

すると、亜樹子はどこからか取り出したスリッパで翔太郎の頭を叩いた。

「いつてー！！ 何すんだよー！」

「あたしのこと、無視するからよ。それより、何があったの？」
「そのことは天道達に報告する時に話す。」

そう言うのと、翔太郎はさっさとかもめビリヤード場へ向かった。

「なあ、真倉」

「何ですか、刃野さん？」

風都署の一室で真倉俊と上司の刃野幹夫がぼんやりと話していた。

ガイアメモリによる事件がなくなった今では彼らの仕事はそれほどないのである。

「暇だなあ……」

「そうですね……」

「なら、俺が暇じゃなくしてやるよ」

刃野と真倉は声のした方を見た。

そこには、茶髪でボサボサな髪をした男がいた。

真倉はその男を追い返そうと近づいていく。

しかし、男は真倉の胸ぐらを掴むとそのまま投げた。

「雑魚に用はねえ…… 刃野ってのはてめえか？」

男は刃野に近づきながらそう尋ねた。

刃野は頷きながら投げられた真倉に近づき、様子を伺っていく。
どうやら、真倉は気絶してしまったようだ。

「なら、話は早え…… 俺と一緒に来てもらおうか？」

「もし、断るって言ったら？」

刃野は目の前の男が普通の人間だと思っているようだ。

「そう言ったら…… てめえの首が身体とお別れすることになる
ぜ……」

男はそう言つと、自身の身体を変化させた。

その姿は岩の竜人そのものだ。

そう、風都署に現れた男の正体はデュラハンだったのだ。

「な、な、な、なんじゃこりゃあー!!」

「うるせえなあ・・・ てめえには俺らに付いてきてもらっぜ・・・」

デュラハンがそう言って指を鳴らすとダーククライム戦闘員がマシンガンなどを持って現れた。

刃野は笑いながらその場から離れようとしていくがデュラハンが指を鳴らし、一人のダーククライム戦闘員がマシンガンを発砲した。

「な、な・・・」

「分かったらとつと俺達に付いてこい・・・ 殺されたくねえだろ・・・」

デュラハンがそう言うのと刃野は首を縦に振り、デュラハンの指示に従った。

翔太郎達はかもめビリヤード場で天道達にこれまでにあったことを話した。

「なるほど、やはりイヴが暴走したか」

「やはりってどうということだよ、天道？」

翔太郎は天道の言葉に疑問を抱き、尋ねていた。

天道は翔太郎の疑問に答えを出した。

「以前、零次が初めてイヴに変身した時も今回と同じ波長のエネルギーが検知された。そして、今回は零次は死にかけていたところから変身したんだろう？」

「そういうことかよ・・・ 零次はつまり死にかけた時なんか暴走するんだな・・・」

翔太郎は天道が答えたことに言い様のない怒りを感じていたのだ。

「しかし、天道総司・・・君はこれからどうするんだい？」

「どうするとはどういう意味だ、フィリップ・・・」

フィリップの問いかけに天道は質問で返した。

フィリップはさらに言葉を続けた。

「沢井零次、いや、仮面ライダーイヴはダーククライムが作ったライダーだ。おまけに暴走して敵味方関係なくなる。そんな獣を置いておくつもりかい？」

フィリップの言葉に天道の表情がわずかに変わった。しかし、すぐに表情を戻すとフィリップの言葉に答えていく。

「今すぐどうこうするつもりはない・・・零次がいくら暴走しようとならなくとも限りなく続く限りな」

天道の言葉にフィリップに詰め寄ろうとしていたスバルの動きが止まった。

「一度や二度、いや、何度暴走しようとならなく俺達が止めればいい。フィリップ、お前は俺がこう言うことを予想していたんだろう」

「まったく・・・君という男は僕の知っている知識を軽々と超えてくれるから面白い」

フィリップは天道が言うであろう言葉を予想してはいたがそれ以上の答えが返ってきたため、嬉しくて仕方ないという表情を浮かべた。そして、空気が穏やかになり、今後の作戦を立てた。

デュラハンは刃野を拐った後、翼町の廃工場に潜伏していた。

「さて、あとはあいつらが俺の落としたメッセージに気づくかどうかだな」

「何で、俺をこんなところに連れてきたんだ？」

刃野の質問にデュラハンは笑いながら答えていく。

「それはなあ・・・ てめえがあ探偵と知り合いだからだよ・・・」

「

探偵？ 翔太郎のことか！？」

刃野の語気を荒げた質問にデュラハンは笑いながら頷いた。

しかし、それは友好的なものではない。

「あいつらが余計なことしなけりや俺は死の恐怖に怯えなくて済んだんだよ！ それをあいつらのせいで！！」

デュラハンはそう言うのと辺りに岩の弾丸を乱射した。

その岩の弾丸がダーククライム戦闘員にも刺さっていたがデュラハンはまったく気にしていないようだ。

「だから、てめえと俺を餌に連中を引きずり出すんだよ・・・」

デュラハンはそう言うってからその場を後にした。

翔太郎達は今後デュラハンをどう追っていくかを議論していた。

「奴は周囲の岩や土などを吸収し、自身の鎧にしていた・・・」

まり、奴の本体はさほど丈夫ではないと言っていいだろう・・・」

「いつにもなく冴えてるな、フィリップ」

「これくらいは常識だろう、左・・・」

フィリップの立てた推論に翔太郎が感想を述べるとそれを聞いていた竜がツツコンでいった。

「なら、奴の鎧を引き剥がし倒すしかないだろうな」

「零次、お前はどつする？」

天道の言葉を聞いた暁は零次にどつするのかを尋ねていた。その言葉に全員の視線が零次に向いた。

零次はその視線に怯むことなく、自分の言葉で答えた。

「俺は・・・戦う・・・もし・・・俺が暴走して止まらなくなったら俺のことを倒してくれ・・・」

零次の覚悟を決めた言葉に全員の表情が柔らかくなった。

そして、話は進んでいく。

しかし、その話もある人物によって中断されることになる。

「探偵ー！！！」

「どつしたんだよ、マツキー？」

翔太郎達の下を訪ねてきたのは刃野の部下、真倉だった。

「刃野さんが拐われちゃったんだよ！」

「刃さんが拐われた!？」

翔太郎は真倉の言葉に動揺してしまい、声を荒げてしまった。

しかし、すぐに自分を落ち着かせると真倉に詳細を尋ねた。

「つまり、ガタイのいい男が来て刃さんを拐っていったと・・・」

「そ、そうなんだ！　なあ、探偵！？　あいつ、一体何なんだよ！
！？」

真倉は事態が掴めず、混乱しているようだ。

混乱している真倉を安心させるように竜が真倉の肩を叩いた。

「心配するな、真倉。　刃野は必ず俺が助け出す」

「照井課長・・・　お願いします・・・」

真倉の声を押し殺しての願いに竜やガイアセイバーズの面々も力強く頷いた。

「真倉刑事、何か遺留品がありませんでしたか？」

「どういうことだよ、探偵の相棒？」

「もし、遺留品が残っていれば奴の居場所が分かる」

フィリップの言葉に真倉は自身が持ってきていたコンクリートのかけらをフィリップに渡した。

「これが遺留品ですね？」

「ああ・・・　たぶんだけだな・・・」

フィリップはその言葉を聞くとすぐに検索を始めた。

「知りたい項目はデュラハンの居場所だよね？　キーワードはこの
コンクリート片・・・」

フィリップは自身の意識を地球の本棚へ飛ばし、デュラハンの居場所を検索しているのだ。

そして、真倉が持ってきたコンクリート片からデュラハンの居場所を特定することができた。

「翼町の廃工場に奴がいるはずだ」

「その根拠は何だ、フィリップ？」

フィリップの特定した場所に疑問を抱いた竜がそう尋ねていた。その疑問にフィリップは自身の仮定を話した。

「僕が奴の居場所を特定した理由は二つ。まず、一つ目に考えたことは奴が刃野刑事を拐ったということは奴にはもう後がないということだ」

「そうでなければ刃さんを拐う必要がないってか？」

翔太郎がそう尋ねるとフィリップは頷いた。

そして、フィリップはさらに自身の仮定を続けた。

「さらに、二つ目は奴はその状況でおそらく自身の身体を強化してくるはずだ。これは僕の推論だが・・・」

フィリップの言葉にその場にいた全員は頷いた。

そして、拐われた刃野の救出とデュラハン打倒のために行動を開始した。

アイキャッチA（ガイアセイバーズ勢揃い）

アイキャッチB（灰色のデュラハン、仁王立ち）

翔太郎達はデュラハンが潜伏している翼町の廃工場に来ていた。

「出てきやがれ、デュラハンー!!」

「ようやく来やがったか・・・ 待ちくたびれてあいつを殺しちまうところだっただぜ・・・」

デュラハンはそう言う柱に縛った刃野を指さした。

「さてと、まずはてめえらの変身ツールを渡しな・・・ じゃねえとあいつを潰しちまうぜ・・・」

デュラハンがそう言う天道達は自身の変身に必要なツールをデュラハンに渡した。

デュラハンはそれを受け取ると零次に手招きをした。

「次は沢井零次、てめえが俺んとこまで来い・・・」

零次はデュラハンの言葉に従い、一步步み寄っていく。

デュラハンは零次が自分の下に来ると零次の腹を思い切り殴った。

「最後は沢井零次、てめえの手でここにあるもんをあのドラム缶の中に入れる・・・」

零次はデュラハンの指示通り、ガイアセイバーズのメンバーのツールをドラム缶の中に入れた。

デュラハンはその確認すると刃野を翔太郎達の方へ投げ飛ばした。そして、ツールの入ったドラム缶目掛けて火球を放った。

火球が炸裂し、ドラム缶は爆発した。

「ヒヤハハハハ！！　これでてめえらのほとんどはただの人間になっちまったわけだ！！　ざまあねえなあ！！」

「さあ、お前の罪を数えろ・・・」

デュラハンが高笑いしている中、翔太郎が呟いた。

デュラハンが翔太郎の呟きに視線を翔太郎に向けた。

「何言つてんだ、てめえ？　ドライバーとメモリがなけりやあてめえはただの人間だろうが・・・」

デュラハンはその言いながら翔太郎の腰を見た時、表情を変えた。

爆破されたはずのダブルドライバーが翔太郎の腰に装着されていたからだ。

それだけでなく、ガイアセイバーズのメンバー全員がツールを取り戻していたのだ。

「てめえら、何しやがった・・・？　どうやって取り戻したんだよ・・・??」

デュラハン自身の目の前の光景がどうしても信じられないようだ。

「さあな・・・　そんなことはどうでもいいんだよ・・・　それよりも、てめえには刃さんに手出したことを後悔させてやるぜ・・・」

「ああ・・・　こいつは必ず倒そう、翔太郎・・・」

翔太郎とフィリップが静かに怒りを燃やしているのを見せたのと同じ時に全員が戦闘準備を終えていた。

「行くぜ、みんな！！」

零次の気合いの入った声で全員が戦闘態勢に入っていく。

デュラハンはそのような零次達の様子を見て、岩の剣を作り出した。

「やれ、ダーククライム戦闘員!!」

デュラハンの命令で数百人というダーククライム戦闘員がイヴ達の下へ殺到してくる。

それをカブト達が迎え撃っていく。

「沢井、照井、左。お前らはデュラハンという奴をやれ」

「分かったぜ、天道。行くぜ、照井、零次!!」

「俺に命令するな!」

「おうっ!!」

ダブルとアクセル、イヴはそう言うところへ駆けていく。

そして、ダブルとイヴは左右のパンチやキックを放ち、アクセルはエンジンブレードで斬りつけていく。

しかし、デュラハンは岩の剣を巧みに操り、イヴ達の攻撃を捌いていく。

「ふんっ! てめえらの力つてのはこの程度なのかよ!? ちゃんとやってつと潰すぞ!!」

「うつせえんだよ!!」

デュラハンの言葉にイヴはさらに左右のパンチを繰り出していくがデュラハンにはなかなか当たらない。

「うつせえ!!」

デュラハンはそう言うのとダブル達目掛けて岩の弾丸を乱射した。
至近距離で岩の弾丸を喰らってしまったダブル達は大きく吹っ飛ば
されていく。

【予想以上の戦闘力だ・・・ 翔太郎、ここはヒートメタルで行こ
う】

「ああ、そうだな!!」

『HEAT』

『METAL』

ダブルは素早くサイクロンとジョーカーのメモリを抜き、ヒートと
メタルのメモリを挿入し、ダブル（ヒートメタル）にハーフチェン
ジしていく。

そして、背中に現れたメタルシャフトを手に持ち、デュラハンに攻
撃していく。

ダブルの棒術にデュラハンの防御が追いつかなくなるとアクセルの
斬撃やイヴの打撃がデュラハンの身体に打ち込まれていく。

「決めるぜ、照井、零次!!」

「ああ!」

「分かっている!!」

ダブルはアクセルとイヴに指示を出しながらメタルシャフトのマキ
シマムスロットにメタルのメモリを装填し、アクセルはエンジンブ
レードのトリガーを引いていく。
そして、イヴは身を屈めていく。

『METAL MAXIMUMDRIVE』

『ENGINE MAXIMUMDRIVE』

エンジンブレードとメタルシャフトのマキシマムドライブが発動し、ダブルとアクセルはデュラハンへと駆けていく。そして、イヴはその場でジャンプし、デュラハンにライダーキックを叩き込もうとしていく。

「これで決めるぜ！ 【メタルブランディングー！】」

「ライダーキックー！！」

「振り切るぜー！！」

三人の必殺技がデュラハンの身体に叩き込まれていく。そして、デュラハンが吹き飛ばされていく。

「やったか？」

「いや、まだだ・・・ 奴の表皮を剥がしたにすぎん・・・」

【照井竜の言う通りだ・・・ しかし、僕達と照井竜のマキシマムの力と沢井零次のライダーキックの力を合わせても奴を倒せないとは・・・】

「ぐだくだ言ってんな・・・ さっきので決まらなかったんだったら今度は決めりゃあいいだろうがー！！」

ダブル（翔太郎）の言葉にアクセルとイヴは頷く。

しかし、デュラハンの様子が変わった。

デュラハンはその周囲の物体を吸収し始めた。

「野郎！ また同じ手を繰り返すつもりかよ！？」

【させないー！！】

『HEAT』

『TRIGGER』

ダブルは素早くヒートトリガーにハーフチェンジし、炎のエネルギー

「弾をデュラハン目掛けて撃ち込んだ。」

しかし、周囲の鉄柱やコンクリートを吸収し、硬質化したデュラハンの身体にはかすり傷すらなかった。

そして、岩の翼を広げ、廃工場から飛び立った。

「左、照井、沢井。ランスターとナカジマを連れて奴を追え」

「天道さん!？」

スバルは天道が自分を名指しするとは思っていたので驚いてしまった。

しかし、頷くとすぐに廃工場から飛び出していった。

「あの子はまったくもー 翔太郎、あんたはあたしを運んで!」

「何命令してんだよ!？」

「いいわね・・・!!」

ティアナの迫力にダブル（翔太郎）は押されてしまった。

そして、渋々ティアナの提案（命令）を飲んだ。

「沢井零次、お前は自分のバイクを持ってきていないな？」

「ああ、はい。 どうしたらいいですかね？」

「答えは簡単だ・・・ 俺に乗れ」

アクセルはそう言うのとアクセルドライバーを取り外し、バイクフォームへ変形した。

イヴはそんなアクセルの変形に感心したようにため息を吐いた。

そして、アクセル・バイクフォームに跨がった。

「行くわよ、翔太郎!」

「だから、命令すんなって!!」

ダブル（翔太郎）は文句を言いながらティアナを乗せて、ハードボイルダーを発進させた。

それを追って、アクセル・バイクフォームもイヴを乗せたまま廃工場から飛び出していく。

デュラハン（飛翔体）は高速で風都の空を飛んでいく。

ダブル達も地上からデュラハンを追うがデュラハンの飛行速度になかなか追いつくことができない。

「マツハキャリバー！ ギア・セカンド！！」

『Gear Second』

スバルはマツハキャリバーの走行速度をさらに速め、デュラハンを追っていく。

高速で走っていくスバルを追うため、アクセル・バイクフォームとダブルもそれぞれハンドルのスロットルをさらに捻り、スピードを上げていく。

デュラハンは地上からスバル達が追ってくるのを見ると地上へ火球や岩の弾丸を乱射していく。

しかし、ティアナがその火球や岩の弾丸を魔力弾で撃ち落としていく。

「やるなあ、ティアナ・・・ だったら、俺もやってやるぜ！」

ダブルはそう言いながらハンドルから両手を放し、左手でトリガーマグナムを持ち、右手でスタッグフォンを持っていく。

「ちよつと！！ 何手放してんのよ！！」

「大丈夫なんだよ」

ダブルの言葉通り、ティアナはハードボイルダーから落ちていない。ティアナはデュラハンが放つ火球や岩の弾丸を撃ち落としながらダブルに尋ねていた。

「翔太郎！？ これ、どうなってんのよ！！？」

「相変わらず呼び捨てかよ・・・ ハードボイルダーとかは俺が持つてるスタッグフォンで遠隔操作なんかできんだよ」

【それよりも、ティアナ・ランスター・・・ 君とスバル・ナカジマには奴の表皮を破壊してほしい・・・】

ティアナはダブル（フィリップ）の言葉に頷き、すぐにスバルに念話を繋いだ。

”スバル！！ あんたは何がなんでもあいつに追いつきなさい！！
それで、あたしのスターライトとあんたのバスターであいつの鎧を壊すわよ！！”

”うん！ 分かったよ、ティアア！！”

スバルはティアナの指示に返事をするデュラハンに追いつくべく、さらにスピードを上げた。

「ギア・エクセリオン！！」

『A・C・S Standby』

スバルの声に反応し、マッハキャリバーはギア・エクセリオンを発動させた。

そして、スバルは高速でデュラハンに接近し、デュラハンを叩き落とした。

「ぐあつ！！ チキショーがつ！！」

デュラハンはそう言うときスバルに追いつき、ハードボイルダーから降りようとしているティアナ目掛けて巨大な火球を放った。しかし、ダブルがティアナを庇い、火球を浴びた。

「翔太郎！！」

ティアナが叫んだと同時にダブルの変身が解けた。

しかし、同じタイミングでリボルギャリーが近づき、フィリップが翔太郎を回収した。

ティアナはそれを見て、表情を引き締めてデュラハンを見据えた。

「行くわよ、スバル！！」

「うん！！」

スバルはティアナに返事をするとき一気に駆け出した。

ティアナは周囲の魔力を収束し、スターライトブレイカーを発動させる準備を整えた。

「スターライトブレイカー！！」

「デイベインバスター！！」

スバルとティアナの魔力の奔流がデュラハンを飲み込んだ。

しかし、フィリップはファンゲメモリを呼ぶとメモリモードに変形させて構えた。

そして、ダブルドライバーに挿入し、展開することでダブル（ファンゲジョーカー）に変身した。

「行こう、照井竜」

「任せろ」

『FANG MAXIMUMDRIVE』

『ACCICLE MAXIMUMDRIVE』

アクセルとダブル（ファンゲジョーカー）のマキシマムが再び火を吹こうとしている。

「『ライダーツインマキシマム!!』」

その掛け声とともにアクセルのアクセルグランツァーとファンゲジョーカーのファンゲストライザーがデュラハンを捉えた。
デュラハンがツインマキシマムの威力に表皮を吹き飛ばされてしまう。

しかし、すぐに表皮を纏おうとしていく。

「させるかよ！ ライダースピンキック!!」

その瞬間にイヴがスバルのリボルバーナックルから構想を得た新技、ライダースピニックをデュラハンの本体へ叩き込んだ。

果たして、デュラハンはどうなるのか。

t o b e c o n t i n u e d

次回予告

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Episode - 18 デュラハン死す！ そして、新たな戦いへ

デュラハンを倒し、零次達は風都を後にする。
一方、デュラハンの死を受けて、他のマスタークラウンが動き始めた。

さらに、自身の記憶を取り戻した神楽雪枝はアダムから身体の支配権を奪い、ある行動を始めた。

新たな嵐が吹き始める時、零次は何を思うのか？

次回

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Episode
e - 18 デュラハン死す！そして、新たな戦いへ

Episode - 18 デュラハン死す！ そして、新たな戦いへ（前書き）

皆さん、どうもですよ ♪ ♪

ひらひらです ♪ ♪

さて、ブログおよびホームページ掲載分まで追いついたのでここでの掲載はブログおよびホームページでもう少し進んでからになりますのでお待ちくださいね ♪ ♪

それでは、お楽しみください ♪ ♪

Episode - 18 デュラハン死す！ そして、新たな戦いへ

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Episode - 18 デュラハン死す！ そして、新たな戦いへ

デュラハンの身体をライダースピッキクで貫いたイヴはその場に着地した。

そして、コアを貫かれたデュラハンの身体は徐々にひび割れ始めた。

「チキショー…… だが、忘れるなよ…… 俺を倒したくらいじゃ終わらないぜ…… いずれ……」

そう言うと、デュラハンは粉々に砕けた。

イヴ達はデュラハンが砕けたのを見ると静かに変身を解除した。

そして、零次は砕け散ったデュラハンの欠片のある場所に近づいた。

ダーククライムの本拠地、ダークホライズンではデュラハンの死を受けて、他のマスタークラウンが今後のことを話し合っていた。

「デュラハンは力はあったが知恵がなかっただけの話だ」

「そうね、夜叉の言う通りだね。 そんなことよりも次は誰がガイアセイバースに仕掛けるの？」

「なら、次は私が出向こう……」

マスタークラウンの一同は口々に話をしている。

そんな会話を聞き、ダーククラウン大首領が言葉を発した。

『静まれ…… 次は白澤、お前が仕掛けよ……』

「分かったぜ、ダーククライム大首領…… 俺のとおっておきの奴

らを使つて奴を始末してやるぜ」

ダーククライムに白澤と呼ばれたマスタークラウンはそう言つと姿を消した。

それと同時に他のマスタークラウンも姿を消した。

ガイアセイバーズの面々は引き上げの準備と念のためにデュラハンの動向を探り終え、帰還することになった。

「左、お前達は後からセイバーズベースに来い」

「ああ・・・分かつた・・・」

翔太郎は背中 of 痛みを堪えながら返事をしていく。
そんな翔太郎の様子に天道も頷く。

「引き上げるぞ」

「ああ」「はい」

天道の言葉にガイアセイバーズメンバーは隊員専用の装甲車数台に次々乗り込んでいく。

零次が車内に乗り込もうとすると翔太郎が呼び止めた。

「零次・・・」

「何ですか、翔太郎さん？」

歯切れの悪い翔太郎の様子に零次は疑問を投げかけた。

「いやな・・・お前はお前だ・・・お前が戦うことを決断したならそれがお前の仕事だ・・・」

「えっ？」

「男の仕事の8割は決断だ・・・あとはおまけみたいなもんだ・・・」

零次は翔太郎の言葉に頷き、右手を差し出した。

「翔太郎さんの言いたいこと、なんとなくですけど分かりますよ。大丈夫、俺は自分の仕事を投げ出したりしませんから」

「ああ、頼むぜ」

翔太郎はそう言うとき零次が差し出した右手を握り締めた。そして、その後、タンクに乗り込み、風都を後にした。

セイバースベースに戻ってから零次はより一層訓練に励んでいた。零次は自身の暴走で誰かを傷つけてしまうのではないかという想いを抱いてしまっていた。

「（今回はどうにかなったけど・・・たぶん、次はこうはいかねえ・・・今度、暴走したら仲間を傷つけちゃう・・・だから・・・）」

零次は思考をまとめるとさらに左右のパンチやキックを空に放っていく。

そして、さらに激しく動いていく。

「零くん。少し休憩しない？」

零次がトレーニングをしていると梨杏が水筒を持ってきた。

しかし、零次は梨杏を一瞥するとすぐにトレーニングを再開した。

「零くん、少し休もうよ」

「悪い、梨杏・・・今はそんな気分じゃないんだ・・・」

梨杏は零次の言葉を聞き、左手を強く握り締めた。
もちろん、零次に怒っているのではなく、何もできないのが悔しいのだ。

「そっか・・・じゃあ、頑張つてね・・・」

梨杏はそう言うと、水筒をその場に置き、立ち去った。

イヴとの戦闘の後もアダムはダークホライズンには戻らず宛もなくさ迷っていた。

「（私の中でバグが発生している・・・いったい、あの映像は何だ・・・）」

アダムは自身の理解できない映像に困惑していた。
自身の知らない情報が自身を支配しようとしている状況が許せないのだ。

「お前は誰だ？ 私に語りかけてくるな・・・」

（私は・・・かぐ・・・ゆき・・・ゆき・・・）

「かぐ・・・ゆき・・・だと・・・私はそんな奴は知らん・・・
お前は何者だ!？」

（あなたの素体・・・でも、そろそろ私に身体を返してもらわ
ない!!）

そう言うと、意識の中でアダムに語りかけていた女性の記憶がアダムの中を駆け巡り、アダムは完全に身体を支配されてしまった。

「零次・・・」

アダムの姿がいつもの女性の姿に戻るとそのまままた歩いていった。

零次はセイバースベースに戻ってきてから数日、学校では普段通りにしているがトレーニングはいつもより激しく行っていた。

そして、以前は変身した状態でトレーニングをしていたが今は一向に変身しようとはしていなかった。

「ねっ、零次。 どうして、変身しようとしなの？」

「スバル・・・ 分かったのか・・・」

「みんな、疑問に思ってるよ・・・」

スバルの言葉に零次は自分の手を見つめながら話し始めた。

「この前、暴走した時、俺は明らかにあの力に酔っていた・・・」

「でも、それは・・・」

スバルは零次の言葉に反論しようとしたがいい言葉が浮かばなかったのか、途中で止めてしまった。

「だから、使いこなせるようになるまで変身したくない・・・ 次に変身したら暴走しちゃう・・・」

「零次・・・」

スバルは少し考えた後、自分の想いを話し始めた。

「あたしね・・・ 前に話した通り、普通の人間とは違う・・・ あたしも子供の頃からずっと自分の力が怖かった・・・」

「スバル、もう・・・」

零次がスバルを止めようとするとスバルは構わず話し続けた。

「だから、あたし、子供の頃はシューティングアーツの練習もしなかったしね・・・ 自分が痛いのも嫌だけど人を痛くするのも嫌だったから・・・」

「スバル・・・」

「えっと・・・ だからね・・・ 零次が戦いたくないなら無理して戦う必要ないよって言いたかったんだよ！！」

スバルの言葉に零次はつい大きな声で笑ってしまった。

それは、スバルを笑ったのではなく、自分自身を笑ったのだ。自分らしくもなく、ウジウジ悩んでしまったのが恥ずかしいからである。

しかし、まだ心の奥では変身することへの怖れがあることを零次は悟っていた。

「（けど、なんとかしてみせる・・・ スバルにこんな辛い思いをさせたんだ・・・ これで何もできなきゃ男が廃るぜ・・・） ありがとな、スバル・・・」

「うっん、気にしないで。 頑張ってね、零次」

スバルはそう言うとき零次に右手を突き出した。

零次は右手をスバルの右手に打ち合わせた。

「（零くん・・・ よかった・・・ でも、わたしにはできないことをあつさりやっちゃうなんてスバルは凄いや・・・ でも・・・）」

「悔しい？」

陰からスバルと零次の様子を伺っていた梨杏の背後からティアナが声をかけた。

梨杏はティアナに声をかけられたことに驚き、大きな声を出してしまった。

「どうしたの？」

「何だよ、梨杏？」

梨杏の声を聞いたスバルと零次が二人の下へ行くと梨杏はあたふたしだした。

「落ち着きなさいよ、梨杏。 そうだ、梨杏、スバル、あたしの格闘訓練に付き合ってよ」

「うん。 いいよ、ティア」

「わたしも付き合っよ」

ティアナは二人の返事を聞くと二人を連れてトレーニングルームへ向かった。

零次も仕方なく付いていくことにした。

ダーククライム大首領からイヴ抹殺を命じられた白澤はあるサイクロプスを呼び出していた。

「キャットサイクロプス・マウラ、ラウラ、出てこい」

「お呼びですか、白澤様？」

「俺達を呼ぶなんて珍しいな、白澤様？」

キャットサイクロプスは白いマウラ、黒いラウラの2体のサイクロプスなのである。

「お前らに頼みたい仕事がある」

「何でしょうか、白澤様？」

「マウラ、ラウラ。 お前らの毒でイヴを抹殺してもらいたい」

白澤の言葉にマウラは意味ありげに頷いた。

「我らが同胞をことごとく蹴散らしている仮面ライダーイヴ・・・
いずれは我らの手で始末しようと考えていましたので問題ありませんよ・・・」

「そうだぜ。 イヴなんざ俺らの毒で始末してやるよ」

そう言うと、マウラとラウラは早速行動を始めた。

梨杏とスバルに格闘技の訓練を手伝ってもらいながら、ティアナは二人に話しかけていた。

「ねえ、梨杏？ 零次ってあんな深く悩む奴なの??」

「あそこまで悩んでるところは見たことないよ・・・ 自分の力に怯えてるみたい・・・」

「まるでじゃないよ・・・ 零次は自分の力に怯えてるんだと思う・・・
あたしもそうだからよく分かるよ・・・」

スバルの言葉に梨杏とティアナは手を止めた。

スバルは二人の反応にオーバーな動作で誤魔化そうとしていく。

「ああっ！ ごめんっ！ 気にしないでっ!!」

「ちよつと落ち着きなさい。 別にあたしも梨杏もあんたの気持ちのことまでどうこう言うつもりはないわよ。 けど、自分を卑下したような物言いは止めなさいよ」

「そうだよ！ スバルは凄く強くて優しい子なんだから！ それに、

零くんはきつと大丈夫だよ!!」

梨杏の力強い言葉にスバルとティアナは頷いた。

そして、話はティアナの格闘技術についてにシフトしていった。

零次は学校で授業を受けている間も自分の力をどう使えばいいのか考え続けていて、まったく授業に身が入っていない。

「（どうすれば俺の力を使いこなせるようになるんだ・・・）」
「さ・・・ さわ・・・ 沢井!!」

零次はクラスメートが自分を呼んでいることに気づくと慌てて応対していく。

「あつ？ えつと・・・ 何だっけ?？」
「おいおい・・・ 大丈夫か、沢井？ 次、体育だぜ・・・ 女子の着替え、覗くつもりかよ??」

クラスメートの一人、中村の言葉に零次は今の状況を理解した。自分がぼーっとしていたため、女子が着替えられなかったのである。

「わりい・・・ すぐ出てくから・・・」

零次はいそいそと準備を済ませ、教室を飛び出した。

零次は別のクラスの教室に向かいながらまた考えに耽っていた。しかし、中村とクラスメートの佐藤、石田が零次の腕を抱えて運ぼうとしているのに気づくと三人を振り払った。

「何してんだよ!？」

「それはこっちのセリフだったの・・・　なんか、今日のお前、変だぜ・・・」

「うん、そうだね。　いつもはもっとお気楽なキャラなのに」

佐藤と石田の言葉に零次はハッと気づかされた。

自分が自分らしくできていないということに・・・

「悪い・・・　ちょっと考え事しててな・・・」

「なあ、沢井。　悩みがあるなら俺らに話せよ」

「そうだな。　また話すよ」

中村と零次がそんな話をしていると石田がとある話を切り出した。

「ねえねえ、零次、知ってる？　新しい転校生の話」

「転校生？　こんな時期に珍しいな。　どんな奴なんだよ？？」

零次の問いかけに石田は自身のメモ帳（東山学園美少女列伝）を取りだしてから答えていく。

「名前はスバル・ナカジマちゃんとティアナ・ランスターさん、二人ともおっぱいが大きくてとってもかわいいんだ。　スバルちゃんはボーイッシュな女の子でティアナさんは凄く大人っぽい人だったよ！！」

「あははは・・・　（スバルに関しては石田の調査通りだけどティアナに関しては調査が甘いぜ・・・　あいつはいわゆるツンデレって奴だからな・・・）」

零次は石田の論説を聞きながらそんなことを考えていた。

「くしゅん!!」

「ティア、どうしたの？ 風邪??」

「んなわけないでしょ！ 誰かが悪口でも言ってるんでしょ」

東山学園に転校の挨拶に来ていたティアナは零次の考えが伝わったのか、くしゃみをしていた。

そして、スバルと話しながらティアナは零次を真っ先に疑っていた。

アイキャッチA（悩める零次）

アイキャッチB（東山学園の制服を着たスバルとティアナ）

気持ちを切り替えた零次はサッカーにおいて本来の実力を発揮していた。

「石田！ こっちに回せ!!」

「分かったよ!」

佐藤の言葉に石田は返事をするマークを潜り抜け、パスを回していく。

そして、石田からのパスを受け取った佐藤が零次にパスを繋いでいく。

そして、零次が的確にゴールしていく。

マウラとラウラはすでに東山学園に忍び込んでいた。

「兄貴、ここにいりゃあいつが来るんだよな?」

「ああ。 そのためにわざわざ噂を広めさせたんだからな」

マウラとラウラは白猫と黒猫の姿になると零次を待つことにした。

翌日、スバルが零次達のクラスにやって来ていた。

「あー・・・ 今日からうちのクラスに転入してきたナカジマだ・
・ ナカジマ、自己紹介してくれ」
「はい！」

スバルは担任の言葉に頷くと教壇の前に立った。
担任がスバルの名前を黒板に書いた。

「えっと、スバル・ナカジマです！ イギリスから転入してきました。
体を動かすのが好きです。 みんな、よろしくね！！」

スバルはそう言うと言を勢いよく振った。

そして、零次と梨杏の姿を見つけると大きな声で二人を呼んだ。

「零次！！ 梨杏！！」
「スバル！」

梨杏はスバルに手を振り返していくが零次は机に突っ伏していた。
何故なら、その瞬間、男子からは殺気を、女子からは好奇の視線を感じた。

その後、クラスメートからの質問責めから逃れるために屋上に来ていた。

しかし、石田達に捕まってしまっていた。

「さて、零次・・・ どういうことか、説明してもらおうかな？」
「いや・・・ 落ち着けよ、石田・・・ 話せれば分かるって・・・」

「じゃあ、話してもらえるかな??」

石田の妙な迫力に零次はたじろぎ、佐藤や中村に視線を送ったが首を横に振られてしまった。

「零次ー！！」

石田はスバルの声を聞くと零次に詰め寄るのを止め、肩に腕を組んだ。

しかし、笑顔の裏に『自分のことを紹介しろ』というサインを見せている。

「こんなどこにいたんだ。で、その人誰？」

「こいつは俺のクラスメートでダチの・・・」

「石田康成です！ よろしくお願いしますね、スバルさん！！」

「うん！ よろしくね、康成」

スバルの言葉に石田は嬉しそうな表情になっていた。

スバルは石田が嬉しそうにしている理由を理解してはいないようだ。

「なあ、沢井。 誰か、俺達のことを見てる気がしねえか？」

「中村も感じてたのか・・・ 俺もそんな気がしてたんだ・・・ だから、佐藤と石田を連れてここから離れてくれ・・・」

「ナカジマはいいのか？」

零次は中村の疑問に小さく首を振り、答えた。

「ああ、構わねえ・・・ スバルはああ見えてもガイアセイバーズの隊員だ・・・ 何かあっても大丈夫だろ・・・」

「分かった・・・ おい、石田。 教室に戻んぞ」

「えー！ もう少しスバルさんと話させてよー」

「後でも話せるだろ・・・ 佐藤、手伝ってくれ」
「あいよ」

佐藤は中村の言葉を聞き、すぐに石田の右腕を抱えた。
そして、中村と一緒に石田をその場から離れた。

「さて、出てこいよ・・・ サイクロプス・・・」
「ほう・・・ 我らに気づくとはなかなか感心だな・・・」

零次の言葉に黒猫と白猫が降りてきた。
そして、その姿を2体の猫の怪物へと変貌させた。

「零次！ 下がってて！！」

零次はスバルの指示にしぶしぶ下がっていく。
変身さえできれば戦えるが変身できない自分では足手まといになることは理解しているからだ。

「ニヤハハハハ！！ てめえが俺らを相手取ろうつてか！！？」
「我らも舐められたものだ・・・ 我らの目的はその小僧を始末することだ・・・ 邪魔をするなら小娘、貴様から排除するぞ・・・」

マウラはそう言うトラウラに目配せしていく。
そして、スバルの周りを高速で駆けていく。

「スバル！！」
「大丈夫！ 零次はここから離れてて！！」

スバルは零次に素早く指示を出し、下がらせようとする。

零次はスバルの指示に従い、下がっていく。

「ヒヤハツハハ！ 本気で俺らを相手にするつもりかよ!？」

「愚かな・・・やるぞ、ラウラ・・・」

「あいよ、兄貴！」

ラウラとマウラはスバルの周りを高速で駆けていき、爪でスバルのバリアジャケットや皮膚を切り裂いていく。

「あうっ・・・くうっ・・・」

「いいねえ・・・その呻き声・・・」

「（ラウラの悪い癖が出たか・・・だが、この小娘を始末できれば問題はないだろう・・・）」

スバルはラウラとマウラの攻撃を受けながらも左右のパンチやキックを繰り出していくが速すぎる動きに当てることができない。それどころか、スバルの身体には次々に傷ができていく。

「そろそろ終わらせるぞ、ラウラ」

「あいよ、兄貴」

マウラとラウラはさらにスピードを上げ、スバルを切り刻もうとする。

しかし、ラウラ達の狙いは別のものだった。

「終わりだ・・・」

マウラはそう言うときスバルの胸に爪をめり込ませた。そして、スバルはマウラの一撃に倒れてしまった。

「退くぞ、ラウラ・・・」
「分かったぜ」

マウラの指示にラウラは従い、撤退していく。

「スバル！ おい！ スバル！！」
「ううっ・・・ 零次・・・」

スバルはそう呟くと意識を失った。
そして、胸の傷が変色していく。

零次はそのことに気づき、すぐにガイアセイバース専用装甲車、タンクを手配してもらい、スバルをセイバースベースの内部にある医務センターへ搬送してもらった。

スバルが数種類の毒に侵されていることが医務センターでの検査で判明した。

「浜岡さん！ スバルを助ける方法はないんですか！？」
「落ち着きたまえ、沢井君。 別に彼女を助ける方法がないとは言っ
てはいないよ」

零次の剣幕に押されることなく、浜岡は検査の結果と自身の仮定を織り混ぜて話していく。

「毒自体は相当なものだが敵が使いこなしているということは敵が毒に対する血清を持っているということだ」
「それがあればスバルは助かるんですね！！？」
「確証はないがね」

零次は浜岡の言葉に医務センターを飛び出すとマッハアクセルを止

めた場所へ急いだ。

マツハアクセルに乗りうつとした時、零次を止めた人物がいた。
それはティアナだった。

t o b e c o n t e n i u e d

次回予告

スーパーヒーロー作戦 N E W M I S S I O N E p i s o d
e - 1 9 イヴの決意

スバルが自分を庇い、傷ついたことで零次は冷静さを欠いてしまう。
そのことに気づいたティアナは零次を止めようとするが聞こうとしない。

そんな零次にティアナのある言葉がかけられた。

零次はスバルを救うことができるのか？

次回

スーパーヒーロー作戦 N E W M I S S I O N E p i s o d
e - 1 9 イヴの決意

これで決まりだ

Episode - 19 イヴの決意（前書き）

皆さん、どうもですよ ♪ ♪

ひらひらです ♪ ♪

卒研やら未だ終わっていない就活やらでずいぶん遅くなりましたが
更新再開です ♪ ♪

今回は3話掲載予定ですよ ♪ ♪

それでは、どうぞ ♪ ♪

Episode - 19 イヴの決意

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Episode - 19 イヴの決意

スバルがキャットサイクロプス・マウラの毒に侵され、セイバースベース医務センターにて治療を受けている。

零次は自身が戦う決意をできないばかりにスバルを死の危険に晒してしまったことに怒りすら感じていた。

「（俺がうじうじしてたせいでスバルが・・・俺は何やってんだ！！）」

零次はそんなことを考えながら壁に拳を叩きつけていく。

「あんた・・・何やってんのよ・・・」

「ティアナ・・・別に何でもねえよ・・・」

ティアナは零次のそんな言葉に詰め寄ると零次の胸ぐらを掴んだ。

「あんた、不幸のヒーローでもやってるつもり？」

「違う・・・けど、変身できなきゃあいつらと戦うこともできねえ・・・」

ティアナは零次の弱気な言葉に言い様のない怒りが込み上げてきた。

「あんたは変身できなきゃ何もできないわけ！？ 甘えてんじゃないわよ！！ そりゃ、あたしだってバリアジャケットがなかったら苦戦はすると思うわよ！ でも、あたしは逃げない！！」

ティアナの叫びに零次は自分の思い上がりを思い知らされた。そして、今一度病室で苦しんでいるスバルを見た。

「悪い、ティアナ・・・ティアナの言いたいことは分かる・・・けど、もう少し待ってくれ・・・」

「戦うのはあんたよ。あたしじゃない。いくらでも待ってあげるわ」

ティアナはそう言うとスバルの病室へ入っていった。

零次はそんなティアナを見送るとすぐに動き出した。

セイバースベースの屋上で零次はこれからどうするのかを考えていた。

「（ティアナの言う通りだ・・・俺は思い上がってたんだ・・・だから・・・）」

零次は自分の側に近づいている人がいることに気づいていなかった。

「零次君」

「ああ、なのはさん・・・俺に何か用ですか・・・？」

零次は自分の下に来たなのはを見て、呟いた。

なのはは零次の呟きに少し笑いながら零次の側にもたれかかった。

「えっとね、零次君に話があつて来たんだ」

「俺に話？」

零次はなのはが自分と話しに来たことに驚いた。

「零次君は戦うつつもりなのかな？」

「分かりません・・・俺はついこないだまでただの高校生でした・・・」

「うん・・・」

なのはは零次の気持ちに自分にも覚えがあるのか、少し小さな声で頷いた。

「でも、仮面ライダーになったおかげでスバル達に出会えたし・・・けど、だから、俺を庇って誰かが傷つくのを見たくない・・・」
「分かるよ・・・零次君の気持ち・・・」

なのははそう言った後、少し深呼吸をしてからある話をしていく。

「私ね、前にスバルから何で強くなりたいか、聞いたことがあるんだ」

「えっ・・・」

「スバル、こう言ったんだ。災害や争い事みたいなどうしようもないことから泣いてる人や悲しんでる人、助けを求める人を一直線に助けたいって」

零次はなのはからスバルの想いの一部を聞き、自分の答えが見つかったように感じた。

「なのはさん、ありがとうございました。俺、やれることをやってきます」

零次はなのはにそう言つと屋上を後にした。

ダークホライズンではアダムを乗っ取った神楽雪枝がロキの前にい

た。

「戻ったか、アダム」

「あなたを倒させてもらうわ、ロキ・・・」

ロキはアダム（神楽雪枝）の言葉を聞くと呆れたような表情になった。

そして、銀の長髪の青年から灰色の怪物へと姿を変えた。

「仕方ない・・・一度回収して調整し直すか・・・」

「その必要はないわ！ 私があなたを倒す！！」

そう言うと、アダムはロキに攻撃を仕掛けていく。

しかし、アダムの攻撃はロキには当たらない上にロキのカウンターがアダムを捉えていく。

そして、アダムの周囲に重力場を発動させていく。

その重力場から発せられる重力にアダムの動きが止められた。

「さて、お前を調整し直すか・・・」

そう言うとロキは祭壇へ向かった。

零次はキャットサイクロプス・マウラとラウラを探していた。

しかし、なかなか姿を現さないマウラとラウラに零次は苛立ちを募らせているかと思われた。

だが、そんなことはなく、零次は落ち着いて2体のサイクロプスを探している。

「おい！ 馬鹿猫ども！！ 俺が怖くて出てこられないのか！？」

零次の言葉にラウラが反応しそうになるがマウラが止めていく。
しかし、零次は相変わらず叫んでいた。

「おら！ どうした！！？ 猫がこたつで丸くなってんのかよ！！」
「うるせえ！！ そんなに死にてえなら殺してやるぜ！！」

零次の罵倒に耐えられなくなったラウラが零次目掛けて飛びかかっていった。

しかし、零次は慌てることなく冷静にラウラの攻撃をかわしていく。

「（誰も完璧じゃない・・・俺もスバルもティアナも・・・みんな、完璧なんかじゃないんだ・・・！！）」

零次はティアナに言われた言葉を心の中で復唱しながら戦っているのだ。

マウラはラウラと零次の戦闘を見ながら様子を伺っていた。

一方、ティアナ達にもキャットサイクロプスの出現と零次が戦闘していることを知らされていた。

「（あいつ・・・あたしが予想してた通りに動くって馬鹿じゃないの！！）」

ティアナは自分の言葉やなのはとの話で零次がどんな行動に出るかを予想していたのだ。

しかし、それは自分の杞憂だと誤魔化したかった。

「天道さん！ あたしが出ます！！」

「そうか・・・なら、ギンガ・ナカジマ、お前も行ってこい」

「はい！！」

ギンガは天道の指示に返事をするときさま作戦室を飛び出した。
ティアナもそれに同行する形で作戦室を後にした。

ラウラは零次の周囲を動き回りながら鋭い爪で零次の身体を切り裂いていく。

しかし、零次はあえて反撃することをせず、まるで、何かを調べているような反応を見せている。

「（やっぱりだ・・・ こいつの爪には毒がない・・・ だが、サイクロプスが2体いる理由が説明がつく・・・）」

そう、零次はスバルが襲われた時からそのことを考えていたのだ。
何故、キャットサイクロプスは2体なのか。
その答えを出そうとしている。

「どうした！？ でかい口を叩いておいてその程度の力しかねえのか！！」

ラウラはそう叫びながら零次の身体を次々に切り裂いていく。
しかし、零次の視線がラウラの口元にあることには気づいていない。

ティアナとギンガはキャットサイクロプス・マウラとラウラが現れた場所、東山学園の屋上へ向かっていた。

しかし、街中でバリアジャケットやデバイス、魔法を使うわけにはいかないで身体強化の魔法以外は使えないのである。

「ティアナ！？ どうして零次君がサイクロプスのところへ行くって分かったの！！？」

「あいつ、あたしと話してた時、すでに無茶するつもり目をして

たんです！　だから、分かつたんです！！」

二人は走りながら話しているため、わりと大きな声で喋っている。それでも、東山学園とティアナ達がいる場所との距離は徐々に縮まっている。

マウラは零次とラウラの戦いを見ながら零次の狙いについて考えていた。

「（明らかに沢井零次の様子がおかしい・・・　変身もできないのに何故こんなにも激しく戦う・・・）」

マウラは零次が恐れをなして逃げると考えていたのに零次は逃げるどころか、自分自身からマウラ達に戦いを挑んできたのである。このことにマウラは違和感をひしひしと感じていた。

「あの馬鹿・・・　死んだら承知しないわよ・・・」

「ティアナ、やっぱり心配？」

「心配ですね・・・　あいつ、凄く馬鹿だから本気で刺し違えてもスバルを助けるつもりなんでしょうし・・・」

ギンガとティアナは東山学園まであと少しという中で話していた。

ギンガにしたらティアナを落ち着かせるつもりでもあるのだろうが。

「あいつ、一度決めたら絶対にそれを通す・・・　スバルみたいな頑固さがあるんです」

「分かるよ」

ギンガはティアナの言葉に頷いていく。

「だから、余計心配で・・・」

「うん・・・」

「さっ、早く行きましょう」

ギンガとティアナは東山学園に到着し、屋上へと向かう。

零次はラウラと戦いながら腰からある物を取りだし、ラウラの開けた口に入れていく。

「ふぁひ？（何？）」

「何をした、小僧？」

ラウラの異変に気づき、マウラはすぐにラウラの側に降り立った。そして、ラウラは口にある物を噛み砕こうとしていく。

「おっと！ そいつを噛み砕いたらてめえら二匹、いや、一匹は死ぬぜ・・・」

「どういうことだ？」

マウラは零次の言った言葉に違和感を感じていた。

零次はマウラの言葉に答えていく。

「俺がラウラの口に放り込んだのは爆弾だ・・・ てめえらは二匹で一組じゃねえ・・・ 二匹で一匹だろ？」

マウラは零次の問いかけに答えず、沈黙していく。

零次はその沈黙に自分の考えが正しかったと理解した。

「だとしたら、どうだと言うんだ？ それを知ったところで貴様の仲間の女は助からんぞ」

「まあ、聞けよ。　てめえらの命を握ってるのは弟のラウラなんだろう？」

零次の言葉にマウラとラウラは沈黙してしまった。

零次の言葉は外れてはいなかったのだ。

2体で1体のサイクロプスであるキヤットサイクロプスは分裂する際、兄であるマウラに毒を、弟であるラウラに解毒剤を所有させるのである。

「なかなか面白い推論ではあるが証拠はどこにある？」

「証拠？　証拠ならてめえの言動にあるだろうが」

零次の言う通り、マウラは自分達の正体を見破られた瞬間から口数が多くなり、逆にラウラは静かになった。

「それに、俺の言ってることが戯言だっていうんならどうしてラウラを殺さない？」

「弟を殺す兄がどこにいる・・・」

「そんなもん、どこにでもいるだろ。　それに、てめえらはサイクロプスだ。　人じゃねえ」

零次はそう言いつつもラウラの口を調べている。

「ならば、貴様が殺せばいいだろう」

「それもありだが、もし、ラウラが解毒剤を持ったら無駄になっちまうからな」

零次の言葉と雰囲気にもウラもラウラも寒気を感じてしまった。それほどに静かな殺気を放っているのだ。

「なんなら、お前の言う通りにしてやろうか？」

「ほう……それは面白い……」

マウラと零次はお互いに言葉で相手を牽制しようとしていく。しかし、どう見ても零次の方が有利である。

「（解毒剤はやっぱりラウラの右の牙の中にあっただか……あとはどのタイミングで抜くか、だな……）」

零次はラウラが持つ解毒剤の在処を突き止め、それを回収する手段を考えていた。

一方、東山学園に着いたティアナ達は急いで零次がいる屋上へ駆け上がっていた。

「ねえ、ティアナ！？　どうして、零次君が屋上にいるって思ったの！？」

「キャットサイクロプスが現れたのが屋上で、万が一何かあっても影響が少ない場所が屋上だからです！！」

ティアナの言葉にギンガは頷くと懷から自身のデバイスであるブリツッキヤリバーを取り出した。

ティアナもクロスミラージュを取り出しながら屋上の扉を開けた。

アイキャッチA（殺気全開の零次）

アイキャッチB（仮面ライダーイヴ、決めポーズ）

ティアナ達が屋上に来たことでラウラ達に隙ができると零次は勢いよくラウラの右の牙を引き抜いた。

その瞬間、ラウラ達は苦しみ始め、マウラは自身の右腕を切り捨てた。

「ラウラ！ 我らの本当の姿と力を見せてやるぞ！！」

「ああ、兄貴！！」

マウラの言葉にラウラが返事を返すと2体のサイクロプスが合体し、灰色の猫のような姿になった。

「これこそが俺達の本当の姿だ！ そして、これを見た奴らは死ぬ！ 解毒剤は無駄になるぜ！！」

零次はキャットサイクロプスの言葉に静かになった。そして、意識を集中させると変身しようとしていく。

「零次！ あんた、何してんのよ！？」

ティアナは零次が敵を前にして目を閉じたことに叫んでいた。しかし、零次はいつこうに目を開けようとしなない。

「ブルっちまったか！！！！」

キャットサイクロプスはそう叫びながら鋭い爪で零次を切り裂こうとしていく。

「（今だ・・・） 変身・・・」

襲いかかってくるキャットサイクロプスを静かに見据え、変身していく。

零次の影は黒ではなく、銀色だった。

「零次、あんた・・・」

「ああ・・・ 変身できたぜ」

イヴはそう言う構えていく。

「何故だ・・・ お前は変身できないんじゃないのか・・・」

「お前らのおかげで死への怖れを少しは克服できたんだよ」

イヴの言葉にキャットサイクロプスは怒りが込み上げ、イヴに襲いかかっていく。

しかし、そこへティアナの魔力弾が撃ち込まれ、右目が潰されてしまった。

「ギヤアアアア!!」

「うつさいわよ! あんたにはあたしの相棒にしたことの借りをたづね返したいんだからそれくらいでギヤあぎやあ言うんじゃないわよ!!」

ティアナの言葉にイヴとギンガは少しの間呆然としてしまったがすぐにキャットサイクロプスとの距離を詰めていく。

そして、イヴは左右のパンチから右ハイキックへ繋げるコンビネーションでキャットサイクロプスを圧倒し、吹き飛ばしていく。

「はあああつ!!」

吹き飛ばされたキャットサイクロプスにギンガが高速で接近すると左手のリボルバーナックルでキャットサイクロプスの顔に叩き込んでいく。

しかも、リボルバーナックルには衝撃波が纏われていた。

「ギニャアア!!」

ギンガのナックルバンカーで殴り飛ばされたキャットサイクロプスは屋上のフェンスを突き破り、地上へ落ちていく。

イヴも咄嗟に屋上から飛び降り、追っていく。

「おらああ！　行くぜえええ!!　ライダー急降下キイック!!」

イヴの気合いの込もった声とともに放たれたライダー急降下キックがキャットサイクロプスに叩き込まれ、地面へと落ちていく。

イヴはキャットサイクロプスにライダー急降下キックを叩き込んだ勢いを利用して屋上へ戻っていた。

「零次!!」

「零次君!!」

ギンガとティアナは戻ってきたイヴに駆け寄っていく。

しかし、イヴは変身を解除せず、その場に置いてあったキャットサイクロプスの牙をオーラルアイの透視能力で確認していた。

「どうしたのよ?」

「あいつの牙を調べた・・・　間違いなく解毒剤だ・・・　早く、スバルのところへ・・・」

イヴはティアナにそう言う空を見ていく。

それは、まるでまだ戦いが終わっていないと言わんばかりの雰囲気だ。

「本当にどうしたの、零次君？」

「こういうことですよ、ギンガさん・・・」

イヴの言葉と同じタイミングでエネルギー弾が辺りに撃ち込まれた。しかし、イヴが咄嗟にティアナとギンガを下がらせたため、被害はない。

「アダムか・・・」

「イヴ・・・ 今日こそ貴様を殺す・・・」

アダムは右手のエネルギー砲を元に戻すとイヴに攻撃を仕掛けようとする。

しかし、そこへティアナが撃った魔力弾が当たった。

「邪魔をするな、小娘・・・」

「ふん！ あんたに小娘呼ばわりされる筋合いはないわ！ 零次、手を貸すわよ！！」

ティアナの言葉にイヴは首を横に振った。

「いや・・・ ティアナ達は早くスバルに解毒剤を」

イヴはティアナ達に指示を出すとアダムとの距離を測りつつ、ティアナ達を屋上から出ていかせた。

「いいのか・・・ 味方がいなくて・・・」

「ああ・・・ 姉さんと話すのに味方はいらねえ・・・」

アダムはイヴの言葉に構えを解くと雪枝の姿に戻った。そして、零次もイヴの変身を解除し、元の姿に戻っていく。

「いつから気づいていたの、零次？」

「デュラハンとの戦いの時、死にかけただろ。その時にいろいろ思い出した」

零次の言葉に雪枝は少し俯いた。

しかし、顔を上げると雪枝の表情は変わった。

「なら、話は早いわね・・・ 私はあなたを殺す・・・」

「何で、そうなるんだよ！？ 姉さんと戦えるわけねえだろ！！」

「零次・・・ 甘えないで・・・ あなたはダーククライムを叩くんでしょ・・・ なら、姉の偽者など躊躇わず殺しなさい！」

零次は雪枝の言葉に激しい憤りを感じた。

「姉と弟・・・ 俺達が戦う理由なんてねえ！！」

「零次、あなたは何も分かってない・・・ もう、そんな小さなことでは済まないのよ・・・」

雪枝はそう言いながら再びアダムのかたちになっていく。

しかし、零次は変身することを躊躇ってしまっている。

「零次・・・ 変身しなさい・・・ そして・・・」

「ざけんな・・・ 姉さんと戦えるわけねえだろ！！」

「何度も同じことを言わないで・・・ さあ、私を殺しなさい！」

零次は集中し、変身しようとしていく。

そして、影が銀色になり、イヴに変身していく。

「仮面ライダーイヴ・・・ アダム・・・ お前を・・・」

イヴが紡ごうとした言葉は激しい雨音に消された。

ギンガとティアナがセイバースベース 医務センターに解毒剤を持ち帰り、スバルに投与したことでスバルの中にあつた毒は完全に死滅した。

しかし、毒の効力で身体中がぼろぼろになり、スバルは時空管理局本局の医務局で治療することになった。

イヴとアダムの戦いは降りしきる雨の中、未だ続いていた。戦い始めてから6時間以上も続いているのである。

「（零次……あなたは本当に強くなつたわ……。でも、まだ足りない……。もっと強く……。）」

「（何で……。何で、姉さんと戦わなきゃならねんだよ……。俺に姉さんを殺せっていうのかよ!?）」

イヴ達の戦いにある乱入者が現れたことで二人の戦いは中断した。

「君達が持つ、ストーン・イヴとストーン・アダムは凄いいお宝だ。ぜひとも、欲しい」

そう言った乱入者とは仮面ライダーディエンド、海東大樹が変身した仮面ライダーである。

「興が削がれたわ……。次は殺してあげる……。」

アダムはそう言うところかへ消えた。

「あーあ……。行っちゃった……。せつかくだから君からもら

おうかな？」

「ざけんなよ・・・ 誰がてめえなんかにくれてやるかよ・・・」

ディエンドの言葉にイヴは怒りをぶつける相手を変えた。

「行くぜ・・・」

イヴはそう言うのと数発の左右のパンチを放っていく。

しかし、ディエンドはそのパンチをかわし、ディエンドライバーでイヴの身体を狙い撃っていく。

しかし、イヴはディエンドの銃撃にも目もくれず、突っ込んでいく。

「もう、君のお宝はいいや・・・ 別のお宝を頂くことにするよ・・・」

ディエンドはそう言うのと次元のオーロラを発生させ、別の世界へ行った。

イヴは変身を解除することなく、屋上に拳を叩きつけた。

スバルが本局に行く日、零次達は見送りに来ていた。

「見送りなんていいのに」

「何言ってるのよ、スバル。 人の好意は素直に受け取るときなさいよ」

ティアナにそう言われるとスバルはくすぐったそうに笑いながら頷いた。

「スバル、早く元気になって一緒にトレーニングしようね！」

「もちろん！！ 梨杏もいろいろ頑張つてね」

スバルと梨杏は小さく右手を打ち合わせた。

そして、ギンガに運ばれながらスバルはセイバースベースの転送ポートから本局の転送ポートに飛んだ。

スバルの治療は無事に終わるだろう。

しかし、零次の中で生まれた迷いは戦いにどのような影響を及ぼすのか・・・
それはまだ分からない。

t o b e c o n t i n u e d

次回予告

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Episode
- 22 「少年の想い」

零次の迷いは未だ晴れない。

しかし、そんな中、友人の中村はある想いを抱いていた。

それは、一人の少女への恋心だった。

だが、倒したはずのキャットサイクロプスは変異態になり、生き延びていた。

そして、零次への本能的な復讐をしようとしていた。

果たして、迷う零次に戦えるのか？

次回

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Episode

- 22 「少年の想い」

ぶっちぎるぜー！

Episode・20 「少年の想い」(前書き)

皆さん、どうもですよ ♪ ♪

ひらひらです ♪ ♪

3話掲載の第2話目ですよ ♪ ♪

お楽しみくださいね ♪ ♪

それでは、どうぞ ♪ ♪

Episode - 20 「少年の想い」

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Episode
- 20 「少年の想い」

キャットサイクロプスを撃破した零次は相変わらず訓練と学業づくめの日常を過ごしている。

「けど、零次。 あんた、最近何か吹っ切れたわよね？」

「ああ。 ティアナの言葉のおかげだよ」

零次がそう言うのと、ティアナは少し顔を赤らめながら話し続ける。

「うつさいわよ！ それより、あんた、スバルと勝負するとか約束したんだって？」

「確かにしたけどリップサービスみたいなもんだぜ。 スバルがあんな性格でも真に受けることはねえだろ？」

零次はそう言って笑っているがティアナは微妙な表情をしている。

「（間違いなく真に受けてるわよ・・・ あの子、ミッドに戻る前に戻ってきたらあんたと戦うんだって嬉しそうに話してたんだから・・・）」

実は、スバルがミッドチルダに治療しに行く前にティアナにこんな話をしていたのだ。

「ねえ、ティア」

「何よ？」

「零次にあたしが帰ってきたら勝負しようねって言ってたって伝え
ていてくれない？」

ティアナはスバルの言葉に耳を疑った。

身体がぼろぼろになり、治療しにいく人間の言う台詞ではないと感じたからだ。

「あんた、零次と本当に勝負するつもりなわけ？」

「もちろんだよ！　だって、零次と約束したもん！！」

ティアナはスバルの力強い言葉と表情に何を言っても無駄だと理解したのか、文句を言うのを止めた。

「分かったわよ。　伝えとけばいいんでしょ」

ティアナは零次に降りかかった苦勞に同情していた。

零次はティアナと梨杏とともに東山学園に登校していく。

ティアナは前回の任務で終わると思っていた学生生活に戸惑いつつも嬉しそうにしている。

梨杏もティアナや今は治療のためにミッドチルダに帰っているスバルと引き続き学校に行けるということが嬉しくてたまらない様子である。

「梨杏、あんた、ずいぶん嬉しそうね」

「えっ？　だって、ティアナさんやスバルと一緒に登校できるなんて嬉しいもん！」

「どこのスバルよ・・・」

ティアナはそう言いつつ、少し照れていた。

三人が校門を通りすぎた辺りに零次のクラスメートの中村がいた。零次はティアナと梨杏に先に教室に行ってもらい、中村の下へ駆け寄った。

「よう、沢井。 ナカジマは無事か？」

「ああ、なんとかな。 これからちよつと治療に行ってくるらしいけどな」

「あつそ・・・」

中村は零次の言葉にそう言つとそのまま校舎へ入っていった。

授業が始まると零次はまた考え事をしていた。

「（さっきの中村、変だったよな・・・ いくら、知り合いでもスバルのことだけを聞くために俺より早く学校に来てるなんてよ・・・ ひよつとして・・・）」

「・・・い。・・・わい。 沢井!!」

「は、はい!!」

零次は自分が考え込んでいる間に国語の教師に呼ばれていたことに気づいていなかった。

「沢井、先生の授業はそんなつまらないか・・・？」

「いえ、そんなことは・・・」

零次のしどろもどろな言葉に教師の怒りがさらに大きくなった。

「だったら、ちゃんと聞いとけ! いいな!？」

「はい・・・」

零次は教師に反省の意を見せ、謝った。

「なら、いい・・・座れ・・・」

教師は零次を座らせると別の生徒を指名した。

そして、放課後になり、零次は中村を屋上へ呼び出していた。

「何だよ、沢井？」

「なあ、中村。最近、好きな奴でもいんのかよ？」

零次の質問に中村は一瞬動揺した後、取り繕うとしていく。

「やっぱりなんだな。だから、あんなこと聞いたんだろ？」

「だったら、悪いかよ・・・俺はナカジマが好きだよ・・・お前はどうかんだよ？」

零次は中村の質問に首を横に振った。

「俺はダチとしてはスバルのことが好きだ。けど、あいつに恋愛感情はねえよ」

「それはお前が仮面ライダーだからか・・・？」

零次は中村の言葉に驚きを隠せなかったが零次は落ち着いて中村に何故自分の正体を知ってるのかを尋ねた。

「なあ、中村。何で、俺の正体を知ってる？」

「俺が新聞部に所属してることは知ってるよな？」

零次は中村の言葉に頷いていく。

中村は新聞部に所属しており、様々なスクープ写真を撮ってきている。

「つまり、新聞部は俺達のことを嗅ぎまわってたってことか？」

「違いよ・・・ そのことは俺一人の独断だ・・・ 俺はただ今起きてることの真相が知りてえただけだ・・・」

「危険だとしてもかよ？」 「ああ・・・ 危険だとしてもだ・・・」

零次は中村の表情にそれ以上何も言えなかった。

「俺がナカジマに惚れたのはあいつが一生懸命人を助けるところを見ちまったからだ・・・」

「そっか・・・ だったら、俺は何も言わねえよ・・・」

零次はそう言うつと屋上を後にした。

零次はティアナと梨杏をセイバースベースの食堂に呼び、中村と話したことを相談していた。

「つまり、あんたはその中村って奴の話聞いて、スバルとの仲を取り持ってやりたいってわけね？」

「ああ。 そのつもりだ」

零次の言葉にティアナは少し考えてから自分の意見を話した。

「あたしは正直反対よ・・・」

「何でなの、ティアナさん？ わたしはいいと思うんだけど」

ティアナは梨杏の言葉に首を横に振りながら答えていく。

「梨杏の言いたいことも分からないでもないわ・・・ けど、魔法のことはこの世界の人には極力バレないようにしないとダメだし、それにそいつがほんとにただの新聞部なのかも分からない・・・」

ティアナの言い分も零次と梨杏には理解できる。

しかし、梨杏はティアナに自分の想いを話していく。

「でもね、ティアナさん。 中村くんのこと信じてみてもいいんじゃないかな・・・」

「俺もそう思うぜ。 なんなら、ティアナの幻術や射撃魔法を見せちまえばいいだろ。 それで、どんな反応を見せるかでスバルに会わせるかを決める。 どうだ？」

零次と梨杏の言葉にティアナはため息を吐きつつ、自分の考えを話していく。

「なら、あたしなりのやり方で話をつけるわ。 いいわね？」

「ああ、いいぜ」

零次はティアナの言葉に答えていく。

そして、翌日の放課後、ティアナ達は中村に話し、河原にいた。

「ランスター、ここで何すんだよ？」

「あんたが本気でスバルのことを好きなのかを確認させてもらうのよ」

「何で、お前がそんなことすんだよ？」

ティアナは中村の問いかけには答えず、自身のデバイスであるクロ

スミラージュに話しかけていた。

「クロスミラージュ、結界張れる？」

『もちろんです、Sir』

クロスミラージュが結界を展開するとその場の雰囲気が変わった。

中村はそのことに驚き、辺りを見回していく。

「いったい、ここはどこなんだよ？」

「ここは結界の中よ。これが魔法の一種よ」

中村はティアナが話しかけてきたのでそちらに視線を向ける。

すると、ティアナはクロスミラージュの銃口を中村に突きつけていた。

「何のまねだよ、ランスター・・・」

「あたしは魔導師っていう魔法使いみたいなもんなのよ。　どういう意味か、分かるわよね？」

ティアナの凄みのある言葉に中村は息を飲んだ。

しかし、ティアナの表情に中村はティアナが言いたいことを悟った。

「つまり、ナカジマもランスターと魔導師ってわけか？」

「そうね・・・それで、どうするつもり？」

「ランスターが言いたいのは、俺がダーククライムつつう組織に報告したり報道機関に密告したりするつもりかってことだよな？」

中村の言葉にティアナは静かに頷いていく。

しかし、銃口はしっかりと中村を捉えている。

「だったら、撃てよ・・・俺はそれでもお前らのことを誰かに言うつもりはねえ・・・俺はただ、真実が知りたい、いや、俺が知らないことがあるのが許せねえだけだ」

「分かったわよ・・・けど、スバルがどんな存在でも愛せるわけ？　もし、中途半端な気持ちでスバルを傷つけるならあたしはあんたを許さない・・・」

ティアナの言葉に中村はゆっくり頷き、答えていく。

「ああ・・・俺はナカジマが化け物だろうがロボットだろうが何だろうが愛してんだよ」

「あんた、馬鹿？　あの子はあんたが考えてるより子供よ。　だいたい、人の話もろくに聞かないし」

中村はティアナの言葉に少し笑ってしまう。

そんな中村の態度が気になったのか、ティアナは中村に詰め寄っていく。

「何よ？　何笑ってんのよ？？」

「いや、ランスターがナカジマのお袋さんみたいでな」

ティアナが詰め寄ると中村は自分が感じたことを話していく。

「それに、いい加減スバルのことを『ナカジマ』って呼ぶの、止めなさいよ。　スバルの姉妹はあと5人いるのよ。　紛らわしいですよ」

「なら、スバルって呼ぶことにするさ」

ティアナの言葉に中村も返事をしていく。
しかし、中村は獣の匂いを感じていた。

「ランスター！ この辺、何かいるぞ！！」

「分かってるわよ！ 零次！！」

「ああ！ 変身！！」

零次はイヴに変身し、ティアナはバリアジャケットをセットアップしていく。

そして、草むらから出てきた獣と対峙する。

「キャットサイクロプス！？ 何で奴が生きてる！？」

イヴの疑問はもつともである。

キャットサイクロプスは前回の戦いで完全に撃破したはずなのだ。

それなのに、今、目の前にいてイヴとティアナを見て、唸っている。

「キャットサイクロプスは普通のサイクロプスとは違って2つの命を持っている……一つ目の命がなくなっても2つ目の命があるというわけだ……だが、その2つ目の命は以前の個体と比べて能力も知力も著しく劣化する……」

イヴの疑問に灰色の怪物が答えた。

イヴはその灰色の怪物に何故か見覚えがあった。

「てめえは何なんだ？」

「俺はロキ……マスタークラウンの一人であり、貴様のことを改造した一人さ……」

ロキの言葉を聞き、イヴは右の拳を力強く握り締めた。

そして、ロキに殴りかかるうとしていく。

しかし、そこへ銃弾が撃ち込まれた。

「誰だ!？」

「動くなよ、イヴ。 そいつは俺の獲物だ」

零次の足下に銃弾を撃ち込んだのは銃を手にした中村だった。
そんな中村を見て、ロキは何かを思い出したように呟いた。

「そうか・・・ 貴様は識別番号121、シンか・・・」

「そうだ。 貴様にすべてを奪われ、復讐を誓った男だ」

そう言うと、中村、いや、シンは手にした銃でロキを狙い撃っていた。

しかし、ロキは自分の周囲に真空を作り出すとその銃弾を無力化した。

「貴様!！」

シンは近くに置いていた鞆からブラスターを取りだし、エネルギー弾を撃ち込んでいく。

「おい!！」

イヴはそう言いながらロキに攻撃をしようとするがロキはそれをかわし、姿を消した。

イヴは変身を解除するとシンに詰め寄っていく。

「どういうことだ、中村? お前、いったい何者なんだよ?」

「零次、俺はダーククライムの尖兵、デスソルジャーとして造られた男だ」

アイキャッチA（シン、ブラスター銃を構えている）

アイキャッチB（零次とシン、背中合わせ）

零次はシンの言った言葉の意味が理解できなかった。

「どういうことだよ、それ？」

「零次、考えてみるよ。 奴らがダーククライム戦闘員に戦力として期待してると思うか？」

零次はシンの言葉に首を横に振った。

シンはそんな零次の様子にさらに言葉を続けた。

「だから、奴らは死ぬことを怖れない兵士を造ろうとしてるのさ。それが俺達、デスソルジャー候補生だ」

「分かったさ。 けど、お前は どうしてここにいる？」

零次の問いかけにシンは何も答えず、その場を去ろうとしていく。零次はそれを止めようとするがシンはそんな零次達の足下に再びブラスター銃のエネルギー弾を撃ち込んだ。

「くそっ…… 何なんだよ……」

「零次…… あいつの鞆の中身、銃器ばかりよ」

ティアナの言葉に零次もシンが持っていた鞆の中身を見た。そこには複数の銃器が入っていた。

零次達を撒いたシンは街中を歩きながら自分の想いを考えていた。

「（スバル・・・ 奴が現れなきゃお前に俺の気持ちを伝えるつもりだった・・・ けど、奴が死なない限り、俺はお前に想いを伝えることはできねえ・・・）」

街の明かりがそんなシンを照らしていた。

零次達はスバルの見舞いがてら、時空管理局の医務局に来ていた。そして、スバルの病室を訪ねていた。

「スバル、元気か？」

「うん！ 元気だよ！ もうすぐ、そっちに戻るからね！！」

零次はスバルの言葉に素直に喜ぶ余裕がなかった。

アダム、姉のことやシンのことでもややもやしているからだ。

「零次、どうしたの？ なんか、上の空だよ？？」

「別になんでもねえよ。 そんなことよりさっさと体治せよ」

零次はスバルの問いかけに驚いたがそれを顔には出さず、おどけたように答えていく。

「そうだね。 じゃあ、治ったら零次にアイス奢ってもらおうかな？」

「ああ、いいぜ。 アイスでも何でも奢ってやるさ」

「ほんとだね？ 約束だよ！」

零次はスバルの言葉に頷くとティアナとともにスバルの病室を後にした。

ダークホライズンではついに、シャドームーンの肉体に魂が宿り、

シャドームーンが復活を果たした。

「ほう・・・この体はあの時のままか・・・」

「やはり、気づかれましたか、シャドームーン様・・・あなたのお力を探すのは手間でしたがあなたのお力を貸していただけるのならそれくらいのことには苦にもなりません・・・」

シャドームーンはトライバル・エンドの言葉に関心がないかのような態度を取り、どこかへ消えた。

M78星雲 光の国では頻発している地球での事件や怪獣の復活の兆候を察知したウルトラの父がウルトラマンメビウスを呼んでいた。

「大隊長。それは本当ですか？」

「うむ。 本当だ。 地球では様々な怪事件が頻発し、怪獣が再び出現しようとしている。 そこで、メビウス、お前を再び地球へ派遣する。 異存はないな？」

「はい！」

メビウスが返事をするとうltraの父は虚空を指さし、メビウスに指示を出した。

「メビウス、今すぐ地球へ向かえ」

「はい！ 分かりました！！」

メビウスはそう言うとその場を後にし、地球へ向かって飛び立った。

ウルトラの父の言う、怪獣の復活の兆候もダーククライムが引き起こしているものだろうか。

いずれにせよ、これからの戦いも激化しそうである。

t o b e c o n t i n u e d

次回

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Episode
- 23 「戦う意味」

スバルが時空管理局本局から帰還し、零次達にはリフレッシュのための休暇が与えられた。
しかし、零次は休暇の間も今の状況のことばかり考えてしまい、まったく休暇を楽しめない。

そして、梨杏は新人王戦に向けて厳しいトレーニングをしていた。

零次は梨杏の闘う意味を聞き、自分の戦う意味を改めて考えていく。
果たして、零次は答えを出すことができるだろうか？

次回

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Episode
- 23 「戦う意味」

次回もご期待ください

Episode - 21 「戦う意味」(前書き)

皆さん、どうもですよ

ひらひらです

3話掲載の第3話目です

お楽しみください

それでは、どうぞ

Episode - 21 「戦う意味」

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Episode
- 21 「戦う意味」

零次はシンのことや姉の遺体を改造したアダムのことを考えて悩んでいた。

「（姉さんやシンは俺の敵なんだ・・・ けど、俺は二人と戦いたくない・・・）」

零次は敵であるダーククライムに造られた存在であるシンやアダムを倒すべきなのに戦えない自分に苛立っていた。

「零次・・・ 零次！！」

零次は自分呼んでる声の方に向いた。

そこには、一緒に遊びに来ていたスバルと梨杏がいた。

零次は二人の買物について来ていたが考え事のせいで二人の話を聞いてなかった。

「零次、あたし達の話、聞いてなかったでしょ？」

「悪い・・・ ちよつと考え事しててさ・・・」

零次がバツが悪そうに答えるとスバルは少し表情を曇らせたがすぐに切り替えた。

「もう、梨杏の新人王戦の調整前に遊ぼうって言ったの、零次だよね？」

「悪いな。　なら、こんなところで油売ってないでさっさと行こうぜ」

零次とスバルの掛け合いに梨杏はお腹を押さえながら笑っていた。
零次とスバルは梨杏に近づくのと梨杏にじゃれついていく。
それから、しばらくして、三人は少し休憩することにした。

「はあ・・・　はあ・・・　零くん、スバル？」

「ごめん、梨杏・・・　でも、楽しかったでしょ？」

「うん」

梨杏とスバルが話しているのを見ながら零次は自分に余裕と冷静さが足りていなかったのだと悟った。
そして、二人の様子を静かに見ていた。

だが、強烈な殺気に零次が視線を送るとそこには自分と同じような体の色の存在があった。

「（貴様が仮面ライダーイヴか・・・）」

零次の心の中に語りかけてくる存在に零次の闘争心が増していく。
そして、スバル達の下から離れるとその存在のいる場所に向かった。

「てめえは何者だ！？　何故、俺を狙う！！？」

「我が名はシャドームーン・・・　RXの前の肩慣らしだ・・・」

シャドームーンの言葉に零次は怒りを無理やり抑えると変身していく。

そして、シャドームーンに殴りかかっていく。

しかし、シャドームーンはイヴの拳を受け止めていく。

「仮面ライダーイヴ・・・貴様の力はそんなものか・・・」

シャドームーンはイヴを投げ飛ばしていく。

イヴはその勢いで壁に叩きつけられてしまう。

「がはぁ・・・」

イヴは口から息を吐き出し、少し体勢が崩れてしまう。

しかし、シャドームーンがゆっくり近づいてきていることを見ると動こうとしていくがなかなか動けないようだ。

「死ね・・・」

動けないイヴにシャドームーンの右の拳が叩きつけられようとしていたがそこへ冷凍ガスが吹き付けられた。

「誰だ・・・」

「仮面ライダースーパー１！！」

イヴを助けたのは仮面ライダースーパー１だった。

スーパー１はイヴとシャドームーンの間立ってイヴを庇っている。

「ふん・・・援軍が来たようだ・・・ここは退いておこうか・・・」

シャドームーンはそう言うのを消した。

イヴはそれを見た瞬間、膝から崩れ落ちた。

「危なかったな、零次」

「ありがとうございます、一也さん。助かりました」

零次は変身を解除してそう言うとスバル達の下へ戻っていった。

イヴとシャドームーンが戦っていた頃、一台の特殊な車両がセイバースベースに向かっていた。

その車両とは翔太郎達が所有するリボルギャリーだった。

「しかし、よく翔太郎君が風都を離れるのを許可したよね？」

「いや、亜樹ちゃん。翔太郎は風都を守るためにここに来たんだよ」

リボルギャリーの中でフィリップと亜樹子が話していた。

翔太郎が二人の会話を聞いても反応しないのは風都のことを心配しているからだ。

「（EXEが壊滅してからもガイアメモリ犯罪はなくなっていねえ・
・なのに、俺はこんなこととしていいのかよ・・・）」

翔太郎はそんなことを考えながら街の風景を見ていた。

そんな翔太郎が見ていた画面にはダーククライム戦闘員に追われている少女が映っていた。

「フィリップ!!」

「何だい、翔太郎？」

「あの子を助けるぞ!!」

翔太郎がそう言うときフィリップはスタッグフォンでリボルギャリーを操縦して、少女を庇うようにダーククライム戦闘員の前に入った。そして、ハッチが開くと翔太郎がロストドライバーを装着して、立っていた。

「変身・・・」

翔太郎はそう言いながらジョーカーのガイアメモリを挿入し、右側に倒していく。

すると、風が吹き、翔太郎の身体が変化した。

「・・・ギイツ？」

「俺は仮面ライダージョーカー・・・」

ジョーカーは呟くとダーククライム戦闘員との距離をゆっくりと縮めていく。

ダーククライム戦闘員は手にしたナイフでジョーカーに斬りかかっていくがジョーカーはそれらをかわし、キックやパンチでダーククライム戦闘員を蹴散らしていく。

「おいおい・・・どうした？」

「・・・ギイツ・・・」

ジョーカーの凄みにダーククライム戦闘員の足が止まった。

「何だ？　かかって・・・」

ジョーカーがそう言うとした時、ガスが吹き付けられた。

なんとかかわしたジョーカーが見たのは煙のように消えるダーククライム戦闘員の身体だった。

「どういうことだ・・・」

「お前が知る必要はない！　どうせ、ここで死ぬんだからな！！」

そう言うとなズミのようなサイクロプスは自身の吐くガスを吹き付けようとしていく。

だが、ジョーカーは近くにゴミ箱を持つとそのサイクロプスに投げた。

ゴミ箱に気を取られたサイクロプスが視線を戻すとジョーカーは姿を消していた。

リボルギャリーと合流した翔太郎はフィリップに事情を説明した。

「つまり、ガスを浴びた戦闘員が霞のように消えたと言いたいわけだね？」

「ああ・・・ 検索を頼めるか？」

「ああ。 早速始めよう」

フィリップはそう言う意識を地球の本棚に飛ばし、検索を始めていく。

【知りたい項目は謎のサイクロプスが吐いたガスについてだね？】

「ああ」

【キーワードは『ガス』『消失』『追われていた少女』】

翔太郎はフィリップがダーククライム戦闘員に追われていた少女のことをキーワードにしたことに疑問を感じた。

「なあ、フィリップ。 何で、あの子のことをキーワードに？」

【ああ・・・ 彼女は何らかの理由でダーククライムに追われていた・・・ おそらく、彼女の身内が関係していると考えていいだろう】

フィリップの精神がそう告げると本棚が少なくなり、一冊の本が残

った。

フィリップはその本を読み、何が起きているのかを理解した。

「で、どうだったんだよ、フィリップ？」

「彼女は大村みき、大村源三郎博士のお孫さんさ」

翔太郎にはフィリップの言う、大村源三郎のことが分からなかった。フィリップはそんな翔太郎の様子を見て、話を進めていく。

「大村源三郎博士は物質を分解するガスを発明した人さ。君も事務所のテレビで見たら？」

フィリップにそう言われ、翔太郎は大村源三郎のことで自分が知っていることを思い出した。

そして、みきに近づき、しゃがんでから話しかけていく。

「みきちゃん、君のおじいさんに何かあったのかい？」

「あのね！ さっきの変な人達に追いかけられてるから逃げるって言ってた！！」

翔太郎達に心を開いたのか、自分の知っていることを一所懸命話していく。

翔太郎はその話を静かに聞いていく。

一方、ジョーカーに邪魔をされ、みきを捕らえることのできなかったサイクロプスはダークホライズンに戻り、ダーククライム大首領に報告していた。

「申し訳ありませんでした・・・ダーククライム大首領様・・・」
『申し訳ありませんでは済まんど、ラットサイクロプスよ・・・』

ダーククライム大首領はネズミのようなサイクロプス、ラットサイクロプスにそう告げるとレリーフの目を光らせた。

ラットサイクロプスはその光景に怯え、取り繕うとしていく。

「お待ちください！ ダーククライム大首領様！！ 必ず、大村を手に入れてみせます！！」

『失敗すれば貴様は処分する・・・ 覚悟しておけ・・・』

「は、はっ！！」

ラットサイクロプスは返事をするすぐにダークホライズンを後にし、みきを捕まえるために動き出した。

セイバーズベースに戻った零次は沖一也と組み手を行っていた。

しかし、自分の繰り出す攻撃を防ぐだけで反撃しようとしないうちに零次は苛立ちを覚えていた。

「零次・・・ まずは、落ち着くんだ・・・」

「一也さんに言われなくても俺は落ち着いてるよ！！」

「いいや、君は落ち着いてなどいない・・・ 無理やりそう思うことで自分を誤魔化そうとしているだけだ・・・」

零次は一也にそう言われて、自分が興奮し、まったく落ち着いていないとなんとなく理解した。

「零次、一度深呼吸をしてみろ」

零次は言われた通り、深呼吸をしていく。

その瞬間、自分が今まで抱えていた悩みが小さく見えた気がした。

「零次、君は物事を難しく考えようとしすぎていたんだ・・・」

「物事を難しく・・・」

「そうだ・・・　だが、それでは何も見えなくなる時がある・・・
これを見る・・・」

一也はそう言うのと両手をまるで花を包むように動かした。

零次はその手の中に花が見えた。

「どうだ・・・」

「花が見えました・・・」

「そうだ。　荒々しい戦いの中でも花をいとおしむ心を忘れないこと、これが赤心小林拳の極意だ」

零次は一也から赤心小林拳の極意を聞き、自分にはその極意の心を見ることができていなかったと悟った。

ラットサイクロプスは大村みきを探しながら街中で物質分解ガスを撒き散らしていた。

「ヒヤハハハハ！！　俺のガスの味はどうだ！？」

ラットサイクロプスはそう言いながらも次々にガスを撒き散らしていく。

ラットサイクロプス出現の報告を受け、天道は現場付近にいるジャンとレッツ、ランに現場に向かうように指示した。

現場に急行したジャン達が見たのは溶けたように半分になっている車だった。

「何だ、これ？」

「スゲーー！！　車が溶けてるーー！！」

レッツは周囲の状況に驚き、ジャンは溶けた車に触りながら興味深そうにしている。

「ジャン！　レッツ！　あれ！！」

ランの指さした方向には物質分解ガスを辺りに吹き付けているラットサイクロプスがいた。

「行くわよ、二人とも！」

「ああ」「おうっ！」

三人は両手を前に突きだし、ラットサイクロプスを見据えていく。

「『たぎれ！　獣の力、ビースト・オン！！』」

三人がゲキチエンジャーの右手甲部分に触れることで次元圧縮された変身スーツが身に纏われ、三人はゲキレンジャーに変身した。そして、ラットサイクロプスを囲むようにしていく。

「気をつける。　あいつが吐き出すガスは物を消し去ることができるぞ」

「分かった！！　なら、ゲキワザ・咆哮弾！！」

ゲキレッドはゲキブルーの言ったことを理解したのか、物質ではなく、激気を虎の形に打ち出すゲキワザ・咆哮弾でラットサイクロプスを攻撃した。

ラットサイクロプスは咆哮弾に向かって物質分解ガスを吹きかけた。

しかし、物質ではない咆咆弾には物質分解ガスは通用せず、虎の形をした咆咆弾の爪で弾き飛ばす。

「やったぜ!!」

「油断するなよ、ジャン」

「おうっ」

レツの言葉にジャンは答えながらラットサイクロプスの動きを見ていく。

しかし、そこへ赤色のエネルギー球が飛んできた。

アイキャッチA（胴着姿の沖一也）

アイキャッチB（ゲキレッド、構える）

赤いエネルギー弾が放たれた方向を見ると灰色の怪物がいた。

「お前は何だ？」

「マスタークラウン、ロキ・・・ラットサイクロプス、大村の孫がガイアセイバーズの基地からいなくなったそうだ・・・」

ロキの言葉にゲキレンジャーの三人は驚いた。

何故なら、ロキがガイアセイバーズ内部の情報を熟知していると分かったからだ。

「行け、大村とその孫を捕えろ・・・」

「分かりました!」

ラットサイクロプスがそう言ってその場を去ろうとしたのを見て、

ゲキレンジャーはそれぞれに駆け寄っていく。

しかし、ロキは高速で三人に近づくとゲキレッドには左の掌打、ゲキブルーとゲキイエローには左右の蹴りを叩き込んでいく。

「うわぁ！」

「かはぁ・・・」

「あぐっ・・・」

三人はロキの攻撃を受け、弾き飛ばされてしまう。

そして、その間にラットサイクロプスはそこから逃げ出していた。

「みんな！ 気をつけて！！」

「ああ！」 「おうっ！！」

ゲキイエローの言葉に残りの二人が頷くと立ち上がろうとしていく。しかし、ロキはそんな三人に近づくと左手でゲキイエローの首を掴み、右手でゲキブルーの首を掴み、右足でゲキレッドの胸元を踏みつけて自由を奪った。

そして、さらに電撃を三人に浴びせ、動けなくしてしまった。

「ふん・・・ 精々、生き残れるように祈ることだな・・・」

ロキはそう言うのと三人には目もくれず、姿を消した。

ラットサイクロプスはロキの指示に従い、大村博士とその孫、みきを探していた。

そして、二人が会っている場所を特定し、二人をダーククライム戦闘員とともに囲んだ。

「待ってくれ！！ 孫は関係ない！！」

「黙れ！ お前は黙ってガスを作ってればいいんだよ！！」

ラットサイクロプスの言葉に大村博士は迷いつつもみきを見る。
みきは恐怖から表情が強ばっている。

「分かった・・・ 物質分解ガスを作る・・・ だから、孫を！！」
「いいだろう！ だが、ガキは人質にさせてもらうぜ！ 安心しろ、
てめえがガスを作りやあガキは殺さねえよ！！」

ラットサイクロプスはそう言う二人をダーククライムのアジトへ
連れていった。

翔太郎はみきがセイバースベースからいなくなってから必死に走り
回り、探していた。

しかし、手がかりはまったくなく、みきも大村博士も見つけられて
いない。

「くそっ・・・ さつさとしねえとあの子が・・・」

翔太郎はみきの身に起こるかもしれない最悪の事態を想定していた。
それが翔太郎の焦りを増長させる。

セイバースベースでは、二人の搜索のために動いていた。

零次も動こうとするが、フィリップに呼び止められた。

「何ですか、フィリップさん？ 今は・・・」

「検索の結果、大村みきと大村源三郎博士の居場所は分かった。

だが、君の返答次第では僕はそのことを君には教えられない・・・」

零次はフィリップの言葉に息を飲んだ。

「君は何のために戦う・・・？」

「俺は・・・」

零次はフィリップの言葉にすぐには答えられなかった。

しかし、心の中では答えが決まっていた。

「（俺は・・・俺は最初はダーククライムを潰すために戦ってた・・・けど、今はあいつらのせいで泣いたり傷ついたりする人を出したくない・・・）」

零次は自分の戦う意味を思い出した。

そして、フィリップの問いかけに答えた。

「俺は誰かを守るために戦う！それが俺のやるべきことだ！！」
「そうかい。君の答えは分かったよ。さて、ラットサイクロプスがいる場所を教えよう」

フィリップは零次の言葉に納得すると大村博士とみきのいる場所を教えた。

零次はそれを聞くとすぐさまその場所へ向かった。

ラットサイクロプスに拐われた大村博士は物質分解ガスの作成を強要されていた。

そして、物質分解ガスが完成間近になった時、一人のダーククライム戦闘員が入ってきた。

「ラットサイクロプス様。外に仮面ライダーイヴが現れました！」
「何！？俺が奴を始末してやる！見張ってる！！」

ラットサイクロプスはそう言う外へ出ていった。

イヴが現れたと報告したダーククライム戦闘員はそれを確認すると近くにいたダーククライム戦闘員を手早く片付けた。

「な・・・き、君は・・・？」

「ガイアセイバース所属、沢井零次です。博士、早くお孫さんを連れて逃げてください」

零次はダーククライム戦闘員に変装し、潜入していたのだ。

零次の言葉に大村博士は首を横に振り、あるものを差し出した。

「博士、これは？」

「それは奴の物質分解ガスをただの空気に変えるための液体の入ったボトルです。うまく使ってください」

「分かりました」

零次はそう言う外へ出ていった。大村博士は首を横に振り、あるものを差し出した。

ラットサイクロプスはイヴを探していたがなかなか見つからずイライラしていた。

「ラットサイクロプス様！」

「何だ！？」

「大村が物質分解ガスを完成させたので持ってきました」

ラットサイクロプスはダーククライム戦闘員が持っているボトルを受け取り、口の中へ入れた。

そして、その場にいたダーククライム戦闘員に向かって物質分解ガスを吹きかけた。

しかし、物質分解ガスを浴びたはずのダーククライム戦闘員は溶け

なかった。

「どういうことだ!?!」

「どういふもこういふもねえよ! バーカ!」

焦っているラットサイクロプスにダーククライム戦闘員は罵声を浴びせながら顔のマスクを取った。
そして、正体を表した。

「て、てめえは沢井零次!」

「そういうことだよ! これでてめえのガスは無害なものになったぜ! ここでケリをつけてやる!」

零次はそう言う意識を集中させ、イヴへと変身した。

「行くぜ、ラットサイクロプス!」

イヴは逃げようとするラットサイクロプスとの距離を一気に詰める
と左右のパンチを叩き込み、猛攻をかけていく。
ラットサイクロプスは意味がないと分かっているにもかかわらず、ただの空気を吹きかけていく。

「終わりだ!」

イヴはラットサイクロプスの身体を掴んで上空へ投げ飛ばした。
そして、自分自身はさらに高く飛んだ。

「ライダァァキイイクッ!」

イヴは気合いの雄叫びとともにラットサイクロプスにライダーキッ

クを叩き込んだ。

そして、ラットサイクロプスは空中で爆散した。

ラットサイクロプスを倒したイヴは大村博士とみきを救出した。

翌日の夜、セイバースベースの屋上にいた梨杏と久しぶりに話していた。

「悪い、梨杏・・・俺・・・」

「ううん・・・ 大丈夫だよ、零くん。 わたし、零くんのこと信じてたもん！」

零次は梨杏の言葉が心に染み込

自分のことを信じてくれている人間がこんなにも身近にいたからだ。

「あのよ、梨杏・・・ 新人王戦、行けるとこまで行っちゃえ！！」

「うん！ 行くよ、どこまでも！！」

梨杏を励まし、照れくさそうにセイバースベースの中へ戻っていく。零次を梨杏は追いかけていく。

もうすぐ、新人王戦が始まる。

梨杏はどこまで勝ち続けられるのか。

t o b e c o n t i n u e d

次回予告

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Episode

- 24 「激闘！ 新人王戦開始！！」

梨杏の新人王戦へ向けた特訓はさらに本格的になっていた。

自身の身をボロボロにしながら必死にトレーニングを積んでいく。

そして、新人王戦の第一回戦第1試合が始まる。

梨杏の対戦相手は梨杏と同じくハードパンチを武器とするインフア

イターであるボーイッシュな少女、鈴城深雪だ。

梨杏は果たして激戦を制することができるのか。

次回

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Episode

- 24 「激闘！ 新人王戦開始！！」

乙女達よ、己の拳に魂を込めろ！！

Episode - 22 「激闘！ 新人王戦開始！！」 （前書き）

皆さん、どうもですよ ♪ ♪

ひらひらです ♪ ♪

いろいろあつてずいぶんかかりました ♪ ♪
とりあえず、お楽しみください ♪ ♪

ひらひらでした ♪ ♪

Episode - 22 「激闘！ 新人王戦開始！！」

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Episode
- 22 「激闘！ 新人王戦開始！！」

梨杏の新人王戦に向けた練習が本格的になっていた。

基本的には学校で授業を受け、女子ボクシング部で軽いスパリングなどを行ってから学校からセイバースマスまで走るという日課をこなしながら洋子やラン達との実戦に近いスパリングや15kmというかなりの距離を走ったりしてスタミナや技術、戦闘経験などを鍛え上げようとしている。

しかし、梨杏はまだこれでは足りないと感じていた。

それだけ、梨杏が今度の対戦相手である鈴城深雪を強敵だと感じているということである。

「はぁ・・・ はぁ・・・ こんなことじゃ鈴城さんには勝てない・・・ どうしたらいいの・・・？」

梨杏は自分の力では深雪には勝てないと考えてしまい、悩んでいるのだ。

一方、深雪も対戦相手である梨杏に対して思うところがあった。

というのも、深雪は中学時代に梨杏の空手の大会での試合を見ていたのである。

そうはいつても、深雪は梨杏と闘ったことはなかったが・・・

「（彩坂梨杏・・・ オレはあいつとやったことはねえ・・・ けど、兄貴のボクシングを証明するためにはもってこいの相手だ・・・）」

深雪は自分のことを『オレ』と呼んでいる。

それは、彼女が中学を卒業する少し前から続いていることである。

「深雪、次の相手の彩坂梨杏はお前と同じようなハードパンチャーだ。殴り合いを好むお前にはもってこいの相手だな」

「ああ。兄貴とオレのボクシングを彩坂梨杏にぶつけてやれる。

それで、ブッ倒す!!」

深雪は決意を大声で叫んだ。

その声にジムにいた他の練習生は驚いてしまった。

会長はその様子に深雪をなだめていく。

「おいおい、深雪・・・ 気合いが入ってるのは分かるけどな・・・
他の奴の邪魔になるような声出すなよ」

「悪いな・・・ みんな、悪かったな・・・ 気にせず、続けてくれよ・・・」

深雪の言葉に他の練習生は練習を再開していく。

梨杏は昼休みに教室で昼食を食べないで屋上でシャドーボクシングをしていた。

少しでも練習をしておかないと不安で仕方ないのである。

「やっぱり、ここにいたのね」

一人の女生徒が梨杏に話しかけた。

彼女は梨杏の親友であり、梨杏の所属する女子ボクシング部の選手兼マネージャーの城崎みなみである。

「あつ・・・ みなみちゃん」

「梨杏、やつぱりここにいたのね。 あんたは何か悩みがあるところに来るもんね」

「空が見えて気持ちいいんだ・・・ 空を見てるといろんなことを忘れられるから・・・」

梨杏の言葉にみなみは呆れたように肩をすくめると微笑みながら梨杏に歩み寄っていく。

梨杏もみなみが近づいてくるとシャドーボクシングを止めて歩み寄っていく。

「それで、何か掴めたの？」

「全然・・・ というより、わたしはたぶん鈴城さんと全力で打ち合うしかないと思うの・・・」

みなみは梨杏の言葉にくすりと笑うとあえて何も言わなかった。

そして、二人の試合の日がやってきた。

梨杏は自身の控え室でみなみ達に準備をしてもらいながら深雪との試合のイメージトレーニングをしている。

そうしなければ不安で仕方ないのだ。

「梨杏、あんたが焦る気持ちは分からないでもないけど少しは落ち着きなさい」

「でも・・・」

「でもない。 相手はあんたと同じインファイター、緊張する要素ないじゃないのよ」

みなみの言葉に梨杏の表情が少しだけ曇る。

「鈴城さんに勝てるか、やっぱり、不安なんだ・・・」

「あんたが不安に思う気持ちは分かる・・・でも、あんたは強い・・・だから、負けない・・・」

みなみの言葉に梨杏は少しだけ安心したような表情になった。

みなみはそんな梨杏の表情を見て、さらに一言つけ加えた。

「それに・・・鈴城深雪に臆してるようじゃ神宮寺まどかに笑われるわよ」

「そうだね。わたしは今さらファイトスタイルは変えられないもんね。ありがとう、みなみちゃん。わたし、必ず勝つよ！」

梨杏は気を取り直し、みなみに深雪に勝つと宣言していく。

一方、深雪の控え室では会長であり自身の叔父でもある鈴城忠助に試合の準備をしてもらいながら試合について話していた。

「なあ、おじさん」

「ん？ 何だ、深雪??」

「オレ、彩坂梨杏に勝てると思うか？」

深雪のふとした問いかけに忠助は迷わず答えた。

「はつきりと勝てるとは言えねえ・・・深雪と彩坂はかなり似てる・・・経歴もファイトスタイルもな」

「ああ・・・」

「だから、勝つとしたら最後まで諦めねえことだ・・・」

「いつも言ってることじゃなかよ。けど、すっきりしたよ、おじさん」

深雪はそう言うとは静かに試合の時を待った。

梨杏は係員に呼ばれ、控え室を後にして、リングへと向かう。
その表情は凛々しいものになっている。

「（鈴城さんには絶対に負けられない！）」

梨杏はそんな決意を胸に花道を歩いていく。

観客が堂々と花道を歩く梨杏を大歓声で迎えていく。
そして、今、リングインしていく。

深雪も自身の控え室を後にして、花道まで来ていた。

「（彩坂梨杏・・・ オレはお前を必ずKOして兄貴とオレのボクシングを証明してやる！！）」

深雪も決意とともにリングインしていく。

リングの上に役者が揃い、レフェリーが二人をリング中央へと呼んでいく。

リング中央で梨杏と深雪はお互いの目を見つめていく。

「お前とやれるのを計量の時から楽しみにしてたぜ」

「こちらこそ、鈴城さんと試合ができるのを楽しみにしてました」

お互いに相手へ闘志をぶつけていく。

しかし、それは二人にとっては嵐の前の静けさと同じである。

「二人ともクリーンなファイトを」

「はい！」

「ああ！」

レフェリーの言葉に二人は力強く答えていく。

レフェリーは二人の返事を聞き、二人を自身のコーナーへ戻らせた。青コーナーに戻ってきた梨杏をセコンドに就いている洋子とみなみが迎えた。

「さて、梨杏。 鈴城深雪を相手にどう闘うつもり？」

「わたしは不器用だから近づいて殴る・・・ それしかできないから」

梨杏の言葉にみなみは少しだけ笑うと梨杏の口にマウスピースをくわえさせていく。

梨杏はくわえさせてもらったマウスピースをしっかりと噛み締められるように調節していく。

一方、赤コーナーに戻ってきた深雪も忠助にマウスピースをくわえさせてもらった。

「いいか、深雪。 彩坂はある意味でお前とおんなじだ」

「ああ・・・ だから、オレが勝ってやるんだ・・・」

必死で強がるが昔から見てきた梨杏の強さを理解している。

だからこそ、深雪は梨杏に勝って自分と兄のボクシングを証明したいのだ。

「まあ、分かっているだろうが彩坂に勝ちたいなら1ラウンド目の間に潰すべきだが・・・」

「そんなんやったら、オレのボクシングを台無しにしちまうじゃん

かよ。　オレはあくまでも全力の彩坂を殴り倒して勝つ、それだけだよ」

深雪の言葉に忠助は何も言わずに深雪を集中させてやる。

そして、１ラウンド開始のゴングが鳴ると梨杏と深雪は勢いよく近づいていく。

お互いの距離がほぼゼロになるような位置で二人は相手の顔を狙って、左右のパンチを放っていく。

「んぶう・・・」

「んあつ・・・」

二人の顔にパンチがめり込むと会場から歓声が上がりはじめた。

歓声の支援を受けて、二人はさらに左右のフックやストレートを相手の顔やボディに叩き込んでいく。

しかし、梨杏には深雪が試合のビデオのような闘い方をしているようには見えない。

まるで、１ラウンドの間は本気を出さないとでも言うように・・・

「はあ・・・　はあ・・・　（鈴城さん、どういっつもりだろ・・・

？　ジムでビデオを見た時は鈴城さん、凄くアグレッシブだった・・・

・）
「」

深雪は梨杏と殴りあいつつ、電光掲示板を見た。

電光掲示板を見て、残り２０秒もあることを確認する。

もちろん、苦戦しているからではなく、梨杏を倒すには身体が温まり、全力で打ち合うことが必要だと考えているからだ。

「ストップ！　ストップ！！　ゴングだ！！」

2ラウンド開始のゴングが鳴ると同時に二人は一気にリング中央まで駆け出していく。

そして、左右のストレートをお互いの顔に叩き込んだのをきっかけに二人の壮絶な打ち合いが始まった。

「んぶっ・・・ 負けません！」

「かふう・・・ オレも負けねえ！」

梨杏が右アッパーを深雪のボディに叩き込めば深雪は左フックを梨杏の頬にめり込ませていく。

自身の左フックが梨杏の頬にめり込んだのを見た深雪はさらに右アッパーを梨杏のレバーに叩き込んでいく。

「んぶう・・・」

肝臓を狙った強烈な一撃に梨杏の身体がリングの上に崩れ落ちた。

「ダウン！ 下がって！！」

レフェリーは深雪にニュートラルコーナーに向かうように指示をするとダウンした梨杏に対してのカウントを取っていく。

「1・・・ 2・・・ 3・・・」

ニュートラルコーナーに下がった深雪は梨杏がボディブロー一発でダウンしたのを見て、少しだけ気落ちしてしまいそうになる。

自分が梨杏を最高の標的だと考えていたのは周囲の話や雑誌の記事を信じすぎていたのではないかと考えてしまったからだ。

しかし、梨杏の立ち上がるうとする姿に自分の心配は杞憂だったと深雪は思った。

「6・・・7・・・エイ・・・」

梨杏はカウント8間際で立ち上がった。

しかし、その顔には笑みが浮かんでいる。

自分をダウンさせた深雪に対して、闘争心が湧き上がってくるのを感じている。

「へっ・・・そうじゃねえとなあー　オレがお前に勝つにしてももっとやりあってからだろ？」

深雪の軽口に梨杏は一気に距離を詰めていく。
距離を詰めてくる梨杏に対して深雪も距離を詰めると左右のフックで梨杏を迎え撃っていく。

「負けない!!」

梨杏はそう言うのと深雪の左右のフックをダッキングでかわすと先程の意趣返しともいうべき右アッパーを深雪のボディに叩き込んでいく。

「がはぁ・・・」

梨杏の強烈な右アッパーをボディに叩き込まれた深雪の口から唾液が吐き出され、深雪は膝から崩れ落ちるようにダウンしてしまった。

「ダウン！　下がって!!」

梨杏はダウンした深雪をしばらく見ていたがレフェリーにニュート

ラルコーナーに向かうように指示されるとゆっくりとニュートラルコーナーに向かう。

深雪をダウンしたが自身も先程のボディブローのダメージが抜けきっていないのだ。

アイキャッチA（梨杏、右ストレート）

アイキャッチB（梨杏、左フック）

レフェリーがカウントを取っている間も梨杏は落ち着いて息を整えていく。

しかし、深雪も落ち着いてダメージを軽減させようとしているようだ。

「4・・・5・・・シッ・・・」

深雪はカウント6で立ち上がるとレフェリーにファイティングポーズを取って見せていく。

レフェリーは深雪が試合を続けられることを確認すると試合を再開していく。

梨杏はチャンスを活かすべく、深雪にラッシュをかけていく。

「ちいつ・・・（まだダメージが残ってやがる・・・情けねえがしばらく凌ぐしかねえなあ・・・）」

深雪は自分の不利な状況を理解し、ダメージを抜くために必死で梨杏のラッシュを凌ごうとする。

梨杏も深雪の狙いは分かっているため、ガードされても構わずラッシュをかけていく。

「（あと20秒しかない・・・できるだけ攻めないと・・・）」

梨杏は深雪のボディや脇腹に左右のフックやアッパーを叩き込んで深雪のガードを崩そうとするが硬い深雪のガードは崩れそうにない。そして、2ラウンドが残り10秒で終わることを知らせる拍子木の音が聞こえると梨杏はさらにラッシュのスピードを速めていく。

しかし、2ラウンド終了のゴングが鳴り、二人の間に割って入ったレフェリーによってラッシュを止められると梨杏は青コーナーに戻っていく。

「ふうっ・・・ 次のラウンドは覚悟しろよ・・・」

深雪は梨杏にいいように攻められたのを悔しがりながら赤コーナーにゆっくりと戻っていく。

梨杏のラッシュを受けたため、ダメージも大きく、身体が重くなったように感じられる。

そのため、足どりがおぼつかない。

梨杏が青コーナーに戻ると洋子は梨杏からマウスピースを受け取り、洗っていく。

今回の試合はみなみからセコンドとして戦わせてほしいと言われたため、自分はフォローに徹することにした。

「梨杏、さっきのラウンドはいい調子だったよ」

「ありがと、みなみちゃん。でも、鈴城さんはあの程度のラッシュじゃ倒せないよ」

梨杏の言葉にみなみは小首を傾げてしまう。

先程のラウンドは明らかに梨杏が攻めていたし深雪のダメージだつて相当のものはずだ。

それにも関わらず、梨杏が弱気なことを言うのでみなみは少しだけイライラしてきた。

「あのねえ、梨杏・・・ さっきのラウンド、鈴城深雪はあんたのラッシュでただ一方的に殴られてただけじゃない・・・ 何で、あんたがそんな弱気なのよ！」

みなみの言葉に梨杏は一瞬驚いたような表情になったがすぐにいつもの表情に戻るとみなみに自分の考えを話していく。

「鈴城さんのボディや顔をあれだけ殴ってもKOできなかったんだよ。それに、鈴城さんもまだ本気出してないはずだよ。だから勝てるかどうか分からないんだよ・・・」

みなみは梨杏の言葉を聞くと自分の考えが甘かったことに気がついた。

梨杏は深雪について研究し、何度もイメージトレーニングをして試合に臨んでいるのに自分の考え通りに梨杏が闘えば絶対に勝てるなどという根拠のない考えに囚われていたのだ。

「ごめん、梨杏・・・ 私、あんたがそこまで考えてるなんて思っても見なくて・・・」

「うつん・・・ 気にしないで・・・ 実際、あまりちゃんとは考えられてない・・・ だから、不器用に殴りあうしかないわけだし・・・」

みなみは梨杏の言葉にゆつくりと首を左右に振り、自分の想いを伝えていく。

「あんたは不器用なんかじゃない・・・ それは私なんかじゃ頼り

ないだろうけど私が証明する」

梨杏はみなみの言葉に自然と涙が溢れてくるのを感じ、慌ててグロ
ーブで拭おうとする。

洋子は二人の話がちょうど終わったタイミングで洗ってきたマウス
ピースを梨杏の口にくわえさせていく。

一方、赤コーナーでは深雪が少し弱々しく息をしながらダメージを
軽減しようとしていく。

「はあ・・・ はあ・・・ つくしょう・・・」

「2ラウンド目はしてやられたな、深雪」

忠助の言葉に深雪は荒々しい息をしながら答えていく。

なんとか、ボディを打たれた痛みを緩和しようとするが梨杏のボデ
イブローはまるで重石のように深雪を蝕んでいる。

しかし、深雪としては梨杏がこれほどに強いことに感謝すらしてい
るのだ。

「さて、深雪。 次のラウンドはどうする？」

「んなもん決まってるだろ・・・ 彩坂を倒す・・・ できれば、
おんなじボディブローでだ・・・」

深雪の言葉に忠助は少し笑いながら深雪のマウスピースを洗ってい
く。

そして、洗い終えたマウスピースを深雪の口に入れていく。

「ほらっ。 だったら、次のラウンドはお前のパンチで彩坂をKO
してこい」

「おうっ！！ 任せとけ！！」

深雪はマウスピースの位置を自分で直すと3ラウンド開始のゴングが鳴った。

3ラウンド目が開始されると梨杏は一気に深雪との距離を詰めていく。

そして、KOを狙って左右のストレートやフックを深雪に叩きつけていく。

「んぶう・・・ かはあ・・・」

深雪は打たれつつも左右のストレートを打ち返していく。

梨杏は深雪から左右のストレートで反撃されると口から唾液を吐き出してしまいが構わず左右のストレートを打ち続けていく。

「んんっ・・・ あぐう・・・」

「ぶへえ・・・ くはあ・・・」

二人の凄まじい殴り合いに会場中から歓声上がるが梨杏達にはまったく気にならなかった。

いや、歓声を気にする余裕すらないのだ。

お互いに強打を武器にしているため、油断すれば相手の一撃で倒されてしまうかもしれないのだ。

「とつとと倒れな！」

「負けない！」

お互いに相手を倒そうとさらに強烈な一撃を放とうとする。

梨杏が放った右フックをダッキングでかわした深雪は下から突き上げる左アッパーを梨杏の顎に叩き込んだ。

「かはあ・・・」

深雪の強烈な左アッパーをカウンターで決められた梨杏の口からはマウスピースが唾液とともに吐き出される。

そして、脱力したかのように梨杏の身体がゆっくりとリングの上に崩れ落ちた。

「ダウン！ ニュートラルコーナーへ！！」

レフェリーは深雪に指示を出すとダウンした梨杏へのカウントを取っていく。

しかし、梨杏は意識が飛んでしまっているのか、カウントを取られていても反応する気配がない。

「（さすがにこれで終わりだろ・・・もし、立ってきたら、オレが負ける可能性も出てきちゃう・・・）」

深雪は梨杏の左右のストレートを数十発以上は受けているため、受けたダメージも相当なものになっているため、少し弱気になっており、そんなことを呟いてしまう。

「8・・・ ナイ・・・」

しかし、深雪の思いとは裏腹に梨杏は多少ふらつき、焦点も微妙に合っていないがそれでも闘志溢れる眼でレフェリーを見ながら試合の続行を訴える。

レフェリーはそんな梨杏の様子を見て、少し悩みながらも試合を再開していく。

「ファイト!!」

レフェリーが試合を再開させると深雪はとどめを刺すべく、梨杏との距離を縮めていくがそこで3ラウンド目終了のゴングが鳴る。深雪はゴングの音を聞くと梨杏に背を向け、自分のコーナーに戻っていく。

「はぁ・・・ はぁ・・・ 負け・・・ ない・・・」

梨杏はそう呟きながら自分のコーナーにゆっくりと戻っていく。

赤コーナーに戻った深雪は肩で大きく息をしながら次のラウンドをどうやって闘うかを考えている。

「ほれ、深雪。 マウスピース」

「あ、あぁ・・・ 悪い、おじさん・・・」

深雪は忠助の両手にマウスピースを吐き出して渡していく。忠助はそのマウスピースを落とさないように注意しながらバケツの上で洗っていく。

「深雪、こっからはお前の好きにやってみろ」

「なんだよ・・・ いつものことじゃん・・・」

深雪は忠助の作戦をあまり実行しようとはしない。会長としては信用しているし、セコンドとしては頼りにしているが自分のやり方を貫きたい深雪は素直に忠助の作戦を実行できないのである。

「なぁ、おじさん・・・」

「何だ？」

「オレみたいな選手、迷惑か・・・」

深雪の問いかけに忠助は黙り込んでしまう。

深雪は忠助のいる鈴城ジムに所属する前、別のジムに所属していたことがある。

しかし、そのジムの会長は深雪の兄のボクシングを馬鹿にし、深雪のファイトスタイルを無理やり別のものにさせようとした。

それに腹が立った深雪はそのジムを所属して数日で辞めたのである。そして、自身の叔父である鈴城忠助が経営する鈴城ジムに身を置くようになった。

「馬鹿言つてんじゃないねえ・・・ 自分とこのボクサーを迷惑だなんて言う会長は三流以下だ・・・ 一流の指導者つつうのはそいつの持ち味を引き上げてこそなんぼだろ」

忠助の言葉に深雪は安心したように小さく笑った。

忠助の言葉で自分の中に力が溢れてくるような感じがしたからだ。

「ありがとよ、おじさん・・・ オレ、彩坂に勝つぜ・・・」

「おうよ」

忠助は深雪の言葉に何も言わず、洗ったマウスピースをくわえさせていく。

そして、4ラウンド目開始のゴングが鳴ると梨杏も深雪もゆっくりと相手に近づいていく。

たった3ラウンドだがガードもろくにせず、相手の強打を食らい続けた二人にはかなりのダメージが積み重なっており、それほど長くは闘えない状態になっている。

しかし、相手との距離がゼロになると左右のフックやストレートを
がむしゃらに相手の顔やボディに叩き込んでいく。

「んあっ…… げふう……」

「くふう…… がふぁ……」

梨杏と深雪はお互いの強打が顔に叩き込まれる度に口から血混じりの
唾液を吐き出し、ボディを殴られる度に胃液を吐き出していく。
しかし、相手をＫＯしようと相手の身体に自分の強打をぶつけてい
く。

次第に腕が重くなってくると二人は身体を密着させて相手の鳩尾に
パンチを叩き込んでいく。

「んぶう…… 倒れるよ……」

「ぶふう…… 嫌です……」

お互いに悪態をつきながら相手の腹筋に拳を叩き込んでいくが疲労
やダメージから緩みきった腹筋に密着した状態からのパンチでも相
当きつい。

しかし、少しずつ深雪の手数が減ってきている。

「（ちつくしよ…… だんだん力が抜けてきやがる…… けど、
彩坂をＫＯして、兄貴とオレのボクシングを……）」

深雪はそんなことを考えながら一心不乱に梨杏のボディを殴ってい
く。

梨杏もそんな深雪に負けじとさらに深雪のボディを殴っていく。

この二人の意地の張り合いはどちらに軍配が上がるのか？

t o b e c o n t i n u e d

次回予告

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Episode

- 23 「激闘決着！ そして、次の闘いへ！！」

梨杏と深雪の激しい殴りあいも決着がつこうとしていた。
そして、勝者には次の闘いへの切符が与えられる。
その切符を手にするのはどちらか？

乙女達よ、己の拳で未来を切り開け！！

次回 スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION Epis
ode - 23 「激闘決着！ そして、次の闘いへ！！」

これで決まりだ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1007o/>

スーパーヒーロー作戦 NEW MISSION

2011年10月7日08時24分発行